魔法少女リリカルなのはＺＸ

暁 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＺＸ

【Ｎコード】
Ｎ４５１１Ｐ

【作者名】
暁　楓

【あらすじ】
セルパンとの戦いでライブメタル・モデルＶを破壊してから１年後・・・、ライブメタル・モデルＸの適合者、ヴァンはある日拾った青い宝石、ジュエルシードによって異世界へと飛ばされる。そしてジュエルシードを巡る少女達の戦い・・・ヴァンはその世界で何を見るのか・・・・『魔法少女リリカルなのは』『ロックマンゼクス』のクロスオーバー！ヴァンの新たな戦いが始まる！
第２章・・・ジュエルシード事件を終え、ヴァンはなのはの世界で居候となっていた。しかしある日、なのはが魔導師襲撃事件の被害

に会う。ヴァン達は、１つの魔導書を巡る戦いに身を投じることとなった。その先にある未来とは――！？

第0話－プロローグ（前書き）

俺は戦う・・・！自分が信じるモノのために・・・・・・！

・・・ヴァン

前書きにはロックマンゼクスの名言を入れようと思いま～す

・・・暁　楓

いや、銀魂？というか、両立できんの？

・・・ファラク・レアス

第0話ープロローグ

それは、その国の誰もが知る場所で起きた、しかしその国の誰も知らずに起きた話。

意思を持つ金属、そして全てを支配する力をめぐった戦い。
決戦の地にいたのは、国を救った英雄と、1人の少年。
英雄は全てを支配する『力』を手に、少年は6つの『意思』と1つの『勇気』を手に、戦った。
『意思』と『勇気』が勝ち、1つの『支配する力』は消えた。
そして少年は仲間と共に、全てを守るため、戦い続けることを決意した。

これは、そんな選ばれし者の戦いから、一年後の物語・・・・。

第0話ープロローグ（後書き）

楓

「はい、というわけで始まりました。相変わらず知ったか振りスタートです。いろいろ無理あると思われますが、頑張ろうと思います！あと、ロックマンゼクスわかってくれる人、何人いるのかな・・・・？」

第1話ー物語の始まり（前書き）

・・・君と僕が力を合わせれば・・・奴らと戦える！

・・・モデルX

・・・俺が作者権利と力を合わせれば・・・原作と戦える！

・・・暁　楓

・・・で、俺にどうしろと・・・？

・・・ヴァン

第1話ー物語の始まり

エリアC－3

「運び屋でーす！荷物お届けに来ましたー！」

「ああ、ありがとうございます！それじゃあトランスサーバーに報酬を送っておきますね・・・あ、荷物はそちらに置いてください」

「わかりましたー！」

運び屋の少年は荷物を置く。少年の名前はヴァン。今回は中企業の機材の運送をしていた。

「またのご利用をお待ちしてまーす！」

仕事が終わり、ヴァンは自分のバイクへと向かう。最近新たに買った青いバイクの元につくと、バイクのホルダーから青い金属の塊が話しかけてきた。

『ヴァン、お疲れ様』

優しい、青年の声。彼の名はモデルX。意思を持ち、特別な力を適合者に与える生きた金属、『ライブメタル』というものだ。ヴァンは、モデルXの適合者である。

ヴァンは他に5つのライブメタルを持っているが、適合するのはモデルXのみ。残りのライブメタルはモデルXと一緒に使うことで力を発揮させている。

ヴァンはバイクに乗ろうとするが、地面に落ちている何かに気づい

た。

「ん？なんだこれ？」

拾ってみると、青い手のひらサイズの宝石だった。

「誰かが落としたのかな・・・？」

辺りを見回すが、持ち主らしい人はいない。と、耳にかけてある端末から通信が入ってきた。

『ヴァン、ちょっと時間空いてる？』

「プレリー？どうしたんだ？もしかして、モデルＶを見つけたのか？」

通信は、対イレギュラーの国家非公認組織、ガーディアンの司令官、プレリーからだった。モデルＸの力を手にした頃に出会い、モデルＶと戦った仲間である。
そしてモデルＶ、それは機械や人々を狂わせ、操る力を持ったライブメタルだ。ヴァンは１年前にモデルＶを破壊して以来、世界各地にあるモデルＶをガーディアンと共に捜索、破壊している。

『ううん、モデルＶは１週間前に破壊してからまだなの。今日はちょっと、息抜きでもどうかなって思って』

ああ、なるほどぉ、とヴァンは理解する。モデルＶの破壊に取り組み始めてから、プレリーはヴァンを気遣い、たまにこういったことを誘うようになった。そのときプレリーが紅茶をいれてくれ、とてもうまいため、ヴァンも気に入っている。返事はすぐに決まった。

「ああ、ちょうど仕事も終わったことだし、そっちに行くよ」

『わかったわ。部屋で待ってるね』

通信を終え、ヴァンはバイクを飛ばした。

ガーディアンベースは、空飛ぶ船である。
そしてガーディアンメンバーは、ヴァンを除けばその全員が限りなく人間に近いロボット、レプリロイドだ。しかし、法律で人間には機械の体を、機械には寿命を与えられ、人間とレプリロイドの違いと呼べるものはほとんどない。
かわいらしいぬいぐるみがたくさんある部屋で、ヴァンはピンクの服に長い金髪の少女、プレリーと紅茶を飲み、会話をしている。この部屋は彼女の部屋だ。初めてお茶会に来た時は気恥ずかしさがあって会話がなかなか続かなかったが、今はすっかり弾んでいる。今回の話題はヴァンが仕事を終えたばかりということもあってどんなものを運ぶことが多いのか、といったことをプレリーが聞いてきた。ヴァンは、以外と運び仕事より便利屋のような仕事が多かったりする、と答えると、プレリーはクスクスと笑った。こんな感じで、プレリーが質問したのをヴァンが答えるといった会話が多い。
お茶会を始めてから３０分程、ヴァンはふと、ポケットの中に入っているものを思い出した。街で拾った青い宝石である。

「やべっ、忘れてた・・・プレリー、悪いけど、街で落とし物を拾ってそのままだったんだ。持ち主を探さないと・・・」

「あ、そうなの？いいよ、いってらっしゃい」

「ああ、いってくる」

ヴァンは再び街へと向かった。

それからヴァンは、拾った場所を中心に、大通りや商店街、宝石店などに行って持ち主を探した。だが、持ち主どころか持ち主を見たという人すら見つからず、宝石店の店員からは高くするので買い取らせてほしいとまで言われた。そしてもうすっかり夜である。

「こうしてみると、街って広いなぁ・・・」

やや自嘲気味にヴァンはつぶやいた。

『今日はもう暗いし、明日また聞き込みして捜したほうがいいと思うよ』

モデルXが今日は帰ったほうがいいと勧めた。ヴァンも今日はやめるか、と思ったとき、夜空から流れ星を見つけた。

「流れ星か・・・」

半ばヤケクソで願ってみる。

「これの持ち主に会えますように、持ち主に会えますように、会えますように・・・」

『・・・ヴァン、ちゃんと同じ内容じゃないと願いは叶わないよ・・

・』

「・・・・・えぇー？」

これじゃダメかー、とヴァンが思ったときである。突然宝石が強烈な光を発した。

「うわっ！？な、なんー－－」

言い終わらない内に光は輝きをさらに増し・・・・・光が収まるとそこに人はいなかった。

第1話ー物語の始まり（後書き）

楓

「次回、リリカルキャラが登場です。まだ書き置きがあるけど、もうちょっと作りたかったなぁ・・・」

第1章・第2話ー魔法少女との出会い（前書き）

・・・後はお前次第だ。戦う勇気はあるか。この男の意志を継ぎ、戦い続ける覚悟はあるか・・・！

・・・モデルZ

俺は・・・この小説と戦い続ける！

・・・楓

こっちとも戦ってくれ。

・・・ファラク

第1章・第2話ー魔法少女との出会い

「ねぇフェイト、あいつ何者だろうね」

とある夜の街、そこに2人の影があった。2人はある一点を見ている。

獣の耳と尻尾を生やした女が隣の金髪の少女のほうを向く。

「わからない・・・でも、あの人、ジュエルシードを持ってる」

フェイトと呼ばれた少女は答えながら黒い杖を構えた。

「気絶させて、ジュエルシードを奪おう。あの人には悪いけど・・・私が攻撃して、もしよけたらアルフがそこを攻撃して。デバイスを持たずに転移したから強敵かもしれない、気をつけてね」

「あいよ」

フェイトから、アルフと呼ばれた女性は、そう短く返した。

ヴァンは、今の状況に途方に暮れていた。宝石が光り、気がつくと知らない街の屋上にいた。どこなのかわからないし、ガーディアンと通信が繋がらないし、そして極めつけは・・・

「なんでモデルH達がいないんだよ・・・」

確かに持っていたはずのライブメタル、モデルH、L、F、Pがな

くなっていた。おそらくはぐれたのだろう。

『大丈夫だ、モデルH達の反応がこの街にある。明日回収すればいい』

赤のライブメタル、モデルZがそう言った。確かに、今日回収に行って不審者扱いされるのは避けたい。とりあえずどこかホテルにでも泊まるか、と腰を上げた瞬間である。

『ヴァン！何か来るぞっ！』

モデルZが警告を発した。後ろを向くと、何発もの金色のエネルギー弾が飛んできた。

「おわっ！？」

ヴァンは本能的にそれを避ける。

「はあああああっ！！」

今度は獣の耳をつけた女がヴァンに向かって突進してきた。間一髪でそれもよける。

ヴァンが突進してきた女を向くと、その女の隣に金髪の少女が空から降りてきた。さっき弾を撃ったのはこの子だろう。

「なんでいきなり襲ってくるんだ！？」

ヴァンが2人に聞いてみた。聞いたところで答えてくれないだろうと思っていたのだが、少女は答えてくれた。

「ジュエルシードを渡してください」

「早く渡さないとガブッといくよ！」

獣耳の女も脅すように言う。が、

「・・・へ？ジルウェサード？何それ、先輩が何かあったの？」

ヴァンは何のことかわからずそう返してしまった。

「・・・ジュエルシードです」

「つーか誰だよ！とぼけるな、持ってるんだろ？青い宝石！」

「ああ、これ？」

2人、フェイトとアルフのツッコミでヴァンはようやくその手に持つ青い宝石・・・ジュエルシードのことだと気づいた。それと共に、思い当たる1つの節に当たった。

「あ、もしかして持ち主さん？」

「「え？」」

フェイトとアルフが意外そうな表情をするがヴァンは気にしない。

「よかった～、これの持ち主ずっと捜してたんだけど、全く見つからなくてさ～・・・はい」

「え・・・え？」

ヴァンは安堵しながらジュエルシードを渡し、奪い取るつもりだったフェイトはわけがわからずといった状態だ。

「ん？どうした？」

ヴァンが動揺しているフェイトに疑問を持ち、声をかけてみた。

「あ、あの・・・」

フェイトが控えめにきりだす。

「あなたは、管理局の人じゃないんですか？」

少しだけ沈黙の空気が流れた。

「・・・え？管理局？なんだそれ、レギオンズの新しい部隊か何か？」

「レギオンズ・・・？」

ここで、両者の話の食い違いが生まれた。と言っても、ほとんどヴァンの一方的などな勘違いだが。

「・・・えーと・・・あれ？ここのエリアナンバーって何だっけ？」

「エリアナンバー？」

「・・・・・」

「あの、ひょっとして、次元漂流者ですか？」

それから何分か、フェイトからここはどこか、次元漂流者とは何かの説明を受けた。かいつまんで説明すれば、ここは海鳴市という街で、ヴァンは次元規模の迷子になったということだ。次元漂流した理由は、ヴァンの持ち主に会うという願いにジュエルシードが反応した結果らしい。ジュエルシードはロストギアという危険なもので、もう一度ジュエルシードを使えば元の世界に帰れるという保証はないとのこと。

「そっか・・・色々説明ありがと・・・。これからどうしよ・・・・・」

大体の理解ができたところでヴァンはまた問題にぶち当たる。帰る方法はなんとか探すとして、それまでの衣食住の要素が１つもない。ヴァンの世界の通貨はＥクリスタルが一般的だが、話を聞く限りそれはここの世界では使えないようだ。

「あの・・・住む場所がないなら、うちに住みませんか？」

悩むヴァンに、フェイトが提案した。

「え、いいの？だって、他人だろ？俺達」

「悪い人じゃなさそうですし、ジュエルシードを渡してくれたお礼です。いいよね、アルフ？」

「いいんじゃない？フェイトがそう言うなら」

2人の優しい言葉に、ヴァンは感激した。

「ありがとう！あ、自己紹介がまだだったな、俺の名前はヴァン。運び屋をやってんだ」

ヴァンが自己紹介をした。そしてフェイトとアルフも自己紹介をする。

「私の名前はフェイト、フェイト・テスタロッサ」

「あたしはアルフって言うよ～」

「そうか、これからよろしくな、フェイト」

「う、うん・・・。こっちもよろしく、ヴァン」

最後に少し頬を赤らめながらフェイトが言った。

こうして、ヴァンとフェイト、アルフは出会った。

「おおぉ～！」

ヴァンはフェイトの住むマンションに来ていた。高級マンションである。この世界はそんなに科学技術が発達していないようだが、それとは別だ。

「2人ってこんなところに住んでるのかぁ～いいなぁ～」

エレベーターに乗り部屋へと行く。部屋は、高級マンションというだけあって広く、ガラス張りの壁から夜景を一望できる。

「いい景色じゃん。やばっ、ほんとに羨ましくなってきた」

ソファに座り、部屋を見回すと、じっとこちらを見るアルフが目に入った。ちなみに獣の耳と尻尾は隠してる。

「ん？どうしたアルフ？」

「あのさ、ヴァン。腰のホルダーに入ってるのは何なのさ？普通のポーチにしては大きいよね」

「ああ、これか？」

ヴァンは一瞬、これの中身を言おうかどうしようか迷った。６つのホルダーの内２つに入っているのはライブメタルだ。それ以外は空である。ライブメタルを入れるためのホルダーなのである。でも、ごまかすのは好きじゃないし、こっちも聞きたいことがあるため、この質問に素直に答えることにした。

「これに入ってるのは、ライブメタルって言って、意思を持ち、俺に戦う力をくれるんだ」

「へぇ～ヴァンって、戦うんだ？そのライブメタルってヤツ、見せてくれない？」

アルフの要望に応え、ヴァンはモデルＸとモデルＺを取り出し、アルフに手渡した。

「ん～デバイスみたいだねぇ～・・・ありがと」

アルフはライブメタルを見てそう呟き、２つとも返した。

今度はヴァンが質問する。

「じゃあ、こっちからも質問。フェイトって何者なんだ？空は飛ぶし、光の玉を作って打ち出すし」

「私は魔導師です」

「魔導師？」

「魔力を操り、魔法を扱う人のことです」

「へ～、アルフもその魔導師ってやつなのか？」

ヴァンは次にアルフに聞いてみる。

「いや、あたしは使い魔さ」

「使い魔？」

「魔導師が使役する一種の人造生物だよ」

「うーん、要するに、フェイトはすごい魔法使いってことなんだな」

「そ、そんなことはないですよ・・・」

フェイトが照れたように頬を赤くする。アルフもご主人が誉められて嬉しいのだろう。ニコニコとしている。

「いや、そんなことあるって・・・そうだ」

ヴァンが何か思い出したように言った。

「なあ、フェイト、敬語やめてくれない？なんていうか、敬語で言われると申し訳なくなっちゃうから」

「え、あ・・・・うん、これで、いいかな？」

ヴァンの要望にフェイトは少し恥ずかしそうにタメ口に変える。

「ああ、これで話しやすくなったかな」

ヴァンが微笑む。

「そんじゃ、そろそろ晩御飯にするかいっと」

「「いただきます」」

「ちょっとまった」

フェイトとアルフが晩御飯を食べようとするが、ヴァンに呼び止められた。

「どうしたの？ヴァン」

「どうしたって言うかさぁ・・・」

ヴァンは目の前の料理を見つめる。
料理は全て、冷凍食品やインスタント料理だった。

「あのさぁ・・・食事ぐらいちゃんとしたものをとれよ・・・」

「え?えーっと・・・ごめん」

よく理解してないようだがフェイトは謝った。

「それとさ、アルフ」

今度はアルフの方を向く。

「なに食ってんの?」

「なにって・・・」

アルフは床に置いてある物を持った。

「ドッグフードだけど」

「意味わかんねーよ!つーか犬!?」

「違う、狼だ!」

「ドッグフード食ってるヤツが狼だって言っても信用できねーって!」

アルフにつっこんだ後、ヴァンは少し大きめにため息。

「しょうがない、俺が作るか」

ヴァンは台所に行き冷蔵庫を開けた。
その瞬間、ヴァンの肝が一瞬凍りついた。

「どうしたのさ、固まっちゃって」

「調味料込みで全部ないってどういうことおおぉぉぉぉ！！？？」

仕方ないから、今日の晩御飯はインスタント料理で済まし、明日ヴァンが食材を買うことにした。

「なんか悪いねぇ、こんなことにさせちゃって」

「気にしないで。これくらい当然だし、俺も明日探し物をしなきゃいけないから」

「探し物・・・？あれ、ヴァンって次元漂流者じゃん。なに探すのさ？」

アルフが訝しげに聞く。

「ライブメタル、ホントは６つあったんだけど、次元漂流したときにはぐれちゃったからさ、反応はもうわかるから、明日回収しに行きたいんだ」

「ふーん」

「ま、今日はもう早く寝よう。」

そう言ってヴァンはソファに寝転がった。晩御飯の後に話してここにしたのだ。

（モデルH達、大丈夫かな？）

そう思いながら、ヴァンは眠りにつくことにした。

第1章・第2話ー魔法少女との出会い（後書き）

楓
「えー、ヴァンはしばらく戦いどころか変身すらしないかもです。申し訳ない」

ヴァン
「俺・・・主人公だよね・・・？」

楓
「次回はようやくタイトル主人公登場です」

第3話－ライブメタルと魔法少女（前書き）

それで・・・争いは終わるのか？
・・・モデルH

これで・・・人気が上がるのか？
・・・楓

それに・・・説得力はあるのか？
・・・ヴァン

第3話ーライブメタルと魔法少女

どうも皆さん、おはようございます。高町なのはです。
ひょんなことから魔法少女になって、喋るフェレット、ユーノ君の手伝いで家族や友達には内緒でジュエルシードを集めてます。
実はそんなある日、私はある変わったものを拾いました。というか、部屋に落ちてきました。
それはですね・・・ふぁ・・・・・・

『なのは殿、朝でございます。お目覚めください』

レイジングハートを通して声が聞こえる・・・・・すぅ・・・。

『ちょっと、完全に寝ちゃったわよ?』

『早く起こさないと、学校というのがあるのではないのか?』

すぅー、すぅー・・・。

『じゃ、俺が起こしてやろうか?』

『あんた、体当たりはなしよ?』

『んなもんわかってるよ』

ぐーぐー。

『おーい、足音が聞こえるぞ。お前の母ちゃんじゃね?』

「！！？？」

お、お母さん！？やばい！！早く着替えないと！

『ほら起きた』

・・・・・・・・・・え？

『ガキってのは母ちゃんにとことん弱いんだぜ？』

『・・・・その情報はどこから仕入れた？』

『知らんうちに入ってた』

「モ、モデルＦ！脅かさないでよー！」

そう言って私はあるものに怒ります。

それは、オレンジ色のデザインの金属の塊。ほかにも、緑や青、紫色もあります。

彼ら（？）はライブメタルと言って、意思を持って、特別な人に力を与えることができるそうです。でも、私はその力を扱うどころか、ライブメタルの声すら聞こえません。私のデバイス、レイジングハートには聞こえるそうなので、それを通して会話をしています。

名前は、緑色がモデルＨ、青色がモデルＬ、オレンジ色がモデルＦ、紫色がモデルＰです。彼らは持ち主と一緒に次元漂流してしまい、その時にはぐれてしまったそうです。部屋に落ちてきて、それを私が預かっている、ということです。

持ち主さん、今どこにいるのかな？

『なのは殿、早く着替えて行ったほうがいいのでは？』

へ？・・・やばい、本当にそろそろ行かないと！
さっさと着替えて、準備はオッケーです！あ、念のため言っておきますけど、モデルH達は適当に引き出しの中に入れて見られないようにしましたよ？

『行ってらっしゃい』

唯一引き出しに入れてなかったモデルLの言葉。
うん、行ってきまーす！

オマケ

「ここ、かぁ・・・」

夕方。
買い物を済ませ、ヴァンは帰りにモデルH達を探した。たどり着いたのが翠屋という看板のある店である。

「回収しづらいなぁ・・・」

とりあえず店に入ろうかどうしようかで迷う。

「あの、どうしたんですか？」

「今日は止めようかなぁ・・・でもこのままだといつまで経ってもモデルH達を回収できないしなぁ～・・・」

「・・・・モデルH？」

「いや、こっちの話だよ？でもどうしたらいいのかなって・・・誰と話してんの俺？」

ヴァンが振り向くと、そこにはツインテールの少女・・・学校帰りの高町なのはがいた。

「あの・・・モデルHって・・・」

なのはがヴァンに詰め寄ってくる。

「い、いや！な、なんでもないよ。ただの独り言だから！じゃ！」

「あっ、ちょっと！」

ヴァンは『変なことを言ってる人』と思われ、そそくさと逃げるように、というか逃げた。なのはが呼び止めようとするが、そのまま走り去ってしまった。

（まさか、モデルH達の持ち主・・・？）

なのはは走り去るヴァンを見て、そう思った。

第3話ーライブメタルと魔法少女（後書き）

楓

「書き置きがなくなりました。これから更新速度は落ちると思いますが、頑張っていこうと思います。」

第４話－微妙と協力（前書き）

モデルＺを追い詰めたいう奴と戦えるなら、ちょっとは楽しめそうだしね

・・・モデルＬ

・・・理由それだけ？

・・・暁　楓

あら、私似でいいじゃない？

伝説の英雄Ｌ

うおっ！誰！？

・・・ヴァン

第４話－微妙と協力

場所だけわかっただけでも進歩と言いたい。そうライブメタルの回収に失敗した現実に開き直り、マンションに帰ったヴァンは台所に立っていた。ヴァンが帰ってきて少し経ったころにフェイトとアルフも帰ってきて、ヴァンの料理を待っている。

「ねぇ、ヴァンって料理できんの？」

台所を覗きにきたアルフが問う。ヴァンは首を縦には振らずに大丈夫だよ、と答えた。

昨日は説教じみたことを言っていたが、ヴァンも同類だったりする。料理は作ったことはないし、元の世界で食べてたものもコンビニ弁当とか栄養ドリンクばかりだ。前者ならともかく、後者を言えば間違いなく説教の意味がなくなる。それではだめだ。

そこでヴァンは買い物で食材だけでなく、本屋であるものも買った。ポケットから取り出す。

「これで勝ってみせる・・・」

『・・・・誰にだ？』

ヴァンがポケットから取り出したものは料理本だった。料理初挑戦の人が料理本片手に挑む・・・というありきたりな展開。だが、ヴァンは違う。料理本片手は結構危ない。だから、協力者をつけた。

「作るのは・・・あったあった、これだ」

ヴァンはハンバーグの写真が載っているページを見つけ、料理の邪

魔にならない場所に置く。

『ヴァン、頑張って！』

「おう。モデルXも頼む！」

協力者とは、モデルXだった。モデルXに説明を読んでもらい、それを受けてヴァンが料理する。いちいち本を読み直す必要がなくなるため、地味に時間短縮にもなる。一石二鳥だ。ちなみにモデルZにも協力を頼んだがモデルZ曰わく説明は好きじゃないらしい。読むだけなのに。

とりあえずヴァンの初クッキングがスタートしたのだが・・・

考えが甘かった。

モデルXの説明はよかったのだが、包丁の扱いやら説明だけではわからぬものがあり、

さらにはヴァンが自分の予想以上に不器用だった。

結果、

「・・・・ごめん」

できたのは普通に炊けたご飯と、奇跡的にうまくいったハンバーグ1個。他の2つは真っ黒になっていた。

この悲惨な結果を誤魔化すために卵焼きも作ったが、ハンバーグと卵焼きはあまり並ぶものではないことは、彼のために言わないでおこう。

「そんなことはないよ。私達の為に作ってくれたんだよね？」

「そうそう、仕方ないよ」

返ってきた2人の言葉に、ヴァンは嬉しく思いつつ、申し訳ない思いでいっぱいになっていく。

「さ、早く食べよう?」

フェイトが箸を持った。ヴァンとアルフも箸を持つ。

「俺、この黒いのを片付けるからさ、そのいいやつを2人で食いなよ」

ヴァンが真っ黒ハンバーグを2つとも自分の前に寄せた。自分の料理だ。責任を持たないと。

だが、それをアルフが止めた。

「ダメだよ、これは3人仲良く食べないと。その黒いのも食べるよ」

「え、でも・・・・・」

「大丈夫だよ。はい」

フェイトがハンバーグをそれぞれ三等分にしてそれぞれ3つの皿に乗せた。

「それじゃあ」

「「「いただきます」」」

ヴァンはまずうまくいったはずであるハンバーグを食べてみた。

（う～ん・・・・・微妙・・・）

うまくはなく、まずくもない。あ、ちょっとまずい寄りかな？アルフもリアクションに難しそうな表情だ。
次に卵焼き。これは黒くはなってない。決して暗黒物質ではない。

（・・・やっぱり微妙だ・・・・・）

微妙に自信がなくなっていく。
最後に真っ黒ハンバーグ。これも微妙に苦いなんてことかな、と思ったが、

（・・・・・苦い・・・・・）

結構苦かった。ここまできたら、微妙に苦いで済んで微妙に驚くのが流れだろ！？とわけのわからないことを思いながらショックを受ける。微妙じゃない。
アルフも暗黒バーグを食ったらしく、かなりつらそうな表情だ。フェイトも食べたみたいだが表情は穏やかだ。絶対に我慢してる。
その後ご飯を食べきり、ヴァンは食器を洗っている。フェイトとアルフも隣で食器洗いの手伝いをしている。
ヴァンはお椀を泡立てたスポンジでこすりながら顔をフェイトに向けた。

「なあ、今日の料理の感想を聞かせてくれないか？」

どんな料理であっても、感想は気になるものである。
アルフが先に手を止めて答えた。というか、あまり手を動かしてなかった。

「うーん、微妙だった。あと真っ黒ハンバーグはかなり苦かったし、おいしかったとは言えないなぁ」

予想通りの答えが返ってきた。

「私は、おいしかったと思うよ」

フェイトは全く逆の感想を述べた。

って・・・・・

「え?うまかったの?あれが?」

ヴァンが信じられずに聞き直した。

「うん、味はについてはアルフと同じだよ。でも、おいしかった」

「・・・・・どゆこと?」

ヴァンは首を傾げる。まさか、苦いものが好きなのか?

「ヴァンが私達のために作った料理だから、かな」

フェイトは恥ずかしそうにそう言った。

「・・・・・そっか。それじゃあ今度は味もよかったと言われるようにしないとな」

食器を洗い終わり、3人はリビングへと向かった。

「ところで、ヴァンは無くしたライブメタルを回収したのかい？」

リビングで、アルフがヴァンに聞いてきた。

「いや、できなかった。でも、場所はわかったから、そのうち回収するさ」

「ふ～ん」

「こっちも質問だけど、今日2人が出かけたのは、ジュエルシードを回収するためだよな？」

「うん」

「ジュエルシードって、いくつあるんだ？」

今度はヴァンが聞いてみた。他にも、ジュエルシードを集めてどうするのか、とか聞きたいことはあったが、あまりそこまでは聞かないことにした。

「ジュエルシードは全部で２１個。私はその全部を回収するんだ」

「２１個かぁ・・・大変だな」

「大丈夫だよ。それに、お母さんが必要としてるから」

「母さんの頼みなんだ？」

「ま、あたしはあの女の頼みじゃなくて、フェイトのためだけどね」

ヴァンは考えた。２人でこの街に散らばった２１個全て（１つはヴァンが別世界で拾ったが）を探しきるのは大変なものだ。それに、自分には戦う力がある。４つ無くしたけど。

「・・・よし、俺も手伝うよ、ジュエルシード集め」

「「え！？」」

「探す人は１人でも多い方がいいだろ？」

「で、でも！ジュエルシードは危険なものなんだよ！」

フェイトがヴァンの参加に反対した。だが、ヴァンも引き下がらない。

「それならフェイトだって、それを集めるのは危険じゃないか。大丈夫だよ、俺には戦う力がある」

「で、でも・・・・・」

「フェイト、いいじゃないか」

フェイトがまた反論しようとした時、アルフが入ってきた。

「ヴァンが言う通り、人数は多い方がいいし、ヴァンにはライブメタルって力があるじゃん。せっかく手伝いたいって言ってんだし、ここは甘えたら？」

「アルフ・・・」

フェイトは少し悩んだ後、意を決してヴァンに顔を向けた。

「ヴァン、絶対に無茶はしないって約束して」

フェイトの言葉に、ヴァンはフッと笑った。

「ったく、それはこっちの台詞だって」

「え？」

「フェイトの方が、よっぽど無茶しそうに見えるって」

言ってヴァンはフェイトの頭を撫でた。

「それじゃあ改めてよろしくな、フェイト」

「・・・うん！」

こうして、ヴァンもジュエルシード集めに協力することとなった。

第４話－微妙と協力（後書き）

楓

「やっと本編に繋がります」

第5話ー再会と事故（前書き）

さあ、次行こうぜ！今度は誰をぶっ飛ばしに行くんだ？

・・・モデルF

ま、まてよ！俺はまだ知ったか振りのままだろ

・・・暁　楓

俺の台詞改造すんの止めてくんない！？

・・・ヴァン

第5話－再会と事故

「しくった・・・・・」

ヴァンがジュエルシード集めに協力することとなった翌日。
ヴァンは森の中1人で両手両膝を地面につけうなだれていた。
数分前、フェイトと共にジュエルシードを探してここに来て、ヴァンが進んで森の中に入っていった。その時はちゃんと探す手段も考えていた。

が、

「モデルLもモデルPもないんだった・・・・・」

これである。
森に入る時、ヴァンはモデルLのアイテムサーチングかモデルPのレーダースコープの能力を使おうと考えていた。だが、まだその2つどころか、モデルH達4つのライブメタルを1つも回収してないことを思い出し、冒頭に至る。

「ちくしょう！なんでこんな事になるんだよぉ！」

ヴァンが叫ぶが叫んだところで状況は変わらない。モデルZからもため息の音が聞こえた。

『このままいても仕方ないし、手探りで探そう？』

モデルXからそう言われて1分後、ようやく立ち直ったヴァンは歩き出した。

しかしあてはない。
どの方角かもわからない。
自信が無くなってくる。

「ダメだ・・・鬱になる・・・」

『ヴァン、諦めちゃダメだ!』

「諦めたい・・・・・」

ヴァンが本気で諦めようとした時、

「あの～・・・」

「え・・・・・？」

ヴァンが振り返ると、1人の少女がいた。
それも、昨日の買い物帰りに顔見知ったヤツである。
要するに、なのはだ。

「・・・・・・・・・」

ヴァンはその顔を確認し、

（最悪だぁぁぁ！）

心の中シャウトした。

（なんで?なんでここにいるの?そしてなんでこんな悪いタイミングなの!?やべぇ、めっちゃ逃げたい！）

昨日の独り言を聞かれ、“変な人”の烙印をつけたであろう人物を前に、ヴァンはどう凌ぐか悩んだ。しかしいい案が思いつかない。
やべぇ、どうしよう・・・・・
そう思った時だ。

「あ、あの！」

なのはが腰につけたポーチから、

「これ、あなたのですよね？」

４つのライブメタルを取り出した。

「・・・・・

なのはは突然聞こえた音に驚いた。

（この音・・・まさか僕らの他にも魔導師が！？なのは！）

なのはの肩に乗っていたフェレット、ユーノは焦り、なのはに念話を送った。

念話とは魔法で直接言葉を発さずに相手と会話することである。言葉を発してないため、ヴァンには聞こえない。

（うん！）

なのははユーノの言葉に頷くと、手に持っているモデルH達を無理やりヴァンに持たせた。

「これはお返しします！」

そう言い、なのはは音の方へと走っていった。

「・・・・・」

『おい、いつまでぼーっとしてんだ』

ゴチンッ

「痛っ！？」

モデルFが体当たりをかましていまだに唖然としていたヴァンをたたき起こした。

『ほら、何やってんの。早く帰るわよ』

『というより、お前は今どこで生活してるんだ?』

『モデルX様、心配をおかけしてしまい申し訳ありませんでした』

モデルL、モデルH、モデルPがそれぞれ言う。

『みんな、お帰り』

『これで、ライブメタルは全部戻ってきたわけだな』

「まあ・・・そうだな・・・」

いまだ少しだけ実感が沸かず頭を掻く。と、なのはが走っていった方からアルフがやってきた。

「あ、いたいた・・・って、なんか増えてる?」

「ん、アルフ」

「全く、探したよ。ジュエルシードはもう回収したよ。・・・それが残りのライブメタルかい?」

「ああ、それぞれモデルH、モデルL、モデルF、モデルPって言うんだ」

「そうかい。じゃあ帰るよ」

アルフの案内のもと、ヴァンもこの場から立ち去った。

マンションに帰り、今日の成果を報告しあった後、夕食を食べた。
ヴァン作の八宝菜。

「・・・微妙だ・・・」

「微妙だね」

「おいしいよ」

ヴァン、アルフ、フェイトそれぞれの感想である。
夕食が終え、片付けも終え、アルフは今日ヴァンが回収したライブメタルをいじくっていた。といっても、ライブメタルを手に取って前後左右上下見ているだけだ。時々抵抗の声をあげているがアルフにはそれが聞こえない。

「ところで、ライブメタルの名前ってモデルなんたらって感じだけど、モデルって言うからには元があるんだよね。なんなのさ？」

モデルPを観察しながらアルフが聞いた。

「俺達の世界の、数百年前に存在した英雄の魂を宿してるんだってさ」

「ふーん」

ヴァンがソファの上で寝ようとする。だが、風呂に入ってないことを思い出し、脱衣場へと向かう。

脱衣場の前につき、ドアを開けた。
そこには、風呂から上がり、今まさに着替えようとしているフェイトがいた。要するに裸だ。

「っ！？」

「・・・・・」

フェイトは突如入ってきたヴァンに驚き、顔を赤くする。
ヴァンは何も言わず、開けたばかりのドアを閉めた。踵を返す。

自分ハ何モ見テマセン。

そう思った瞬間、

「サンダースマッシャー！」

ドオォォォォォン！

フェイトがヴァンをドアごと、否、壁ごと吹き飛ばした。

「な、なんだい今の音！？」

爆音を聞きつけたアルフが脱衣場の前に来ると、そこにはうつ伏せに倒れているヴァンが1人。

「ヴァン！どうしたんだい！？」

アルフが助け起こすとヴァンは虚ろな目でアルフを見ながらこう呟いた。

「先輩・・・俺は疲れたよ・・・今日はもう休みにしてくれ・・・・・」

「先輩って誰!?あ、最初ジュエルシードの聞き間違いで言ったアレ?・・・ってヴァン!?ヴァーーン!!」

ヴァンはぽっくりと気絶した。

『・・・ヴァン、ご愁傷様・・・』

『・・・今のはヴァンが悪い』

『同感だな』

『最低ね』

『・・・・・あ?なんかあったのか?』

『・・・・・』

ライブメタルは、それぞれの思いを口にした（一機無言の者がいたが）。

脱衣場には、顔から首元まで真っ赤になったフェイトがいた。

第5話ー再会と事故（後書き）

楓

「この作品ではヴァンが直接関わらない戦闘は省こうと思います。
次回は温泉です」

第6話ー海鳴温泉（前書き）

自らの力に溺れ、敗れたか・・・外道にふさわしい最期だな。
・・・モデルP

大体の敵はそういうもんじゃね？
・・・暁　楓

せっかくのいい台詞なのに・・・
・・・ヴァン

第6話ー海鳴温泉

ライブメタルがヴァンの元へ戻り、フェイトが2つ目のジュエルシードを回収した翌日。ヴァンとアルフはある場所へと来ていた。

「海鳴温泉？」

ヴァンが海鳴温泉と書かれた旅館を見上げた。

「昨日ジュエルシードを見つけた場所がこのあたりなんだ」

「ふ～ん」

とりあえずヴァンは納得する。ちなみに今のヴァンの服装は青のパーカーに白のズボン。何日も同じものを着るわけにはいかないが、いつもの服とは大した変わりはない。

また、なぜヴァンがここに来てるかというと、フェイトからご飯を作ってくれているお礼と昨夜ヴァンを魔法で黒こげにしたお詫びということだ。まあ、事故とは言えフェイトの裸を見たヴァンが悪いのだが。

『それでもそれを受け取るあたり、あなたの罪悪感はたかが知れていると考えていいのかしら？』

そうモデルＬに嫌みを言われたが、正直、フェイトはおとなしそうに見えて意外と頑固なのである。話し合いをしたが折れず、結果そのまま受け入れることとなった。

「ほら、早く入るよ～」

アルフに急かされたので、ヴァンは海鳴温泉へと入っていった。

部屋につき、特にすることはないのでそのまま風呂に入ることにした。ちなみにライブメタルは部屋に置いていった。

「ふぃ～。いい湯だねぇ～」

湯船に浸かりたっぷりとくつろぐ。ヴァンの世界にも温泉はあるが、ヴァンはそこに行ったことはない。だから初温泉を満喫していた。と、頭に何か小さなものが乗っかる感覚がした。そしてキュー、と頭上で一鳴き。

「？」

ヴァンは頭上にあるであろうものを軽く掴んだ。己の手が掴んだものは1匹のフェレット。

「・・・ここって、ペットオッケーだっけ？」

とヴァンは呟いた。普通飼い主はどこか、と思うはずなのだが。一拍程遅れて飼い主を探し始めるが、フェレットの飼い主らしき人はいない。

改めてフェレットを見る。

「どっかで見たようなやつだな～、どこだったっけ？」

そう思いながら、せっかくだしこいつの身体も洗ってやるかー、と

フェレットの身体を洗い、風呂を出た。
脱衣場で服を着直し、フェレットを頭に乗せてそこから出ると、廊下でアルフが凄く見覚えのある人物を含む3人の少女達を睨みつけていた。
これでもアルフは1人の少女、なのはに念話をしていたのだが、まわりの客同様、ただのガン飛ばしにしか見えないヴァンはこっそりアルフの後ろへと近づき、

「なにやってんの？」

ゴチンッ

「痛っ！？」

素手でアルフの頭を殴った。素手と言っても、ヴァンの機械の腕は相当痛いわけで、アルフはその痛みでようやくヴァンの存在に気づいた。

「ウ、ヴァン！？」

「何子供相手にケンカ売ってんだよ。・・・それとさあ・・・・・」

と、ヴァンはなのはを見る。

「なんで俺の行く先々にお前がいんの？」

「あ、あはは・・・」

偶然とは言え、3日連続で鉢合わせとなり、なのはは苦笑するしかなかった。

と、ヴァンの頭上にあるものになのはの友達、すずかが気づき、なのはに声をかけた。

「ねぇ、なのはちゃん。あの人が頭に乗せているのって、ユーノ君じゃない？」

「え？あ、ユーノ君！探したんだよ！」

その言葉でフェレット、ユーノに気づき、なのはは手を伸ばす。ユーノはその手に飛び乗った。

「やっぱりお前のだったんだな」

「はい、一緒に温泉に入ろうとしたんですけど、逃げちゃって・・・探したんですけど見つからなくて」

「なのは、ところでこの人は？」

と、なのはのもう1人の友達、アリサがヴァンを指差して聞いた。

「えっと・・・顔見知り？」

「なんで“？”が入るのよ・・・それに、顔見知りなのに慣れた感じじゃない」

「まあ・・・顔見知りなのは事実だな」

ヴァンが頭を掻く。確かに、ライブメタルを返してもらったりしたが、まだ名前を聞いてない。

話がどんどんずれてきたので、ヴァンは1つ咳払いをした。かなり

下手である。

「あー、話がずれてきたな。とにかく、俺の連れが変なことしてゴメンな。許してくれねーか？」

「あ、はい・・・」

ヴァンの頼みに、なのはが答えた。その返事を受け取ると、ヴァンは悪かったなー、と誤りながらアルフを掴み、そそくさと部屋に向かって歩き去って行く。掴まれたことに対しアルフは抵抗するかけど、機械だから痛くない。あ、ちょっと痛いな。

「あ、あの！」

そんなヴァンをなのはは呼び止めた。ヴァンが振り返る。

「自己紹介が遅れました、私、高町なのはって言います！」

なのはは自分の名前を伝えた。

「・・・俺は、ヴァン。運び屋のヴァンだ」

ヴァンも自分の名前を告げる。

そして、またズルズルとアルフを引きずっていった。

ヴァンの部屋

「・・・で、アルフ。子供3人に何してたんだ？」

ヴァンはアルフに先程の行為について問いただした。

「・・・その前に、ヴァン。ヴァンはあいつらとどんな関係なのさ？」

「関係って・・・なのはとは顔見知りで、モデルH達を拾ってくれたってだけだけど。あとの2人は今日初めて会った」

ヴァンが答えた後、アルフは暫く黙っていたが、呟くように話した。
なのははフェイトと同じ魔導師であること。
そしてなのはもジュエルシードを集めている、自分達とは敵同士であること。
アルフはたまたまなのはを見かけて、フェイトの邪魔をしないように警告、というか脅しをしてたこと。

「・・・そっか。でも、あんま周りに人がいるような場所でそういうことはもうするなよ？周りから見れば小さな子供に絡んでるようにしか見えないからな」

「うっ・・・わかったよ・・・」

少し落ち込みながらも、アルフはヴァンの注意を受け入れた。

「ちょっと、フェイトの様子を見てくる」

ヴァンは立ち上がった。

一方、なのはとユーノは念話で警告を発してきたアルフについて話し合っていた。

「とにかく、あの魔導師と関係があるのは間違いないよ。でも・・・」

「うん・・・ヴァンさんのことだよね・・・」

ライブメタルの話から、ヴァンが次元漂流者であることはわかっている。問題は、次元漂流者であるヴァンがなぜ魔導師と行動を共にしているかだった。

しかし、ヴァンがフェイトに拾われた身であることを知るはずもないなのはにその理由がわかるはずがない。

「一度、お話を聞かせてくれればいいんだけど・・・」

ヴァンがどこにいるかわからないなのはは、また再会することを望むしかなかった。

旅館の周りを探してると、木の上に座っているフェイトを見つけた。

「おーい！」

「！」

声をかけ、フェイトを振り向かせた。

「ヴァン、どうしたの？」

「そっちの様子を確かめたくてさ」

頭の後ろで手を組みながらフェイトの質問に答えた。

「ジュエルシードは？」

「見つけたよ。封印は今夜やるから」

「わかった」

ヴァンは旅館へと引き返そうとした。

だが、１つ思いつき、フェイトに伝えることを決め振り返る。

「そうそう、今度時間があったらフェイトも来いよ」

「え？」

「たまには休みも必要だろ？疲れたら正直に言って、ゆっくりとすればいいさ」

そう言ってヴァンは旅館へと引き返した。

（・・・ありがとう、ヴァン）

その後ろ姿を見て、フェイトは少し顔を赤らめて心の中で感謝の気持ちを述べた。

第6話ー海鳴温泉（後書き）

楓

「はい、というわけでユーノの淫獣化は避けられました。次回はまた色々はしょるかもです」

第7話ー激突・・・1（前書き）

あきら・・・めるな・・・・・・お前には・・・まだ・・・守るべきものが・・・・・ある・・・・・・・・・・・

・・・ジルウェ

あきら・・・めない・・・・・・俺には・・・まだ・・・書くべき構成が・・・・・ある・・・・・・・・・・・

・・・暁　楓

いい加減にしろおおぉぉぉぉぉ！！

・・・ヴァン

第7話－激突・・・1

その日の夜、旅館のチェックアウトを取ったヴァンとアルフはフェイトと合流した。

「ヴァン、楽しめた？」

フェイトが聞いてきた。

「ああ」

ヴァンはそう短く返した。そして聞く。

「ジュエルシードは？」

「あそこだよ」

フェイトは川を指差した。

川から、青い光を発しているジュエルシードが見える。

「バルディッシュ、起きて！」

フェイトの手袋にはめられた黄色い三角形が外れ、黒い杖となる。

「封印するよアルフ。サポートをお願い」

「へいへい」

2人が封印にかかる。ヴァンは邪魔にならないよう2人が離れた。

そして無事封印が完了したときだ。

「あ・・・あれって！」

なのはとユーノがやってきた。

「あ～らあら、やっぱり来ちゃったか」

アルフが白々しく言った。

「つーかまたかよ！」

「あ、ヴァンさん！」

「それを・・・ジュエルシードを集めてどうするつもりだ！」

ユーノが声を上げた。フェイト、アルフは平然としているが・・・

「フェレットが喋った！？」

ヴァンは驚いた。それを気に止めることなくアルフが言う。

「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにあたしは親切に言ったよね？いい子にしてないとガブッといくよ・・・って」

「いや、それはただの脅し・・・」

ヴァンがつっこもうとしたが、途中で止まった。

アルフが狼の姿に変わったからだ。

「おわあああぁぁ！？」

ヴァンが仰天した。さすがにこれにはびっくりした。

「あー・・・ヴァンにこの姿を見せるのは初めてだったね」

アルフは思い出すように言いながらも相手を睨んだ。
フェイトもジュエルシードのことは一時置いといて、なのはと対立する。
状況を確認しよう。
向かい合うフェイトとなのは。
睨み合うアルフとユーノ。
封印済みのジュエルシード。
1人取り残されたヴァン。

「・・・ヴァン、今の内にジュエルシードを回収し・・・て？」

フェイトがヴァンの方向を向くと、1人しゃがみこんでぶつぶつ呟いているヴァンがいた。

「わかってたよ・・・どんなに力があっても、ここでは魔法が使えなきゃなんも手伝いできないってことぐらい・・・でも、でもさぁ・・・関係者なりに手伝いしたいって思うじゃん。なのに、なんでこう仲間外れにされるのさ・・・・・」

「・・・・お～い、ヴァン、どうしたんだい？」

「それにさぁ・・・対立するときにしか出会わないなのはならまだしも、使い魔ってことも知って、一緒に生活してる俺がアルフが狼になれるってこと知らないって・・・もう確定じゃないか・・・」

「・・・あー・・・・・」

ヴァンのどんよりとした空気に、アルフは顔をしかめた。ヴァンを中心にして、こう、なんというか気まずい空気ができていた。関係者であるのにも関わらず仲間外れにされるということは、結構つらいものである。作者は知らないけど。

モデルZがため息をついた。

『ヴァンのことは俺達に任せろ。お前達は自分のやるべきことをやれ』

バルディッシュを通し、フェイトとアルフに言葉を発した。

「う・・・うん」

フェイトは申し訳なさそうに返事をし、なのはに向き直った。

「・・・私達もあなたも、ジュエルシードを求めてる。つまり敵同士ってことになるね」

「・・・そ、そんな勝手なことにならないように、話し合いってものが・・・！」

なのはが抗議するが、フェイトは静かに目を閉じた。

「言葉だけじゃ・・・なにも変わらない・・・・・伝わらない！」

フェイトは目を見開きバルディッシュを構えると、なのはの背後に回った。

「くっ！」

なのはは足に魔力の翼を展開し、フェイトの攻撃を避けた。

「けど・・・だからって！」

「賭けて。ジュエルシードを1つずつ」

言って、フェイトも空を飛びなのはを追った。

「なのは！」

「あんたの相手はあたしだよ！」

ユーノはなのはを助けに向かおうとしたが、アルフが割り込みそのまま戦闘となった。

一方

『おら、いつまでへこたれてんだ。さっさと立ちやがれ』

「いや、わかってる。わかってるんだけどさ、仮にも俺は主人公だよ？なのにまだ戦闘してないどころか変身すらしてないってどういうことさ？」

『・・・確かに、6話目になってまだ関わりが薄いっていうのは、正直考えものね』

『・・・そんなこと話しているときではないだろう？』

ヴァンとライブメタルは話し合っていた。というか一部この小説に対する愚痴のこぼし合いになっている。

正直勘弁してほしい。（暁　楓）

『・・・作者によると、第2話はフェイト殿との戦闘にするか迷ってたときがあったそうだ』

って、モデルPもかよ。（暁　楓）

そしてその言葉にヴァンは激情した。

「なんだよ！最初に戦闘させる気あったんじゃん！なんでこうなったんだよ！」

『ヴァン、落ち着いて！』

『そうだ。俺に至っては出番が無さすぎるせいで読者から心配の感想文が来たんだぞ！』

申し訳ない。（暁　楓）

『んー、よくわかんねぇが、そのうちなんとかなんだろ』

モデルFが適当に流した。

モデルHも続く。

『そうだ、それに二度目になるが、今はそんな話しをしてる時ではないだろう』

モデルHの言葉で、ヴァンがようやく戦闘を繰り広げるフェイト達に気づいた。

「・・・フェイト！」

だが、その時にはもう勝負が決まった。
フェイトが、なのはの首もとでバルディッシュの刃を止めていた。
いわゆる寸止めである。
主人の危機を脱するために、なのはのデバイス、レイジングハートがジュエルシードを1つ排出した。

「レイジングハート・・・何を！？」

「きっと主人思いの、いい子なんだよ」

フェイトはそのジュエルシードと、封印したジュエルシードを回収した。

「さっすがあたしのご主人様♪」

フェイトの勝利を確認したアルフが戻ってきた。
2人はヴァンの元へと向かう。

「ヴァン、帰ろう」

「ん、ああ」

「ヴァン・・・ゴメンよ、1人仲間外れにしてしまって・・・」

アルフが謝る。だがすっかり立ち直ったヴァンは気にしなかった。

3人が立ち去ろうとする。

「ま、待って！」

なのはがその3人を呼び止めた。
フェイトは立ち止まるが、振り返らない。

「できればもう、私達の前に現れないで。今度会ったら、きっと手加減できない。」

「名前・・・あなたの名前は！？」

なのはがフェイトに名前を求めた。

「フェイト。フェイト・テスタロッサ」

「私は・・・」

なのはは自分の名前を言おうとするが、言い終えたフェイトはそのまま去ってしまった。

「ばいばーい」

アルフがそれに続く。

「・・・・・」

ヴァンは何も言わず2人に続いた。
なのはとユーノは、3人が行った方向を静かに見つめていた。

第7話－激突・・・1（後書き）

楓

「えー、ヴァンのキャラが不安定になりました。申し訳ないです。他に思いつかなかったんです。石は投げないでくださいお願いします。

次回、ようやくヴァンが変身する予定です。

ちなみにモデルPが言ったこと、事実です（笑）」

第8話ー激突・・・2（前書き）

発電所のボスを倒したから、施設の中は、一部機能が働いていないみたいね

・・・プレリー

・・・・名前で言ってくれ・・・（涙目）

・・・ハイボルト

哀れ（笑）

・・・暁　楓

・・・あれ、名言コーナーじゃなかったっけ？

・・・ヴァン

第8話ー激突・・・2

数日後の夕方。
アルフは美味しそうにドッグフードを食べている。ヴァンに説教されたものだが、アルフにとっての好物なのでやめる気はない。

「ん～、ヴァンにダメだって言われるけど、やっぱ止められないねぇ～」

アルフは席を立つ。

「さて、ウチの姫様はっと」

ドッグフード1箱を手にフェイトの部屋へと向かう。
部屋に入ると、バリアジャケットを着たフェイトがベッドの上で横になっていた。
台の上の物を見る。

「ああ、また食べてない」

台の上には、ほとんど手付かずのご飯があった。
ちなみにヴァンの料理である。

「ダメだよ、食べなきゃ。ヴァンも怒るよ」

「大丈夫だよ。少しだけど食べたから」

「確かにそうみたいだけど・・・」

フェイトは体を起こした。
フェイトの背中にある無数の傷跡を見て、アルフの顔が悲痛に歪む。
「フェイト・・・ヴァンにそれを言わなくていいの？」
「うん・・・、あまり心配させたくないから」
「でも、ヴァンならもしかしたら、あの人からフェイトを護ってくれるかもしれないよ」
「大丈夫だよアルフ。母さんは私のためだって言ってたし」
フェイトが立ち上がる。
「ヴァンが帰ってきたら出発しよう。ジュエルシードの位置特定ならできてる。ヴァンは・・・確か買い物だよね？」
「う、うん・・・けどフェイト、あんまり無理はしないでね」
「大丈夫だよ。私、強いから」
フェイトは微笑みながら言った。
買い物帰りのヴァンは、歩きながらあることを考えていた。
フェイトが集め、自分がこの世界に飛ばされた原因にもなったジュエルシード。
アルフもユーノも、ジュエルシードを危険なものと言っていた。

「危険なもの、か・・・」

ヴァンは呟いた。すると、モデルXが話しかけてきた。

『・・・ヴァン、ジュエルシードについてどう思う?』

「・・・わからない。少なくても関わらないほうがいいものだってことはわかる。あの2人も含めて」

そこにモデルHも入る。

『だが、ジュエルシードはもとはユーノのものである上、ほうっておいても暴走したら一溜まりもないって話だぞ?』

「・・・ああ、それをどうするかってことだよな・・・・・」

しかし考えても思いつかず、そのままマンションに帰ることとなった。

ヴァンが帰ってきたあと、3人は海鳴市へと来た。ヴァンはいつもの服で、アルフは狼の姿である。

ビルの屋上から、街を見下ろす。

「こりゃ大変そうだな・・・モデルLを使うか?少し早く見つかるはず」

ヴァンがホルダーからモデルXとモデルLを取り出そうとする。

フェイトはそれを止めた。

「ううん、ちょっと乱暴だけど、魔力流を打ち込んで、ジュエルシードを強制発動させるよ」

フェイトが始めようとすると、

「ああ、ちょっと待った。それあたしがやる」

アルフがその役割を申し出た。

「大丈夫アルフ？結構疲れるよ」

「いったい誰の使い魔とお思いで？任せなよ」

「わかった。じゃあお願いね」

フェイトがアルフにまかせた。

「じゃあいくよ！」

アルフが構えた。

「はあああああ！」

オレンジの魔力が展開される。

それにジュエルシードが反応し、黒雲が空を包み、海では雷が鳴り響いた。

時は同じくして、なのはとユーノも街でジュエルシードを探していた。

「こ…これは！？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

「こんな街中で強制発動！？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

「く・・・！広域結界！間に合え！」

ユーノは緑色の魔法陣を展開させる。

ジュエルシード反応後の空を見て、ヴァンの表情は引きつっていた。

「なあ・・・やばいことになってない？」

やっぱモデルL使った方がよかったか？

そう思った直後、街中に1つの青い光が立った。

「見つけた！」

「けど、あっちも近くにいるみたいだよ」

ユーノの魔法によって世界の色が変わる。

「早く片付けよ。バルディッシュ」
フェイトはバルディッシュを構えた。

別の場所でなのはもジュエルシードの光を確認した。
「あれはジュエルシードの光！？」
その光を見てなのはは声を上げた。
レイジングハートを構える。
「リリカルマジカル！」
「ジュエルシード、シリアル１９！」
レイジングハートとバルディッシュそれぞれに、魔力が収束される。
「「封印！」」
２人のデバイスから閃光が放たれた。それを受けたジュエルシードは光を失った。
なのはとユーノは急いでジュエルシードのある場所に向かう。
「あいつらもいるんだったら、俺達も急いだ方が良さそうだな」
「うん・・・そうだね。ヴァン、悪いけど・・・」

フェイトが申し訳なさそうな表情になる。この前のことを思っているのだろう。

「大丈夫だ。俺がやることは、２人を見守ることだろ？」

「うん、ごめんね。・・・アルフはフェレットをお願い」

「はいよ！」

フェイト達もジュエルシードへと向かう。

なのは達が先にジュエルシードの元についた。

「やった！なのは、早く確保を！」

「そうはさせるかい！」

空からアルフが襲いかかってきた。
ユーノは障壁を張って攻撃を防ぐ。
そしてユーノはアルフを引きつけなのはから離れていく。
なのはとフェイトも対峙した。
ヴァンはその２人を少し離れた場所から見守っている。

（目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない・・・）

なのはは真っ直ぐにフェイトを見つめる。

（だけど知りたいんだ！）

なのは一歩前に出る。

「この間は自己紹介できなかったけど・・・私、なのは！高町なのは！私立聖祥大付属小学校三年生！」

なのははフェイトに自己紹介した。

だが、フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させた。

「！！」

なのはもレイジングハートを構える。

（どうしてそんなに寂しい眼をしてるのか・・・）

フェイトの眼を見てなのはが思う。

だがフェイトがバルディッシュを振り上げて襲いかかった。

なのはは足に翼を展開させて空を飛んだ。

フェイトは、なのはの後ろに回る。

なのはは足に展開した翼を羽ばたかせ、フェイトの後ろに回った。

レイジングハートから桜色の閃光、ディバインシューターが放たれる。

フェイトは金色の障壁を張ってそれを防ぐ。

「フェイトちゃん！」

「！！」

「話し合いだけじゃ・・・言葉だけじゃ何も変わらないって言って

たけど・・・話さないと、言葉にしないと伝わらない事だってきっとあるよ！」

「・・・・・・・・・」

突然名前で呼ばれ驚いていたフェイトだったが、何も答えない。

「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

声に出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから！」

「・・・・・・・・・」

フェイトは黙って、なのはの話を聞く。

「これが・・・私の理由！」

「・・・私は・・・・・・」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

「フェイト！答えなくていい！！」

アルフがそれを止めた。

「！」

「優しくしてくれる人達の所で、ヌクヌクと甘ったれて過ごしてきたガキんちょに何も教えなくていい！！」

アルフのその言葉は、ヴァンの表情を険しくさせた。

（まさか、フェイトとフェイトの母さんの間で何かあるのか・・・？）

アルフはジュエルシードを集めるのはフェイトのため・・・一見フェイトとアルフの関係から考えてアルフの理由は当然のように感じさせるが、アルフの言葉はそれを覆すほどのものだった。
フェイトとフェイトの母親の間に何かあったら、
フェイトの身が危機に晒されるようなことになったら・・・
だが、そんなヴァンの思考はアルフによって遮られた。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフの言葉では我に帰ったフェイトは、ジュエルシードの方へ向かった。
なのはもジュエルシードへ向かう。
そしてジュエルシードの前で、二人の持つデバイスがぶつかり合った。互いのデバイスにヒビが入る。
その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

「フェイト！」

「なのは！」

アルフとユーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れる。

「大丈夫？戻ってバルディッシュ」

傷ついたバルディッシュを見てフェイトはそう言う。

バルディッシュは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。

フェイトは目の前で暴走しているジュエルシード目掛けて走った。

「フェイト！ダメだ危ない！！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシードを掴み取る。ジュエルシードは強い光を放っている。

「く・・・！」

フェイトはその場に座り込んだ。魔法陣を展開させる。

「止まれ」

光が激しさを増す。

「止まれ・・・止まれ！」

フェイトの言葉にジュエルシードは反応せず、フェイトの手袋が破れて血が吹き出てきた。

「フェイト！！」

ヴァンは走り出した。

それに気づいたフェイトは叫ぶ。

「ヴァン、来ないで！」

「そんな依頼は却下だ！」

ヴァンはフェイトの叫びを一蹴し、モデルXを取り出す。

「ロックオン！」

『適合者確認・・・R．O．C．K．システム、起動開始・・・！』

モデルXから発する光がヴァンを包み込んだ。

次の瞬間、ヴァンは青いアーマーに包まれた、ロックマンモデルXとなった。

それを見てなのはが驚く。

「あ、あれが・・・ライブメタルで変身したヴァンさん！？」

ロックマンとなったヴァンは地面を蹴り上げ瞬発的に高速で移動するダッシュであっと言う間にフェイトの元に辿り着く。

フェイトをジュエルシードから離し、ヴァンがジュエルシードを掴んだ。

ジュエルシードの光が、ヴァンに襲い掛かる。

「ぐあああああ！！」

「ヴァン！！」

フェイトが叫ぶ。

ヴァンが傷つき、Xアーマーにひびが入る。

「ヴァン！魔導師でもないのになんて無茶を！！」

アルフも傷ついていくヴァンに悲鳴に近い叫びを上げた。

「ぐあああああ！」

「ヴァン！！」

フェイトの目に涙が浮かぶ。

「は、早く・・・封印しろ・・・・・！」

「・・・っ、・・・止まれ、止まれ、止まれっ、止まれ！」

フェイトが懇願するように叫んだ。ジュエルシードはしだいに光を失っていき、やがて収まった。魔法陣も消える。

ヴァンはだらんと腕を降ろした。彼の手には光を失ったジュエルシードが何事もなかったようにあった。

「ヴァン！」

フェイトが心配する。

「・・・ったく、無茶させやがって」

ヴァンは反対に笑みを浮かべ、傷ついた右腕を抑えた。ただ、左腕も同様に傷ついている。

「ヴァンさん！」

そこになのはが駆けつけてくる。しかし、その足は睨むアルフによって止まってしまった。

「なっ・・・！」

なのはが止まったことを確認すると、アルフはなのはを視線から外し、２人の元へと駆け寄った。

「ヴァン！大丈夫かい！？」

「ああ、なんとか、な」

「・・・早く帰って、手当てをするよ。ヴァン、アルフを背中に乗って」

「わかった」

変身を解いたヴァンはフェイトの言うとおり、アルフの背中に乗った。

そして３人は去っていった。

なのはとユーノはその姿を黙って見ているしかなかった。

第8話－激突・・・2（後書き）

楓

「やっっっとヴァンが変身しました。これから変身が多くなっていく、と思います。」

第9話ー時の庭園（前書き）

青のロックマン・・・お前のそれは勇気じゃない・・・・・ただの無謀だ

・・・プロメテ

・・・・・だまれっ！

・・・ヴァン

サブキャラの癖に！！

・・・暁　楓

・・・・・・。

・・・パンドラ

第9話 一時の庭園

マンションに戻ったヴァンは、自分で手に包帯を巻いていた。というのも、アルフはフェイトの手当てをしていたからだ。
フェイトの怪我はヴァンが庇ったことで大したほどではなかった。それより、ヴァンの怪我の方がひどかった。モデルXを使ったことによりいくらかは軽減され、明日にはもう大丈夫だろうが、本来なら、アルフはヴァンの手当てを優先すべきであろう。
だが、それはヴァンの方から断った。
ヴァンの怪我からは、機械の部品が僅かに見えていたのだ。それ自体なら大したことはなかったのだが、ここはヴァンのもといた世界とは違う。ましてや子供のフェイトにこれを見せ、ショックを与えるようなことにはしたくなかった。
だからヴァンはアルフをフェイトのほうに向かわせた。

「これでいいかな」

包帯を巻き終え、一息つく。そこに、フェイトが入ってきた。アルフも入ってくる。
入ってきたフェイトは、ヴァンの手に巻かれている包帯を見て表情を暗くした。

「・・・・ヴァン、ごめんね・・・私のせいで、あなたをこんな目に・・・・」

「・・・・・」

ヴァンはフェイトの前に立った。
フェイトは顔を俯いていて、表情が見えなくなっていた。

はぁ、とヴァンはため息を吐いた後、

ペチッ

デコピンをフェイトの額にくらわせた。少し強めに。

「「・・・〜っ！！」」

強めのデコピンをくらったフェイトは勿論、手負いのデコピンを行ったヴァンも苦悶の表情を浮かべた。

「・・・なにやってんの？」

アルフが半目になってヴァンを見た。まだ痛がっている。

「っ〜・・・いいかフェイト」

ヴァンが話し始めた。

「フェイトは俺に無茶するなって言ったけど、俺もそう言ったよな？」

「う・・・うん」

「でもお前は今日無茶をした。・・・そんなに俺を信用できないのか？俺を他人だと思っているのか？」

「そ、それは・・・」

フェイトが迷っていると、再びヴァンが腕を伸ばしてきた。思わず

ビクリと肩を震わせ、目を閉じる。
だが、感じたのは頭への優しい感触だった。

「え？」

顔を上げると、ヴァンが自分の頭を撫でていた。

「フェイト、お前は１人じゃない・・・。１人で背負おうとするな。
フェイトには、俺やアルフがついている」

この言葉はかつてライブメタル回収ミッションで遊園地に来たときにプレリーから言われたものだ。１１年前のことを思い出し焦るヴァンに、自分を支えてくれる仲間と、それを守っていくことを改めて教えてくれた。

「ヴァン・・・」

フェイトはヴァンを見た。

「さて、そろそろ飯を食うぞ」

ヴァンが台所へ向かおうとする。
アルフが待ったをかけた。

「ヴァン、あんたそんな腕で料理できるのかい？」

「あ」

そう、ヴァンの腕は今怪我をしている。動かすには問題ないし明日には治るだろうが、それでも料理しずらい。しずらい、で済んでい

るのは、何度も言うが、ヴァンの体は機械化されている。その気になれば料理はできる。

「わ、私がやる！」

フェイトが名乗りを上げた。

「「・・・え？」」

テーブルの上は、初日のヴァン顔負けの悲惨な状態となっていた。普通に炊けるご飯を除き、あとの料理は全部黒こげだった。ヴァン同様、卵焼きも作ったようだが、それすら真っ黒である。アルフも引いている。

「えっとこれは・・・焦げの千切りという名の料理？」

ヴァンが皿に盛り付けられた黒い千切り状のものを箸でつまむ。

「・・・・・野菜炒めです」

ムッとしたフェイトが答えた。

「いや、これはさすがにさ、ここまで黒くはなんないだろ？というか、どこまで黒くする予定だったの？」

すると、

「ヴァン、食べるよね？」

笑顔でフェイトがバルディッシュを取り出した。いつ直った。

「エエ、モチロン」

ヴァンは多分今までの中で最上級であろうスマイルと共にその焦げ炒めを口に放り込んだ。

まあ感想を述べよう。
味は不明。というのも、フェイトに笑顔で接することのみ考えて味まで感じてなかったからだ。ある意味奇跡。
今ヴァンはソファの上で横になっている。

（・・・明日フェイトは報告するためフェイトの母さん・・・確かプレシアか、そのところへ行くんだよな）

ヴァンも同行することになっている。そしてヴァンはなんとかしてプレシアにジュエルシード集めを止めさせようと思っていた。
フェイトが集める理由はプレシアの頼みなら、そのプレシアをとめる必要があるからだ。
問題はどうやって説得するかだ。ヴァンもまだ１５歳、まだ子供だ。
そんな子供の説得に素直に応じてくれるかどうか・・・
そんなこんな考えていると、フェイトがやってきた。

「あ・・・あの、ヴァン・・・」

「？どうした？」

ヴァンが起き上がる。フェイトはもじもじとして、顔を赤くしていく。

「そ、その・・・今日、一緒に寝てくれる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

長ーい溜めｐａｒｔ2。
まあ無理もないだろう。少女から一緒に寝ることを頼まれれば、それがほぼ何でも屋な運び屋であっても、驚くものだ。

「えーっと・・・・・なんで？」

「え、いや、その・・・ヴァンはいつもソファの上で寝てるけど、たまにはベッドの上で寝たい時もあるのかなって・・・・・」

そう言う間にもフェイトの顔は赤くなっていく。このままだと蒸気でも出るんじゃないだろうか？

「・・・・わかった。今日はフェイトの部屋で寝るよ」

ヴァンはそんなフェイトの顔を見て折れることにした。このままはなんかかわいそうだし。
その返事を聞くと、フェイトは笑顔になった。

「それじゃあ待ってるね」

フェイトは自分の部屋へ向かった。特にすることもなかったのでヴァンもフェイトの部屋へ向かう。
その日はフェイト、アルフ、ヴァン、そしてライブメタル全員がフ

エイトの部屋で寝た。
結局、ヴァンはアルフとベッドの横で寝た。

その翌日。

「ヴァン、準備はいい？」

「ああ」

ヴァン達はマンションの屋上にきていた。これからプレシアに報告とジュエルシードを渡しに行く。
フェイトの手には喫茶店で買ったケーキが入っている箱がある。お土産だろう。ちなみに翠屋ではない。

「それじゃあいくよ」

「おう」

「次元転移。次元座標。・・・・・」

魔法陣を展開し、フェイトが数字やら色々呟く。魔法陣の光がしだいに強くなっていく。

「開け、誘いへの扉。時の庭園、テスタロッサの主の所へ！」

魔法陣が強い光を発し、三人を包み込んだ。

ヴァン達は高次元空間内の時の庭園に到着した。
だがその直後、

パタン

ヴァンが倒れた。

「ヴァン！？」

「ヴァン、どうしたんだい！？」

フェイトとアルフは驚いた。

「な、なんか・・・気持ち悪い・・・・・」

ヴァンが倒れた理由。
それは今いる高次元空間という場所に身体が慣れてないせいだ。ヴァンの場合、身体の機器までもが異常を訴え、全く動けなくなっていた。ライブメタルも例外なく、自身の異常を訴えている。
フェイトはとりあえずうつぶせになっているヴァンを起こし、楽な体勢にさせる。

「わ、悪い・・・先に行っててくれ。俺もすぐに行くから」

「う、うん・・・無理はしないでね」

「ゆっくり休みなよ」

2人は先に屋敷に入っていった。

しばらくすると、この空間に慣れ、身体も動くようになった。
ライブメタルも大丈夫だ。ちなみにモデルZとモデルPが一番回復が早かった。
ヴァンがフェイトの元へ行こうとするが、

「・・・道聞くの忘れてた・・・・・」

仕方なく、適当に中を歩くことにした。もしものときはモデルPを使う。
しばらく歩くと、勘がよかったか、アルフの姿が見えた。だが、様子がおかしい。
アルフは扉の前で体を丸めて震えている。フェイトはいなかった。
1人で報告しているのだろうか？
ヴァンは気になり、アルフに声をかけた。

「おい、なにやってんだ？」

ピクリと反応したアルフがゆっくりと振り返る。

「ヴァン・・・」

するといきなりアルフはヴァンの肩を掴んだ。

「お、おい！どうしたんだ！？」

「ヴァン、お願いだよ！フェイトを助けて！」

「え・・・？」

アルフは泣いていた。そしてフェイトを助けてくれとすがるように言ってきた。
ヴァンは目の前の扉を見た。
扉の奥からは、何か聞こえてくる。何かを叩きつけるような音だ。
ヴァンは昨日自分が考えてたことを思い出した。フェイトの身に危機が迫るようなことになったら・・・
ヴァンは目を見開き、ホルダーからモデルXとモデルZを取り出す。

「モデルX、モデルZ！」

ヴァンが叫ぶ。

「ダブル・ロックオン！」

2つのライブメタルが光を発し、力が合わさった。
ヴァンは赤い装甲を持つ、モデルXとモデルZの融合した姿、ロックマンモデルZXとなった。
変身したヴァンは、扉の前に立ち、その扉を蹴破った。
ヴァンの目に映った光景は、バリアジャケットがズタズタに引き裂かれ、傷だらけになったフェイトが倒れているものだった。

「フェイト！！」

ヴァンは駆け寄り、フェイトを抱き起こした。

「フェイト、しっかりしろ！」

フェイトを揺さぶる。するとフェイトはうっすらと目を開けた。

「ウ・・・ヴァン・・・・・・？」

「いきなり入ってくるなんて、あなた何者？」

声がした。

ヴァンが顔を上げるとそこには、２人を見下すように立っている黒髪の女性がいた。

「・・・誰だ・・・？」

ヴァンは怒りを露わにしその女性を睨みつける。

「私の名はプレシア。大魔導師プレシア・テスタロッサよ」

これがヴァンとプレシアが対峙した瞬間だった。

第9話－時の庭園（後書き）

楓
「やっとモデルＺＸの活躍・・・の予定」

ヴァン
「予定だけ！？」

楓
「他のモデルの活躍は確定してます」

第１０話－真実と想い（前書き）

・・・・運命は・・・動き出した・・・・・滅びの運命は・・・
誰にも止められない・・・
・・・パンドラ

このセリフの一部、ロックマンＺＸのＰＶ?にも使われているよ
・・・暁　楓

俺の台詞がない・・・だと・・・・・・？
・・・プロメテ

第１０話－真実と想い

ヴァンとプレシアは睨み合っている。

「プレシア・・・お前が、フェイトの母さんだと・・・」

ヴァンが怒りを抑えながら言った。しかし、その感情は抑えきれていない。

「そうよ。・・・で、あなたは何者かしら？」

対するプレシアはヴァンを見下ろしながら聞く。

「・・・俺の名は、ヴァンだ」

ヴァンは自分の名前を告げた。そして続ける。

「なんでこんなことをした？」

その答えはヴァンには理解できないものだった。

「躾よ」

プレシアはそう言い放った。

「あの子はこの大魔導師プレシア・テスタロッサの娘。なのに回収してきたジュエルシードはたったの５個。この程度の成果しかあげられないことを躾るのは当然よ」

「・・・お前はフェイトがどんな思いで、どんなつらい思いして、必死で集めているのかわからないのか・・・？」

「さあ？そんなもの私の知ったことじゃないわ」

「・・・貴様っ！」

ヴァンはもう今にもこの怒りを爆発させたい思いでいっぱいになっていた。だがその前に、

「アルフ！」

ヴァンがアルフの名を呼んだ。腕に抱えてるフェイトをここから離すためだ。フェイトは今気を失っている。

「フェイト！」

アルフが駆け寄った。ヴァンはアルフにフェイトを預ける。

「アルフは先にここから離れろ。そしてフェイトの手当てを」

「わ、わかったよ・・・ヴァンは？」

「・・・俺は、こいつをブッ倒す」

ヴァンはビーム状の翡翠の剣、ＺＸセイバーを取り出した。

「ヴァン、絶対に無事で帰ってきてよ・・・」

「ああ」

アルフはフェイトを抱えて走り出した。
プレシアは部屋を出て行くアルフを見たあと、再びヴァンに目を向ける。

「倒す？大魔導師であるこの私を？」

「・・・そうだ」

「フン・・・笑わせるんじゃないわよ！」

プレシアは手に持つ杖を振るった。ヴァンの頭上に雷が発生する。
ヴァンはダッシュでその雷を素早く避けた。

（速い！）

その機動性にプレシアは驚く。
だが、驚いている一瞬の間にもヴァンは自分に接近してくる。
ヴァンはＺＸセイバーにエネルギーをチャージした。大きく振りかぶる。

「くらえええぇぇ！！」

その声と共にチャージを解放し、チャージセイバーを放った。
しかし、プレシアはとっさに避け、その一撃は壁に激突した。セイバーから発せられた衝撃波は壁に穴を開けた。
それを見てプレシアが再度驚く。

（なんて力・・・！でも魔力は感じない・・・？）

プレシアは今度は雷をヴァンの頭上だけでなく、その周囲にも発生させた。普通に撃って避けられるなら、避けられない状態にするまで。

雷が落ちる直前、ヴァンは叫ぶ。

「モデルＰ！」

雷が落ちる。ヴァンを中心に電撃が走り、煙が舞い上がった。

「これでどうだったかしら？」

煙が晴れる。

そこには、紫の装甲を身に纏い、無傷で立つヴァンがいた。

「ばかな・・・無傷！？」

紫の装甲、真紅のマフラー、そして顔を覆う仮面が特徴のヴァンの姿は、モデルＸとモデルＰが融合した、ロックマンモデルＰＸ。ヴァンはその姿になってライブメタルの潜在能力を覚醒させるＯＩＳ（オーバードライブ・インヴォーク・システム）を起動させた。モデルＰＸはオーバードライブをすると自身を影と同化させ、敵や攻撃をすり抜けることができる。それでさっきの攻撃をかわしたのだ。

「・・・でも、いつまでかわせるかしらね！」

プレシアは再び雷を起こす。ヴァンはオーバードライブを行わずバックしてよけた。

オーバードライブは確かに強力だが、弱点がある。それはその解放できる時間だ。オーバードライブを起動するにはライブメタルエネ

ルギーが必要となる。エネルギー切れを起こせばオーバードライブできなくなるだけでなく、武器のチャージもままならない。できるだけオーバードライブは控えるべきであるものだ。
だが、

「いつまでそうやって後ろに下がれるかしら？」

プレシアはヴァンを後ろ、後ろへと下げていく。そしてプレシアの言う通り、ヴァンが後ろへ下がる度、壁が近くなっていく。

「・・・くっ！」

ヴァンが再度オーバードライブを発動しようかと思ったとき、モデルPが語りかけてきた。

『ヴァン、このまま後ろに下がれ』

「で、でも壁が・・・！」

『問題ない。ヴァンの後ろは・・・隠し通路になっている』

モデルPがレーダースコープの解析結果を頭の中に直接入れた。確かにヴァンの後ろに隠し通路があった。
ヴァンは後ろに下がる速度を上げた。
そして壁に接触しそうになったとき、壁がスライドし、ヴァンはその中へと入る。

「っ！」

プレシアに焦りの表情が浮かんだ。

隠し通路に入ったヴァンはそのまま通路の先へと進む。この狭さでは十分に回避ができない。
だが、ヴァンが通路の奥にあるものを見つけた。
それを見てヴァンが驚愕した。
そこには、

「・・・・フェイト・・・・!?」

フェイトと瓜二つの少女が、生体ポットの中に裸で入っていた。

『これは、一体・・・・・・!?』

モデルXもその光景に驚いていた。モデルXだけではない。他のライブメタルも同じく驚いている。
ヴァンが生体ポットに近づこうとしたとき、

「アリシアに近づかないで!!」

怒声と共にプレシアが雷を繰り出してきた。

「うわっ!」

ヴァンは慌ててそれをかわした。

『・・・・・アリシアだと・・・・?』

プレシアの声を一番冷静に聞き取っていたモデルZが声を出した。

「プレシア、どういうことだ?なんでフェイトが2人も!?」

「フェイトが2人？勘違いしないで」

ヴァンの問いかけにプレシアは鼻で笑った。

「私の可愛いアリシアを、あの人形と一緒にしないで」

「人形、だと・・・？」

ヴァンは目を細めた。

「フェイト・テスタロッサは私が造った人造生命体。フェイトの名は当時のプロジェクトの名残よ」

「なっ・・・！？」

「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。記憶を与えても無意味だった」

プレシアは遠い目をする。

「アリシアはもっと素直で明るくて、いい子だった・・・いつも私に笑顔を見せてくれた・・・・・・・・・だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカッと見開かれた。

「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地アルハザードへ向かって、娘のアリシアを蘇らせるのよ！！」

ヴァンはプレシアの話を黙って聞き、あることを感じた。

「・・・・プレシア」

ヴァンの口が動いた。

「お前はただ、未来から逃げているだけだ」

「・・・なんですって？」

プレシアがヴァンを睨んだ。ヴァンはその視線に怯えることなく続ける。

「お前は未来を恐れて、過去にすがりついているだけだ」

「・・・黙りなさい」

プレシアは杖を持つ手に力を入れる。しかしヴァンの口は止まらない。

「過去の幻想に捕らわれ、今を見ようとしていない」

「黙れ」

しかしヴァンは止まらない。

「そんなプレシアを見て、アリシアは喜ぶと思っているのか？」

「黙れって言ってるのよ！！」

プレシアは怒りにまかせて雷を放った。

雷はヴァンに直撃した。

「ぐあっ・・・！」

「あなたに何がわかるって言うのよ！大切な娘が、目の前からいなくなる悲しみが！！」

プレシアの怒鳴り声に、ヴァンは静かに目を閉じた。
答えは１つだった。

「・・・・ああ、わかるさ」

「なんですって・・・・・？」

今度はプレシアが驚いた。

「俺も、大切な人が何度も目の前から消えていく光景を見てきたよ・・・」

ヴァンは２回、目の前で大切な人が消える光景を見たことがある。
１回目は、１１年前、遊園地に来たときイレギュラーの襲撃に合い、母親が目の前で殺された。
そして２回目は、モデルＸを手にし、罠だとわかってイレギュラーに飛び込み、セルパンによって倒れた自分を生かすために自分の大切な先輩、ジルウェが消えていった。

「２度目のとき、俺には戦う力があったのに人１人救うことができなかった時には、自分を呪いもしたよ・・・」

『ヴァン・・・・・』

ヴァンの告白に、モデルXは思わず声を漏らした。

「・・・・・」

プレシアも、このことに何も言えず、黙って聞いていた。

だが、

「うっ、ゴホッゴホッ・・・！」

プレシアが突然苦しみ、咳き込んだ。

「！おい、プレシア！？」

ヴァンが駆け寄る。プレシアの口からは血が出ていた。

「あんた、まさか病に・・・」

「フッ・・・大魔導師でも不治の病にはどうしようもないのよ・・・・・」

プレシアは自嘲気味に言った。そしてヴァンの顔を見る。

「私を倒すなら、今がチャンスよ・・・」

「・・・・俺の力は、何かを守るための力だ。奪うための力なんかじゃない」

そしてヴァンはこう続けた。

「あんたを倒したら、フェイトが悲しむ・・・」

「・・・・・」

プレシアは黙った。
ヴァンは変身を解いた。
そして立ち上がり、ここから出ていこうとする。
それを、プレシアは呼び止めた。

「確か、ヴァンって言ったわね・・・」

「・・・ああ」

ヴァンは立ち止まり、振り返らずに答える。

「ヴァン・・・私は間違っていたの・・・・・？アリシアも、未来も、何もかもを失った私は、どうすればよかったの・・・・・？」

プレシアは絞り出すような声で言った。大人が少年に答えを聞くのはどうかと思うものだが、それほどまでにプレシアは自分を見失って、どうしようもなくなっていた。

「・・・俺には、わからない・・・・・けど」

ヴァンはそのまま続ける。

「お前はまだ、フェイトって名前の娘が残っているじゃないか」

「・・・！」

「受け売りの言葉だけど・・・諦めるな・・・お前にはまだ、守るべきものがある・・・・・」

その言葉は、セルパンに操られた後、意識を取り戻したジルウェが言った言葉だった。そして、ヴァンはもう1つ言った。

「過去を変えることなんてできない・・・けど、未来は、自分の運命なら、まだ、変えられる・・・・・」

ヴァンは静かにその場を去った。
ヴァンが去った後、プレシアは1人呟いた。

「・・・運命・・・・・アリシア、私はどうすれば・・・・・」

そして、プレシアはもうひ1人の娘の名を、無意識のうちに呟いた。

「・・・フェイト・・・・・」

ヴァンはフェイトがいる部屋に向かっていた。フェイトがいる部屋はわからなかったが、モデルPを使って探し出した。
部屋に入る。
そこには、ベッドの上で寝ているフェイトと、その隣で椅子に座っているアルフがいた。

「ヴァン！・・・ってどうしたんだいその傷！？」

アルフはプレシアから受けた雷による火傷を見て驚いた。
だがヴァンは平然として、

「ああ、これはあれだ、モデルFがコントロールしくった」

『てめっ、なに俺のせいにしてんだコラ！』

モデルFのせいにした。すかさずモデルFがキレる。

この声はアルフには聞こえなかったが、ヴァンがウソだということがすぐにわかった。

「ウソを言うなよ！あいつにやられたんだろ！？」

「大丈夫さ」

と軽くアルフをあしらう。

と、フェイトが目を覚ました。ゆっくりと起き上がる。

「あれ・・・ここは・・・・・・」

「フェイト！」

アルフがフェイトが目を覚ましたことに安堵する。フェイトは、ヴァンの火傷に気づいた。

「ヴァン・・・その怪我どうしたの？」

「ん、ああコレか？」

ヴァンはついさっきアルフに言ったことを繰り返した。

「モデルFがコントロールしくった」

『だがら、なんで俺の――』
『うっさい』
モデルFが抗議するが、モデルLによって止められた。
ちなみにこの2人の声はバルディッシュを通して2人にも聞こえた。

第１０話－真実と想い（後書き）

楓

「プレシアとヴァンって、境遇似てますよね。次回がヴァンの無印篇での最大の活躍かな？」

第11話－6つの意思と無限の力（前書き）

データはコピーしましたので、これはお返しいたします

・・・フルーブ

・・・ライブメタルって、あんたらのものじゃなかったっけ？

・・・暁　楓

第11話－6つの意思と無限の力

（くそ・・・！どうする・・・どうすればいい・・・・・・！）

翌日。
ヴァンはフェイトのジュエルシード集めを止めることができずにいた。
そして3人は今、ジュエルシードの反応がある場所へと向かっている。
フェイトは、まだアリシアのことは知らない。
だが、今後ジュエルシードを集めていけばそれを知ることになるのは目に見えている。
ヴァンは焦った。

（何か・・・何かないのか・・・！？）

3人は海が見える公園にやってきた。ジュエルシードの反応はここにある。
ジュエルシードの光の柱が現れた。
ジュエルシードは1本の木の中に入っていった。木に変化が起こる。

「ゴオオオオ！」

2本の腕が生えた木の化け物になった。

「あの子達もいる・・・」

フェイトはなのはを目に捉えながらも、バルディッシュを構えた。
ヴァンがフェイトの前に出た。

「ヴァン？」

「フェイト、こいつは俺に任せて、ジュエルシードの封印に集中しろ」

「え、でも・・・」

ヴァンの言葉に、フェイトは驚いた。同時に少し戸惑う。

「心配するな。それに言ったよな？何でも1人で背負おうとするなって」

ヴァンはモデルXとモデルZを取り出した。

「モデルX、モデルZ！」

『うん！いくよ！』

『いつでも準備は整っている』

ヴァンは両手に持つそれぞれのライブメタルを交差させた。

「ダブル・ロックオン！」

『『適合者確認・・・R．O．C．K．システム、起動開始』』

2つのライブメタルが輝きを放ち、次の瞬間ヴァンは、赤い装甲と、

金の長い髪が特徴のロックマンモデルＺＸとなっていた。
フェイトはモデルＺＸとなったヴァンを見た。ヴァンのこの姿を見るのは２度目となるが、その時はぼんやりとしか見えていなかった。再度見るヴァンの姿・・・赤きロックマンの後ろ姿は、何よりも強く、そして優しく見えた。

なのはとユーノは、木の化け物の前で変身し、武器を構えるヴァンの姿を捉えた。

「まさか・・・ヴァンさんはあれに１人で戦うつもりか？無茶だ！」

ヴァンの行動を無謀と見たユーノが声を上げた。
だが、なのはは違った。

「大丈夫だよ。ユーノ君」

「なのは？」

ユーノがなのはの方を見る。なのははじっとヴァンを見ていた。

「初めて見てもわかる・・・・・ヴァンさんは強いよ」

フェイトと同じく、ヴァンの強さと優しさを感じ取ったなのはは、ヴァンを見守ることを選んだ。

木の化け物が、自身の根っこを使ってヴァンを襲い始めた。
ヴァンはＺＸセイバーを手に取り、自分に襲いかかる根っこを斬り、ダッシュでよけていく。

ヴァンは走りながらＺＸセイバーを変形させ、銃の形にした。そして変形した武器、ＺＸバスターにエネルギーをチャージする。
チャージが最大になった瞬間、トリガーを引いた。チャージバスターが放たれ、木の根っこを貫いていく。
そしてまた武器をセイバーに切り替えて根っこを切り裂きながら、木の化け物へと近づいていく。
だが、化け物の方もやられるばかりで終わろうとしない。
ヴァンめがけて正面から、後ろから、そして横、上から囲むように攻撃をした。ダッシュでくぐり抜ける隙間もない。
ヴァンは一瞬立ち止まると、別のライブメタルを取り出した。

「モデルＰ！」

『御意』

根っこが迫る。

「ロックオン！」

『Ｒ．Ｏ．Ｃ．Ｋ．システム、起動開始』

根っこが激突した。地面を抉り、砂煙を巻く。

「ヴァン！」

「・・・大丈夫、ヴァンは無事だよ」

アルフが叫ぶが、フェイトは冷静に言った。

「え・・・フェイト、わかるのかい？」

アルフがフェイトに聞く。フェイトは当然のように言った。

「当然だよ。私は、ヴァンを信じているから」

煙の外から、人影が見えた。
紫のロックマン、モデルＰＸとなったヴァンだ。
手の甲にエネルギーチャージをしている。

「くらえ！」

手の甲から大きな十字手裏剣を発生させ、自分を襲っていた根っこに投げ飛ばした。十字手裏剣の刃は根っこをまとめて切り裂いた。

「ゴオオオ！」

化け物は今度は地面から根っこを突き出した。ヴァンは軽い身のこなしでさける。地面は木の根っこで埋め尽くされそうになっている。

「モデルＨ、いくぞ！」

『ああ、Ｒ．Ｏ．Ｃ．Ｋ．システムを起動する』

「ロックオン！」

ヴァンが光に包まれ、緑の装甲と、背中にホバージェットを持つ風のロックマン、モデルＨＸとなった。
モデルＨＸとなったヴァンは、ジャンプし、さらにホバージェットを噴出させるエアダッシュで根っこのない空へと飛んだ。
そしてホバーで空中に浮き、大きさの違う二振りの剣、ダブルセイ

バーにエネルギーチャージをし、剣を振った。振った先から大きな竜巻、プラズマサイクロンが巻き起こり、根っこを巻き込み、なぎ倒していく。
プラズマサイクロンが消えると、ヴァンはホバーを解除して地上に降りた。

『よぅし、次は俺の――』
『バカ言ってんじゃないわよ。まだ私がいるじゃない』

『んだとおおぉぉぉ！』

モデルFが出ようとするが、モデルLに遮られた。また邪魔されたことにモデルFがキレる。だがモデルLはそれをあしらう。

『ほら、いくわよ』

「あ、ああ・・・。ロックオン！」

『R．O．C．K．システム起動させるわ！』

ヴァンはモデルXのような青色の装甲、そして頭部のヘルメットから出ている2つのウォータージェットのあるロックマン、モデルLXとなる。ヴァンは手に持つモデルLXの武器、ハルバードにエネルギーをチャージし、それを振るった。
三日月状の軌道を斬撃が描いた瞬間、斬られた空気が凍りつき、氷は竜の形となった。氷の竜、フリージングドラゴンは根っこを蹴散らしながら化け物に向かっていく。
だが、フリージングドラゴンは、途中で化け物が張った障壁に激突して砕けてしまった。

「あいつ！生意気にバリアなんか張りやがったよ！」

「今までよりも強い・・・」

フェイトはバルディッシュの持つ手に力を込める。だが、それだけで加勢することは我慢した。

なのは達もヴァンの戦いを心配そうに見ていた。ただ、なのはもフェイトと同じように加勢は我慢している。

ユーノは、多彩に姿を変化させ戦うヴァンに驚いていた。ライブメタルの数がそのままヴァンの姿の数になることはわかっていたが、それを使いこなす、魔法とは違う力に驚いた。そして疑問も生まれる。

（ヴァンは・・・一体何者なんだ・・・？）

ヴァンはフリージングドラゴンによってできた氷の道を走っていた。手には既にモデルFが握られている。

「いくぞモデルF！」

『やっと出番だな！思いっきりぶっ飛ばすぜ！』

走りながらヴァンが叫ぶ。

「ロックオン！」

『R．O．C．K．システム起動オオォ！』

ヴァンの体がオレンジの装甲に包まれる。肩にはナックルバスターが2つ取り付けられており、モデルFが気合いを入れているのか、

一瞬炎に包まれた。
ヴァンは二丁のナックルバスターを取り、右手のアームＲにエネルギーを溜め込んだ。
木の化け物が根っこをヴァンの正面から伸ばす。

「オーバードライブッ！」

ヴァンが叫んだ瞬間ヴァンの体にオレンジのオーラが纏われた。チャージされていない左手のアームＬを突き出し、エネルギー弾を飛ばした。オーバードライブによって炎を纏ったエネルギー弾は根っこを燃やした。化け物は障壁を展開する。

「そんな壁・・・」

ヴァンはオーバードライブしたままチャージされたアームＲを振りかぶる。
そしてその障壁に渾身の一撃、メガトンクラッシュを叩き込んだ。

「ぶっ壊すっ！！」

その一撃で、障壁は粉々に砕け散った。

「一撃！？」

障壁が粉々に吹き飛ぶ光景を見て、ユーノがまた驚いた。
ヴァンは再びモデルＺＸとなり、ＺＸセイバーをチャージし、高く跳んだ。

「はあああっ！！」

ヴァンはＺＸセイバーを振り下ろし、チャージセイバーを叩き込んだ。

「ガアアアッ！！」

防御できず、そのまま攻撃を受けた木の化け物は、その一撃で切り裂かれ、地に伏した。
倒れた木からジュエルシードが出てきた。

「やった！やったよフェイト！」

「うん！」

アルフとフェイトはヴァンの勝利に喜んだ。なのはとユーノもだ。

「おいフェイト！早く封印しろ！」

「あ・・・う、うん！」

ヴァンに言われ我に帰ったフェイトがバルディッシュを構えた。
なのはもレイジングハートを構える。

「ジュエルシード、シリアル７！」

「「封印！」」

ジュエルシードに２つの光が降り注いだ。
ジュエルシードは光を失い宙に佇む。フェイトとなのははジュエルシードを挟むように対峙した。

「・・・ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だしね」

なのはの言葉にフェイトは少し戸惑う。

「・・・だけど、譲れないから」

だがその戸惑いを抑えフェイトはバルディッシュを鎌の形状に変えた。

「私は・・・フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど・・・」

なのはもレイジングハートを構える。

ヴァンはその2人の様子を見て、ふと思った。

（・・・あれ?なんかこれに似たようなことなかったっけ?）

そして思い出す。2人がジュエルシードのそばでぶつかり合って、ジュエルシードが暴走したときのことを。

（・・・ってやべぇっ!）

今まさにそれと同じようなことが起こりそうになっていた。

「おい、フェイト!なのはとぶつかるのはいいとして、まずジュエルシードから離れろ!そこは危ないから!」

ヴァンが叫ぶ。アルフのユーノも、今の状況に気づき叫ぶ。

「そ、そぉだよフェイト！とりあえずそこから離れて！一昨日と同じ状態にしないで！」

「なのは、いい子だからまず離れよう！いい子だから！」

しかし2人にはその3人の言葉が聞こえなかった。なぜか。
そして2人のデバイスが振り上げられる。

（誰かぁーーっ！誰か2人を止めてぇーー！！）

ヴァンがどこかに向かって心の中叫んだ。
その願いは、余計面倒な展開で叶った。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

「「！？」」

2人のデバイスがぶつかり合う直前、2人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織った少年が2人のデバイスを受け止めた。
突然の乱入者に、2人は驚く。
他の3人も、唖然とその乱入者を見ていた。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

ジュエルシードを巡る戦いに、時空管理局が新たに加わった。

第１１話－６つの意思と無限の力（後書き）

楓

「無印篇にてのモデルＨＸの戦闘シーンは、これで終わりだと思います。ＨＸ好きの皆さん、ごめんなさい」

第１２話ー時空管理局（前書き）

フンッ・・・むやみに牙を剥いても命を落とすだけだぞ・・・あの赤のロックマンのようにな

・・・プロメテ

今回はモデルZ無双おおおお！

・・・暁　楓

・・・・・プロメテ・・・・・・ずるい・・・・・・

・・・パンドラ

関連性全然ねぇ！？

・・・ヴァン

第１２話－時空管理局

「時空管理局・・・」

ヴァンはクロノと名乗った少年を見て呟く。時空管理局のことはフェイトから少しは聞いていた。
いくつもの世界に干渉し、管理する組織。

（面倒な奴らが来たな・・・・・）

ヴァンがそう思う中、３人がヴァンの目の前に降りてくる。
地面に足を着けた直後、魔力弾が降ってきた。
アルフだ。

「フェイト、ヴァン、逃げるよ！」

アルフが再び魔力弾を飛ばした。フェイトは先に飛びそれを避ける。
そしてフェイトは宙を浮くジュエルシードに手を伸ばした。

「そうはさせるか！」

クロノが魔力弾をフェイト目掛けて撃ち出した。青い魔力弾がフェイトに迫る。
だが、その魔力弾は横からのエネルギー弾を受けて相殺された。
クロノが振り向く。そこには、ＺＸバスターを構えるヴァンがいた。

「ヴァン！」

「早く逃げろ！」

ヴァンが叫ぶ。フェイトは少し迷った後、ジュエルシードを取ってアルフと共に逃げ去った。

「貴様ッ！」

クロノが睨む。ヴァンはモデルZを解除しモデルXとなる。アームバスター型の武器、Xバスターにエネルギーチャージをした。そしてチャージバスターを撃ち放った。
クロノはその攻撃を避ける。

「そんな攻撃があたるか！」

クロノが言った、直後、

「ぐあっ！？」

クロノはチャージバスターをもろに受けた。ふっ飛ばされ、地面を転がる。
激痛に顔を歪めながらも、クロノは顔を上げた。
クロノの目に映ったヴァンは、Xバスターの銃口に息を吹きかけている。

（馬鹿な・・・僕は確かにさっきの攻撃をよけた！なのになぜ当たった！？）

ヴァンはその視線に気づいたのか、ニンマリと憎たらしい笑みを浮かべた。

「いや～、ダブルチャージもいいもんだねぇ～」

他のモデルと比べ、身体能力に特に差はなく、武器もXバスターのみという、一見他より性能の劣っているように思われるモデルX単体の力。しかし、そんなモデルXにも他に勝っているところが1つある。それがダブルチャージだ。
通常、1つの武器が一度にチャージできる回数は1回が限界だ。しかしモデルXはXバスターに二重のチャージをかけ、2発までチャージバスターを放てる。
ヴァンはわざとよけやすいように1発目を発射し、それをクロノがかわして隙ができたところに2発目を打ち込んだのだ。つまりクロノは攻撃を避けはした。なのに結果として攻撃を受けたのである。
ちなみに威力はモデルXの配慮で、くらっても問題ない程度に調節されている。

「貴様ッ・・・自分が何をしているのかわかっているのか・・・！」

「危険物の回収作業を妨害した上に作業者に怪我をさせようとした奴を撃墜した」

「・・・くっ！」

ヴァンの言い分にクロノが言葉を詰まらせる。
ヴァンの言い分はあっている。ジュエルシードは暴走すれば大変なことになる危険な物だ。理由はどうあれ、それを回収しようとしているヴァン達にクロノは割り込んできて、さらにはフェイトに攻撃を仕掛けた。ヴァンの行動はジュエルシードを回収する人材の保護である。
我ながらいい言い訳だ。と、ヴァンはまたニタリと笑う。
と、空に魔法陣が出現し、その中に人が映った。緑の髪の女性である。

「艦長！」

クロノが叫んだ。艦長、というからにはこいつの上司だろうか、とヴァンが推測する。
クロノがようやく、というか慌てて立ち上がった。

「艦長、申し訳ありません！1人を取り逃し、ロストロギアも奪われてしまいました」

「まあ、ロストロギアの暴走が防がれただけでもよしとしましょう」
艦長は特に叱ることなくそう言った。

「それと、その人達から話を聞きたいから、アースラまで案内してくれる？」

「了解しました」

『おい、俺達はまだ行くと言ってねぇじゃねーか』

モデルFが愚痴った。その声はなのはのレイジングハートを通して全員に聞こえたので、何も知らないクロノと艦長の視線がなのはに向いた。

「い、いや、私でもレイジングハートでもないですよ！？」

その後、ヴァンがモデルFの頭を殴った。

クロノを先頭に、ヴァン、なのは、ユーノがアースラ内を歩いている。
なのはは初めて来る場所におどおどしているが、ヴァンは落ち着いていた。というのも、ヴァンのいた世界では1日の半分以上を空飛ぶ船であるガーディアンベースで過ごすこともぼちぼちあった。言わば慣れだろう。

「そうそう、窮屈だろうし、バリアジャケットとデバイスを解除しても構わないよ」

「あ、そうですね」

クロノに言われ、なのはが元の姿に戻る。ヴァンはモデルXの変身を解いておらず、解こうともしなかった。

「・・・君も、そのバリアジャケットを解除していいんだぞ？」

「俺のこれはバリアジャケットじゃねーもん」

ヴァンは屁理屈を言った。しかし、言った後ヴァンも変身を解いた。

「あと、君も元の姿に戻っていいんじゃないか？」

「あ、そうですね。ずっとこの姿だったから忘れてました」

「？」

なのはが首を傾げる中、ユーノは光を発し、
なのはのそう変わらないくらいの少年の姿になった。

「えっ！？」

なのはは目を丸くして驚いた。

「へー」

ヴァンは特に驚かず、それだけの声を出すだけだった。

「ふう、なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな？」

ユーノが言ったその直後。

「ふえええええ！？」

なのはが盛大な声を出した。

「な・・・なのは？」

「ユーノ君って・・・ユーノ君って・・・・・えええええ！？」

「・・・・・どうした？」

ヴァンが聞いてみた。どうやら何か双方で食い違いがあるようだ。

「えっと・・・なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

「ち、違う違う！最初からフェレットだったよ～！」

なのはは、首を横に振りながら答えた。

言われてユーノは額に指を当てて記憶を辿った。

「ああっ！そ・・・そういえば、この姿まだ見せてなかった」

そして思い出した。

「だ・・・だよね？ビックリした～！」

なのはは大きく息を吐いた。

と、ヴァンも１つ思い出す。

「ユーノがあのとき俺に逃げ込んだ理由、これではっきりしたよ」

「え・・・ヴァンさんに？」

ユーノが首を傾げた。

「お前、忘れたか？俺とお前らがたまたま温泉に同時に来たとき、ユーノは俺の頭の上に来たじゃないか」

「あ、あれですか」

「なのはから逃げた理由がわからなかったけど、これでよーくわかった。お前、災難だったんだな」

ユーノがヴァンに逃げ込んだ理由。

それはユーノがなのはに連れられて女風呂に入りそうになったからだった。けど一瞬の隙を逃さず男風呂に避難。なのはの父親の元へ行こうとしたが小さなフェレットのユーノじゃ危険がいっぱい。そこでたまたま湯船に浸かるヴァンを見つけたのでそこに乗っかったのだ。

温泉のことを思い出し、ユーノとなのはが顔を赤くした。
そこに、クロノの咳払いが入った。

「その・・・だな、君達の事情はよく知らないが、早く艦長に会わせたいんだが・・・」

「あ・・・はい、すみません・・・」

『なのはと同じ子供のくせに、随分偉そうね』

今度はモデルＬが愚痴った。通訳（？）は勿論レイジングハート。
クロノの睨む先はなのは。

「僕は１４歳だ！」

「だから、私でもレイジングハートでもないです～！」

『数百年の魂を持つ私からしたら、十分子供だわ』

なんやかんやで、数分程無駄に時間を費やした４人であった。

クロノが艦長の部屋についた。扉を開ける。

「失礼します。艦長、連れてきました」

ヴァン達はその部屋を見た。
その部屋は一面、和で統一された空間が広がっていた。

「・・・なんっじゃこりゃ」

「まあ、いらっしゃい。そしてはじめまして、リンディ・ハラオウンです」

艦長、リンディが笑顔で言った。一方ヴァンはこの部屋の造形に顔をひきつらせていた。一応、ヴァンの世界にも和風という文化は存在する。

しかしなぜ、ここに持ち込む？趣味だったら、趣味なんかで船の一室をこんな改造するのも考えものだが。

「どうぞ。３人共座って、楽にしてくださいね」

リンディの手招きを受け、とりあえず３人はリンディの前に、クロノはリンディの隣に座った。

ライブメタルを含む全員が自己紹介を終えたあと、ユーノはことの経緯を話した。

「まあ、それじゃああのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったのですね」

話を聞いたリンディが言った。

「・・・それで、僕が回収しようと・・・」

「立派だわ」

「だが、同時に無謀でもある！」

そのクロノの言葉に、ユーノは顔を俯かせてしまう。

「あの・・・ロストロギアって、何ですか？」

なのはが質問をした。

リンディはそれに頷くと、説明を始めた。

ヴァンも改めて聞いて、纏めるとこうだ。

なのはのいる世界やヴァンのいた世界の他にも幾つもの世界が存在する。

その中には、他の世界よりも進化し過ぎ、滅んだ世界もある。

その世界を滅ぼした技術の遺産、それがロストロギアだ。ちょうど、モデルＶなんかも管理局が確認すればそれに含まれる、はずだ。

ロストロギアは使い方によればその世界や、このアースラのある次元空間も滅ぼすことになるらしい。

話を聞いて、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わっていた事を理解した。

話し終えたリンディは自分のお茶に角砂糖を入れる。その行動には３人が引いた。

リンディはその砂糖入りのお茶を飲むと、ヴァンに視線を向けた。

「ところで、あなたにも１つ質問があるのですが」

「ん？俺？」

あぐらをかいているヴァンが首を傾げた。ちなみにヴァンは和の文化を知ってはいるが、今他のみんながしているような正座は苦手だ。

「あなた、次元漂流者よね？あなたの世界では、その体は当たり前なのですか？」

「この体？」

「あなたの体のほとんどが機械でできていることです」

リンディがその言葉を言い放った瞬間、なのはとユーノが驚きで固まった。

『・・・どうやら、調べられていたようだな』

モデルZが呟いた。

「ええ、勝手ながら、そうさせていただきました」

リンディが言った直後、

「ふえええええ！？」

なのはが本日2回目の絶叫をした。

「ヴァンさんって、ロボットだったんですか！？」

ユーノも声を上げた。ユーノやなのはからしたら、肌があって、髪も生えているヴァンの体が機械でできているということが信じられなかった。

「ああ、俺のいた世界の法律だからな。でもユーノ、俺はこれでもれっきとした人間だぞ？」

ヴァンは特に動揺せずにそのことを認め、一部訂正した。

「ヴァンさん、できれば、こっちでその体とライブメタルの技術をもう少し詳しく調ー－－」
『両方とも断る』
リンディが頼もうとするが、言い切る前にモデルZに遮られた。残念がるリンディ。
「あら・・・どうして？」
『自分やヴァンを研究材料にされる気はない』
リンディが聞くが、モデルZは素っ気なく返した。しかし、そこにクロノが割り込む。
「ヴァンについてはわかるが、モデルZらライブメタルは調査次第でロストロギアに指定される可能性がある。これはお前の為でもあるんだぞ」
『お前らの都合は知らん。それに俺達を扱えるのは現時点でヴァン1人だ。それともなんだ、ヴァンが次元震を引き起こすとでも言いたいのか？』
クロノの言葉にすかさず反論する。確かに、この中どころか、ヴァンの世界でも適合者は現在ヴァンだけだ。
だがクロノも引き下がらない。
「だが、こいつは僕に攻撃を仕掛けた！それで怪我を負わせたじゃないか！」

ヴァンを指差し、さらに包帯を巻かれた腕を見せる。

『あれはお前がフェイトに攻撃を仕掛けたから、フェイトを防衛するためにやったことだ。２人の間に突然割り込んだお前に非があると思うがな』

「ぐっ・・・し、しかし！」

クロノが一瞬怯んだ。確かに、突然なのはとフェイトの間に入って２人を止め、フェイトを撃墜しようとした。ヴァンはフェイトを守るためにクロノを止めようとしただけだ。

『もっと言えば、その怪我は地面に当たったことによる怪我だ。モデルＸによる怪我ではない。そもそも、あの木の化け物を吹き飛ばした力が、お前にはその程度の怪我で済むものと思っているのか？』

「ぐっ！」

モデルＺの遠まわしな手加減の言葉に、クロノが完全に詰まった。もし、木の化け物と戦ったときの力でクロノに攻撃してたら、クロノどころかクロノのデバイスも粉々になっていただろう。

「クロノ、仕方ないわ。これ以上はやめましょう」

リンディはクロノを止めた。ヴァンとライブメタルの解析を諦めることにしたのだ。

「・・・わかり、ました」

クロノは渋々了解した。

リンディはさらにお茶に角砂糖を投下し、一口飲んだ。
そしてなのは達に言った。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収は、時空管理局が全権を持ちます」

「え！？」

突然のリンディの一言になのはとユーノが驚いた。ヴァンは特に表情を変えない。ライブメタルはそもそも表情なんてない。

「君達は今回のことを忘れて、それぞれ元の世界に戻って暮らすといい」

クロノが言うが、なのはとユーノは納得のいかない表情だった。

「え・・・でも・・・」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

なのはが何か言おうとするが、厳しい表情のクロノが遮る。

「でも！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて二人で話し合って、それから改めてお話をしましょう」

それでも納得のいかないなのはをリンディがなだめた。

そのとき、

『元の世界に帰れと言っているのにも関わらず、再びここに来るチャンスを与えるとはどういうことだ?』

モデルZが声を出した。全員の視線がモデルZに集まる。

『と言っても、どうせうまいことなのはらを自分側に引きつけ、利用するのが狙いだろう?』

「貴様!」

クロノが怒鳴った。今のモデルZの言葉は管理局を罵倒する発言だ。

『ならなぜ、なのはをこの件から引かせるために話し合わさせる?なぜもう一度ここに来るよう言う?そのようなことをすれば、なのはが協力したいと思う可能性が生まれるのではないのか?』

「そ、それは・・・」

モデルZの的確な指摘に、クロノは反論できない。リンディもだ。それもそのはず、リンディはなのはが協力するという可能性があることを知っていて言ったのだ。むしろ、なのはが協力すると言わせるつもりで言った。時空管理局には人員が少ない。そして強力な魔力を持つなのはは、管理局からしたら喉から手が出る程の存在だった。

『別に協力してもらうことには俺は何も言わん。ただ、そんな曲がったやりかたが俺には気に食わんだけだ。立場がどうとか、そんなことを気にするようなら、お前たちの度量はたかがしれてるな』

「・・・・・」

確信をつかれ、リンディは黙っている。

「あ、あの・・・」

静寂が流れるなか、なのはの声がした。

「私に、ジュエルシード集めを手伝わせてください！」

なのはがジュエルシード集めの協力をしたいと言い出した。

「リンディさんに言われなくても、私、自分から頼んだと思います」

なのはが自分の気持ちを伝える。

「しかし・・・」

クロノが戸惑う。今度はユーノが身を乗り出した。

「僕も、手伝わせてください！」

なのはとユーノは2人して頭を下げた。

「・・・だってよ」

ヴァンがリンディを見た。

「自分から手伝わせて欲しいって言ってるんだ。それに応えてやっ

たらどうなんだ？」

モデルZの話を聞いてヴァンは管理局の思惑に反感を覚えた。しかし、すぐそばの2人の意思を尊重することにした。
リンディはヴァンのその言葉を受け止め、頭を下げている2人を見る。

「・・・わかりました。あなた方の乗艦を許可します」

「艦長、本気ですか！？」

「2人の善意を利用しようとした私に、断る権利はありません」

リンディはそう述べた後、再びなのはとユーノを見、

「あなた達を利用しようとして、申し訳ありませんでした」

2人に向かって頭を下げた。

「いえ・・・そんな・・・」

「ご協力に感謝します。そしてこれからよろしくお願いします」

「は、はい！よろしくお願いします！」

「お願いします！」

なのは達の、管理局への協力が決まった。
そしてリンディはヴァンの方に顔を向ける。

「ヴァンさん、先程は申し訳ありませんでした。そして・・・」

「ああ、協力するかってことだろ？」

ヴァンにはリンディの言いたいことがわかった。

「俺も手伝うよ。ここまで巻き込まれた身だからな。モデルX達もそれでいいだろ？」

『うん、僕はそれで構わないよ』

『我々の役目、人々の守護、その役割を果たす』

『ま、これも面白そうでいいんじゃない？』

『まだ暴れ足りねぇんだ。遠慮なくいかせてもらうぜ？』

『我らは、弱き者の刃。今ひとたび、その者の力となりましょう』

モデルX、モデルH、モデルL、モデルF、モデルPがそれぞれ言った。

『俺も構わん。ただ、こちらも3つほど頼みたいものがある』

モデルZの3つの頼み。

1、ヴァンの元の世界の捜索

2、フェイトの保護

そして3つ目は・・・

『俺達の戦闘は記録してあるんだろう？それを消去、俺達の世界の

技術の秘匿を約束してほしい』

それは、イレギュラーを別世界に生み出さないため、そしてライブメタルの悪用を抑えるためのものだ。ヴァンの世界の技術、人格を持つ機械が生まれたことによってできた人間と機械の戦争。それが再び他の世界で起こさないようにするため。

「ええ、３つ共約束します」

リンディはこの３つを全て了解した。

「それでは、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園にきてください」

「はい！」

「クロノ。二人を元の世界へお送りして」

「・・・はい」

まだ納得しきれていないクロノであったが、了解して、なのはとユーノを連れていった。

クロノが部屋から出た後、リンディは時計を見た。

「もうこんな時間ですね・・・ヴァンさん、食堂に案内しますか？」

「ん、ああ、頼む」

ヴァンとリンディも立ち上がった。リンディが歩き始め、ヴァンがその後ろを歩く。

リンディについて行きながら、ヴァンは最後に見たフェイトとアルフの後ろ姿を思い浮かべた。

フェイト・・・大丈夫なんだろうな・・・・・？

第１２話ー時空管理局（後書き）

楓

「どうでしたか？モデルＺの管理局アンチ（笑）
個人的に楽しめたと思ってます。
そしてヴァンも何気に嫌な感じにできちゃったよｗ」

第13話―それぞれの気持ち（前書き）

力を・・・・・もっと力を！

・・・ヴァン

ヴァンが司令官Eと同類になりました

・・・暁　楓

そんなカットの仕方をするからだろ？

・・・ジルウェ

第13話－それぞれの気持ち

フェイトが住む、ヴァンの居候場所だったマンション。

「ヴァン、帰ってこないね・・・」

アルフが呟いた。ヴァンに逃げろ、と言われたからフェイトと共に逃げたが、ヴァンを置き去りにしたのは正直つらかった。

「うん・・・でも、ヴァンは次元漂流者だし、管理局は保護してくれるよ」

フェイトが安心させるように言った。

「ねぇフェイト、逃げようよ。どこか遠くに・・・管理局に本気で調べられたら、いずれここもばれちゃうよ・・・」

アルフは逃げることを促した。だがそれはジュエルシードの回収を諦めるということになる。

「でも・・・私は母さんの願いを叶えてあげたいの」

フェイトは諦めようとしなかった。

「あたしは、フェイトに幸せになって欲しいんだよ！フェイトが悲しんだり苦しくなると、あたしもはちきれそうにつらいんだよ！」

アルフは声を荒げ、必死にフェイトを説得する。

「・・・私とアルフは精神がリンクしてるから、感情が流れちゃうんだね・・・ごめんねアルフ。アルフが悲しむなら、私はもう泣かないよ」

だが、アルフの説得はフェイトには届かなかった。アルフはその言葉を聞いた瞬間、涙を流し、床に伏せてしまう。

「なら・・・約束して・・・あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為に頑張るって！そしたらあたしは、全力でフェイトを護るよ！」

「うん。ありがとうアルフ・・・」

フェイトは、アルフを優しく撫でた。

そして、もうここに帰ってこないであろう少年、ヴァンを思い浮かべた。

ある日会ってから、ヴァンは色んな面でフェイトを支えてくれた。

ヴァンは一度何もできないとすねてしまったこともあったが、フェイトにとってはそばにいるだけで大きな支えであった。

それが、今日からいない。

もう、ヴァンの料理を食べることができない。アルフやライブメタルとのやりとり、そして自分はもうヴァンと会うこともできない。

（ヴァン・・・）

フェイトの目から、涙がこぼれた。もう泣かないと決めたのに、それを拭うのにも関わらず、涙が流れてくる。

アルフは泣きながら伏せていて、フェイトのその涙に気づいてないようだ。

（ヴァン・・・寂しいよ・・・・・・）

フェイトの頬を伝った一粒の涙が、床に落ちた。

アースラの食堂。

ヴァンは現在食事をしていた。食べているのはラーメン。味は味噌。

ヴァンの他にも、リンディと、なのは達を送り終えたクロノも同席している。

「先程の質問では法律だからって言ってましたけど、どんな法律なんですか？」

「んあ？」

リンディがラーメンをすするヴァンを見ながら尋ねた。ヴァンの動きが止まる。

そしてヴァンの隣を浮くライブメタル達を見る。代わりに説明してくれと目で頼むが、

『お前が質問されているのだから、自分で答えろ』

モデルHに断られる。ついでに言えば、クロノのデバイス、S2Uは思考機能を持たないため、通訳を頼めない。

仕方なく、頬張っている麺を飲み込み、ヴァンが説明を始めた。

「えっと、人間を機械の体で身体強化し、機械の寿命設定で命の尊さを与え、皆を平等にすべし・・・だっけ」

「機械に寿命？」

「ああ、俺の世界には、高度な技術によって人格を与えられたレプリロイドっていうロボットがずっと前から存在してるんだ。人間とレプリロイドで長い争いがあって、そして数百年前、連合政府レギオンズが発足し、最高権威者の三賢人がこの法律を決め、全ての人間とレプリロイドが対象になっている。寿命は、オリジナルの人間の寿命が標準になってるけど、三賢人だけは数百年の時を生きて、今も現役だ。歴史と解説はこんな感じか？」

「・・・なるほど。それじゃあ、ヴァンさんが次元漂流した理由は？」

リンディが新たに尋ねる。

「実は俺の世界にもジュエルシードが１つ落ちていて、それを拾った後持ち主をさがして、見つからずに途方に暮れてたらジュエルシードが発動、こうなった」

ヴァンは簡単に説明し、お手上げと言った感じのポーズをとった。

「それで、そのジュエルシードは？」

クロノが入る。だがヴァンは苦笑いをして答えた。

「フェイトにあげたよ」

「・・・そうか」

その返答に、クロノは力なくため息をついた。

だがすぐに気持ちを切り替え、ヴァンにもう1つ質問する。

「もう1つ質問するが、フェイト・テスタロッサの目的について、何か知っているか？」

「テスタロッサ・・・あの大魔導師と同じファミリーネームだけど、それとの関係についてもなにか知っていないかしら」

リンディも尋ねる。

ヴァンは、

「さあな。誰かに頼まれてジュエルシードを探してるって言ってたけど、それが誰なのかは知らない」

色々嘘を入り混ぜた回答をした。

『ああ？何言ってんだ。おめぇその目で見ただろ。隠し部屋のアリシー――』

ゴンッッ！！

『っってぇ！！』

モデルFが本当のことを言おうとして、モデルLの頭突きを食らった。何も聞こえていないクロノとリンディが頭突きしたモデルLに驚く。

「えと・・・何かあったんですか？」

「あ、ああ。いつものケンカだよ。・・・モデルFとモデルLって結構ケンカするんだ」

「そう・・・なのか？」

ヴァンはモデルＦの声が聞こえていたため、かなり動揺した。もし通訳がいたら確実にアウトだろう。
そのごまかしがうまくいったのか、クロノはそれ以上言及しなかった。

「明日の会議で君やなのは達の紹介をする。遅れずに来るんだ」

「りょーかい」

ヴァンの返事を聞いて、クロノは食堂を後にした。

翌日、アースラ会議室。

そこに、管理局局員が集まっていた。なのは、ユーノ、ヴァンの姿もある。ライブメタル達はヴァンのベルトホルダーに入れられている。
なのはとユーノは、緊張のせいか体が固まっている。ヴァンは、運び屋としてのキャリアから、そう緊張はしてなかった。
リンディは今、局員にことの説明をしている。

「・・・・というわけで本日をもって、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます。また、今回は特例として問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら」

リンディがユーノを見る。

「はい！ユーノ・スクライアです！」

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た・・・高町なのはです！」

なのはもユーノも、緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

「そして、もう1人」

リンディはヴァンに視線を向ける。

『ヴァン、しっかり』

モデルXもリンディの声を聞いてヴァンに話しかける。

「（わかってる）・・・はい。ヴァンです。よろしくお願いします」

ヴァンも立ち上がり、自己紹介する。敬語はどうも好きじゃないが、それでよくジルウェに叩き込まれたものだ。

「彼らが臨時局員となって事態にあたってくれます」

「「「よろしくお願いします！」」」

3人が頭を下げた。

どこぞの森の中。

なのはとユーノが、管理局員が発見したジュエルシードの回収をしていた。
ユーノがチェーンバインドでジュエルシードを取り込んだ、不死鳥のような怪鳥の身動きを封じた。怪鳥は呻きながら暴れる。
そこになのはが魔力の光をぶつけ、ジュエルシードを封印、回収する。

なのは達から少し離れた場所で、ヴァンは地上でモデルＰＸとなり立っていた。
ジュエルシードを回収するとき、フェイトに会えるかもしれないと、レーダースコープで探しているのだ。
だが、フェイトの気配は全く感じない。管理局を警戒しているのだろう。

「・・・だめか」

『フェイトにとって、管理局は天敵なんだから、仕方ないよ』

肩を落とすヴァンに、モデルＸが優しく慰める。
ジュエルシードの回収を終えたなのはがやってきた。

「ヴァンさん、回収終わったよ！」

「もうすぐ、ゲートが開かれます！」

「・・・ああ、わかった」

ヴァンは変身を解除した。

「・・・・フェイトちゃん、見つかった？」

「いや、管理局を警戒してるらしい」

「そっか・・・」

なのはがしゅんとする。

目の前に、アースラに繋がるゲートが開かれた。

「・・・まあ、仕方ないさ。アースラに戻ろう」

「・・・うん、そうだね」

3人はゲートをくぐった。

どこぞの遺跡。

フェイトとアルフが、ジュエルシードを探しにここに来ていた。

一通り探した狼形態のアルフが言う。

「だめだよフェイト。また空振りみたいだ」

「そう」

そう返すとフェイトは遺跡を見る。

「フェイト、やっぱり管理局にバレずに探すのは難しいよ」

「うん・・・でも、もう少し頑張ろう」

フェイトは次に空を見上げた。
ヴァンを思い浮かべる。

（ヴァン・・・今頃どうしてるかな？）

なのは達が臨時局員となってから１０日が経った。
その１０日間で、なのはが回収したジュエルシードは３つ。フェイトは１つ。これまで回収したのを合わせてなのはが合計で８つ、フェイトが７つ。残りは６つだ。
残りのジュエルシードは海の中ではないかと考えられ、今捜索範囲を広げている。
そして今、なのは、ユーノ、ヴァンは食堂で食事をしている。

「そう言えば、ヴァンさんって何で運び屋をやってるんですか？」

千切ったパンを食べながら、ユーノが尋ねた。２人がヴァンが運び屋をやっているのは、以前温泉で聞いたからだ。

「・・・俺は、１１年前に母さんがイレギュラーに殺されて、１人ぼっちになっていたんだ」

「・・・え？」

なのはのパンを持つ手が止まる。ユーノもだ。
ヴァンが続ける。

「それで、１人ぼっちになっていた俺を先輩・・・ジルウェが拾っ

てくれて、先輩が営んでる運び屋、ジルウェ・エクスプレスで働くことになったんだよ」

ヴァンの目が少し、懐かしいものを見る目になった。

「・・・す、すいません。嫌なことを思い出させてしまって・・・」

ユーノが謝った。知らなかったとは言え、人の心の傷に触れてしまったのだ。

「・・・気にするな。そんなことがあったから、俺は先輩に会うことができたんだし、モデルX達ライブメタルにも関わって、戦う力を手に入れたんだ。それに、それは俺が生きてきた証、俺の思い出だ。忘れる気なんてないさ」

家族を失った出来事は悲しい思い出だ。しかし、だからこそ守り、生きていく、その命を背負っていくことが大切なのだ。それを捨てるようであれば、俺はきっとイレギュラーと戦えないし、モデルXらに会ったかもわからない。

「・・・1人ぼっちのころは、私にもあったよ。」

なのはも思い出話を始めた。

「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって・・・しばらくベッドから動けなかった事があるの。喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて・・・」

「・・・・・・・」

少し寂しそうな表情を浮かべながら、なのはは話を続ける。
ヴァンは、そんななのはの話を黙って聞いている。

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で・・・・だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言って、なのはは笑顔を作った。

「すごく寂しかったけど、ヴァンさんの話を聞いて、それも私が生きてきた証で、私の大切な思い出なのかなって・・・そう思ったよ」

「・・・そうか」

ヴァンは微笑んだ。
その直後、艦内に緊急事態のアラームが鳴り響いた。

第１３話－それぞれの気持ち（後書き）

楓

「自己解釈、レプリロイドの設定寿命です。
寿命は、人間の機械化で延びてるかもしれないですが、僕は細かいところは知らないので、勝手に決めちゃいました。
オリジナルの寿命の基準は大体７０～８０くらいかな？」

第１４話－巻き荒れる海上（前書き）

私ももう長くはない・・・このデータが心正しき者の手に渡ることを祈る

・・・ガーディアン、モデルＶ調査隊員

私の知ったか振りも長くはない・・・この文が心広き者の目に留まることを祈る

・・・暁　楓

もう見始めてんじゃん

・・・ヴァン

第１４話－巻き荒れる海上

捜索域の海上で、大型の魔力反応が感知された。

「な、なんてことをしてるのあの子達！」

モニターを見て、エイミィは驚愕した。

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。魔法陣の上で、呪文を唱えているフェイトがいる。

魔法陣から少し離れた場所で、狼形態のアルフは心配そうにフェイトを見つめていた。

（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違ってないけど…）

アルフの表情が険しくなる。

「はぁあああ！！」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。

雷を受けたあと、海からジュエルシードの光が現れた。数は６本。

「はあっ、はあっ・・・見つけた・・・残り６つ！」

大量の魔力を消費し、フェイトは息を荒げながらその光を睨む。

（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて・・・いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる！）

アルフはフェイトの心配をしながら、ある少年の顔を思い出す。

（ヴァン、あんたなら・・・あんたが言えば、フェイトを止められたかな・・・・・？）

アルフが考えていると、フェイトがアルフに声をかけてきた。

「アルフ！空間結界とサポートお願い！」

「あ・・・ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。
アルフは決意を固めた眼をする。

（ヴァンは命懸けでフェイトを護ってた！あたしも全力で、フェイトを護るんだ！！）

ジュエルシードの光は、竜巻へと姿を変えた。

「いくよバルディッシュ。頑張ろう」

バルディッシュを構え、フェイトは竜巻へと飛んだ。

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

モニターに映し出されたフェイトを見て、リンディは呆れと心配の表情を浮かべた。

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

クロノは特に悪びれもせずに言う。
アラームを聞きつけたヴァン達が駆けつけてきた。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

モニターを見て、ヴァンとなのはが叫ぶ。

「あの、私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした。
だが、

「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

クロノはそれを止めた。

「！？」

クロノの言葉に驚き、なのはは動きを止めた。
ヴァンもその言葉に表情を険しくした。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

「でも・・・」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

オペレーターが準備に取りかかる。

「私達は、常に最善の選択をしなくちゃならないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた。
フェイトは、ジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。しかし、竜巻に投げ飛ばされる度にフェイトが弱っていく。

「なのは」

ヴァンが口を開いた。

「行くぞ」

短く言い、ヴァンが転送装置へと向かう。
リンディとクロノがそれに驚き、クロノはヴァンのところへ走り寄ると、ヴァンの胸倉を掴んだ。

「貴様ッ・・・話を聞いてなかったのか!?」

クロノの問いに、ヴァンは答えない。

「貴様は1人の少女を助けるために、世界を滅ぼそうとでも言うのか!?答えろ!!」

ヴァンはカッと目を見開いた。

同時に握り拳を作り、クロノを思いっきり殴った。

突然のパンチにクロノは防御できず、床にたたきつけられる。

「ウ、ヴァンさん!?」

行くぞと言われたときも驚いたが、なのはとユーノは、ヴァンの行動にまた驚いた。

「だったらフェイトを助けて、ジュエルシードを全部封印すればいいだろ!!」

ヴァンはありったけの声でクロノを怒鳴りつけた。その声はクロノだけでなく、ブリッジにいる全員が肩を震わせる。

「・・・ッ貴様は、ことの重大さがわかって・・・」

「クロノ!」

「か、艦長!?」

クロノの怒りも頂点に達しようとしたが、リンディによって止められた。

「モデルZとの約束を忘れたの！？」

「・・・・・っ」

モデルZとの約束の2つ目・・・フェイトの保護。
それを出されたら、クロノもその矛をしまうしかなかった。

「・・・・行動を許可します」

リンディはなのは達に向かって言った。

「はい！」

「なのは、急ごう！」

「うん！」

なのはとユーノ、ヴァンが転送装置の中に入る。その時、ヴァンがなのはにあるものを差し出した。

「なのは、ジュエルシードを封印した後、これをフェイトに渡してくれ」

「え？」

それを受け取って、なのはは首を傾げた。

一方、フェイトは竜巻に近づけずにいた。

もうすでに魔力は限界で、バルディッシュの魔力刃も消えている。
もう何度目かの突入も拒まれたとき、空の黒い雲が一部桜色に光った。

「！！」

フェイトが見ると、雲からバリアジャケットを着て、レイジングハートを持ったなのはが飛んできた。

「フェイトの邪魔をするなあぁぁぁぁ！！」

なのはを見て、アルフがなのはめがけて襲いかかった。
ユーノが間に入り、障壁を張ってアルフを止めた。

「待ってくれ！僕達は戦いに来たんじゃない！」

「えっ！？」

ユーノの言葉にアルフが驚いた。
そして上空から、モデルＨＸとなってホバーしているヴァンが降りてきたのをアルフが見つけた。

「ヴァン！？」

「ったく、無茶ばっかりしやがって！」

ヴァンは怒り気味にそう言う。

「とにかく今はジュエルシードの封印を！」

ユーノが魔法陣を展開し、魔法陣から出た緑色の鎖が竜巻の動きを縛り付けた。

「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトの隣に並んだ。

「一緒にジュエルシードを封印しよう！」

レイジングハートのコアから、桜色の光が出た。
その光はバルディッシュのコアへと入っていく。
そしてバルディッシュに金色の魔力刃が戻った。
フェイトはなのはを見る。なのははそれに応えるように頷いた。
ユーノが必死にチェーンバインドで竜巻を抑える。アルフも、オレンジの鎖で竜巻の動きを抑えた。

『よし、俺達も協力するぞ』

「ああ。・・・・・でもどうやって？」

モデルHに応えながらも、どうすればいいのかわからずヴァンが尋ねた。

『竜巻が見えるのは、竜巻がものを巻き上げているからだ。この場合は海面の水分を巻き上げている。ここは俺の力で竜巻を無効化するよりも、モデルLで水分を凍らせて竜巻の動きを止めたほうがいいだろう』

「・・・そうか、モデルL！」

『いつでもいいわよ！』

ヴァンがモデルＬを取る。

「ロックオン！」

ヴァンはモデルＬＸとなった。

「オーバードライブ！」

ヴァンに青いオーラが纏われる。ヴァンはハルバードにエネルギーチャージをした。

「いっけえぇぇぇぇ！！」

フリージングドラゴンが現れる。

「もう一丁おおぉぉ！」

さらにもう１つフリージングドラゴンを出した。
２つの氷の竜が竜巻へと向かう。
そして氷の竜は竜巻を片っ端から凍らせていった。

「今の内に！」

なのははフェイトに顔を向ける。

「２人で“せーの”で封印するよ！」

レイジングハートを構える。

「ディバインバスター、フルパワー！」

なのはの足下に巨大な魔法陣が展開される。

フェイトも巨大な魔法陣を展開した。

「せーの！」

なのはが合わせるための声を出した。

「サンダー・・・」

「ディバイィィン・・・」

2人が魔法を撃つ体勢に入る。

「レイジー！！」

「バスター！！」

2人の魔法が、凍って動かない竜巻を呑み込んだ。

アースラ。

「ジュエルシード、6個全ての封印を確認しました！」

エイミィが報告をする。

「・・・なんてデタラメな・・・」

クロノはそれを見て驚いていた。それはリンディもだ。

「でもすごい・・・」

リンディは、モニター越しにその2人を見つめていた。

「よし！やった！」

ヴァンはジュエルシード全部が封印されたことを確認するとガッツポーズをとった。

『・・・ところで、自己管理できてる？』

「へ？」

モデルＬの言葉に首を傾げた直後、

ダバンッ！！

ヴァンは全身を海の上に叩きつけられた。

「ガペッ、ペッ！いってぇ～！」

が、すぐにモデルＬＸの能力、スイムで水面まで浮き上がった。

黒い雲が晴れ、青い空が見えてきた。

「えっと・・・半分こ、でいいよね？」

なのはの問いに、フェイトは無言で頷いた。
そしてフェイトは自分の取り分のジュエルシード３つを回収すると、すぐアルフと共にに立ち去ろうとする。

「あ、待って！」

なのははフェイトを呼び止めた。フェイトは立ち止まるが振り返らない。

「これ、ヴァンさんから！」

「・・・え？」

ヴァンの名を聞くや否や、フェイトはなのはに振り返った。
なのはの持っているもの・・・それがヴァンの耳に付けていたものだとわかると、なのはに近寄り、それを受け取った。
試しに、それを耳に近づける。
すると、

『おーい、聞こえるか～？』

ヴァンの声が聞こえた。

「・・・ヴァン！」

フェイトは下を見る。そこには、水面を浮かび、手を振っているヴ

ァンが微かに見えた。

『それは通信端末だよ』

端末から、ヴァンの声が聞こえる。

『・・・たくっ、今度また無茶したら、デコピンじゃなくて拳骨にするぞ』

フェイトは、１０日振りのヴァンの声を聞き入っていた。

ヴァンの呆れたようで、安心したような声がする。

「・・・ヴァン・・・・・」

フェイトは黙ってヴァンの言葉を聞き終わると、端末を耳から離し、なのはに返した。そしてアルフと共に飛び去っていく。

「あ、フェイトちゃん！」

なのはが再度呼び止めようとするが、フェイトはそのまま行ってしまった。

「・・・・・えっと、ヴァンさん、端末、返されちゃったんだけど・・・」

なのはが端末に向かって声をかけた。

『・・・仕方ないさ、戻ろう』

「・・・うん」

なのはは最後に、フェイトが飛んで行った方向を眺めた。

フェイトとアルフは、マンションに向かっている。

（ヴァン・・・私のこと、心配してくれてたんだ・・・）

まだ、フェイトの耳には先程のヴァンの声が残っていた。

（ヴァン・・・ありがとう・・・・・）

フェイトは心の中でお礼を言いながら微笑み、マンションに戻った。

第１４話 巻き荒れる海上（後書き）

楓

「なんて言うかこの小説、クロノの扱いが酷い気がする・・・しかし俺は謝らない」

第１５話－決闘前（前書き）

我が言の葉は、風となり、空を巡る・・・・・ウェントス・アルス・・・

・・・モデルＨ

ライブメタルのパスコードの１つ目、モデルＨ

・・・暁　楓

第15話 決闘前

会議室。
そこになのは、ユーノ、ヴァン、リンディ、クロノが集まっている。
「全く・・・勝手にジュエルシードを半分にして・・・」
クロノがなのはの行動に怒っている。
「はい・・・すみません・・・・・」
なのはは謝るが、
「約束を破った上、フェイトが倒れるまでジュエルシードをほったらかしにしようとしていたお前らが、随分と偉そうだな」
『あら、ヴァンが辛口コメントなんて珍しい』
ヴァンが睨みながらクロノに言った。モデルLはそんなヴァンを珍しそうに見る。
「なんだと！」
クロノはその言葉に食いかかるが、
「やめなさいクロノ」
「・・・はい」

リンディに止められ、渋々下がった。

「それより、問題はこれからね。クロノ、事件の大元について、何か心当たりは？」

「はい。エイミィ、モニターに」

壁に寄りかかってたクロノが前に出る。
エイミィが返事をし、テーブルの中央に1人の女性の顔が映し出される。

「あら」

「！」

映し出されたのは、プレシアだった。
それを見てリンディは少し驚き、ヴァンも表情を険しくした。

「僕等と同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テスタロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発で、偉大な魔導師でありながら違法研究の事故によって放逐された人物です」

「テスタロッサって・・・・・」

なのはが呟く。

「おそらく、あの少女は・・・」

「プレシアの娘、ね・・・・・」

リンディは険しい表情で呟いた。

「この人が・・・フェイトちゃんのお母さん・・・・・」

映されたプレシアを見て、なのはが再度呟いた。
ヴァンもモニターのプレシアを見ている。

「・・・・プレシア・・・」

誰にも聞こえない声で、ヴァンは呟いた。

時の庭園。

「・・・ジュエルシードは、全て回収できませんでした・・・・・」

玉座の間には、プレシアの他に、フェイトとアルフがいた。報告に来たのである。

「・・・・・」

プレシアはフェイトの報告を黙って聞いている。

「・・・ごめんなさい・・・・・母さん・・・・・」

フェイトは顔を拭かせ、震える体を抑えながら謝った。
全てのジュエルシードを回収できなかったことに対して、プレシアは怒り、また躾がくるだろう。
これからくる苦痛に怯えていたら、

「・・・少なくても、あと5個のジュエルシードを集めて来るのよ」
プレシアは、特に躾る様子も見せずにフェイトに言った。

「・・・え?」

躾がくると思っていたフェイトが少し驚いて顔を上げた。アルフも以前とのプレシアとの違いに疑問を持つ。

「何をボーッとしてるの?早く行きなさい」

「え?あ、は、はい」

フェイトが退室する。アルフはプレシアに疑念の目をプレシアに向けながらもフェイトについていった。
2人が部屋から出て、残るはプレシアとなった。

「・・・ッゴホッゴホッ・・・!」

プレシアが咳き込む。口が血を吐き、床が赤く染まる。

「私には、時間がないわ・・・・・」

プレシアが呟いた。
ヴァンと出会い、ヴァンの言葉を聞いてから、プレシアの心境が変化しつつあった。
自分には、未来はない。
だが、自分の行動で変わる運命があるならば・・・
プレシアは、あることを決意していた。

「私の、もう1人の娘・・・フェイトの未来は守ってみせる・・・！」

「・・・とまあそんな10日でしたのよ～」

「まあ、そうだったんですか」

高町家、リビング。
そこでリンディがなのはの母、高町桃子になのはが出掛けた10日間を話している。
あまり長く学校を開けっ放しにするのはよくないというわけで、なのはには一時帰宅が許された。
リンディと桃子以外にも、兄・恭也、姉・美由紀、なのは、フェレット姿のユーノ、ヴァンもいる。
リンディと桃子はすっかり意気投合している。
だが、

「ははは・・・」

なのはは苦笑いを浮かべた。なのはだけでなく、ユーノとヴァンも苦笑いしていた。

（リンディさんの話・・・この話はフィクションであり、実際の人物、団体には一切関係ありませんってやつだなぁ・・・・・）

ユーノが話の感想を心の中で呟く。
ヴァンはその話が終わると、高町家が営む翠屋でケーキを2つ買っ

た。

フェイトが使っているマンション。
今そこにはフェイトでもアルフでもなく、ヴァンがいた。手には葵屋で買ったケーキの入っている箱がある。
ヴァンは1人、フェイトのいない部屋を見つめた。

（・・・フェイトは、管理局側についた俺に会いたくないんだろうな・・・・・）

ヴァンはケーキ入りの箱をテーブルに置き、『食っとけ　ヴァン』と書き置きも残す。

「・・・またな」

そう言い残し、ヴァンは部屋を出た。

ヴァンは再び高町家に向かっている。
前方から、なのはがやってきた。

「ヴァンさん！」

「なのは・・・どうした？」

「ヴァンさんが心配で、迎えに来ちゃった」

「・・・そうか」

ヴァンとなのはが並んで歩く。

「ヴァンさんって、フェイトちゃんのお兄さんみたいだよね」

「そうか？」

ヴァンがなのはの顔を見る。なのはは笑顔で言った。

「フェイトを心配したり、助ける姿を見て、お兄さんって言葉が、似合うかなって」

「兄さん、か・・・」

ヴァンには兄弟はいない。でも、人間の姉を持つレプリロイドの少女のことを考えると、それのような感じかな、と納得した。

「・・・なのは」

なのはが顔を向けた。

「フェイトは、近いうちになのはの持つジュエルシードを狙ってくる」

ヴァンは、真剣な表情になっていた。

なのはの顔も真剣になる。

「フェイトは、強いぞ」

「うん、わかってる。でも、私はフェイトちゃんを助けたい。そして、フェイトちゃんとわかり合いたい」

なのはは、真っ直ぐな目をして、正直に答えた。

2人が見つめ合い、暫くの時が流れる。

「・・・ホント、この世界で俺にできることは全然ないな」

ヴァンが頭を掻いた。

「なのは、思いっきりぶつかって、しっかりわかり合ってこいよ！」

「うん！」

なのはは力強く頷いた。

2日後。

午前5：27。

出発の支度を整え、外に出るなのはとフェレット姿のユーノ。

玄関の前には、ヴァンも来ていた。

『ったく、なんでこんな朝っぱらに行かなきゃなんねーんだよ？』

モデルFが眠そうな声を出した。

「にゃはは・・・ごめんね」

なのはが申し訳なさそうに謝る。

『こいつの言うことを真に受けちゃだめよ?戦闘馬鹿になるから』

『んだとおおぉぉ!』

モデルLとモデルFがケンカになる。この前リンディとクロノに言ったごまかしは、あながち間違いじゃない気がしてきた。

『・・・早く行きましょう』

モデルPが、3人を催促した。

午前5:55。

なのは、ユーノ、ヴァンは公園にきた。薄暗かった空が、太陽の光で明るくなり始めている。

「ここでなら・・・いいよ」

なのはは、どこかにいるであろうフェイトに言う。

「出てきて・・・フェイトちゃん!」

風が、吹く。

林が風を受けてざわめく。

なのはとヴァンがほぼ同時に振り向いた。そこには、バリアジャケットを纏い、バルディッシュを持つフェイトと、狼形態のアルフがいた。

「・・・ヴァン・・・・・」

ヴァンの顔を見たフェイトが呟く。

「大丈夫だ。これはフェイトとなのはの問題・・・俺は何も手を出さないさ」

ヴァンが後頭部に手を組ながらそう言う。

なのはが前に出た。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？逃げればいいってわけでももっとない」

バリアジャケットを纏い、レイジングハートを持ちながらなのはは言う。

真っ直ぐ、フェイトを見つめる。

「きっかけはジュエルシード・・・だから賭けよう。お互いが持ってる全部のジュエルシードを！」

なのはとフェイトの周りに、それぞれが持つジュエルシードが出た。

「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。

フェイトもバルディッシュを構える。

「私達の全てはまだ始まってすらいない・・・」

ヴァン、ユーノ、アルフが見守る。

「だから、本当の自分を始めるために・・・

始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

２人の魔法少女、その決戦が始まる。

第１５話－決闘前（後書き）

楓

「いよいよ終盤です。できればＡ'ｓ篇に入る前には感想件数１０は行きたいと願ってます。どっちでもいいけど。ロックマンゼクスがマイナーだからこんなに人気ないけど」

第１６話－２人の決戦（前書き）

我が言の葉は、水となり、大地を潤す・・・・・グラキエス・パッシオ・・・
・・・モデルＬ

ライブメタルのパスコード２つ目・・・モデルＬ
・・・暁　楓

第16話－2人の決戦

アースラ。

「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイトの戦いが始まったのを、画面で確認しながらエイミィが言った。

隣にクロノが立つ。

「ああ」

クロノとエイミィは、ただを見守るだけではなく、なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、帰還先追跡をしておくという作戦を立てていた。

クロノがエイミィの癖っ毛を直しながら言う。

「頼りにしてるんだから、逃がさないでよ」

「おう！任せとけ！」

エイミィが親指を立てて返事をした。

直後、また癖っ毛が跳ねた。

なのはとフェイトは海上へと飛んだ。

［フォトンランサー］

フェイトの周りに金色の魔力弾が現れる。

［ディバインシューター］

なのはの周りにも桜色の魔力弾が現れた。

「ファイア！」

「シュート！」

2人が同時に魔力弾を放つ。
魔力弾が交差し、相手へと向かっていく。
なのはは魔力弾を避けていく。
フェイトはなのはの魔力弾を障壁を張って防いだ。
だが、障壁を解除したときにはなのはを見失ってしまう。

「！」

フェイトが気づいた時には、なのはは魔力弾を形成し、攻撃体勢に入っていた。

「シュート！」

魔力弾が再びフェイトに向かって飛ぶ。

［サイズフォーム］

フェイトは鎌型の魔力刃で魔力弾を斬り裂き、なのはへと接近、そのまま攻撃する。

［ラウンドシールド］

なのはは手をかざし、障壁を形成してその魔力刃を防いだ。
そのとき、なのはの魔力弾の1つが、フェイトの後ろから迫ってきた。
フェイトはそれに気づくと、とっさに障壁で防ぐ。
だが、またなのはを見失ってしまう。

［フラッシュムーブ］

「てやあああああ！」

今度は上からだった。
なのはがレイジングハートを振り下ろした。
2人のデバイスがぶつかり合う。
直後、眩い光がなのはとフェイトを包み込んだ。
その中、

［サイズスラッシュ］

フェイトはなのはを見つけ、バルディッシュを振る。
だが斬ったのは、なのはのバリアジャケットのリボンだった。なのはは光の中から出るが、目の前に金色の魔力弾が複数見えた。

［ファイア］

バルディッシュの声で、魔力弾がなのはめがけて飛ぶ。なのはとっさに障壁を展開して防いだ。
弾かれた魔力弾は海面に飛び込んだ。

2人は一旦距離を取った。

（初めて会った時は、魔力が強いだけの素人だったのに・・・）

フェイトはなのはと初めて対峙したときを思い起こす。
だが、もうそんな彼女には見えない。

（・・・強い！）

フェイトは表情を険しくした。

（迷ってたら・・・・・、やられる！）

フェイトはバルディッシュを正面に構えた。足下に巨大な魔法陣が展開される。
そして、あちこちに金色の魔法陣が展開されては消え、展開されては消えが繰り返される。
なのはは対処したいところだが、何がくるかわからないものに、対処のしようがない。
そして、なのはの左腕がバインドに捕まった。
右腕、そして両脚の自由もバインドで封じられる。

「ライトニングバインド」

フェイトはそう呟いたあと、呪文詠唱を開始した。

2人の戦いを見守っている3人（2人は獣形態だが）にもその様子が見えた。

『・・・どうやらなにか仕掛けるようだな』

モデルZがその光景を見て呟いた。
アルフは、フェイトが何をするのかわかり慌てた。

「やばいよ！フェイトは本気であの子を潰す気だ！」

「なのは！今サポートを！」

ユーノが手助けしようとした時、

「2人の戦いだ。手を出すな」

ヴァンがそれを止めた。

「ヴァンさん！？」

ユーノが驚く。
アルフも声を出した。

「でも！フェイトのアレはホントにやばいんだよ！」

「それでも、俺達のすることは2人を見守ることだ。もしそれに水を差すんだったら・・・」

ヴァンは前に出た。手にはライブメタルがある。

「俺は許さない」

（ヴァンさん、ありがとう・・・）

なのはは心の中でヴァンにお礼を言った。
これは自分とフェイトの決闘だ。２人だけで決着をつけなければ意味がない。
なのははフェイトの方を見た。
今まさに、フェイトの呪文詠唱が終わっていた。
フェイトの周りには、無数と言える膨大な数の魔力弾が出現している。

「・・・フォトンランサー・ファランクスシフト」

フェイトは手をなのはにかざす。

「撃ち砕け、ファイアー！！」

無数の魔力弾が、なのはに襲いかかった。
だがその魔力の消費は凄まじく、フェイトも顔を歪める。
やがて、全ての魔力弾を撃ちきった。
なのはの姿は煙が立ち込めて見えない。

「なのはー！」

「フェイトー！」

ユーノとアルフが叫ぶ。

「はあっ、はあっ・・・・・！」

息を切らしながら、フェイトは残る魔力で魔力弾を１つ作った。

煙が晴れる。
そこからは、

「たはぁー、撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

ほぼ無傷のなのはが姿を現した。
あの攻撃に耐えたのだ。

「今度は・・・こっちの番だよ」

足下に魔法陣が展開される。

［ディバインバスター］

レイジングハートから、桜色の砲撃が撃ち出される。ヴァンからしたらまるであのルアールの冷凍ビームのようだ。
フェイトは魔力弾を放った。しかし、魔力弾はその閃光にかき消された。

「くっ・・・！」

フェイトは障壁を張った。桜色の閃光が障壁にぶつかる。

「うあっ・・・くうぅ・・・！」

フェイトはなんとかその一撃を耐えた。しかし、バリアジャケットはボロボロになり、限界寸前である。
だが、なのはの攻撃はこれで終わりではなかった。

「受けてみて・・・ディバインバスターのバリエーション！」

［スターライトブレイカー］

なのはの前方に、魔法陣が展開された。その先にはフェイトがいる。

「っ！？バインド！」

そしてフェイトはなのはのバインドに両手両足を拘束された。抜け出そうとするが、今のフェイトの体力では無理だった。

「これが私の全力全開！スタァァァライトォォ！」

レイジングハートを振り上げる。

「ブレイカアアアアアア！！」

レイジングハートを振り下ろすと、魔法陣からディバインバスターより極太の閃光が撃ち出された。

バインドから抜け出せないフェイトに、抵抗する手段はない。

フェイトに、スターライトブレイカーが直撃した。

決着はついた。

アースラで、この一撃を見ていたクロノとエイミィは唖然とした。

「なんつー馬鹿魔力・・・・・」

「すごい・・・・・」

2人は、それぞれの感想を呟いた。

なのはの一撃をくらい、気を失ったフェイトは、海に向かって真っ逆さまに落ちていた。

「フェイト！」

そのフェイトを、モデルＨＸとなったヴァンが抱きかかえ、そのまま地上へと引き返した。

「・・・う・・・ん・・・・・・」

地上に降りる途中、フェイトが意識を取り戻した。
ゆっくりとフェイトが目を開ける。

「あれ・・・ヴァン・・・・・・？」

フェイトはすぐ目の前にいるヴァンの顔があることに疑問を持った。
そして、今の自分の状況・・・ヴァンにお姫様抱っこされてることに気がつくと、すぐに顔を赤くした。

「ウ、ヴァン!?え、あ・・・そ、その・・・・・恥ずかしいんだけど・・・・・・！？」

「・・・・・ごめん、我慢してくれ」

みるみるうちに顔が赤くなっていくフェイトに、ヴァンは謝るしかなかった。だって、背負うには背中のホバージェットが邪魔すぎる。

そしてヴァンの足が地上に着く。その後フェイトを無理のないように立たせる。

「フェイトちゃん！」

上空から、なのはも来た。地上からもアルフとユーノが来る。
落ち着いたフェイトは勝敗を理解し、顔を俯かせた。

「私・・・負けたんだね・・・・・・」

「・・・確かにそうだけどフェイト、お前はよく頑張った。最後までよくやったな」

ヴァンはそう誉め、フェイトの頭を撫でた。
バルディッシュがジュエルシードを排出した。
と、次の瞬間、

「っ！フェイト！！」

「きゃ！？」

ヴァンがなにかに気づき、フェイトを押し倒した。空から雷が落ち、フェイトへ放たれたそれはヴァンが受けた。

「ぐああっ！」

「・・・ヴァン！」

それを見たフェイトが叫んだ。ヴァンは少し体が焦げるも、しっかり立ち、空を睨んだ。バルディッシュの出したジュエルシードが無

くなっている。

「プレシア・・・・・ッ！」

自分に攻撃されたことでもなく、ジュエルシードを奪われたことでもなく、フェイトを攻撃しようとしたプレシアに怒りの念を向けた。

アースラでは、プレシアの居場所を捜索、エイミィが場所を突き止めた。

リンディが立ち上がる。

「武装局員、転送ポードから出動！任務は、プレシア・テスタロッサの身柄確保！」

転送装置が稼働し、武装局員はプレシアの居場所・・・時の庭園へと向かった。

時の庭園。

「ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ・・・！」

プレシアが咳き込み、床に血溜まりができている。

「次元魔法は・・・もう体が耐えられないわね・・・・・」

苦痛で顔が歪む。

「それに・・・今のでこの場所も掴まれた・・・・・」

プレシアは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。

「フェイト・・・よく頑張ったわね・・・・・・」

プレシアは、最初で最後の、フェイトを、フェイトとしてのほめ言葉を口にした。

プレシアは微笑む。

そして、フェイトの未来をアルフとヴァンに託す。

「さあ・・・全てを終わりにしましょう・・・」

アースラのブリッジに、フェイト、ヴァン、なのは、アルフ、ユーノが到着した。

ブリッジまでくる途中、局員がフェイトに拘束具を取り付けようとしてきたが、

『邪魔なんだよ、この下っ端ごときが！火だるまにすんぞ！！』

『珍しく、モデルFと意見が合うわ。さっさと離れなさい。それとも、氷付けされたいの？』

モデルFとモデルLの脅し、

『我らとの協定を、忘れたわけではあるまいな？』

モデルHの協定の提示、

『フェイト殿を拘束するようならば、拙者はそれからフェイト殿を守護してみせる！』

モデルPの構えから、局員はフェイトの拘束を諦めた。ちなみに通訳係は当然というべきか、レイジングハート。

「フェイトさん？はじめまして」

リンディがフェイトに挨拶をした。だがフェイトは顔を俯かせて、待機状態のバルディッシュを持っている。
武装局員は、時の庭園に到着、プレシアを探していた。

（母親が逮捕される姿を見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女をどこか別の部屋へ）

リンディはなのはに念話を送った。

（は、はい）

なのはも念話で返事をしたとき、

「総員、玉座の間に進入。目標発見」

武装局員がプレシアのいる部屋に突入した。

「プレシア・テスタロッサ。時空管理法違反の容疑で逮捕します。速やかに武装を解除してください」

プレシアは武装局員の呼びかけに動じず玉座に座っている。
局員がプレシアを取り囲むように動いた。
その時プレシアが、自分の後ろについた局員を睨んだ。
後ろに移動した局員を感知して、隠し通路への扉が開いた。

（・・・まずい！）

ヴァンが焦った。
なぜなら、その先にあるものを知っているのだから。

「この先を映すな！」

「え、ヴァンさん！？」

突然のヴァンの言葉に、なのはが、そして全員が驚いた。
だが、時は既に遅く、局員は隠し通路の先にあるものを映してしまう。

「！！！？」

そこには、フェイトと瓜二つの少女、アリシアの入っているケースがあった。
ヴァンとライブメタルを除く全員が驚愕した。
特にフェイトは、自分が一体何を見ているのか、理解できないでいた。
局員がアリシアの入ったケースに近づこうとした。
その瞬間。
ケースの前に現れたプレシアに弾き飛ばされた。

「ぐわあぁぁ！」

「アリシアに近づかないで！！」

局員を睨み、プレシアは叫んだ。

「う、撃てぇ！」

局員は武器を構えて、閃光を放った。

だが、閃光はプレシアの障壁によって防がれる。

「うるさいわ・・・」

プレシアは、手を前に突き出した。

「危ない、防いで！」

リンディが叫ぶが、

「ぐわぁあああ！！」

玉座の間に沢山の雷が落ち、局員達は悲鳴を上げた。雷を受けた局員達は全員その場に倒れた。

「いけない！局員達を送還して！」

リンディの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我を負ったものの、死者は一人もいない。

「アリ・・・シア・・・・・？」

フェイトは、ケースに入っている亡骸の少女を見て呟いた。
プレシアはゆっくりとアリシアに近寄った。

「時間がないわ・・・１０個のジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるかわからないけど・・・・・」

プレシアは後ろを振り返った。

「・・・フェイト。そこにいるんでしょ？」

「！」

プレシアに名前を呼ばれて、フェイトの体が震えた。

「貴女はね・・・アリシアの代わりにしようと・・・私が造ったアリシアのクローンなのよ・・・・・」

「！？」

驚愕の事実に、フェイトの目は見開いた。

「・・・プレシアは最初の事故の時に、実の娘のアリシア・テスタロッサを亡くしているの。フェイトと言う名は、当時の彼女の研究につけられてた開発コードです」

エイミィが険しい表情で話した。

「よく調べたわね・・・・・さすが管理局ってところかしら」

プレシアは、ゆっくりと体をこちらに向けた。

「フェイト。正直に言うわ・・・・私ね・・・貴女を造りだした時から、貴女を好きになれなかったの・・・・・・」

プレシアの言葉に、フェイトの体が震える。

プレシアは目を閉じる。

「私はつい最近まで貴女が嫌いだった・・・・・・でも」

プレシアは再び目を開けた。

「それは私が運命に、そして未来から逃げていたから・・・フェイトをフェイトとして見てなかったから」

優しい声で語りかける。

「ある少年の、ある言葉で、私は変わったわ・・・・・自分の運命は変えられる・・・自分の選択によって変えられる、そして守れる未来がある。そして、フェイトに対する感情にも変化があったわ」

プレシアは少し遠い目をした。

フェイトはじっとそんなプレシアを見つめている。

「・・・もう私は許されるような人じゃないってわかってるわ・・・・でも、これだけは、フェイト、あなたに、あなたとして伝えたいの」

プレシアは、微笑んだ。

「フェイト・・・貴女が大好きよ・・・愛してるわ」

プレシアは、フェイトに正真正銘の笑顔と言葉を送った。

第16話－2人の決戦（後書き）

楓

「もうぼちぼちリリなのを見てます。少しはしょってるけど。」

第17話ー伝える気持ち（前書き）

我が言の葉は、炎となり、命を燃やす・・・・・フランマ・ウィース・・・

・・・モデルF

ライブメタルのパスコード3つ目・・・モデルF

・・・暁　楓

第17話－伝える気持ち

「フェイト・・・貴女が大好きよ・・・愛してるわ」

「・・・・・！！」

プレシアの言葉を聞いた瞬間、フェイトの体がぐらつき、その場に座り込んだ。
フェイトの目から、大粒の涙が溢れる。
なぜかはわからない。でも、プレシアの言葉と笑顔は、フェイトにとってとても悲しかった。

「・・・アルフ、今までフェイトに酷いことをしてごめんなさい・・・そしてこれからもフェイトを護ってあげて」

「プレシア・・・」

アルフはプレシアを見つめながら呟く。

「それから、ヴァン・・・・・あなたのおかげで私は変われたわ。ありがとう・・・・・そして、フェイトをお願い」

「・・・・・・・・」

ヴァンは、何も言わなかった。
そしてプレシアはもう1人に対して言葉を発する。

「そして、フェイトと本気でぶつかり合った魔導師さん・・・」

「え・・・私？」

直接ではないが突然名指しされなのはが戸惑う。

「フェイトは今まで寂しい思いをしていた・・・これから、アルフ、ヴァンと共にフェイトを支えて頂戴・・・」

「プレシアさん・・・・・」

一通り話したいことを話し、プレシアは一息ついた。

「それじゃあ、フェイト・・・・・さようなら」

最後にそう言い、プレシアは通信回線を切断した。
その直後、緊急事態のアラームが鳴った。

「屋敷内に魔力反応多数！」

「何だ！？何が起こってる！？」

クロノが動揺する。

「庭園敷地内に魔力反応！しかも５０、８０と数を増やしていきます！！」

そして、庭園のジュエルシードが発動されたのをキャッチした。

「次元震です！中規模以上！！」

「振動防御！ディストーション・シールドを！」

リンディが局員に指示を出す。

「ジュエルシード１０個発動！次元震、更に強くなります！」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動！！」

「了解！」

指示を受けた局員が動く。

「規模は更に拡大！このままでは次元断層が！！」

次元断層とは、いくつもの並行世界を壊滅させる程の災害。

急激に慌ただしくなる中、ヴァンはプレシアが映っていた画面を見ていた。

拳を強く握る。

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、あと三十分足らずです！」

局員が焦った声で、報告する。

「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロギアです！それを発動させて、足りない出力を補っています！！」

エイミィが説明した。

リンディは、顔を険しくした。

アルフは、体を震わせながら、ヴァンに近づいた。

「ヴァン・・・あんたは、知ってたのかい・・・？フェイトのことも・・・あのアリシアって奴も・・・あの人の考えも・・・全部・・・・・！」

ヴァンを睨むように見る。
ヴァンは、俯いたまま何も答えようとしない。
悲しみに耐えきれず、アルフは叫んだ。

「答えてよ！！」

「・・・・・・・・・・ごめん」

ヴァンは、それしか言わなかった。
アルフは強引にヴァンをこっちに向かせ、思いっきり殴った。
ヴァンは抵抗せず、そのまま床に倒れる。

「ウ、ヴァンさん！」

なのはがヴァンに駆け寄った。
ヴァンは殴られた左頬を抑えようとはしない。
アルフは、慌てて殴った右手を引っ込めた。

「あっ、ご、ごめん・・・・・」

「・・・いいんだ、俺が悪い・・・・・」

ヴァンは立ち上がり、フェイトの目の前まで来ると、フェイトに目線を合わせた。

フェイトはまだ座り込んで泣いている。

「フェイト・・・・・・・・ごめん」

ヴァンはフェイトにも謝った。

「・・・・ヴァンは、悪くないよ・・・・・」

フェイトは消え入りそうな声で呟いた。

「フェイト・・・・・」

沈黙が流れる。

先にヴァンが口を開いた。

「・・・俺は11年前に、母さんを亡くした・・・」

ヴァンは静かに続ける。

「自分の目の前で、俺は何もできず、殺されるのを見るしかなかった」

遊園地での、イレギュラー襲撃のころを語る。

「そして・・・フェイトの母さん、プレシアも、もうすぐ、フェイトの目の前から居なくなろうとしている」

フェイトの肩が僅かに動いた。

「フェイト・・・・お前は、どうしたい？」

ヴァンが尋ねる。
暫く無言だったが、フェイトが小さな、弱々しい声で答え始めた。
「・・・私がジュエルシードを集めてたのは・・・母さんに笑顔になって欲しかったから・・・」
そしてその願いは叶った。だが、それはフェイトが望んだ笑顔とは違った。
「でも・・・母さんのさっきの笑顔は、悲しかった・・・本当の笑顔じゃなかった。もっと、心からの笑顔が見たかった」
フェイトが顔を上げた。
「私は、母さんのところに行きたい・・・・母さんに、この思いを伝えて、母さんと一緒に生きたい・・・！」
迷いのない、真っ直ぐな目で、目の前のヴァンを見た。
「・・・そうか」
ヴァンは短く笑った。
「それじゃあ、行くか。本当の笑顔ってやつを取り戻しに！」
「・・・うん！」
フェイトはしっかりと頷いた。

時の庭園に転送された一同。
その直後、

バタンッ！

ヴァンが倒れた。

「ウ、ヴァンさん！？」

「ヴァンさん、大丈夫ですか！？」

なのはとユーノが駆け寄る。
その様子を見て、フェイトとアルフは思った。

（（また、例のあれか・・・・・））

あれとは、初めてヴァンがここに来たときのあれである。

「・・・だめだ・・・気持ち悪い・・・・・」

顔を青くするヴァン。ただ、これでもマシになった方だ。
だが、某風男対メガマンよろしく、何回来ても耐性がつかないようだ。機械の体には。

「クロノ・・・おぶってくれ・・・」

虚ろな目をクロノに向けた。
クロノは嫌そうな、実に嫌そうな表情を浮かべた。

「なんで僕がおぶらなきゃならないんだ！」

クロノが反対すると、

「１０歳ぐらいの少年少女におぶらせろと？」

とヴァン。

「アルフがいるだろ！」

すかさずクロノが反論するが、

「アルフの背中だと落ちる・・・」

「アルフが人型になればいいだろ！？」

「・・・・・・・・」

クロノの提案に少し考えるが、

「・・・・なんか嫌だ・・・」

「酷くない！？」

ヴァンの返答に、アルフが軽くショックを受ける。

ヴァンを置いていこうと一瞬思ったが、そうするわけにはいかないので、仕方なくクロノが背負うことにした。

そして庭園内に突入する。

途中、いくつもの傀儡兵が襲ってきたが、なのはやフェイト、アル

フ、ユーノが破壊していった。
ちなみにそのとき、クロノはヴァンを背負っていたためまともに魔法が撃てなかった。

傀儡兵を倒しながら、一同はエレベーターのあるところについた。

「このエレベーターを登れば、動力炉に行ける」

フェイトが説明した。

「じゃあ、私が行く！」

「僕も行くよ！」

なのはとユーノがエレベーターの道を選んだ。

「私は、母さんに会いに行くから、最下層に」

「あたしは、フェイトの行く方を選ぶよ」

「僕は、プレシアの確保という任務がある」

「俺も、プレシアのところにいくぜ・・・」

フェイト、アルフ、クロノ、そしてまだ顔が青いヴァンが最下層行きとなった。

「フェイトちゃん」

なのはがフェイトの方を向いた。フェイトもなのはの方を向く。

「頑張って！」

「・・・・うん！」

フェイトは頷いた。

そして、一同はそれぞれの道を進んだ。

「・・・もうそろそろ、降りて欲しいんだが」

最下層への廊下を進む中、クロノは言った。

だがヴァンはぐったりしている。

「なんか・・・お前に乗ってると、初めて乗り物酔いをした感覚が・・・」

「だったら降りろ！余計悪化しているだろ！」

クロノが突っ込んだ直後、廊下の壁を突き破って巨大な傀儡兵が姿を現した。奇襲だ。

傀儡兵は、先頭を走るフェイトめがけて腕を振り下ろす。

「フェイト！」

アルフが叫ぶ。だが、突然の奇襲により、フェイトの対応は僅かに遅れていた。

豪腕が突撃し、砂煙を撒き散らした。

「フェイトォー！」

アルフが叫んだ。
砂煙が晴れる。
フェイトは、無傷だった。

「・・・ったく」

フェイトの前に、１つの人影が見える。
モデルＦＸになったヴァンだ。

「何回来ても気持ち悪くなるし、親子は揃って無茶ぶりを発揮するし、なんだか親子喧嘩まで起こるし、奇襲までしてくるし・・・」

『その上俺達の出番は少ないし、そもそも変身回数も少ないし・・・！』

ヴァンとモデルＦはかなり重々しい声を発している。
後ろの人達が僅かに震えているのは気のせいではないだろう。多分。
そんなことも知らない傀儡兵がもう一本の腕を振りかぶった。

「苛立たせるのも・・・」

『「いい加減にしやがれえぇぇぇぇぇ！！」』

ヴァンとモデルＦの怒声とともに、チャージされていたナックルバスター・アームＲが突き出された。
怒涛のメガトンクラッシュは、傀儡兵をパンチごと粉々に粉砕した。

「いくぞぉおらぁぁ！親子まとめてあとでぶん殴ってやる！！」

『こいやあああぁぁぁ雑魚共おぉおお！！』

ヴァンは叫びながらズカズカと先に進んでいく。

ヴァンが、壊れた・・・・・

後ろの３人は、そのヴァンの姿に少なからず恐怖を覚えた。

最下層。

そこに、プレシアがいた。プレシアのそばには、アリシアの亡骸が入ったケースもある。

プレシアは、ケースに入ったアリシアを見つめている。

「アリシア・・・そしてフェイト・・・今までごめんなさい・・・」

アリシアと、この場にはいないフェイトに謝る。

すぐそばを漂っている１０個のジュエルシードが光っている。

「もうすぐ・・・全てが終わるわ・・・・・」

プレシアが呟いた時、

一体の傀儡兵が吹っ飛ばされ、地面を転がってきた。

「・・・来たわね」

プレシアは傀儡兵が吹っ飛んだ方を見る。

これをやったのは、管理局員だろう。
その考えは合っていて、クロノがやってきていた。
だが、クロノだけでない。プレシアにとって予想外の人物も来ていた。

「フェイト・・・！？」

それは、自分のもう1人の娘、フェイトだった。
フェイトだけでなく、アルフ、そしてモデルFX姿のヴァンもいる。

「母さん！」

フェイトが自分を呼んでくる。

「フェイト・・・何しに来たの・・・！？」

プレシアが予想外の来訪者に驚きながら言った。
フェイトは立ち止まり、真っ直ぐプレシアを見る。
その目に迷いはない。

「私は、母さんに笑顔になって欲しかった」

フェイトは、ゆっくりとプレシアへと歩み寄る。

「でも、さっきの母さんの笑顔は・・・私が願った笑顔じゃない・・・」

フェイトは立ち止まる。
フェイトとプレシアの距離はまだ5~6メートル程ある。ヴァン達はフェイトより1メートル程後ろだ。

「私は、母さんに本当の笑顔になって欲しい・・・・・・！」

フェイトの声が大きくなっていく。

親子2人は、真っ直ぐ、互いを見つめ合う。

「母さん・・・・・一緒に帰ろう・・・そして、一緒に暮らそう・・・・・！」

フェイトは、自分の気持ちを、嘘偽りなく、自分の母に告げた。

フェイトは微笑んでいる。

それを見て、プレシアは目を閉じ、微笑んだ。

「ああ・・・私はなんて幸せなの・・・こんなに私を思ってくれる娘がいるなんて・・・・・・！」

「母さん・・・・！」

プレシアの気持ちを聞いて、フェイトが近づこうとする。

だが、プレシアの足下に魔法陣が出現した。

「！」

魔法陣を見てフェイトが驚く。

クロノは、抵抗の意思表示と見て、Ｓ２Ｕを構え、警戒した。

だが、ヴァンはプレシアを蝕んでいる病、そしてさっきまでの言動から、１つの行動が頭をよぎった。

（っ！あんのやろ！）

ヴァンが走り出した。

「ありがとう・・・フェイト。そして・・・・・」

プレシアが杖を振り上げる。

「さようなら」

雷が、プレシアの周りの床を砕いた。
そして、プレシアとアリシアのケースは瓦礫と化した床と一緒に落ち始める。
ここには、虚数空間というのができていた。
虚数空間とは、全ての魔力を無効化する空間。そこに飲まれれば、這い上がることはできない。
飲まれれば、最期。
プレシアは、自らその最期を迎えようとしていた。

「母さん！！」

フェイトが叫ぶ。すると、プレシアとケース以外にも人が映った。
ヴァンだ。
ヴァンが崩れゆく床に乗り出した。

「モデルF！出力を限界まで下げろっ！」

『ん無理言わすな！俺はあの白い魔砲使い同様、全力全壊、完全破壊がモットーなんだよ！』

そんなことをあの子(なのは)に聞かれたら大変だが、そんなことに構っている暇なんてない。

ヴァンは右手のアームRをチャージし、ケースに押し付けた。

「クロノォォォ受け取れぇぇぇぇ！！」

そして、ケースを割らないようにメガトンクラッシュで押し飛ばした。

「うおっ！！」

クロノはなんとかそれを受け止めた。だがバランスを崩し、倒れてしまう。

ヴァンは左手をプレシアに伸ばし、右手にモデルPを持った。

（間に合え！）

ヴァンはモデルPXに変身し、プレシアの手を掴んだ。そして手の甲から光の鉤爪、ハンギングウェッジを出し、崖になった床に引っ掛けた。

瓦礫が虚数空間に飲み込まれていく。

ヴァンとプレシアを支えるものは、3本の光の鉤爪だけだ。

「ヴァン！母さん！」

フェイトは2人の名を叫んだ。助けに行きたいが、崖のようになった場所の向こう側に2人はいる。穴を回り込むのも、今にも崩れそうな床が阻んでいた。

プレシアは自分を掴むヴァンの顔を見た。仮面に隠れて目元が見えないが、口元は苦しそうに歪んでいるのが見える。

「何をしているの・・・この手を離しなさい！」

プレシアが叫ぶ。だがヴァンはプレシアの手を離さないどころか、より強く握る。

「・・・離さない」

ヴァンは苦しそうに言った。

プレシアは声を荒げる。

「何言ってるの！私にはもう時間はない！それに、もし時間があったとしても私にはもう、フェイトの母親と名乗る権利なんて――」

権利なんてない。

そう言おうとした瞬間、何かが重力に従ってプレシアの頬に落ち、濡らした。

「え・・・？」

プレシアはヴァンを見た。仮面のせいで目元がよく見えない。だが、彼の頬を伝っているものが見えた。

「俺はっ・・・」

もう一粒、水滴が落ちる。

「大切な人が失う光景を・・・もう誰にも見せたくないんだぁぁぁっっ！！」

ヴァンは、泣いていた。

プレシアは、そのヴァンを見て驚いている。

「お前は、まだ未来から逃げようとしていることに気づいていないんだろっ?そんなお前を救うために、俺達はここまできてるんだよっ!!」

ヴァンはありったけの、精一杯の声で叫ぶ。
その声は、プレシアの心の奥底まで響いていく。

「時間がないだと?そんなもん、今ある時間を全部使えば、フェイトに忘れられない思い出の1つでも作れるだろっ!」

その声は、この最下層に響き渡る。
ヴァンは今ある力で、プレシアの手を握り、崖にしがみつく。

「プレシアとフェイトの未来を見るまで、俺は諦めない!」

「ヴァン・・・」

プレシアはヴァンを見た。僅かに見えたヴァンの目は、何よりも強く、そして悲しく見えた。

(・・・私は、運命の本当の意味を知ってなかったようね・・・・・・)

プレシアは思った。運命は、全て己で変えられるものだと・・・、決して決まりきった運命などないものだと・・・、その時、プレシアは初めて理解した。
だが、運命は決して綺麗なものだけではなかった。
ヴァンの光の鉤爪が、突如消えた。

「ーーーッ!?」

ヴァンは驚いた。2人の体が宙に浮く。

『虚数空間が、ライブメタルエネルギーをも無力化している!!?』

モデルXのその言葉は、ヴァンの目にも見える形になった。
変身が、解けたのだ。

「え?」

フェイトは、変身が解けたヴァンを見て、ようやくその声が出た。
同時にフェイトは、その光景が夢が幻であって欲しいと思った。
ヴァンとプレシアが、虚数空間へと引き込まれていく。
虚数空間に飲み込まれれば、絶対に這い上がれない。
飲まれれば、最期。
その最期が、2人を引きずり込んでいる。

「ヴァン!母さん!!」

「ヴァン!プレシア!」

フェイトとアルフが駆け寄るが、その距離は遠すぎた。
ヴァンとプレシアが、虚数空間へと消えていった。

「ヴァーーン!!母さーーん!!」

フェイトが叫び、その場に座り込んだ。

「嘘だろ・・・?」

アルフも震える声で呟いた。

「母さん・・・・・ヴァン・・・・・」

フェイトの呟きも、震えている。
泣きそうな目で虚数空間を見た。
やっと、母さんと分かり合えたのに、
ヴァンと一緒に母さんを助けに来たのに、
2人が、いなくなった。
その時、エイミィから連絡が入った。

『みんな！庭園が崩壊するわ！急いで脱出して！』

「フェイト・テスタロッサ！アルフ！脱出するぞ！」

ケースを先に転送し、連絡を受けたクロノが叫ぶ。

「で、でも・・・・・ヴァンが・・・・・」

今にも泣きそうな声でアルフが呟く。
フェイトは、泣きそうな顔を手の甲で拭い、立ち上がった。

「行こう・・・アルフ」

「で、でも・・・・・！」

「大丈夫・・・・・ヴァンは、帰ってくるよ・・・・・」

フェイトはアルフと、自分に言い聞かせ、走り出した。

アースラ。

「庭園崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」

「次元震停止します」

「断層発生ありません」

「了解」

局員達の報告を聞いて、リンディは頷いた。
そして、クロノが転送したアリシアの亡骸が入ったケースは、別室に保管された。

医務室。

「ヴァンさんが！？」

帰還後、クロノからヴァンとプレシアが虚数空間に吸収された話を聞き、なのはが驚愕した。
フェイトもいる。リンディがモデルZとの協定を提示して保護。拘束具もつけられなかった。

「虚数空間からでる方法はない・・・・ライブメタルの力も無効化されたことも考えると、もう絶望的だ・・・・」

「そんな・・・・・」

なのはが俯いた。

沈黙が流れる中、フェイトが呟いた。

「大丈夫・・・・・ヴァンは・・・ヴァンはきっと生きてる・・・」

「！」

なのはが、そしてこの場の全員の視線がフェイトに集中する。

「私達のために、きっと帰ってきてくれる・・・・・」

フェイトのその声は、一体だれに対して言っているのだろうか。

なのはなのか、アルフなのか、自分なのか、はたまたここにはいないヴァンなのか・・・・・。

「・・・そうだよね」

それに賛成したのはなのはだった。

「ヴァンさんは・・・ヴァンさんだもん。きって帰ってきてくれるよ」

「お前・・・その言葉に根拠はあるのか？」

クロノが尋ねた。

「そりゃ、ヴァンさんがヴァンさんだからですよ。他に理由や根拠

なんていりませんよ」

その質問に答えたのはユーノだった。全く理論的ではない、でも当たり前のように言った。

「そおだよ！ヴァンはあんたなんかより何倍も強いんだ。絶対帰ってくるさ！」

アルフも賛成した。

フェイトは、３人の言葉に目を見開き、やがて笑顔になる。

クロノはため息をついた。

（随分と、慕われているようだな・・・・お前には聞きたいことがまだあるんだ。だから絶対帰ってこい！）

全員の気持ちは、１つになっていた。

「う・・・ん・・・・・」

プレシアは目を覚ました。

上半身を起こす。

そこには、プレシアにはわからない世界が広がっていた。

そもそも、自分はヴァンと虚数空間に落ちたはずである。

「ここは・・・・・・・・」

プレシアは目の前の景色に目を丸くした。

第17話「伝える気持ち」（後書き）

楓

「今回はヴァンの感情の変化がすごいことになりました。なってしまいました。

次回は以外な奴が出てきます」

第１８話ー電子空間（前書き）

我が言の葉は、影となり、忠義を誓う・・・・・ウンブラ・プロフェス・・・
・・・モデルＰ

ライブメタルのパスコード４つ目・・・モデルＰ
・・・暁　楓

第１８話 電子空間

プレシアが目を覚ますと、そこは緑一色であった。
緑一色、と言っても、木々や草花が生い茂っているものではない。むしろ逆だ。科学的なものを感じさせる。
プレシアは上半身のみを起こした体勢でその風景を眺めている。
ヴァンの姿がない。虚数空間から、自分だけがここに来たのだろうか？
とりあえずプレシアは立ち上がろうと、手を地面につかせ、力をいれる。
と、そのときだ。

「ぐえぇ・・・」

断末魔が聞こえた。感触も少し柔らかい。プレシアは自分が座っているところを見た。
そこに、ヴァンがいた。自分の片手は、ヴァンの首に当たっている。

「きゃああ！？」

プレシアは慌てて立ち上がった。そりゃ、ヴァンの上に座ってて、立ち上がろうと手を置いた位置が彼の首であれば、誰でも驚くであろう。
プレシアはヴァンの様子を見た。息はしている。特に怪我もない。
プレシアがほっと胸を撫で下ろしたとき、ヴァンも起き上がった。

「ん・・・なんか首もとが痛い・・・」

起き上がりと同時に咳き込んだ。

「ご、ごめんなさい・・・あなたが下にいるとは知らなくて・・・」

「・・・・?プレシア、どうした?」

ヴァンが首を傾げた。
ヴァンはようやく周りの緑一色の風景に気がついた。

「プレシア・・・ここはどこだ?」

「わからないわ・・・気がついたらここに・・・」

ヴァンはこの空間をよく見た。
空間を漂い、そして飛び回る光の玉を見つけた。
プレシアもそれに気づいた。

「何、あれ・・・・・?」

光の玉は、ものによっては小さな動物や人型になるものもある。

「あれは・・・もしかしてサイバーエルフ?」

「サイバーエルフ?何なのそれ?」

プレシアが尋ねた。
ヴァンが説明する。

「俺の世界にいる、プログラム生命体って呼ばれる電子の妖精だ」

だが疑問が生まれる。サイバーエルフの数が多い。

「なんで・・・こんなにたくさん・・・・・？」

「ここはサイバー空間・・・サイバーエルフや、サイバーエルフとなった人の魂が住まう電子の世界だ」

赤い光の玉・・・サイバーエルフが2人の目の前に降りてきた。
そのサイバーエルフは、光の玉から、赤いジャケット、長い金髪の青年の姿になった。眼鏡をかけている。

「・・・先輩！？」

ヴァンがその姿を見て驚いた。
ヴァンが先輩と呼んだ彼の名はジルウェ。モデルZの元々の持ち主であり、ヴァンの良き理解者である。
プレシアがそのサイバーエルフとヴァンを交互に見つめる。

「まったく・・・虚数空間から落ちてここに偶然繋がるなんて、宝くじ一等を連続で当てるよりも難しいんだぞ。その悪運の強さは驚きを通り越して呆れものだな」

ジルウェはやれやれといった感じでそう言った。
そしてジルウェはプレシアに向き直った。

「はじめまして、ジルウェと言います」

「え、ええ。私は、プレシア・テスタロッサよ」

互いの自己紹介が終わる。
ヴァンが1つ、疑問を持った。

「あれ?先輩がなんで俺達が虚数空間から落っこちたことを知ってるんだ?」

それはプレシアの疑問でもあったりする。

「言っただろ?ここは電子の世界だって。ここのサイバーエルフの情報や記憶は、データとなって俺達も共有できるんだよ」

お前たちの記憶を見せてもらっただけさ、とジルウェが説明した。
なるほどー、とヴァンが納得するが、直後固まった。

「?どうしたのヴァン?」

プレシアが聞くがヴァンは動かない。
ヴァンは1つのことを整理していた。
ジルウェはここをサイバーエルフとなった人の魂が住まう場所と言っていた。
人がサイバーエルフになるというのは、ヴァンも見たことがある。
ジルウェが死ぬときだ。
それってつまり・・・

「俺達・・・もう死んでるのか!?」

その答えにたどり着き、口にした。
その答えに、プレシアも驚愕する。
しかし、ジルウェは冷静だった。

「ハズレ、だ」

「？」

「お前達は生きている」

ジルウェは普通に笑っていた。

だが、ヴァンは頭に？マークを浮かべる。

「・・・なんでだ？先輩の話じゃここは死んだ人が来る場所なんだろ？」

「・・・まあ、お前の解釈は一応合ってる。でも、お前は生きているんだよ」

「・・・・・？？」

わけのわからないヴァンは首を傾げるしかなかった。

考えても仕方ないと判断したプレシアはジルウェ次の説明を求めることにした。

「ジルウェさん・・・」

「ジルウェでいいですよ」

「なら、ジルウェ。説明をしてくれるかしら？」

ジルウェは頷いた。

「ええ、まず、あなた達は虚数空間に飲み込まれた」

うんうんと2人は頷く。

「そのとき、なんらかの拍子で現れたサイバー空間に、2人は入った。サイバー空間は電子の世界だから、空間に入るためにすべての情報が電子化される。ここを出れば電子化された全ての情報が実体化される。これで理解できますか?」

「つまり、私達は肉体も電子化されているってことなの?」

「そういうことです。・・・理解できてるか、ヴァン?」

ジルウェはヴァンに視線を向けた。ヴァンは頭を抱え込んでいる。

「う~ん、とりあえず、ここから出られるんだな?」

「結局それだけかよ・・・・・」

ジルウェはヴァンの返答に呆れた。
その時、

「う・・・ゴホッ、ゴホッ・・・!」

プレシアが咳き込んだ。

「プレシア!」

ヴァンが心配し、焦る。
プレシアの病は、電子の世界でもプレシアを追い詰めていた。
だがジルウェは慌てない。

「マルティナ、スノック、頼むぞ」

ジルウェの言葉と共に、看護婦姿のエルフが2匹姿を現した。

「わかりました」

すらりとし、しとやかな雰囲気を出しているマルティナ。

「あたいにまかせな！」

コロッとした体形をしたスノック。

まず先にマルティナがプレシアに近づいた。

「サテライトを開始します。少しの間じっとしてください」

そう言うと、マルティナのピンク色の光が、プレシアに流れ始めた。

プレシアとリンクしているのだ。

マルティナとのサテライトが終わると、今度はスノックが近づく。

「フュージョンするよ。じっとしてな」

そう言い、プレシアめがけて突っ込んだ。そしてピンク色の光がプレシアの体に入った。一瞬、プレシアの体がピンク色に光る。

スノックとフュージョンしたあと、プレシアは目を見開いた。

「体の苦しさが・・・消えた・・・！それと体が軽い！」

プレシアは突然の体の変化に信じられなかった。

今まで不治と思われた病が消えたのだ。驚くのは当然だろう。

「サイバーエルフによって治療しました。病についてはもう大丈夫

でしょう。病の間になくなった体力の回復もそうかからないはずです。一応、マルティナとのサテライトは2~3ヵ月ほど続けてください」

ジルウェが説明をする。
もうプレシアは大丈夫らしい。

「ジルウェ、ありがとう・・・」

「なに、私はサイバーエルフに指示を与えただけです」

プレシアはお礼を言い、ジルウェは謙遜した。

「・・・あとは、元の世界に戻るだけね・・・」

「ああ、大丈夫ですよ。手段ならあります」

ジルウェは手に小さな光を持った。

「ヴァンの記憶を元に、ここからアースラへの座標を割り出しました。転送場所は、ヴァンが使っていた部屋でいいですね?」

「ええ」

プレシアが頷く。

「・・・あなたの記憶も少し見させてもらいました。今度こそは、大切な娘を守り通してください」

ジルウェが微笑む。

プレシアはそれに対して力強く頷いた。

「ええ。フェイトは、アリシアみたいにさせないわ」

ジルウェは今度はヴァンを見た。

「ヴァン、お前の記憶を元に、お前の世界の座標も割り出した」

ジルウェはもう1つの光を取り出した。

「だが、この転送回線は、この空間からしかつかえない・・・」

それはつまり、一方を選んだら、もう一方にはもう戻れないことを示している。

「お前は・・・どうする?」

ジルウェが問う。

ヴァンは、迷うことなく言った。

「俺も、アースラに転送してくれ」

「もう二度と、元の世界に戻れないかもしれないんだぞ?」

ジルウェの問い掛けに、ヴァンは動じない。

「確かに、俺は元の世界に戻ってやらなきゃならないことがある。でも、俺はあっちでも守るべきものができた。・・・中途半端に守って消えるようなことはしないさ」

ヴァンの答えに、ジルウェは微笑んだ。

「・・・わかった。しっかりと、守るべきものを守ってみせろ」

「・・・ああ」

ジルウェは、最初に出した光をヴァンに渡した。

「転送を開始する。あと、ここのことは黙っててくれ。来ることはないだろうけど、ここのサイバーエルフを守るためだ」

「ああ。ありがとう、先輩」

「ジルウェ、礼を言うわ」

プレシアが頭を下げる。

「何、俺はもう、ジルウェって名のただのサイバーエルフですよ」

ジルウェはニッコリと笑った。
ヴァンの持つ光が輝き始める。

「先輩・・・先輩にまた会えて、嬉しかったよ」

ヴァンは最後であろう言葉を呟いた。

「しっかり守っていけよ。・・・ああ、そうだ。お前に言い忘れたことがある」

「・・・？」

ヴァンが首を傾げ、耳を傾けた。その次のジルウェの台詞が爆弾投下とは知らずに。

「女の子と同居して、風呂に入るときはちゃんとノックとかで確認するんだぞ」

「！！？」

ヴァンの顔が一瞬で真っ赤になった。
慌てふためき叫ぶ。

「せ、せせせせせっ、先輩！！？」

「じゃあな～」

「ちょっ、まっ――」

ヴァンが何か言う前に、光と共に2人は転送された。
ジルウェは消えた光を見上げた。

「・・・・さて、電子本でも読むかな」

ジルウェは、また赤い光の玉になると、どこかへと飛び去っていった。

第１８話ー電子空間（後書き）

楓

「というわけで、ジルウェ登場です。まあ、これはこれでいいよね？
次回はモデルＺのアンチ無双の回となりま～す」

第１９話－紡ぐ絆（前書き）

我が言の葉は、光となり、無限の可能性を照らす・・・・・・ルーメン・インフィニタス・・・

・・・モデルＸ

ライブメタルのパスコード５つ目・・・モデルＸ・・・・・・そして今回はモデルＺ無双ぉぉ！

・・・暁　楓

（モデルＺのアンチっぷりを）楽しもうじゃないか！

・・・プロメテ

（モデルＺはあなたを）逃がさない・・・

・・・パンドラ

せっかくのシリアスな雰囲気が・・・

・・・ヴァン

第19話 紡ぐ絆

ヴァンとプレシアが転送された。

「っでえええぇぇぇっ!?」

転送された後、ヴァンがこけた。
サイバー空間でのジルウェの大暴露をどうにかしようと身を乗り出した結果である。
プレシアの傍らには、現在サテライト中のサイバーエルフ、マルティナがいる。
プレシアは辺りを見回した。起き上がったヴァンも同じく見回す。
そこは、少し殺風景な部屋だった。ヴァンが睡眠のためだけに来る部屋である。

「・・・・・戻ってきたか・・・」

ヴァンが呟いた。

「ここが、アースラ・・・」

プレシアも呟く。
その時、部屋の扉が開いた。
ヴァンとプレシアが扉の方を見た。そこには、フェイトが立っていた。

「ヴァ・・・ン・・・・・母さん・・・・・・」

フェイトは目を見開いて2人を見た。

フェイトは、アースラが2人の転送反応をキャッチして一番に駆けつけたのだ。

「フェイト・・・・・！」

プレシアがフェイトに駆け寄る。

「母さん！」

フェイトもプレシアに向かって走り出した。
そしてフェイトはプレシアに抱きついた。
プレシアも、フェイトをしっかりと抱き締める。

「母さん・・・母さん・・・！」

「フェイト・・・ごめんなさいフェイト・・・・・！」

2人とも涙を流しながら、互いに強く抱き合う。
もう、離れ離れにならないように。
遅れて、扉からなのは達がやってきた。クロノもいる。

「ヴァンさん！帰ってきたんだね！」

なのはが笑顔になった。

「ヴァン！帰ってきたんだね・・・って、またなんか増えてる！？」

アルフはヴァンの帰還に喜びながらも、マルティナの存在に驚いた。

「お前、どうやってあの虚数空間から戻ってきた！？あそこからの

脱出は不可能なはずだ！」

クロノは喜びよりも、まずヴァンから帰還方法を問いただすことを優先した。

「あー、あれだ。ゲームでよくある右から出て左から戻ってくるような感じみたいな？」

「真面目に答えろぉぉぉぉ！！」

ヴァンのいい加減な答えにクロノがキレたが、ヴァンはサイバー空間のことは一切言わなかった。

ちなみにマルティナについては、気がついたら一緒にいて、プレシアの病の治療をしてくれたということにした。

翌日。

プレシアとフェイトはリンディに呼ばれた。

サテライトのままのマルティナを連れて2人が和風改造された部屋に入ると、リンディとクロノがいた。

「とりあえず座ってください」

リンディに言われたので2人は畳の上に座る。

「早速本題に入ります」

リンディは書類を取り出した。その書類は今回の事件の報告書である。

「フェイトさんは本局の保護施設に移送されることになります。ただし、今回の事件の重要参考人なので、暫くは事情聴取を受けることになります」

時折紙に目を通しながら言う。

「あの、母さんは・・・？」

フェイトが心配そうに聞いた。

「プレシアは時空管理法違反、しかも次元断層を引き起こそうとした。僕らも、それには目をつむるわけにはいかない」

「そんな・・・」

クロノの返答に、フェイトは顔を暗くした。

そんなフェイトの頭を、プレシアは優しく撫でた。

「フェイト・・・母さんなら大丈夫だから」

その時、扉の開く音がした。

「あ、もう全員揃ってんじゃん」

部屋に入ってきたのは、ヴァンだった。

「ヴァン？」

「ヴァンさん・・・どうしました？」

リンディが聞くと、ヴァンはホルダーからモデルZを取り出した。

「モデルZが話があるってさ。フェイト、バルディッシュに通訳頼んでいいか？」

「あ、うん」

フェイトは待機状態のバルディッシュを取り出した。

「それで・・・モデルZ、話って何ですか？」

リンディが聞いた。少し顔に緊張が入っている。リンディには1つ、もしかしたら・・・と思うものがあった。

だが、モデルZの言い放った言葉は、もしかしたら、を凌駕していた。

『俺の話は、今回のプレシアの処遇について・・・・・プレシアの無罪を求めたい』

その言葉は、管理局側だけでなく、フェイトとプレシアも驚いた。

「貴様、何を言ってるんだ！？」

クロノが叫んだ。

だが、モデルZはそれを気にせずに弁護を開始する。

リンディの手に持つ報告書を見た。

『まず、その報告書を見せてもらおうか。ヴァン、俺の手の代わりを担ってくれ』

「オーケー」

ヴァンはリンディから報告書を受け取ると、モデルZに見えるように報告書をめくり始めた。
すべてのページをめくり終わったあと、モデルZが切り出した。

『この報告書は・・・誰が、何を証拠として書き上げた?』

「僕が、昨日のプレシアの事情聴取と事件の映像を元に書いたものだが・・・」

クロノが答えた。

『なるほどな・・・』

モデルZは意味深そうな溜めをつくった。

「何がだ?」

その溜めにイラつきながらクロノが尋ねた。リンディの顔も険しいままだ。
プレシアとフェイトは、そんなやり取りを見守っている。

『この報告書は真実ではない』

モデルZはそう言い放った。
その言葉にヴァンとライブメタルを除く全員が驚いたのは言うまでもない。

「貴様、真実ではないとはどういうことだ！」

『報告の1つ、プレシアはジュエルシードを集め次元断層を引き起こそうとした。まずこれは間違いだ』

「何を言っている！プレシアの所持していたジュエルシードが発動したのはお前も知っているだろう！それにプレシアもそれを認めている！」

クロノはプレシアを指差した。確かにクロノは昨日の聴取でプレシアが認めたのを聞いた。

『供述が嘘、もしくはその証言をしたという報告が嘘である可能性がある。証言だけでは物的証拠にならないというのはわかっているだろう？』

モデルZがさらに続ける。

『そもそもジュエルシードはユーノが発掘し、運搬中に事故で落としたものだ。次元断層を起こすためにそんな偶然を待つというのか？しかしプレシアはジュエルシードが散らばったという情報をお前たちより早く仕入れ、回収に向かった・・・ジュエルシードの危険性を考えれば、散らばった危険物を処理するために動いたという見方が妥当だと思うがな』

「モデルZ・・・」

プレシアが呟いた。

だが、クロノは引き下がらなかった。

「だ、だが、実際に次元断層が・・・！」

『次元断層が起こりそうになったのは事実だ。だが、それが、“プレシアの魔法行使によってジュエルシードが発動した”と言える証拠がどこにある？』

そう、プレシアは偶然にも、通信回線を切断してからジュエルシードを発動させた。よって、管理局にはプレシアがジュエルシードを発動させた映像が残っていない。

『ジュエルシードそのものにもかなりのエネルギーがあるはずだ。それが一カ所に集まれば、発動する可能性がある。まあ、この場合はプレシアのジュエルシードの保管ミスということで厳重注意が妥当だろう』

そもそも個人より行動が遅いところに問題あると思うがな、とモデルZ。

クロノは行き詰まっていた。モデルZはこちら側の痛い所を、的確に責めてくる。攻勢に移れない。

プレシアとフェイトは、管理局相手に徹底的に責めていくモデルZに目を丸くしていた。

「では、モデルZ、プレシア女史が局員に攻撃したことについては？」

今度はリンディが口を開いた。このことについては映像という物的証拠もある。

さすがにモデルZも反論できないかと思われたが、モデルZは喋り出した。

『リンディ、お前は自分の息子が危機に晒されたとき、何もせずにただじっと見ていられるとでも言うのか？』

「！？そ、それは・・・！」

リンディの目が見開かれた。

『プレシアの行動は、危機に晒されたアリシアを護るためのものだ。プレシアに非はない』

「で、ですが・・・」

リンディが次の反論を考えていると、モデルZが追い討ちをかけてきた。

『これでプレシアの有罪である証拠がなくなったわけだが、無実の人の私有地への局員の不法侵入については、どう言い訳するんだ？』

「「！！？」」

リンディとクロノが揃って驚愕した。

まさか、プレシアを護るだけでは飽きたらず、こちら側に攻撃を仕掛けてくるとは。

確かに、プレシアが事実上無罪に傾いている今、庭園への侵入は不法なものとなる。

２人は黙り込んだ。

庭園が崩壊した今、物的証拠と言えば、今モデルZによって叩きのめされた映像しかない。

暫くすると、リンディがため息をついた。

「・・・・わかりました。報告書の書き直し、そしてこちらでプレシアさんの保護をします」

「そ、それって・・・！」

フェイトが身を乗り出した。

「フェイトさんと、プレシアさんは一緒にくらすことになります」

「・・・！母さん！」

「フェイト・・・！」

フェイトとプレシアは抱きついた。２人の目から涙が零れる。

「クロノ、悪いけど報告書を一から書き直してくれる？」

「・・・・はい」

クロノも頷いた。その表情は、もうこんなことになるのは御免だといったもので、疲れきっていた。

口論でモデルＺには勝てない・・・・・

悔しくも、そのことを思い知らされた２人であった。

クロノが退室する。リンディも、抱き合う２人を見て、こういうのも悪くはないと思いながら退室した。

ヴァンも、親子だけの時間とするため、部屋から出ていこうとする。

そのヴァンを、プレシアが呼び止めた。

「ヴァン・・・そしてモデルＺ・・・本当にありがとう・・・・・」

ヴァンは特に答えない。
モデルZが、素っ気なく返した。

『俺は事実を述べただけだ・・・・・礼をするなら、お前の未来を作り上げたサイバーエルフらに言うんだな』

「・・・・ええ、そうね。ありがとう、マルティナ・・・」

プレシアはモデルZの言葉を聞き入れると、まずそばにいるマルティナにお礼を言った。マルティナは頷き微笑んだ。
そしてプレシアは自分の胸に手を当て、目を閉じた。

「そして、私のためにその命に使ってくれたスノック・・・ありがとう・・・・・」

フュージョン型のサイバーエルフは一度使用すると、エルフは力尽き死んでしまう・・・・昨日マルティナからそのことを聞いたプレシアは、心の底からスノックに感謝した。
フェイトも、母親を救ってくれたサイバーエルフに感謝した。ヴァンはその様子を見て微笑むと、静かにその場を後にした。

「・・・家族・・・か・・・・・・」

廊下を歩きながら、ヴァンはそう呟いた。

第１９話－紡ぐ絆（後書き）

楓

「ちょっとある企画を試験運用しようかなと思っているのですが、どう思いますか？

企画って、あれですよ、人気投票。

どうですかね？

あと、いつの間にか３万ＰＶ突破していました！

ありがとうございます！」

第２０話「名前を呼んで（前書き）

我が言の葉は、勇気となり、信念を支える・・・・・フォルティトゥード・クレド・・・

・・・モデルＺ

ライブメタル最後のパスコード・・・モデルＺ

・・・暁　楓

第２０話　名前を呼んで

一連の事件は終わり、プレシアは無罪となった。
庭園崩壊から数日間は、次元震の余波のためなのは達はアースラにいることとなった。その間、なのははフェイトと話していたり、クロノはライブメタルにからかわれていたり、エイミィはプレシアの元に行ってマルティナの観察をしていたりなどなど、思い思いに過ごしていた。
フェイト、アルフ、プレシアは、管理局で保護することになっているため、アースラで生活することになっている。
ユーノは、元の世界、ミッドチルダへ航路が安定するのはまだ時間がかかるらしく、それなら家にいればいいよ、というなのはの誘いで、なのはに世話になることになっている。
ヴァンは、ユーノと同じ理由に加えて、保護、元の世界の捜索のためにミッドチルダへの移送されることが、アースラ局員以外の管理局にヴァンやライブメタルの解析をされることになるとモデルＺが気づき、成り行きで高町家に居候することになった。
そして今、

「それじゃあ、ゆっくりと話すといい」

海鳴市の、海が見える橋に、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、プレシア、クロノ、そしてヴァンが来ていた。
なのはのいる世界はそもそも、管理外世界の場所だ。管理局はそこにむやみやたらと入ることはない。
だから、なのはとフェイトは、暫く、またはかなりの時間別れることになる。
だから、別れの前にお話をすることになった。
それならここ（アースラ）のような殺風景な場所より、海を一望で

きる場所の方がいいのでは、とヴァンが提案し、今に至る。
なのはとフェイト以外全員は、２人から離れたところで様子を見ることにした。

橋の上で、なのはとフェイトは海を眺めている。

「まだ、話したいことはあったはずだけど・・・こうしていると忘れちゃった」

なのはが苦笑混じりに言った。

「私は・・・そうだね、私も、うまく言葉にできない」

フェイトも苦笑する。

「だけど、うれしかった」

「へ？」

なのははフェイトの方を向いた。
フェイトはなのはを見ている。

「真っ直ぐ向き合ってくれて」

なのはは笑顔になる。

「・・・うん、友達になれたらいいなって、そう思ってたから」

「友達・・・」

「そう、フェイトちゃん・・・私と、友達になってほしいんだ」

なのはは、フェイトに自分の気持ちを伝えた。

だが、フェイトは何か言いづらそうな表情になり、顔を俯かせた。

「わ、私でいいなら・・・でも私、友達になる方法はわからないの・・・」

なのははプレシアの言葉を思い出した。

フェイトは、ずっと寂しい思いをしてきたのだと。

「簡単だよ。友達になるのはすごく簡単」

フェイトは顔を上げた。

なのはは続ける。

「名前を呼んで。最初はそれだけでいいの。君とか、あなたとかそういうのじゃなくて、ちゃんと名前で呼ぶの」

なのはは友達をつくるとき、いつも初めはそうしてきた。

「私の名前は高町なのは。なのはだよ！」

なのははフェイトの顔を見て、フェイトが自分の名前を呼ぶのを待つ。

フェイトは、おずおずと、彼女の名前を口にする。

「なのは・・・」

「うん」

「な・の・は」

「うん、うん！」

名前で呼ばれる度、なのはは頷く。

「なのは」

3度目、はっきり呼ばれ、なのはは涙目になりながらフェイトの手を握った。

「ありがとう、なのは」

4度目・・・なのはは涙を必死にこらえ、目をつむる。

「君の手は暖かいね。なのは」

5度目・・・なのはの目から涙が溢れた。
嗚咽が漏れる。
フェイトはなのはの涙を拭った。

「友達になって、わかったことがある・・・友達が泣いてると、私も悲しくなる・・・」

「フェイトちゃん・・・！」

なのははフェイトに抱きついた。
フェイトも涙を流しながら、なのはを抱き締める。

「ありがとう、なのは。今は離れてしまうけど、きっとまた逢える。そしたらまた君の名前を呼んでもいい？」

「うん・・・・・うん」

なのははフェイトの胸に顔を埋め、涙声で頷く。

「会いたくなったら、きっとまた名前を呼ぶ」

なのはは顔を上げた。なのはの瞳には涙を流しているフェイトが映っている。

「だから、なのはも私を呼んで。なのはが困った事があったら今度は、私がなのはを助けるから」

なのははまた嗚咽を漏らした。

フェイトは、なのはの嗚咽が止むまで抱き続けた。

2人の様子を、少し遠くから他の人達が見ていた。

「うぅ・・・ひっく・・・・・」

「・・・・なんでお前が、あいつらよりも多そうな量の涙を流してるんだよ・・・」

滝のように涙を流しているアルフを見て、ヴァンが少し引いた。

「だって・・・あのなのはって子、すごく優しいし、フェイトもすごく喜んでいるし・・・あたしはフェイトと精神がリンクしているからあたしのうれしさとフェイトの感情が一気に来て涙が止まらないんだよぉ・・・・・」

「・・・・・だよな」

ヴァンは抱き合っている2人を見て微笑んだ。

「・・・フェイトのあの笑顔を見たのも、これが初めてね・・・」

プレシアも、涙を抑えながら微笑んだ。

暫くして、2人は戻ってきた。
2人共笑顔である。

「・・・そろそろ、アースラに戻るよ」

クロノが言う。ついに別れである。暫く会えなくなってしまう。
ヴァンは、一瞬自分を見るフェイトの顔が寂しそうなものになったのを見逃さなかった。
だが、その一瞬の後、フェイトは笑顔になっている。

（・・・・・最後まで正直じゃない奴だなぁ）

ヴァンはそんなフェイトに少し呆れた。
そして、クロノを呼び止める。

「クロノ」

「ん、どうした？」

クロノが振り向いた。

ヴァンは言った。

「もう少し、時間をくれないか」

フェイトと、２人で話をするために・・・・・

第２０話 名前を呼んで（後書き）

楓

「次回、第1章最終回です。
あと、感想の投稿に制限をなくしました。ユーザーじゃない方々もどうぞ」

第２１話－想いを告げる（前書き）

俺は・・・全てを守るロックマンになってみせる！

・・・ヴァン

第１章、いよいよ最終回です。このままこの小説で第２章に行きます。

・・・暁　楓

第２１話　想いを告げる

ヴァンとフェイトは、先程なのはとフェイトが会話をしていた場所に戻った。
なのは達には、近くの公園まで行かせ、そこで待ってもらうことにした。
フェイトのバルディッシュも、ヴァンのライブメタルも、プレシアに預かってもらった。
つまり、本当にここには２人だけである。
ヴァンとフェイトは海を眺めたまま黙っている。
別れるときに寂しそうにしたフェイトと、それを見て呼び止めたヴァン。
話す内容なんて考えてもなかった。
いたずらに時が流れる。
最初に、ヴァンが切り出した。

「なんか・・・長かったようで、短かったよな」

「そうだね。でも、ヴァンのおかげで色々救われたよ」

フェイトは頷いた。

「次元漂流した俺にフェイトが襲いかかって来たのが始まりで」

「うん」

ヴァンが初めて出会ったときを思い出す。フェイトも頷く。

「俺が作った微妙な料理を３人で分けたりさ」

「うん・・・」

ヴァンが今までヴァンとフェイトにあった出来事を1つ1つ述べていく。
風呂でのハプニングや、海鳴温泉でヴァンがすねたこと、そしてフェイトを護るためにヴァンが変身して庇ったことなど・・・
ヴァンが述べ、フェイトはそれに頷いていく。だが、フェイトは頷く度に返事が小さくなっていき、同時に頷く角度も小さくなっていく。

「色々あったけど、全部まとめてみると、フェイトと過ごせてよかった。そう思ってる」

「・・・・・・・・」

ついにフェイトは返事をしなくなった。頷きもせずに俯いている。
ヴァンも黙った。また沈黙が降りてきた。
ただ、時が過ぎていく。風が2人の間を通過する。

「・・・そろそろ、みんなのところに行くか」

ヴァンが言った。
俯いたままのフェイトがこちらを向いた。表情は見えない。
ヴァンは、みんなの待つ公園へと足を動かしはじめた。その時である。
フェイトが、ヴァンの腕を掴んだ。

「・・・フェイト?」

ヴァンが振り返った。、俯いたままであるフェイトが、かすれた声を出した。

「・・・・・嫌だ・・・・・私、私は・・・」

フェイトの頬を伝って、何かが落ちた。

「私はっ・・・ヴァンと離れたくない！！」

フェイトがヴァンに抱きついた。
フェイトは、泣いていた。

「ヴァン・・・私と一緒にいて・・・私と一緒に、私と母さんとアルフ、３人と一緒に暮らそうよ・・・・・！」

フェイトは泣きながら我が儘を言った。
ヴァンは、フェイトの我が儘を叶えてやりたかった。
でも、できない。
ヴァンの世界の技術は進化しすぎたレベルだ。機械の体、意思を持つ金属・・・管理局がそれを見過ごそうと考えるわけがない。
モデルZとの協定は、あくまでもジュエルシードを集めているときだ。ヴァンの世界の捜索は管理局の義務として続行されるが、技術の秘匿はそうは行かない。そもそも、その協定に納得してない者はアースラの中にも居て、勝手に解析しようとする者がいた程だ。
ヴァンの世界のこと、そして自分がなのはの世界に居候する理由は、庭園崩壊後の数日の間にフェイト達にも説明した。皆ヴァンの体が機械になっていることに驚いたが、なのはの世界にいることも含めて納得した。
今、我が儘を言っているフェイトだって、この我が儘が通らないことは理解しているはずだ。

ヴァンは、フェイトの頭を優しく撫でた。

「・・・・ごめん、俺には、その願いを叶えることはできない・・・」

ヴァンは正直に答えた。

フェイトはヴァンを抱く力を強めた。

「なら・・・今はそばに・・・少しそばにいてくれる・・・？私が泣き止むまで、私を抱いててくれる？」

嗚咽を漏らしながら、フェイトは叶えられる範囲の我が儘を言った。

ヴァンは、優しく、フェイトを抱き締めた。

「ああ・・・・・」

フェイトが泣き止むまで、抱き続けた。

泣き止み、上げたフェイトの顔は、もう吹っ切れた様子だった。

「ヴァン・・・今までありがとう」

フェイトが、しっかりとヴァンの目を見て言った。

「・・・ったく、これが最後の別れじゃねえよ」

「本当？」

「だって、元の世界が見つかったら、アースラに戻るじゃんか」

ヴァンが呆れながら言った。フェイトはそのことをすっかり忘れていた。

「あう・・・・・」

フェイトが恥ずかしそうに俯いた。
ヴァンはそれを見て笑いながらため息をついた。

「なーんてな。そうじゃなくても、必ず会えるさ」

「本当？」

またフェイトが顔を上げた。

「本当だ」

ヴァンは頷いた。

「それじゃ、今度こそ戻るか」

ヴァンは歩き出した。フェイトも歩きだす。
フェイトは、歩きながら思った。
ヴァンに一緒にいたいって気持ちは伝えた。それは失敗に終わったが、自分にはまだもう１つ伝えたい気持ちができていた。いつからできたのかわからない。でも、暫く別れることになる今、２人だけである今、どうしても伝えたかった。
フェイトは立ち止まった。

「ヴァン」

そしてヴァンの名前を呼んだ。ヴァンは立ち止まり、振り返る。

「どうしたフェイト？」

フェイトは駆け出した。

距離にして1～2メートルあるかないかの長さを走り、ヴァンに飛び込んだ。ヴァンは飛び込んできたフェイトを支える。

「フェイト？」

フェイトは黙ってヴァンを見上げると、精一杯の背伸びをして、ヴァンの顔に近づけ、

自分の唇を、ヴァンの唇と重ねた。

「――ッ！？！？」

ヴァンはその柔らかい感触を感じた瞬間、思考が停止した。

そう思ったときには、フェイトはすでに顔を離していた。

一体何秒だったのかわからない。もしかしたら1秒もしなかったのかもしれない。

ヴァンはフェイトにキスされる直前の、フェイトを支える体勢から動かない。動けない。

フェイトは、そんなヴァンに、顔を少し赤く染めて言った。

「ヴァン。あなたが好きです」

その笑顔は、どんなものにも勝っていた。

「さ、行こう」

フェイトは歩き出した。
ヴァンはまだ微動だにできず、思考が停止している。
フェイトがかなり歩いたところで、ヴァンの思考はようやく再起動を始めた。
自身に起きたことを順に整理して、一言。

「・・え、どうすればいいの？」

久々の長ーい溜めで、それしか言えなかった。
公園へ歩き出したのは、それから数分後のことであった。

ヴァンが公園に着くと、もうすでにクロノが魔法陣を展開し、出発の準備が整っていた。

「遅いぞ。何をしていたんだ」

不機嫌なクロノに、ヴァンはわりぃ、と謝るしかなかった。フェイトにキスされて固まっていたなんて、言うのは恥ずかしすぎる。
ヴァンの目に、さらに号泣しているアルフが写った。

「うぅ・・・ぐすっ、ひっく！」

「おま、なんで余計泣いてんだよ？」

「だ、だって、ぐず、ぶぇいとがごごまで、ひっく、ヴァンに、ず

ずずっ」

アルフは泣きながら説明しようとするが、嗚咽やら声が酷くてわからない。
隣のフェイトの顔が赤くなっているのが見えた。

「わ、私とアルフの精神がリンクしているの、すっかり忘れてた・・・・」

フェイトが呟いた。
ヴァンも、フェイトとなのはの会話でのアルフを思い出した。
つまり、フェイトがヴァンのことが好きであることを、アルフは知ったこととなった。
ヴァンも恥ずかしさから顔が少し赤くなる。これだけならよかった。
モデルLがヴァンに近寄り、そっと耳打ちした。

『で、フェイトの唇の味はどうだった?』

その爆弾発言で、ヴァンの顔は一気に沸点まで上り詰めた。

「モ、モモモモッ、モ、モデルL!?ななな、何言ってんだ!!?」

他のみんなにバレない声で、モデルLに問い詰める。
モデルLは悪戯っぽい声で言った。表情があったなら、絶対笑ってる。

『モデルPにつけさせたのよ。あれはビックリだったわ~♪』

「モデルP!?」

ヴァンは殺気の籠もった目をモデルPに向けた。
モデルPは全力で目を逸らした。

「ではそろそろ転移するぞ」

クロノが言った。その言葉を合図に、フェイト、プレシア、そしてまだ涙目のアルフが魔法陣へと入る。

「またね、フェイトちゃん、アルフさん、プレシアさん！」

なのはが手を振る。

「うん、またね。なのは、ヴァン」

「元気にしてろよー！」

「今回は、本当にありがとう」

フェイト、アルフ、プレシアがなのはとヴァンに言い、手を振った。
なのはは手をさらに振り、ヴァンも手を振る。
魔法陣が眩い光を発しても、全員手を振り続けた。
そして、魔法陣と共に、フェイト達がそこからいなくなった。
ヴァン、なのは、ユーノは魔法陣が、そしてフェイト達がいた場所を見つめた。そこにはもう何もない。
ヴァンとなのはが同時に互いを見た。そしてそこにいる3人共笑う。

「じゃ、行こっか」

「ああ」

そして歩き出した、と思ったらヴァンが止まった。

「そういえば、どうやってなのはの家に居候になろう・・・・・」

「あ〝・・・・・」

なのはとフェレット姿のユーノが顔をひきつらせた。

「なのは、何か言い訳を考えてくれ！」

「あ、ちょっと待って～！」

ヴァンとなのははは走り出した。ユーノはなのはの肩に乗っている。

太陽は、そんな2人と1匹を照らしていた。

第1章・ジュエルシード事件篇

完

第２１話－想いを告げる（後書き）

楓

「リリカルゼクス第１章、無印篇、無事に終了しました。終わった時にはアクセス数が３万を超えていたり、お気に入り登録数が２０件を超えていたりとビックリです。本当にこんな駄文を読んでくれてありがとうございます。

さて、無印篇が終了したということで、第１回キャラクター人気投票を開催しようと思います。

この企画は、のちにＳｔｓ篇に大きく関わる企画がうまくいくかどうかの試験運用みたいな感じでいきます。

投票の範囲は、第１章第１話から第１章最終話までに登場したキャラ全員です。それまでに登場したキャラであれば、本編であろうが前書きであろうが、人間だろうがフェレットだろうがライブメタルだろうが地の文にしか出てない奴だろうが関係ありません。あと、今後の幕間で出たキャラも有りとします。ただし、第２章初登場のキャラはダメです。無効になります。

投票は、１人のキャラにつき１０票まで、それさえ守られれば、いくらいれても、何回投票しても構いません。試験運行なので。

ちなみにマイナス票は受け付けておりません。

一応、人気投票なので、投票者数が５人未満、もしくは５０票未満の投票となった場合は結果発表を控えたいと思います。

ユーザーじゃない方々も投票できますが、名前がない場合はまとめ

て1人としてカウントします。ご了承ください。
別名を名乗って1人のキャラに大量に投票するという行為はくれぐれもやめてください。
というかユーザーじゃなくても名前を入力できるっけ？

投票は、1月31日までとします。

あと、投票ついでに感想をくれると嬉しいです。

それでは、なにか不明な点があれば感想に記述してもらうとして、皆さんの投票を待ってます。あらすじでも呼びかけようと思います。

それでは、今後もリリカルゼクスの応援よろしくお願いします」

第２２話－それぞれの日々（前書き）

お前の信じる未来まで・・・この世界を送り届けろ。

・・・ジルウェ

・・・ああ！任せてくれ！

・・・ヴァン

第２２話－それぞれの日々

ジュエルシード事件が終わってから、なのはの日常は平凡なものに戻った。
と言いたいものだが、今のなのはの日常は常に魔法と関わってたりする。
朝早くに起きてから、授業中、そして夜など、毎日魔法の練習を欠かさない。
とは言えなのはは小学3年生である。授業はしっかり受けてるし、友達付き合いもちゃんとしている。
だが家族との生活が、事件以降に少し変わりがあった。物理的に。
それは、

「ヴァン君、ちょっと醤油取ってくれるかな？」

「ああ、はい」

家族、というか居候としてヴァンが高町家にいるようになった。
ヴァンが居候になれたのは、リンディのおかげだ。フェイト達と別れた後、リンディが助っ人として駆けつけ、高町家にオールフィクションな事情を説明。無事居候決定となったのである。
ヴァンはただ居候となるのは後ろめたいとして、店では主に掃除とかの雑用として働いている。たまに、なのはの両親が忙しい時などはヴァンがご飯を作りもする。
昨日、実際にヴァンが料理をした。食べた感想は、

微妙・・・恭也、美由紀、ヴァン
おいしい・・・士郎、桃子、なのは

といった感じだ。自分の料理なのに微妙だと言うヴァンになのははは驚いたりする。

ヴァンの手伝いは、こういった高町家の居候としてだけでなく、魔法を知る者としてのものもある。
例えば今日この時間。

「ディバインシューター・・・・シュート！」

「ダブルチャージ・・・・いっけぇぇぇ！」

ユーノに結界を張ってもらって、なのはとヴァンでの模擬戦。
なのははディバインシューターを、ヴァンはモデルXになってダブルチャージバスターを放つ。
ヴァンのチャージバスターはなのはのディバインシューターを潰し、なのはへと向かっていく。なのはは足に翼を展開して空を飛んでかわす。
そして、ヴァンの後ろに回り込んだディバインシューターをヴァンめがけて飛ばす。

「モデルP、ロックオン！」

ヴァンはモデルPXとなると、エネルギーチャージをし、プロテクトを発生させた。球状のプロテクトがヴァンを包み、魔力弾を無力化する。

「あーっ、またそれー！？ずるいよー！」

なのはが抗議する。

「って言っても、お前にはディバインバスターがあるだろ！」

「だって、そうやってディバインバスターを撃とうとしている内に私が負けちゃったんだもん！」

そう、先日の模擬戦では、ヴァンがこのプロテクトでディバインシューターを完全遮断し、それをディバインバスターで破ろうと構えたところを攻撃されるという、なかなかに凶悪な方法によってなのはは負けたのである。

「だから、ヴァンさんはこれからそのプロテクトは禁止して！これじゃあいつまで経っても勝てないよ！」

「・・・・・はぁ」

なのはの禁止令を受け、ヴァンはため息をつく。

その時、モデルFが語りかけてきた。

『なら俺と交代しろ！』

「モデルFはダメ」

ヴァンは即答した。

モデルFがキレる。

『ああ！？なんでだよ！』

「お前、力加減って奴知らねぇもん」

またヴァンが即答した。
これまた先日の話。モデルＦＸとなってメガトンクラッシュを打ち込んだら、木を数本薙ぎ倒した。幸いなのははよけたので大事には至らなかったが、それが原因で加減をしないモデルＦを使わないと決心した。

『んな加減なんてやってられっか！俺様はいつだって全力全か一一一』
『はーいうるさーい。それじゃあ、私と代わる？』
『てめぇぇぇぇ！！』

抗議をモデルＬに邪魔されモデルＦがキレる。
その後も模擬戦は何分か続いた。

特訓が一段落し、２人は休憩している。
と、ヴァンの通信端末が音を出した。

『ヴァン、聞こえる？』

聞こえてきたのは、アースラにいるフェイトからだった。

「ん、フェイトか。どうした？」

フェイトの名を口にした瞬間、なのはの顔がこちらを向いた。

『うん、たまにはビデオメールじゃなくてもいいかなって』

フェイトはそう答えた。

フェイトは、時折自分達の様子をＤＶＤにして送ってきている。こちらも同じく、ビデオメールを送っている。

『この前のビデオメールはもう見た？』

「ああ、見た見た」

ヴァンが答えていると、なのはが隣に来てヴァンを見つめている。フェイトと話をしたいって顔をしている。

「フェイト、なのはがフェイトと話をしたいみたいだから、代わっていいか？」

『うん、いいよ』

返答を聞くと、ヴァンは通信端末を耳から外し、なのはに差し出した。なのははすぐに受け取り、耳元に当てる。

「もしもし、フェイトちゃん？この前のビデオメール見たよ！楽しそうだったね！」

なのはは数日ぶりのフェイトとの会話に顔がパッと明るくなった。ヴァンは、そんななのはの様子を暫く見つめていた。

暫くしてなのはから端末を返してもらい、再びフェイトと話している。

「そう言えば、嘱託魔導師の試験に向けて、頑張ってるか？」

ヴァンが言った。フェイトはこの前、嘱託魔導師というものになって管理局に協力したいと言っていた。

『うん。筆記試験は母さんが教えてくれてるし、実戦もアルフと頑張ってる。色々大変だけど、大丈夫だよ』

「そうか・・・」

ヴァンはふと、あの時、フェイトがキスしてきたことを思い出した。あれは本気なのだろうか。まあ、仮に冗談半分での行動だったらマジで困るが、聞くなら今がチャンスだろう。

なのはやライブメタル達に聞こえないように、声を落として聞いた。

「なあ、フェイト。あの時フェイトが言った言葉・・・その、俺が好きだってこと・・・・あれって、本気なのか？」

『うん・・・本当だよ』

答えは、結構すぐに返ってきた。

少し照れたような声である。

『私は、ヴァンのことが好き。この気持ちは、いつか絶対ヴァンを振り向かせるから』

フェイトはそう宣言した。

ヴァンはこれまでフェイトと接してきて、フェイトはかなり頑固な奴だと理解している。

やれやれとヴァンは首を振った。

「ま、お前の気持ちはよくわかったよ」

『うん・・・そろそろ切るね。母さんと勉強しなきゃ』

「まずは試験だな。頑張れよ」

「うん。頑張るよ」

通信が終了した。

ヴァンは一息つくと、座っていたベンチから立ち上がる。

「なのはー、帰るぞー」

2人と1匹は帰路についた。

ヴァンとフェイトが再会するのは、そう遠くない未来である。

第２２話－それぞれの日々（後書き）

楓

「次回からA-　s篇です。

人気投票の範囲はここまでとなります。・・・と言っても候補に地の文から士郎が入っただけですけどｗｗ

人気投票、どんどん投票しちゃってください！

というか投票マジでお願いします！

あの企画は・・・どうしても成功させたいんだ（まだ内容は言えないけど）！！」

第2章・第23話―新たな始まり（前書き）

今からテメェをボロクソにしてやるぜぇ！覚悟しとけやぁ！クソガキッ！

・・・ルアール

ひゃあ！？（涙）

・・・フェイト

ルアール・・・後で本体を三枚卸にしてやる・・・・・・

・・・ヴァン

新章開始から物騒だな～

・・・暁　楓

第2章・第23話 ― 新たな始まり

6月3日　PM9：05
海鳴市の中丘町。
電気のついてないリビングにて、車椅子に乗った少女、八神はやては留守電をきいている。
はやては生まれた頃から足に原因不明の病を患い、さらに物心がつく前に両親をなくしてしまっている。
だがはやてはそんな孤独で不自由な日々でも、決して弱音を吐かずに生活している。
留守電ははやてが通院している海鳴大学付属病院の石田先生からだ。
明日一緒に食事でもどうかという内容である。
明日ははやての誕生日だ。
はやては留守電を聞き終わると、寂しげな表情を浮かべながら寝室に向かった。
寝室で車椅子からベッドに移ると、ライトを灯し、本を読み始めた。
暫く本を読み、はやてはふとライトの近くにある時計を見た。もうすぐ夜中の12時になる。
そして時計の針が12時を指した。
その瞬間、はやての後ろの何かが鈍く光りだした。
はやてが光の方を見ると、物心のつく頃からあった、鎖に縛られた本が鈍く光っている。
突然部屋が揺れた。
本が浮く。
本が脈を打ち、鎖が解き放たれる。
鎖から解き放たれた本がものすごい速度でページをめくる。
はやては突然のことに怯えながら、その本を見つめる。
最後のページまでめくり終えた本は閉じられ、さらなる光を放った・
・・・・

１２月１日　ＡＭ５：３５
海鳴市の桜台に、少年と少女がいる。なのはとヴァンである。２人とも私服姿だ。
今日のなのはの特訓はシューティングコントロール。今はそのテストである。

「リリカルマジカル！」

なのはの足下に魔法陣が展開される。
なのはは手に持っていた空き缶を高く投げた。指先に桜色の光の玉を作り出した。

「ディバインシューター・・・シュート！」

指先の魔力弾が飛ばされた。
魔力弾は宙を舞う空き缶に当たり、弾く。

「コントロール・・・・・」

なのはは左手をかざし、目をつむる。
魔力弾は軌道を変化させ、また空き缶を弾く。

［１８、１９、２０、２１・・・］

ベンチの上に置かれているレイジングハートがカウントしていく。
ヴァンも弾かれ続ける空き缶を見ている。

「アクセル・・・！～～～っ！」

なのはがさらに集中する。空き缶を弾く魔力弾の速度が速くなる。

そして、

［９８、９９・・・１００］

レイジングハートが１００をカウントした。

仕上げにもう１回魔力弾で弾く。

空き缶はゴミ箱の口へと向かっていき・・・

ちょうどその縁に当たって弾かれてしまった。

「あーあー・・・」

「おしいー！」

うまく入らなかったことになのはががっかりした。ヴァンも悔しそうな表情を浮かべる。

［よい出来ですよ。マスター］

『まあ、あれだけ連続で弾き続けれたら上出来よ』

レイジングハートから、そしてレイジングハート越しからのモデルＬのほめ言葉が聞こえた。

「にゃはは。ありがとう、レイジングハート、モデルＬ」

なのはは地面に落ちた空き缶をゴミ箱に入れた。

「すげーよなー。あんなに器用なことができて。あんな器用なこと、モデルPでもできねぇぞ」

ヴァンが羨ましそうに言う。実際羨ましいのだ。

「えへへ・・・でも、ヴァンさんだってモデルFを使ったら同じようにできるんじゃないかな？」

なのはは照れながらも、1つ聞いた。モデルFには、弾丸の軌道を変えるバスターエディットというのがある。

「まず、モデルFだと空き缶をいかに壊さないかが最大の難関になるんだけど」

「あ、そうだね・・・」

ヴァンの答えを聞いてなのはが苦笑した。モデルFは相変わらず加減をしようとしない。

「じゃあ、今朝の練習は終わり。帰ろう！」

「おう」

2人の日常の始まりはこんな感じである。

家に帰り、学校へ行く準備を整えたなのはがリビングに降りる。リビングにはなのはの母、桃子がキッチンで朝食の準備をしており、姉、美由紀も手伝っている。父、士郎は新聞を読んでおり、居候、

ヴァンはテーブルに突っ伏していた。
ヴァンが突っ伏している理由は、帰ってくると士郎となのはの兄、恭也が襲ってくるからだ。理由はなのはと毎朝どっかに行ってるから。どんだけシスコンなんだ、とヴァンが心の中で叫ぶが、もはやある意味日課となってしまっている。何事もないように新聞を読んでいる士郎だが、少しだけ息が上がっていたりする。
もうなのはにとってもいつもの光景だが、心配なので声をかける。

「えと・・・ヴァンさん、大丈夫？」

「大丈夫じゃない・・・・・」

この返事もいつものことだ。ついでに言うならば、なのはと会話するヴァンを士郎が睨むのも、いつものこと。

「なのはー、郵便がきてるぞ」

リビングに入ってきた恭也が、封筒を持ちながらなのはに声をかけた。

「本当！？」

「海外郵便、差出人、フェイト・テスタロッサ」

「ありがとう！お兄ちゃん」

なのはは大喜びでその封筒を受け取った。

「いつものあの子だね。また、ビデオメール？」

美由希の言葉に、なのはは封筒を抱きしめながら頷く。

「うん！きっとそう！」

士郎が読んでいた新聞を下ろす。

「その文通ももう半年以上になるんだな」

「ユーノも本当の飼い主が見つかったしなぁ」

「お前は特にユーノを可愛がっていたからな。」

美由紀と恭也が言う。フェレットとしてのユーノを最も可愛がっていたのは美由紀だったりする。

ユーノは今、ミッドチルダ行路の確認やらでアースラに行っている。

「で、でも、ユーノ君はまた預かることになるかも、だよ！その飼い主さん次第」

なのはは苦笑し、人差し指を立てながら言った。

あくまで可能性である。

「だといいなぁ！」

「ほんとねぇ」

美由紀と桃子はその可能性を希望した。

なのはが思う。

（フェイトちゃん・・・元気にしてるかな）

ヴァンはまだ、テーブルの上でダウンしていた。

同じ頃、アースラ。

「管理局本局へのドッキング準備すべて完了です」

オペレーターが報告する。

「うん、予定は順調。いいことね」

オペレーターに返事するのはアースラの艦長、リンディ。

「失礼します。艦長、お茶のおかわりいかがですか？」

リンディの後ろからやってきたのはエイミィ。急須とミルクをトレーに乗せ持っている。

「ありがとうエイミィ。いただくわ」

エイミィが空になっている湯のみにお茶を注ぐ。

「本局にドッキングしてアースラも私達もやっと一休みね」

「ですね。でもレティ提督の方は騒がしくなってますね」

この前レティとの話を思い出す。

「一級捜索指定のロストロギアか・・・捜索担当班は大変みたいね」
注がれたお茶に角砂糖とミルクを入れながら、リンディはため息をついた。

アースラの一室。
そこにはクロノ、ユーノとの戦闘訓練を終えたフェイト、アルフがプレシアと共におやつを食べていた。プレシア作のクッキーである。
棚の上にいくつかある写真立てには、なのはの写真やヴァンの写真がある。ここはフェイトの部屋だ。
机の上にはなのはから送られてきたＤＶＤもある。

「ヴァンとなのは、元気にしてるかな」
クッキーを食べながらフェイトが言った。

「最近送られてきたビデオメールでは元気にしてるし、きっと元気よ」
プレシアが答えた。フェイトもそれはわかるが、自分の愛する人の顔は特に、自分で直接見たいものだ。

「でもそろそろ会いたくなるもんだよねぇ～」
そんなフェイトの気持ちを知ってか知らずか、アルフがそんなことを言った。
そしてクッキーを次々と頬張る。

「アルフ、食べ過ぎよ」

「はぁ～い」

プレシアとアルフの様子を眺めながら、フェイトは再び思った。

（ヴァン・・・早く会いたいな）

１２月２日　ＡＭ２：２３
海鳴市のオフィス街。

「「ぐあぁぁぁぁ！！」」

路地裏で２人の悲鳴が響いた。
地面に倒れているのは、２人の時空管理局の捜査員。
その２人を倒したのは、赤いゴスロリ服に身を包んだ、まだ１０歳ほどしかない少女である。
少女の右手にはハンマーが、左手には分厚い本がある。

「雑魚いな。こんなんじゃ大した足しにはならないだろうけど」

そう呟きながら少女は本を広げて、かかげる。
本が鈍く輝く。
捜査員２名の体から光輝く何かが浮かび上がっていく。

「オマエ等の魔力は闇の書のエサだ」

闇の書と呼ばれた本の輝きがいっそう強くなった。

「「ぐあああああああ！！」」

2人の悲鳴が、再び響き渡った。

そして、その日の夜。

なのは、フェイト、そしてヴァンの新たな戦いが幕を開ける。

第2章・第23話―新たな始まり（後書き）

楓

「暗黒ミカン様から投票についての質問で、投票方法はどーすんの的なものを頂きました。
方法は感想に票を入れたいキャラの名前と入れる票の数（1~10まで）を入れたいキャラごとに書いて出すだけでオッケーです。
こんな感じ←

（例）
ヴァン10票、フェイト8票、なのは5票、モデルX3票

これもあり←

（例）
ヴァン、フェイト、なのは・・・9票、クロノ、モデルL、プレシア・・・5票

要するに入れたいキャラの名前と入れる票の数さえわかればいいです。
では投票お願いしま~す。」

第２４話－襲撃（前書き）

何、怯えることはない・・・今からお前が感じるものは・・・一瞬の閃光と・・・永遠の死だけなのだからな！

・・・ハイボルト

お前がな

・・・暁　楓

えっと、リリカルゼクス、始まります！

・・・なのは

第２４話　襲撃

１２月２日　ＰＭ７：４５
海鳴市、市街地。
上空に、２つの影があった。
１つは、赤いゴスロリ服の少女。右手にはハンマーを、左手には本を持っている。
もう１つは、青と、ところどころ白い毛の狼。
少女は目をつむり、何かを探っているようだ。

「どうだヴィータ。見つかりそうか？」

狼が少女に尋ねた。

「いるような・・・・いないような・・・・・」

ヴィータと呼ばれた少女は曖昧な返事をした。
そして右手のハンマーを右肩にもたれさせる。

「こないだっから急に出てくる妙に巨大な魔力反応。あいつが捕まれば一気に二十ページくらいにはいきそうなんだけどな・・・・」

「別れて捜そう。闇の書は預ける」

狼はそう言うと、ヴィータに背を向ける。

「オッケー、ザフィーラ。アンタもしっかり捜してよ」

「心得ている」

ザフィーラと呼ばれた狼は短く返すと、その場から去った。
ヴィータはハンマーを構え、赤い三角形の魔法陣を展開した。

「封鎖領域、展開」

ハンマーを振り下ろすと、ヴィータを中心に禍々しい空間が発生した。
その空間はどんどん大きくなっていき、その空間内の人や車が消えていく。
だが、その空間内でも消えないものが2人いた。

高町家。
ヴァンは自分の部屋で寝ていた。時間からして早すぎる気がするのだが、毎朝のなのはの練習やら士郎、恭也の襲撃やら、翠屋の手伝いの疲れで、よくこの時間帯になると寝てしまう。

『モデルX様、何か来ます』

『!』

机の上に置かれていたモデルPがモデルXに警告をした。
モデルXはヴァンのそばに寄ると自身から青い光を放った。
そして、辺りが禍々しい空間に包まれた。
人々を掻き消す空間は、ヴァンを消すことはなかった。

ヴィータは空間内に残った反応をキャッチした。

「魔力反応、大物！なんか余計なものも混ざってっけど関係ねぇ！」

ヴィータは反応・・・なのはがいる場所へと飛んだ。

モデルXは光を収めた。

『結界が張られた模様です』

モデルPが報告する。

『結界を張った奴の狙いは・・・高町なのはか！』

モデルHが敵の狙いを推測した。

モデルZが外を見ると、そのなのはがどこかへ走っていくのが見えた。

『なのはが行ったぞ』

『ちょっとヴァン！さっさと起きなさい！』

モデルLがヴァンに呼びかけるが、ヴァンは爆睡している。

モデルFが前に出た。

『起きろっつってんだコノヤロッ！！』

モデルFがヴァンの頭めがけて体当たりをかました。

ゴチンという音が鳴った。

「痛っ！？」

ヴァンが頭を抱えて転がり、さらにベッドの上から落っこちた。二重に痛みが走る。

「痛い！なんか頭が、全身が痛い！」

突然の痛みに転げ回る。

『ヴァン、何者かがなのはを狙ってる！』

「・・・・・え？」

モデルＸの言葉を理解し、ヴァンが高町家から飛び出したのはそれから数分後のことであった。

ヴァンが高町家から飛び出した頃、なのはは自分を狙ってくる少女、ヴィータと交戦していた。

なのははヴィータに何度も説得しているが、ヴィータは聞く耳を持たない。

なのはは反撃のためレイジングハートを構える。

「話を！」

レイジングハートに桜色の光が収束される。

「聞いてってばー！」

なのははディバインバスターを放った。
ヴィータは間一髪でよけたが、帽子がかすり、破損して落ちていく。
それに気づき、見た瞬間、ヴィータは目を見開き、怒りに満ちた表情をなのはに向けた。

「あ・・・」

その視線に当てられたなのはがたじろいだ。

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

グラーフアイゼンと呼ばれ、命令を受けたハンマーは、一部をスライド、ガシャンと撃鉄のような音を発し、その形状を変化させた。
片方には突起物が、もう片方はロケットブースターみたいなものがついている。

「え、えぇ！？」

その変化を見てなのはが驚いた。

「ラケーテン！」

足下に赤い三角形の魔法陣を展開し、ブースターを噴出させて回転する。
そしてその回転の勢いを使ってなのはに襲いかかった。
なのはは障壁を展開した。
だが障壁は簡単に破壊され、そのままレイジングハートに直撃する。

「ハンマアアアアア！！」

「あああああ！！」

なのはが吹っ飛ばされ、ビルの窓に激突した。
追い討ちをかけるため、ヴィータはその部屋へと飛んでいく。

「ゲホッ、ゲホッ！」

なのはが咳き込む中、ヴィータが再びアイゼンを振り下ろした。

［プロテクション］

ボロボロのレイジングハートがプロテクションを発生させ、アイゼンを止める。
だが、

「ぶち抜けぇぇぇぇ！！」

［了解］

プロテクションを破り、アイゼンの一撃はなのはに叩き込まれた。
バリアジャケットの上着部分を破壊され、なのはは壁に激突する。
力無く座り込むなのは。
ヴィータはようやく落ち着きを取り戻した。
アイゼンから蒸気が吹き出し、薬莢が2つ排出される。
ヴィータはゆっくりとなのはに近づいた。
なのはが震える手で、ボロボロのレイジングハートをヴィータに向ける。
アイゼンがゆっくりと振り上げられる。

霞む目で、アイゼンを構えるヴィータを見る。

（こんなので・・・終わり・・・？嫌だ・・・ユーノ君、クロノ君・・・フェイトちゃん！）

なのはは固く目をつぶった。

だが、アイゼンは何かによって止められた。

なのはが目を開けると、見覚えのある、黒いマントと金のツインテールが見えた。

「ごめんなのは。遅くなった」

「ユーノ、君・・・」

自分の肩に手を置いている人物を見てなのはが呟く。

「くっ、仲間か！」

ヴィータは距離を取った。

［サイズフォーム］

金髪の少女の持つデバイスに金の魔力刃が現れる。

「友達だ」

金髪の少女、フェイトはそう言い、バルディッシュを構えた。

第２４話－襲撃（後書き）

楓

「感想でエールを出して欲しいとのリクエストが来ました。
本編には出せませんが、余裕があれば番外編でも作ろっかな・・・」

第２５話　戦闘開始（前書き）

うん・・・これもお姉ちゃんから貰った大切なものなの。持ってきてくれて、ありがとう

・・・プレリー

そんな大事なものをテスト合格の証に使っていいのか？アル○ットさん？

・・・暁　楓

ちょっ、ネタバレ！！

・・・ヴァン

第２５話　戦闘開始

フェイトはバルディッシュを構えたまま目の前のヴィータを見つめている。
一方のヴィータは突然現れたフェイトとユーノを睨んでいる。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

とフェイトは警告をする。

「何だてめぇ、管理局の魔導師か？」

ヴィータはフェイトの警告に臆する様子はない。

「時空管理局嘱託魔導師。フェイト・テスタロッサ」

フェイトは自己紹介し左足を前に出す。

「抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して・・・・・」

そう告げるが、

「誰がするかよ！」

ヴィータは拒否すると、割れた窓から外へ出た。

「ユーノ、なのはをお願い！」

「わかった！」

フェイトもヴィータを追うため窓から外へ出た。
ユーノはなのはに手をかざし緑の光を出すと、なのはの手当てを始めた。

一方、アースラでは、整備を一旦保留にして、広域結界の解除を行っていた。

「アレックス。結界抜き、まだできない？」

『解析完了まであと少し！』

モニターには暗号のような文字が並んでいる。

「術式が違う・・・・・ミッドチルダ式の結界じゃないな」

モニターの文字を見てクロノが呟いた。

「そうなんだよ。どこの魔法なんだろ？コレ・・・・・」

エイミィも困惑している様子だ。

「フェイト・・・アルフ・・・」

2人の後ろで同じくモニターを見ているプレシアは、我が娘とその使い魔の心配をしていた。

途中からアルフが加わったフェイトとヴィータの戦闘は、互いに一進一退の攻防だった。
だが、2対1はさすがに無理があった。
ヴィータの両手両足がアルフのバインドに捕らえられた。

「うっ・・・ぐうぅ・・・！」

必死にもがくが、バインドから一向に解放されない。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ」

少しだけ離れたところから、フェイトはバルディッシュを向けて言い放つ。
勝利を確信していた、その時、
突然下からピンクのポニーテールの女性が現れ、フェイトに剣を振るってきた。
予期しなかった攻撃に、フェイトが吹っ飛ばされる。

「シグナム・・・」

その人物を見て、ヴィータが呟いた。

「うおおおぉぉぉぉ！！」

アルフにも、褐色な肌で、獣の耳と尻尾の生えた男が現れ、アルフは吹っ飛ばされた。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

ヴィータからシグナムと呼ばれた女性は、手に持つ剣に命令を下すと、その剣の刀身の一部がスライドし、薬莢を1つ排出された。
剣・・・レヴァンティンの刀身が炎に包まれる。
シグナムの足下に紫の、三角形の魔法陣が展開される。

「紫電一閃！」

シグナムはフェイトの目の前まで接近し、炎が縫われた剣を振り下ろす。
フェイトはバルディッシュでガードするが、レヴァンティンはバルディッシュをいとも簡単に切り裂いた。

「！！」

「はあぁ！」

シグナムが再びレヴァンティンを振り下ろす。
バルディッシュがフェイトを覆うように防御壁を展開するが、レヴァンティンはそれも破壊し、フェイトをビルの屋上に叩きつけた。

「フェイトー！」

アルフがフェイトを助けに行こうとするが、獣の耳と尻尾を持つ男・・・ザフィーラに妨害される。

「どうした？油断でもしたのか？」

シグナムは拘束されているヴィータに尋ねた。

「うるせぇよ！これから逆転するところだったんだ！」

ヴィータは強がりを言う。

シグナムはそんな答え方だろうと予測していた。

「そうか。それは邪魔したな。すまなかった」

そう言ってシグナムは左手をかざし、魔力を集中した。

ヴィータを拘束するバインドが砕ける。

「だがあんまり無茶はするな。お前が怪我でもしたら我等が主が心配する」

「わーってるよ！」

ヴィータはそっぽを向いた。

「それから、落し物だ。破損は直しておいたぞ」

そうシグナムがヴィータにかぶせたのは、なのはとの戦闘中に落とした帽子だった。

「・・・・ありがと。シグナム」

ぶっきらぼうに言いつつ、今度こそ落とさないようにと帽子を押さえる。

シグナムは今の戦況を見た。

下ではザフィーラとアルフがぶつかり合っている。

「状況は、実質3対3・・・1対1なら、我らベルカの騎士に」

「負けはねぇ！」

ヴィータが言葉を紡ぎ、2人は戦闘に復帰する。
シグナムがフェイトと、ヴィータがなのはに結界を張り、参戦したユーノと戦闘する。

その頃、八神家。
はやては今、台所で夕飯を作っていた。
鼻歌混じりに調理していると、携帯電話の着信音が鳴った。

「もしもし？」

『もしもしはやてちゃん？シャマルです』

電話は、今はやてと一緒に生活している人物の1人からだった。

「どうしたん？」

レバーで車椅子を操作しながら電話の相手に問う。

『すみません、いつものオリーブオイルが見つからなくて・・・ちょっと遠くのスーパーまで行って探してきますから』

「別にええよ？無理せんでも」

煮込んでいる鍋の様子を見て、火を弱くする。

『出たついでに、みんなを拾って帰りますので』

「そっか」

冷蔵庫をあける。

『お料理、お手伝いできなくて、すみません・・・』

「平気やって」

冷蔵庫から目的のものを取り出し、閉める。

『なるべく、急いで帰りますから・・・』

「ええって、急がんくても。ほな、気をつけてな」

『はい。それでは』

通話を終了し、はやては調理に専念した。

ビルの屋上で、僧侶のような緑の服を着た女性、シャマルが戦闘の様子を眺めていた。
左手にはヴィータが持っていた本・・・闇の書がある。

「そう。なるべく急いで、確実に済ませます」

シャマルはそう呟き、右手を掲げる。

「クラールヴィント。導いてね」

人差し指と薬指にはめられている指輪の宝石が浮かび上がった。

激戦が続くなか、ユーノ、アルフは徐々に追い詰められていた。
それは、シグナムと戦っているフェイトも同じである。
ビルの一室に叩きつけられるフェイト。
バルディッシュもコアにヒビが入っている。
シグナムは空中からフェイトを見下ろす。

「終わりか？ならばじっとしていろ。抵抗しなければ命までは取らん」

「誰が・・・・・くっ！」

フェイトは立ち上がろうとし、体に走った痛みに顔を歪めた。

「・・・いい気迫だが、これで終わりだ」

レヴァンティンから薬莢が排出され、刀身に炎が縫われる。

（やられる・・・！）

フェイトは目を固く閉じた。
そして、自分の愛する者の顔を思い浮かべた。

（ヴァン・・・！）

その時、懐かしい、何かが収束される音が聞こえた。
次に聞こえたのは、空を斬る音と、何かが凍り付く音。
フェイトが目を開けると、視界にシグナムへ突っ込む氷の竜が入った。

「！？」

シグナムは氷の竜から離れるが、氷の竜はシグナムに追尾していく。
やむを得ず、シグナムはレヴァンティンを氷の竜に振るった。
斬撃と共に、炎が氷の竜を砕く。
上から、１つの人影が入ってきた。
青い装甲、ヘッドパーツの両サイドから伸びるウォータージェット、
その手にはハルバードが握られている。
その者は顔だけをフェイトに向かせた。緑の瞳が見える。

「なんとか、間に合ったか？」

「ヴァン！」

フェイトが待ち望んだ、彼がそこにいた。

「貴様、何者だ？」

シグナムが問う。
ヴァンはシグナムの方に振り向き、こう言い放った。

「何、ヴァンって名前の・・・ロックマンさ！」

戦いの役者が出揃った。

第２５話ー戦闘開始（後書き）

楓
「書くことなし！」

ヴァン
「なら書くな！！」

楓
「各モデルの出番をしっかりしてえええぇぇぇ！！」

第２６話－宴の終わり（前書き）

守るんだ・・・・・俺が全部守るんだ！！

・・・ヴァン

ちょっと声が弱気じゃね？

・・・暁　楓

もっと元気だしぃぃ！

・・・はやて

え！？どこから出てきたの！？

・・・なのは

第２６話　宴の終わり

ヴァンとシグナムが睨み合っている。

「ヴァンか・・・いい目をしているな。戦うことに迷いがない目だ」

シグナムはヴァンを見て賞賛した。
そして続ける。

「私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将、シグナム。そして我が剣、レヴァンティン」

自分とデバイスの紹介をしながら、シグナムはレヴァンティンを構える。
ヴァンの持つハルバードがチャージを開始する。
チャージが完了しても、すぐには動かない。両者共に相手の動きを伺っているのだ。

「・・・いくぞ！」

ヴァンが頭上でハルバードを回転させ、チャージしたハルバードを振り下ろした。
空を斬り、斬られた空気が凍って竜の形となる。
氷の竜が完成すると、それはシグナムめがけて襲いかかった。
シグナムは氷の竜を引きつけ、かわしていく。

「フェイトはここにいろ！」

「ヴァン、気をつけて！」

「ああ！」

ヴァンも動いた。
窓から出ると、ビルの壁を蹴って上へと登っていく。
シグナムは氷の竜、フリージングドラゴンを斬り、砕くと同時に壁を蹴り上がるヴァンを見た。

（管理局の者だと思うが、バリアジャケットが奇抜だ。・・・・・・そもそも魔導師ではないな。魔力が感じない）

だがヴァンを知らないシグナムに新たな疑問が生まれる。先程の氷の竜はどうやって出したのか？
だがそれを考えるのはやめた。
先程見たが、ヴァンの目は戦士の目だ。
力が未知数の敵を相手に、自分の戦いに対する血が騒いでいる。
シグナムはヴァンに接近し、レヴァンティンを振るった。
ヴァンもハルバードを振るう。
互いの刃がぶつかり合い、火花が散る。
シグナムはハルバードん振り切ったヴァンの隙を逃さずに突きを放つ。
ヴァンは右手をハルバードから離し、腕のアーマーでレヴァンティンを払いのけた。
ヴァンがハルバードで斬りかかるが、シグナムは飛んでかわした。
空中でシグナムが止まる。

「いい動きだが・・・先程の魔導師より遅い！」

シグナムの姿が消えた。

「！？」

ヴァンが驚く。
その時にはすでにシグナムはヴァンの頭上にいた。
レヴァンティンから薬莢が排出され、炎が縫われる。

「！」

「レヴァンティン、叩き斬れ！」

レヴァンティンが振り下ろされる。
ヴァンはハルバードを盾にした。
だが一瞬のうちにハルバードに亀裂が生じ、斬り裂かれた。
シグナムがもう一度振り下ろす。
周囲に爆発が生じた。それはヴァンを心配して屋上まで来たフェイトにも見えた。

「ヴァン！」

フェイトが叫ぶ。
煙からヴァンとシグナムが別々に出てきた。
ヴァンのＬＸアーマーは一部大破し、特に右のウォータージェットが折れてしまっていた。ハルバードも折れて使い物にならない。ヴァン本体にダメージがなかったのが、せめての救いか。

『なにやってんのよ！こんなに壊れたら、自動修復にどれだけかかると思ってるの！？』

大損害を受けたモデルＬが怒った。
ヴァンはモデルＨを取り出した。

「すまない、しばらく休んでてくれ。モデルH、行くぞ！」

『ああ、構わん』

「ロックオン！」

ヴァンは緑のロックマン、モデルHXとなった。
ヴァンは手に二刀の剣、ダブルセイバーを持った。

（姿が変わった・・・今度は二刀流か）

シグナムは冷静にヴァンを見ながらレヴァンティンを構える。
ヴァンは背中のホバージェットを開き、エアダッシュでシグナムに接近する。

シグナムの紫の光と、モデルHXとなった緑の光のぶつかり合いは、なのはも見ていた。
なのはの周りには、ユーノの回復と防御の魔法結界が張られている。

「ヴァンさん・・・来てくれたんだ・・・・・」

それだけで、なのははなぜか安心した。
自分はボロボロなのに、敵の力は未知数なのに。
そんな不安が、ヴァンを見た瞬間から晴れていくような気がした。

モデルＨＸとなったことで、戦闘領域は空中にも広がっている。
ヴァンはホバーで宙に浮いた。

「プラズマサイクロン！」

チャージされていた二刀それぞれから竜巻を発生させる。シグナムはそれをかわすが、そもそもヴァンはそれが当たるとは思っていない。
シグナムめがけてエアダッシュする。
プラズマサイクロンの風の勢いを使い、より加速した。
そしてダブルセイバーの小振りの一刀で突きを繰り出す。
それは障壁によって防がれるが、さらに大振りの一刀を振りかぶった。

『「オーバードライブ！」』

ヴァンが緑のオーラに包まれた状態で剣を振り下ろした。
電気を纏い、力が数段跳ね上がった一振りは、障壁を打ち破り、シグナムをビルの屋上に叩き落とした。

「・・・やっと一撃か」

『でも効いてるはずだよ。焦らず、確実に詰めていくんだ』

モデルＸのアドバイスが頭に直接響いてくる。

「ああ！」

ヴァンはホバーとオーバードライブを解除し、シグナムから少し離れたビルの屋上に着地した。

シグナムが起き上がってくる。
甲冑が一部斬り裂かれ、体に打たれた跡ができている。
それでも出血していないのは、モデルHの出力の調整故である。
シグナムはヴァンを見据えた。

（くっ・・・強い・・・！）

魔導師でないことに、最初は少なからずとも油断していた。
しかし次第に押されていき、遂には一撃を加えてきた。

（管理局がいる時点で、この結界の解除も進められている・・・早くなんとかしなければ・・・！）

表情は冷静でありつつも、内心は少々焦っていた。
この場には時空管理局のフェイトがいる。つまりこの結界の解除も行われているはずだ。
長引けば結界が破られ、増援がくる。そうなればこちらが圧倒的に不利だ。
撤退するには、目の前のヴァンが邪魔になる。

（次で勝負を決める！）

レヴァンティンを構えた。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

命令を受け、レヴァンティンから薬莢が排出される。
シグナムの姿が消えた。

「っ！またか！」

ヴァンが上を見ると、レヴァンティンを振りかぶるシグナムが見えた。レヴァンティンの刀身には炎が縫われている。

「紫電一閃！！」

「くっ、モデルＦ！」

レヴァンティンが振り下ろされた。
ヴァンが叫んだ直後、爆発が巻き起こる。

「ヴァアアァァァン！！」

その光景を見たフェイトが叫んだ。
レヴァンティンを振り下ろしたままの状態から、シグナムは煙を見る。手応えはしっかりあった。

（やったか・・・）

シグナムはレヴァンティンを引こうとする。
が、どういうわけかレヴァンティンが動かない。

「・・・やっぱ直撃は効いたけどよ」

煙が晴れた。
オレンジの装甲、モデルＦＸとなったヴァンがいた。
レヴァンティンを受けた肩のアームＬとヘルメットの左側が大破し、血も出ている。
だがヴァンは確信的な笑みを浮かべ、左手にはレヴァンティンの刀身、右手にはアームＲが握られていた。

「・・・捕まえたぞ」

「っ！しまった！」

シグナムはレヴァンティンを引く手に力を入れるが、ヴァンの左手ががっちりと刀身を握って離さない。
だからと言って手を離せばレヴァンティンを失い、戦うことができなくなる。
どちらにせよ、勝敗は決したものだった。
ヴァンがレヴァンティンを引いた。力負けをしてシグナムも引っ張られる。
右手に持つアームRに力を込めた。すでにチャージは完了している。

「くらえぇぇぇぇぇっ！！」

メガトンクラッシュをシグナムを叩き込んだ。

「がっ・・・はっ・・・」

シグナムが吹っ飛ばれ、宙を舞う。
それを見て、ヴァンは自分と融合しているモデルFに話しかけた。

「なあ、モデルF」

『あ？なんだよ？』

モデルFの声が頭に響く。

「ちゃんと、加減したよな？」

ヴァンは1つ尋ねた。

『バカヤロー。俺様をここまで追い詰めたんだ。加減なんて必要ねぇだろ？』

とモデルF。

しばしの沈黙の後、

「バカヤロオオォォォォォッッ！！」

左手に掴んだままのレヴァンティン、右手にモデルHを持ち、後悔を顔に浮かべたヴァンは叫びながら、気を失い地上へと真っ逆さまに落ちていくシグナムへとダッシュした。

「・・・・う・・・ん・・・・・」

気を失っていたシグナムが目を覚ました。

目を開けると、すぐ目の前にモデルHXとなったヴァンがいた。後ろの背景が上へ上へとゆっくり登っていく。降りている途中だろうと判断した。

だが理解すると共に、気を失っているのになんで動きがゆっくりなのか、という疑問と体を包み込まれるような感覚がよぎった。

自分は、ヴァンに俗に言う、お姫様だっこをされていた。

その答えを確認したシグナムが顔を赤くした。

「ウ、ヴァン！？そ、その・・・恥ずかしい、のだが・・・」

「・・・ごめん、我慢してくれ」

懐かしいような言葉だなと思いつつもヴァンは謝った。

「というより、私は空を飛べ・・・痛っ！」

シグナムは飛ぼうとするが、腹部が痛みを訴えてきて、シグナムの顔が歪んだ。

「手加減を知らないモデルFの一撃だ。無理をするな」

「・・・わかった」

シグナムは仕方なくヴァンの言葉に甘えることにした。
やがてヴァンの足が地面についた。

「立てるか？」

「ああ」

シグナムはゆっくり地面に足をつけ、立った。
ヴァンが左手に持っていたレヴァンティンを差し出した。

「ほら、これ」

「ん、ああ」

シグナムはヴァンからレヴァンティンを受け取ると、それを鞘に収めた。
そしてシグナムはじっとヴァンを見た。

「・・・どうした?」

ヴァンがその視線に気づいた。
シグナムは尋ねた。

「なぜ、助けた?」

「?」

「私は、お前の仲間を襲い、傷つけた。私はお前の敵だぞ?なのになぜ助けた?」

シグナムは睨むようにヴァンを見た。
ヴァンは平然と答えた。

「戦う理由は必要でも、人を助ける理由なんて必要ないだろ?」

「!」

シグナムは目を見開いた。
ヴァンは笑った。

「俺はただ、後悔するようなことはしたくないだけだ」

(理由・・・・・)

シグナムはただヴァンを見つめた。
その時、

「ヴァーーン！」

フェイトが飛んできた。転がり込むような勢いで来たフェイトにヴァンは驚いた。

「フェイト、どうした！？」

「なのはが・・・なのはの胸から、手が！！」

「なっ！？」

フェイトの報告に驚く。

だが少し考えたら、原因を知るであろう者に振り向いた。

「シグナム！なのはに一体何を！」

ヴァンが知る中で、人の胸から手を出すような魔法を使う者なんていない。となれば使う者は自然と敵側ということになる。

「蒐集だ」

シグナムは説明をした。

「あの魔導師のリンカーコアから、魔力を取り出しているのだ」

「リンカーコア？」

聞き慣れない言葉にヴァンは目を細めた。

「リンカーコアとは魔力の源。そこから魔力を吸われればリンカー

コアは小さくなり、魔法が使えなくなるが、しばらくすれば元に戻る。命に別状はない」

シグナムがわかりやすく、そしてなのはの無事を説明した。

「・・・本当なんだろうな？」

「嘘をつくつもりはない」

シグナムは頷いた後、宙へと浮いた。

「！おい待て！」

「すまない。だが捕まるわけにはいかないんだ！」

ヴァンの静止を振り切り、シグナムは飛んでいった。シグナムの紫の光の他に、３つの光が飛んでいった。

ヴァンはその４つの光を見つめた。

フェイトが近寄る。

「・・・ヴァン、なのはの元へ行こう」

「・・・ああ」

２人はなのはの元へ走った。

アースラでは、ようやく結界の解除が完了したが、対象を追い切ることはできなかった。

クロノは、画像に映されたシャマルの持っているものを見て、目を見開いた。

「第1級捜索指定遺失物・・・ロストロギア、闇の書・・・・・」

自分にとって因縁深いものの名を呟いた後、クロノは握り拳を固めた。

第２６話－宴の終わり（後書き）

楓

「投票最低でもあと１人欲しいいいいい！！
お願いします！誰かさん！
あと、現在の投票状態じゃ同一順位者がやべーよ！どうしよ！？」

第27話一本局にて（前書き）

強き者が生き残り、弱き者はその糧となる！それは自然の摂理だ！

・・・セルパン

強き者（ヴァン）が生き残り（戦いに勝ち）弱き者（セルパン）がその糧（ヴァンのこれからの意志のきっかけ）となる・・・たしかに摂理として合ってる！

・・・暁　楓

いや、そのつもりではないのだがね

・・・セルパン

第27話一本局にて

12月2日　8：45
八神家。
はやてはヴィータ、ザフィーラと共にテレビの歌番組を見ていた。

「はやてちゃーん。お風呂の支度ができましたよ」

そこにシャマルがやってきた。

「うん、ありがとなー」

「ヴィータちゃんも、はやてちゃんと一緒に入っちゃいなさいね」

「はーい」

シャマルの呼びかけにヴィータが応える。
ソファに座っていたシグナムが呼んでいた新聞を下ろした。

「明日は朝から検診です。あまり夜更かしされませぬよう」

「はーい」

はやてはシグナムに応える。
シャマル身をかがめ、はやてを抱き上げた。

「シグナムはどうします？」

はやてを抱きかかえたまま、シャマルはシグナムに聞いた。シャマ

ルの後ろにヴィータがついている。
「私はいい。明日の朝にするよ」
「そぉ」
「風呂好きが珍しいじゃん？」
「そういう時もあるさ」
フッと笑い、シグナムは目を伏せた。
「ほんならお先にー」
「はい」
シャマル、はやて、ヴィータが風呂場へと向かう。
3人が部屋から出た後、ザフィーラがシグナムに言った。
「まさか、シグナムに1対1で勝つ者が出てくるとはな」
「・・・ああ」
シグナムは脇腹を抑えた。打たれた時の痛みは大分収まったが、それでもまだ痛む。
「奴は一体何者だったのだ？」
「わからない。だが、魔力を感じないところからして、奴は次元漂流者だろう」

シグナムは自分に勝ち、そして気を失った自分を助けた少年、ヴァンの答えを思い出した。敵であるはずの自分を助けた理由・・・。

（戦う理由は必要でも、人を助ける理由なんて必要ない、か・・・・・）

「・・・・シグナム？どうした？」

ザフィーラが聞いてきた。

「・・・今回は、私の完全な敗北だ」

シグナムは、静かに自分の敗北を認めた。

「・・・そうか」

「だが次からは負けん・・・」

シグナム立ち上がり、ベランダの窓から夜空を見上げる。左手には闇の書がある。

「我らヴォルケンリッター。騎士の誇りに懸けて」

だが、シグナムは、そして騎士達は知らなかった。

闇の書の中に巣くう、１つの悪魔がいることを。

それは闇の書にリンカーコアと共に蒐集された“あるもの”少しずつ喰らい、目覚めと支配の時を待っていることを・・・・・。

その頃ヴァン達は、時空管理局の本局にいた。
医務室でなのは、ヴァンはフェイトと改めて再開し合った。シグナムの言っていた通り、なのははリンカーコアが小さくなってしばらくは魔法が使えない状態になっていた。ただ大した怪我はないし比較的すぐに良くなるらしい。
フェイトは左手に怪我をしただけで済んだようだ。
ヴァンは左肩と頭、そしてレヴァンティンを直接掴んだ左手に包帯が巻かれてある。どれもそれほどひどいものではなかった。
3人はその後レイジングハートとバルディッシュの修理が行われている部屋に来た。
部屋では、ユーノがなにやら端末のキーを叩いている。
デバイスの破損具合を確かめているようだ。

「なのは！ヴァン！フェイト！」

「アルフさん！ユーノ君！」

入ってきた3人を見て人型のアルフが声を出した。
なのははアルフ、ユーノとの再会を喜んだ。
アルフとユーノの他にもクロノとプレシアもいて、彼らとの再会にも喜んだ。勿論ヴァンもである。
そんな中、フェイトは修復中のデバイスを見た。2つともボロボロである。

「バルディッシュ・・・ごめんね・・・私が力不足だったせいで」

フェイトは表情を暗くしてバルディッシュに語りかけた。
なのはもフェイトの隣に立った。

「レイジングハートも、今日は頑張ったね・・・今はゆっくり休んでいいよ」

フェイトと同じように語りかける。

2人共、この半年以上特訓に励んできた。それがたった1日でここまでやられたのは、結構、いや、かなり響いた。

「大分破損しているからね・・・自動修復した後一度起動して、部品交換しないと。・・・ところで、ヴァンさんのライブメタルは大丈夫なんですか?」

説明ついでに、ユーノはヴァンに質問を向けた。ユーノはヴィータとの戦闘中に、ヴァンが戦いの中で攻撃を受け、アーマーや武器が破損したのを見ていた。

「モデルFとモデルLが今、自動修復中。破損が大きいから、直るには一週間ぐらいかかるかな」

ホルダーからモデルFとモデルLを取り出した。どちらも少し大きめのヒビが入っている。

「ヴァンをそこまで追い詰めるとはねぇ・・・そういえば連中の魔法、なんか変じゃなかった?」

アルフが尻尾を振りながら言った。

「あれはベルカ式だ」

その疑問に答えたのはクロノだった。

「ベルカ式？」

「聞いたことはあるわ。その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系よ」

プレシアが説明した。

「遠距離や広範囲攻撃をある程度度外視し、対人戦闘に特化した魔法。優れた術者は騎士と呼ばれるわ」

「確かにシグナム、自分を騎士って言ってたな」

プレシアの説明を受けて、ヴァンが戦闘の時を思い出した。

「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装だ。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る。・・・危険で物騒な代物だよ」

最後にユーノが説明した。

「確かにそれは、モデルFとLのアーマーを吹き飛ばしたことで実証済みだな」

ヴァンが言った。ロックマンのアーマーはヒビが入るならまだしも、砕けるようなことはまずない。

「なのは、そしてヴァン」

クロノが2人の名前を呼んだ。2人がクロノに振り向く。

「会わせたい人物がいる」
クロノは歩き出した。

扉を開け、クロノを先頭にヴァン、フェイト、なのはが部屋に入った。
なぜフェイトもいるのか。それはクロノがヴァンとなのはを連れて行こうとした時、クロノはフェイトから自分もついて行っていいかと言われた。特に断る理由はないのでクロノはそれを了承した。
部屋には、1人の長身の老人が立っていた。
彼の名はギル・グレアム。時空管理局顧問官である。

「失礼します。グレアム提督、お連れしました」

「ああ、ご苦労」

クロノが敬意を表している時点で、結構なお偉いさんだと理解した。

「はじめまして。ギル・グレアムだ。ヴァン君となのは君でいいね？」

「あ、は、はい！高町なのはです！」

グレアムの挨拶に、なのはも慌てて挨拶する。
ヴァンも挨拶するが、1つの疑問が生まれていた。

（なんで俺を知ってるんだ？）

その疑問はグレアム自身が答えた。

「ヴァン君のことは、クロノから聞いている。魔法とは違う力を操って、あのジュエルシード事件を解決に導いた人だとね」

「・・・ああ、そうですか」

ヴァンはおもむろにモデルXを取り出した。
そして視線をクロノに向けて言った。

「モデルX。最近狙撃練習してなかったっけ?ちょうど的があるし、今から始めないか?」

「なっ!?待て!ここでするな!いや、ここでなければいいということでもないが!」

発言の意図（狙撃練習という名のクロノのリンチ）に気づいたクロノが青ざめた。

『技術の秘匿、普通に破ったんだな。そんなにイレギュラーを目の前に作り出したいのか?』

モデルZが呆れた口調で言った。
ヴァンがこの行動に出た理由は、ヴァンの世界の技術が知れ渡り、やがてイレギュラーが出現するのを抑えるための行動・・・フェイトと暫く別れてまでなのは宅に世話になった意味が、この黒いの（クロノ）に台無しにされたせいだ。

「技術については詳しく話していない!後、秘匿はジュエルシード

の捜索の時の協定だろう！」

クロノのその言葉で、ヴァンは仕方なくモデルXをホルダーに収めた。

その様子を見てグレアムが笑った。

「ははは、元気だね。さて、立ち話するのも何だし、どうぞ座りたまえ」

その言葉に甘え、ヴァン、フェイト、なのはの順にソファに座った。

グレアムは手に持つ端末の資料に目を通した。端末にはなのはの顔写真が写っている。

「ほう、なのは君は日本人なんだな。私も同じ地球出身なのだよ。イギリス人だ」

「え、そうなんですか！？」

なのはが驚いた。まさか、自分と同じ地球出身の人が管理局にいるとは思わなかった。

「たまにいるのだよ。君や私のように高い魔力資質を持つ者がね。私は管理局の局員を助けたことが、魔法との出会いだったんだ」

「へぇ～」

グレアムは端末を置き、今度はヴァンの方に顔を向けた。

「ヴァン君は・・・どうやらここやなのは君の世界よりずっと遠い世界の者だそうだね」

「ああ・・・まぁ」

「君の活躍はクロノから聞いたが・・・君が持つ力は、人を救う力なのかね？」

「・・・知ってどうする？」

グレアムの言う力とは、ライブメタルのことだろうとヴァンは瞬時に理解し、まずは質問で返した。答えが技術の解析関係なら、その瞬間回答を拒否するつもりだ。

「ヴァン、言葉を慎め！」

「いや、いい」

クロノがヴァンのタメ口を批判するが、グレアムは特に気にせずにクロノを止めた。
そして続ける。

「それをどうしようとするつもりはない。ただ、人を救った者の力がどういうものか、それが気になっただけだ」

グレアムは、解析の可能性を否定した。
ヴァンは少しだけ考えると、自分なりの答えを告げた。否、これが真実だろう。

「力そのものは、戦うための力だ。ただ、俺はそれを自分が信じるものを守るために使っている。ただそれだけだ」

モデルXもモデルZも、そしてほかの4つのライブメタルも、戦うための力であって、それで人の傷を癒やすことなんてできない。だが、その力は、人を“救う”ことができなくても、“守る”ことができる。
グレアムはその回答を、ただ静かに聞いていた。

「・・・そうか。変な質問をしてすまなかったね」

グレアムはヴァン、フェイト、なのはを見た。真剣な面持ちで、つられてなのは、フェイトも真剣になる。ヴァンは元からある程度そのままだ。

「君達に、1つだけ約束してほしいことがある。友達や自分を信頼してくれる人のことは、決して裏切ってはならない。・・・約束してくれるかね？」

グレアムの言葉に、なのはとフェイトの返事は揃っていた。

「「はい。必ず」」

それを見てヴァンも答えた。

「フェイトもなのはも、俺の守るべきものの1つだ。俺はそれを全力で守ってみせる」

「ヴァン・・・」

「ヴァンさん・・・」

ヴァンの答えに、フェイトとなのはは少しだけ顔を赤らめた。

「うむ、いい返事だ」

グレアムは満足そうに頷いた。
そして、ヴァン、フェイト、なのは、クロノの４人が退室する。
部屋から廊下に出て、なのはとフェイトがお辞儀をする。廊下に出る前に、クロノは１つ報告した。

「提督。もうお聞き及びかもしれませんが、先程自分達がロストロギア、闇の書の捜索捜査担当に決定されました」

「そうか・・・君がか。言えた義理ではないかもしれんが、無理はするなよ」

「・・・？」

グレアムの言葉と表情を見て、ヴァンは目を細めた。
一瞬、グレアムの表情に違和感を感じたのだ。
だがヴァンはその違和感の正体を掴みきれない。

「・・・ヴァン？」

「？・・・ヴァンさん？」

ヴァンの様子に気づいたフェイト、そしてその声で気づいたなのはが声をかけるが、ヴァンは答えない。聞こえていないのだ。
クロノが退室する。まだグレアムの違和感がわからない。

「・・・ァン・・・・・ヴァン！」

「ん・・・」

フェイトの少し張り上げた声で、ヴァンはようやく2人の視線に気がついた。

「ヴァンさん、どうかしたの？」

なのはも若干心配そうに尋ねた。

「・・・いや、なんでもない」

そしてまたクロノを先頭に歩き出す。

ヴァンは歩きながら、グレアムのいる部屋の扉を見た。

これから、何かが起こる。そんな気がしてならなかった。

第２７話一本局にて（後書き）

楓
「今やってる人気投票、発表することが決定しましたー！」

ヴァン
「でもさぁ、順位がやばくないか？」

楓
「元は試験運行なんだからいい！これから気をつければいい！」

ヴァン
「・・・はぁ」

フェイト
「あの、これからもよろしければ投票お願いします！」

楓
「締め切りは１月３１日まで！」

ヴァン
「次回もよろしく～」

第２８話－引っ越しの運び屋（前書き）

グァーハッハッハァ！！（第２形態でトドメを刺された時の台詞）
・・・セルパン

・・・・・笑ってる？
・・・クロノ

セルパンがＭだった件についてｗ
・・・暁　楓

・・・・・そーなのか？
・・・ヴァン

第２８話－引っ越しの運び屋

アースラの休憩所には、なのは達を含むアースラスタッフが揃っていた。
代表的な人物を言えば、ヴァン、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、プレシア、クロノ、エイミィ。あとプレシアのすぐ横を漂っているマルティナも。
とにかくみんながいた。
席が少ないので、一部スタッフは立っている。
リンディがみんなの前に立った。

「私達アースラスタッフは今回ロストロギア、闇の書の捜索及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました。ただ肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置く事となります」

アースラは現在、整備中だと、ヴァンはさっきプレシアから聞いている。そして他の艦についても今空いているものがないということもだ。
で、なのはの世界までは結構距離があるということでの臨時本部ということだ。

「分割は観測スタッフはアレックスとランディ」

「「はい！」」

名前を呼ばれ、２人の青年が返事をした。

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同！」

「「「「「「はい！」」」」」」

次に呼ばれた後ろの多数が揃って返事をする。

「そして、司令部は私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、フェイトさん。以上三組に分かれて駐屯します。ちなみに・・・」

とここで一拍の間を開けた。

なのはが不思議そうに見る中、リンディは続けた。

「司令部は、なのはさんの保護も兼ねて・・・なのはさんのお家のすぐ近所になりまーす」

「ええっ！？」

その言葉になのはが驚いた。しかし、フェイトと見つめ合った後、すぐにそれが喜びに変わった。

「うわぁ、すごーい！凄い近所だぁ～！」

「本当！？」

「うん。ほら、あそこが私の家♪」

これからフェイト達が住む新居のベランダから、なのはとフェイトが街を眺めている。

一方、入り口近くでは、

「あー、これはここ、それはそこだな。で、これとこれとこれを一気にっと・・・」

ヴァンとアースラスタッフが荷物の入ったダンボールなどを運んでいる。ヴァンはかなり慣れた手つきで運んでいく。

「運びの仕事はいつもこんな感じだったのか？」

クロノがヴァンの作業を見ながら呟いた。少年のヴァン1人で大人のスタッフ5～6人近い働きだ。機械の体とは言えかなりのハイスペック。驚きというより呆れていた。

「そういえば、ヴァンは今までなのはの家に居候していたのよね？」

同じくヴァンの働きっぷりを見ながらプレシアが尋ねた。ヴァンが一旦足を止める。

「ああ、そうだけど？」

「リンディがここに来たんだし、これからはここがヴァンの住処になるわね」

「そうなのか？というか、リンディは士郎さんになんて説得してたんだ？」

ヴァンは疑問を浮かべながら荷物を運んだ。

荷物を下ろし、リビングに入ると、そこにはフェレットと赤い毛並みの子犬がいた。

「新形態、子犬フォーム！」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと・・・」

子犬・・・アルフは自慢げに、フェレット・・・ユーノは頭を掻きながら言った。

どちらも後ろ足で立っている。

「アルフ・・・お前狼じゃなかったっけ？」

「言葉のあやだよあや！」

「ユーノは・・・特に言うことはないかな？」

「だったら言わなくていいんじゃないですか？」

ヴァンと2匹が言葉を交わした時、なのはとフェイトもリビングに入ってきた。

「アルフちっちゃい！どうしたの？」

「ユーノ君も、フェレットモード久しぶり～！」

なのはとフェイトが駆け寄り、フェイトがアルフを、なのはがユーノを抱きかかえる。

「可愛いだろ～？」

「うん♪」

抱きかかえられたアルフがフェイトの頬を舐める。フェイトも嬉しそうだ。

「にゃはは～♪」

「あ、あはは・・・」

なのははユーノに頬ずりをしており、ユーノが苦笑していた。
そんな2人と2匹の元にクロノがやってきた。

「なのは、フェイト。友達だよ」

「「はーい」」

なのはとフェイトが玄関へと向かう。

「こんにちはー」

「来たよー」

訪問者はなのはのクラスメイト、アリサとすずかだった。

「アリサちゃん、すずかちゃん！」

「初めまして・・・ていうのも変かな？」

「ビデオメールではもう何回も会ってるもんね」

「うん・・・でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

「うん♪」

「私も♪」

4人が笑い合う。
そこに次の荷物を確認するために動いていたヴァンがやってきた。

「あれ、お前らか」

「ヴァン・・・何してるのよ?」

アリサが怪訝そうに尋ねた。

「何って、ここの荷物運びだけど」

ヴァンが答えた。ちなみにヴァンとアリサ、すずかとの関係は、ヴァンが翠屋で働いている時に2人が客として来店、それから知り合ったという感じだ。
でもそんなことを知らないフェイトは少しだけ目を丸くした。

「あれ、ヴァンは2人のこと知ってるの?」

「ん、ああ。働いてる店の客としてときどき来るんだ」

フェイトの質問に、ヴァンは簡単に答える。そして荷物の確認のために下へと向かった。
続いてプレシアもやってきた。プレシアはフェイトの友達を見るためである。

「あ、母さん!」

「あら、こんにちは」

「「こんにちは！」」

「アリサさんにすずかさん、よね？」

まだ言ってないのに自分達を名前で呼ばれて2人が少し驚いた。

「ビデオメール、見せてもらったの」

「あ、そうだったんですか」

理由がわかってアリサが笑顔になる。

「よかったら、お茶でもしてらっしゃい」

「あ、じゃあ私のお店で」

なのはが翠屋を勧めた。

「いいわねぇ。私もご挨拶に行こうかしら」

そう言ってプレシアは奥へと戻っていった。

その様子をアリサとすずかが見る。

「綺麗なお母さんだね」

すずかが率直な感想を述べた。

「うん。優しくて、私の大好きな母さんだよ」

フェイトが言った。

その時、確認を終えたヴァンが戻ってきた。

「荷物、全部終わったよ」

「うん、ありがとう、ヴァン」

「おー」

間延びした返事をして、ヴァンは家の中へと入っていった。

「ところで、フェイトとヴァンって、どんな関係？」

「え？」

ヴァンの後ろ姿がなのは達に見えなくなった後、アリサが尋ねた。

「確かに、なんだか親しい感じだよね」

「ひょっとして、お兄さん・・・だとヴァンだけが先に来る理由になんないか。じゃあ親戚？」

「え、えっと、その・・・」

フェイトは言い訳に迷った。

正直なことを言えば、自分の見てきたヴァンを2人に教えたい。ヴァンは自分にとって恩人だと言いたい。だがそれを言うのは自分が魔導師であることを言わなければならない。

多少迷った後、フェイトは言った。

「その・・・どちらでもない・・・でも、私にとって大事な人、かな」

このばで言える精一杯のことを教える。

少し怪訝そうになったアリサだったが、すぐにまた笑顔になり、４人で翠屋へと向かった。

翠屋。

テラスでは、なのは、フェイト、アリサ、すずかが談笑している。

「ユーノ君久しぶり～」

「キュ、キュ～」

ユーノはフェレット姿ですずかに抱かれている。アルフはアリサの腕の中だ。

そして店内では士郎、桃子とリンディ、プレシアが会話をしている。

「そんなわけでこれからしばらくご近所になります。よろしくお願いします」

プレシアが頭を下げる。

「いえいえ、こちらこそ」

「どうぞ、ごひいきに」

「それと、ヴァンを預かってくれてありがとうございました」

リンディが言った。ヴァンを預かってほしいと頼んだのはリンディである。（第２２話参照）

「いえいえ、ヴァンさんは自分から店の手伝いをしてくれていたので、こちらも助かりましたよ」

と桃子は返した。

「ひょっとしたら、またヴァンさんに手伝ってもらうことがあるかもしれませんが、その時は・・・」

「ええ、その時は喜んで」

そんな会話をしていたら、フェイト達が店内に入ってきた。

「あらフェイト、どうしたの？」

プレシアが聞くと、フェイトは手に抱えていた小包を見せた。

「あの・・・これ・・・これって・・・・・・」

小包の中身はなのは、アリサ、すずかが通う聖祥小学校の制服であった。

「転校手続きとっといたから、週明けからなのはさんのクラスメイトね」

リンディは笑顔で説明した。

「まあ素敵！」

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。な、なのは？」

「うん！」

なのはが嬉しそうに言った。なのはだけでなく、アリサとすずかも嬉しそうだ。

「良かったわねぇ、フェイトちゃん」

桃子がフェイトの目線に合わせて祝いの言葉を送った。

「あの・・・えと・・・はい、ありがとう・・・ございます」

恥ずかしがりながら、フェイトは大事そうにその小包を抱きしめた。

その頃、クロノとエイミィ、ヴァンはハラオウン宅のモニターで闇の書を見ていた。

「ロストロギア、闇の書の最大の特徴はそのエネルギー源にある。闇の書は魔導師の魔力と魔法資質を奪うためにリンカーコアを食うんだ」

クロノが説明する。

「つまり、なのはが襲われたのも、そのためか・・・」

ヴァンが呟くように言った。

「ああ、間違いない。闇の書はリンカーコアを食うと、蒐集した魔力の資質に応じてページが増えていく。そして、最終ページすべてを埋める事で闇の書は完成する」

「完成すると、どうなるの？」

エイミィが不安そうに尋ねた。

クロノも俯いた。

「少なくとも、ロクなことにはならない・・・」

ヴァンは静かに、モニターに映る闇の書を見た。

（シグナムは、闇の書を完成させてどうする気なんだ・・・？）

その答えは、当然ここで出ることはなかった。

第２８話－引っ越しの運び屋（後書き）

楓
「色々な誤字や脱字の指摘を出されたので、そのお詫びとして連日投稿とさせていただきました」

ヴァン
「閲覧モードて確認した上での誤字とかホント勘弁してくれよ・・・」

楓
「こんなダメな作者なので、誤字を見つけたら遠慮せずに指摘しちゃってください」

ヴァン
「お気に入り登録件数３０超え、総合評価９０超えしてるんだから。指摘されないようにしろよ。指摘だけで感想が終わるのはつらいんだからな」

第２９話　転入と邂逅（前書き）

あんな気味の悪い奴にあたしの力を与えるなんて、どうかしてるわ

・・・モデルＬ

ホント、ブサイクでいかつい奴ばかりね

・・・伝説の英雄Ｌ

それを言ったらあんたの部下もそうだろ。象型然り鹿型然り

・・・暁　楓

というより・・・誰？

・・・フェイト

第２９話　転入と邂逅

アースラメンバーが海鳴市に来て、初の週明けとなった。
ヴァンは新しい住処であるマンションで朝を迎える。自分の部屋で起き、台所へと向かう。今日の朝食を作るためだ。それと今日から弁当１つも。
今日はフェイトの聖祥小学校の初登校だ。昨日の夜、フェイトは初めての学校を待ちきれないでいた。ちなみにヴァンが弁当を作る理由は、フェイトが希望したからだ。だが毎日はきついのでプレシアと交代交代となった。
ヴァンの料理の腕は大した変化がない。少しだけうまくなったぐらいだ。ヴァンのその腕前はもうすでにハラオウン家やプレシアら全員週末の間に知った。素直に微妙だとハラオウン家全員が言った。
静かに調理し、調理が完了した頃、フェイトがやってきた。

「ヴァン、おはよう」

「ああ、おはよう」

「ヴァン、その・・・どうかな？似合う？」

恥ずかしそうにフェイトが言った。フェイトは聖祥小学校の白い制服を身に着けている。
ヴァンはその姿を見た。高町家の居候としていたときのなのはの制服姿からフェイトの制服姿を想像できていたが、実際に見て改めて似合ってるとの感想を持った。
まじまじと見つめられて、フェイトの顔がどんどん赤くなっていく。

「あの・・・ヴァン？」

「ああ。すごく似合ってるぞ」

ヴァンは素直に感想を述べた。フェイトの表情がさらにに明るくなる。まだ顔が赤いが。

「本当！？」

「ああ。本当だ」

それから少し遅れて起きてきたプレシア達と朝食を食べた。
朝食を取る前、制服姿のフェイトをみんなが似合ってると賞賛していた。

聖祥小学校の、なのはのクラス。

「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさん、どうぞ」

「し、失礼します」

フェイトが教室に入る。
フェイトが入ってすぐにクラスのあちこちからかわいいとか、綺麗といった声が上がる。
フェイトは教卓の横に立った。

「あの、フェイト・テスタロッサと言います。よろしくお願いしま

す」

緊張しながら挨拶し、お辞儀をする。
クラスから拍手の音が鳴り始めた。
クラスの迎え入れに、フェイトは恥ずかしがりながらも喜び微笑んだ。

フェイトの初の学校生活を過ごした日、太陽が傾きを見せている時間。
ヴァンはマンションのハラオウン家内、自分の部屋の机の上に突っ伏していた。別に疲れているわけではない。その逆で暇なのだ。
今までのこの時間は、翠屋で働いていたのだが、それはほとんど居候だった頃の自主的なものだったので、ハラオウン家の居候となっている今、やることがなくて非常に暇なのだ。
午前中はクロノ、エイミィと闇の書についての説明を聞いていた。
闇の書にリンカーコアを食わせ、６６６ページ全てを埋めれば、闇の書は完成し、その魔力を媒介に次元干渉レベルの力を発揮すること。
闇の書が破壊される、もしくは所有者が死んだ場合、闇の書のページは全て白紙に戻り、別の世界で再生すること。
様々な世界を渡り歩き、自らが生み出したシグナム達守護騎士によって守られ、魔力を食って永遠を生きる。停止させる事のできない危険なものであること。
そして自分達のやることはその闇の書の完成前の捕獲、封印。それと守護騎士と所持者の確保。
説明を受けている途中で、やはりヴァンは疑問を持った。
シグナムらが闇の書を完成させる理由。
シグナムと戦って、なんだかシグナムと自分が同じような気がした。

シグナムの力の使い方が、人を守るためのヴァン自身の力の使い方と重なったのだ。
なんとなくだが、そんな気がする。
だがそのシグナム本人が今いない以上、そのなんとなくを確信に変えることができない。
ヴァンはため息をついた。

「・・・暇だ」

呟く。返事はこないだろうと思われたが、意外なところから返事が返ってきた。

『なら、連れていってほしいところがあるのだが』

返事の主は、モデルHだった。

ヴァンは図書館に来た。

「ライブメタルが読書って、変わってるな」

ヴァンは独り言のように呟く。
ホルダーではなく、着ている青いジャケットの内ポケットからモデルHが返答した。

『俺のパスコードの意味は“風と知恵”だ。この世界の文学がどういうものか、少し興味がある』

「そういやお前、時折なのはの部屋に訪れては国語の勉強を覗いて

たな」

ヴァンが高町家でのことを思い出した。たまにモデルHがなのはの国語の教科書を見たりしていた。

『とにかく、早く入ってくれ』

「へいへい」

モデルHに催促され、ヴァンは図書館の中に入った。

実際モデルH本人が探してほしいのだが、モデルHのようなものはここ（なのはの世界）にはないので、仕方なくヴァンが探している。

（つーかモデルHってどんな本がいいんだよ・・・？）

ついさっき適当に取ったなにやら難しそうな本を開いたら、モデルHに、

『それは図鑑だ！ちゃんとしたものを取れ！』

と怒られた。

この棚にはモデルHご希望のものがなさそうなので、次に行こうとした。

と、ふと必死に棚の本に手を伸ばす、車椅子に乗った少女を見つけた。だが高さが足りないため、その本に届いていない。

「ん～、ん～しょっ！」

それでもその少女は必死に手を伸ばす。周りに人はいないようだ。
ヴァンはその少女のすぐ隣まで寄り、少女の手の先にある本を指差した。

「これか？」

少女は顔をこちらに向けて返事をしようとして・・・その動きが止まった。

「・・・？」

ヴァンが少女が動かないことに疑問を持ちながらも返事を待つ。
少女の口が動いた。

「・・・綺麗な瞳や・・・・・・」

「・・・・・はい？」

「・・・・・はぅ・・・！」

少女は恥ずかしさで顔を赤くした。

それからヴァンは少女に本を持たせ、この場から立ち去ろうとしたが、少女が話をしたいと言い出し、なんやかんやで話をすることになった。

「うち、八神はやてって言います。あなたの名前はなんて言うんですか？」

と少女、はやてはまず互いの自己紹介から始める。

「はやてか。俺はヴァンって言うんだ」

ヴァンも自己紹介をし、互いに名前を知った。

「ヴァンさんって、よくここに来るんですか？」

はやてが尋ねた。

ヴァンは軽く首を横に振り、

「いや、ここに来るのは初めてなんだ。海鳴市に住んで半年近くになるけど。あと、敬語じゃなくていいぞ」

とヴァンは答えるとついでにそう言って言葉遣いを自由にするよう軽く促した。

「あ、はい。じゃなくて・・・うん。わかったで」

はやてはその言葉に甘えて敬語からいつもの関西弁に戻した。

新たに質問する。

「この街に来て半年って言っとったけど、前はどこに住んでたん？」

「あー・・・それは、だな・・・」

その質問にヴァンは目を泳がせた。

ヴァンが海鳴市に来る前に住んでた所と言えば、地方や国どころか、世界まで跨いでしまう。だが、そんなことをはやてに言えるはずも

ない。

「まぁ、ここからかなり遠い所だ」

「かなりアバウトやなー」

結局いい打開策が出ずに、そんな答え方しかできなかった。
しかしはやては大した言及はしなかった。
今度はヴァンが質問した。

「ところで、はやてはいつもここに来るのか？」

「ああうん。見ての通り足が動かんくて、学校にいけないから、こうしてここでよく本を読んでるんよ」

もう足の不自由に慣れているはやては、笑ってそう答えた。

「ふーん。送り迎えは？母さんか？父さんか？」

「いや・・・うち、物心がつく前に両親を亡くしてるんよ・・・」

はやてが少し暗い表情になった。ヤバいとそれを見たヴァンが少しだけ慌てる。知らなかったとはいえ、人の心の傷に触れてしまった。

「あ、いや、ごめん。嫌なこと聞いて悪かった」

「ううん、気にせんでええよ。今は親戚の人と住んでいて、その人が付き添いで来てるんや」

ヴァンを許し、はやては質問の答えを言った。

「ふーん、親戚か」

「そや、3人とペットの犬が1匹。まあ最近はみんな忙しくなってもうてるけどな」

「そうなのか・・・」

ヴァンは少しだけ考える仕草をとった後、おもむろにメモ帳とペンを取り出し、何やら書き始めた。

書き終わり、ヴァンはメモ帳の1枚を切り離すと、はやてに差し出した。

「ん？何やこれ？」

受け取った紙には、いくつかの番号が書かれてあった。

「俺の電話番号」

「え！？」

「親戚の人達は最近忙しいんだろ？どうしても困ったらこれで呼んでくれ。すぐ助けるから」

「え、ええの？」

はやては戸惑った。しかしヴァンは微笑んで言う。

「まあ俺は何でもやる運び屋だからな。必要になったらいつでも呼んでくれ」

その言葉に、はやては少々顔を赤くした。もらった連絡先の書かれた紙を大事そうに両手で持つ。

「あ、ありがとな。その、ホントに困ったら電話するよ」

それからもう少し話した後、はやてがそろそろ時間と言うことで、ヴァンは付き添いの人との待ち合わせ場所まではやてを乗せた車椅子を押していった。
図書館の出入り口近くまで来た。

「ここでええよ。おおきにな」

「ああ。また今度な」

ヴァンは手を振り図書館を出た。

『・・・結局、何も読めなかった・・・』

「・・・また今度来るか」

最後にそんな会話をした。

ヴァンが去って少しした後、付き添いのシグナムが戻ってきた。方角から察するに、御手洗いに行っていたようだ。

「主はやて、待たせてしまい申し訳ありません」

「ええよ。うちもついさっき来たばかりやから」

ふとシグナムは、はやての手に持つ紙切れに気づいた。ヴァンの連絡先が書かれた紙だ。

「主はやて、それは？」

気になったので、シグナムは聞いてみることにした。

「友達って言えばええかな・・・ついさっき知り合ったんよ。その人から、何か困ったら連絡してって言ってこれをくれたんや」

「そうですか・・・」

「まぁ、シグナム達が忙しくて、どうしても困ったときの話や。今度紹介するわ」

「はい。では行きましょう」

「うん」

シグナムが車椅子を押し、２人は図書館を去った。

第２９話 一転入と邂逅（後書き）

楓

「最近疲れが溜まってきてるのか、なんか無理やりな展開になってきた気がします。どーしよ。もうぼちぼち人が来るようになって引き下がれそうにないんだけど。
だが私は謝らない（キリッ）」

第３０話ー第２戦（前書き）

今回は名言なし！

・・・暁　楓

ええ！？

・・・全員

第３０話－第２戦

フェイトの転入から約一週間が過ぎた。
今は夜。ヴァンはハラオウン宅の台所で買い物で手に入れた食材を冷蔵庫に入れていた。
リビングにはリンディとクロノとプレシアが、オペレートルームにはエイミィがいる。
なのはは本局にて検診。フェイトやアルフ、ユーノはその付き添いと修理を終えたデバイスの受け取りで同じく本局に行っている。

「しっかし、フェイト達のデバイスにカートリッジシステムの搭載かぁ」

冷蔵庫への積み込みを終えリビングに入ったヴァンが呟く。今回の修理で、レイジングハートとバルディッシュにベルカ式カートリッジシステムが搭載された。
それにはリンディが答えた。

「繊細なインテリジェントデバイスには本体破損とかで危ないものだけど・・・悔しかったのね。主人を守れなかったことが」

「ところで、ヴァンのライブメタルももう直ったの？」

プレシアが尋ねた。
ヴァンはその質問にああ、と短い返事と頷きを返した。モデルＦとモデルＬの自動修復は昨日済んだ。

「・・・にしても、進展がないものだな」

「ああ・・・ここ一週間ではリンカーコア持ちの大型生物ばかりがやられている。魔導生物のリンカーコアは大した量ではないとは言え、闇の書は確実に完成に近づいている」

そう、この一週間で闇の書に関する手がかりは掴めてなかった。シグナム達は蒐集範囲をさらに遠くの世界まで広げているらしい。情報が掴めず、今はシグナム達が見つかるのを待つしかないという状態。

「「「「・・・・・・」」」」

進展がなくただ闇の書が完成していく今の状況、その場に沈黙が漂う。

（・・・今日の晩飯のリクエストでも取るか）

何とか会話を続けるため、ヴァンがそんなことを考えたその時。
緊急のアラートが鳴った。
モニターに局員が映る。

『都市部上空にて、捜索対象者2名を補足。現在、結界内にて対峙中です！』

報告を受け、リンディが指示を出す。

「相手は強敵よ！交戦は避けて、外部から結界の強化を！そして、現地にはクロノとヴァンを向かわせます！」

『はっ！』

「クロノ！ヴァン！現地へ向かって！」

「はい！」

「わかった！」

クロノとヴァンは返事すると、マンションを飛び出した。

街の上空には、ヴィータと人型のザフィーラ。そしてその2人を取り囲むようにして何人かの武装局員がいる。

「・・・管理局か」

「でもチャラいよこいつら。返り討ちだ！」

ヴィータがグラーフアイゼンを構える。

だが、次の瞬間、武装局員は一斉に2人から離れ、散っていった。

ヴィータが少し驚く。

「！？」

「上だ！」

ザフィーラの声でヴィータが上を見ると、そこには大量の光の剣を生み出し、Ｓ２Ｕを構えるクロノがいた。

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！」

クロノがＳ２Ｕを振り下ろす。魔力の剣が一斉に２人めがけて襲いかかった。

「ちぃっ！」

ザフィーラが自身とヴィータを覆うように魔力壁を生み出す。
魔力壁に光の剣が降り注ぎ、爆発を生み出した。
煙が晴れる。
ザフィーラの左腕には数本の魔力刃が刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな。この程度でどうにかなるほど・・・・・ヤワじゃ、ない！」

ザフィーラは左腕に力を込め、魔力刃を砕いた。
次の瞬間、下から何かの収束音が聞こえてきた。ヴィータが視線を少し落とすと、クロノの真下あたりにモデルＺＸに変身したヴァンがチャージしたＺＸバスターを向けていた。

「当たれぇっ！」

チャージバスターが放たれる。
ヴィータがザフィーラの前に出て、グラーフアイゼンのカートリッジを一発ロードし、その弾を叩き落とした。
ヴィータとザフィーラは２人を睨む。
睨まれたヴァンとクロノは自分の武器を構える。
その時、その２人にエイミィの通信が入ってきた。

『クロノ君、ヴァンさん、今現場に助っ人を転送したよ』

「え？」

クロノが少し驚く。
ヴァンが辺りを見回すと、ビルの屋上に立つなのはとフェイトが見えた。

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

デバイスの新たな名前を呼び、２人は新しいバリアジャケットに身を包んだ。カートリッジシステムが搭載され生まれ変わったデバイスを構える。

「あいつらのデバイス・・・・・あれってまさか！？」

ヴィータは２人のデバイスに取り付けられたカートリッジシステムを見て驚いた。
なのはとフェイトはヴィータとザフィーラを見上げた。

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話しを聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を！」

フェイト、なのはが説得を試みる。

「あのさぁ・・・ベルカの諺にこういうのがあんだよ。“和平の使者なら槍は持たない”」

ヴィータは答えとしてそう言ったが、なのはとフェイトは顔を見合わせ、訳がわからず首を傾げた。ちなみにザフィーラもヴィータに視線を向けている。
ヴィータはグラーフアイゼンをなのは達に向けた。

「話し合いをしようってのに武器を持ってやって来るヤツがいるかバカ！って意味だよバーカ！」

「なっ！？い、いきなり有無を言わさずに襲って来た子がそれを言う！？」

言葉の意味を聞いてなのはが反論した。
その様子を少し離れた場所で聞いていたヴァンもそれに頷いた。

「それにそれは諺ではなく小話のオチだ」

ザフィーラもツッコんだ。

「うっせー！いいんだよ細かい事は」

ヴィータが逆ギレする。もう言っていることが無茶苦茶である。
そのとき、上空から結界を突き破って何かが屋上に落ちてきた。
落ちたときに舞い上がった砂煙が収まる。

「シグナム！」

フェイトが砂煙がら現れた人物の名を言った。
シグナムは立ち上がり、フェイトを見据えた。

「ユーノ君、クロノ君、ヴァンさん！手を出さないでね！私はあの子と1対1だから！」

なのはがヴィータを見据えて言った。ヴィータはなのはを睨む。

（アルフ。私も、彼女と・・・！）

フェイトは念話でアルフに告げた。

「・・・ああ。あたしも、野郎にちょいと話がある」

アルフはザフィーラを見た。視線を受け取ったザフィーラはアルフを睨み返す。

対戦のカードは決まった。

（ユーノ。それならちょうどいい。僕と君、ヴァンで闇の書の主を探すんだ。僕とヴァンで結界の外を探す。君は中を）

クロノが念話でユーノに指示をだした。

（うん。わかった）

「ヴァン。結界の外で闇の書とその主を探すぞ」

「わかった！」

そしてほぼ同時に全員が動き始めた。

なのは対ヴィータ。

「でえぇぇぇぃ！！」

ヴィータはクラーケンフォームとなったアイゼンを振るった。だがなのはのより強固になった障壁によって完全に防がれる。

「アクセルシューター、シュート！」

レイジングハートから１２個という大量の魔力弾が放たれる。ヴィータは全弾の制御は不可能と読んだが、なのははそれをやってのけ、ヴィータを追い詰めていく。

フェイト対シグナム。

シグナムはフェイトの放ったプラズマランサーをカートリッジロードしたレヴァンティンで打ち消す。

フェイトはその隙にシグナムに接近、バルディッシュをザンバーフォームに変えて斬りかかる。

シグナムもレヴァンティンを連結刃形態、シュランゲフォルムに変えて迎撃、デバイスがぶつかり合い爆発が巻き起こす。

２人は爆発から抜け出すと、再び自分の得物を構える。

アルフ対ザフィーラ。

デバイスを持たない２人は互いに己の拳をぶつけ合って戦っていた。

魔力で強化された拳がぶつかり合う度に爆発を撒き散らす。

何度目かの爆発から抜け出したところで、地上にいるザフィーラは

空を見上げた。空では、シグナムとフェイト、ヴィータとなのはが互いに戦っている。

（・・・状況は、あまりよくないな。シグナムやヴィータがあの魔導師達に負けるとは思わんが、ここは引くべきか・・・）

そう考え、ザフィーラは結界の外にいる仲間に念話を送る。

ユーノはクロノの指示通りに結界内で闇の書の主を探している。
クロノは結界の外で空から闇の書を捜索。
ヴァンはモデルＰＸの姿でビルの上を走りながらレーダースコープで探している。
闇の書を探すだけならモデルＬＸの方が効率がいいのだが、闇の書の他に初戦でなのはのリンカーコアを抜き取ったもう１人の騎士が、また奇襲してくる可能性がある。モデルＬＸでは敵の反応まで見えないため、こっちの方がいいのだ。
ヴァンは屋根の上を跳びながら、レーダースコープの目を光らせた。

同じく結界の外。
闇の書を持ったシャマルは、目の前の結界を見て表情を険しくしていた。

（私の魔力じゃ、この結界を破れない・・・シグナムのファルケンか、ヴィータのギカント級の魔力じゃないと・・・・・）

シャマルはサポート専門である。シグナムやヴィータの大技どころ

か攻撃用の魔法すらさほど多く持ち合わせていない。
そして頼みの2人は戦闘中で手が離せない。2人に結界を破壊させるのは不可能だ。
だが何もできない訳ではない。たった1つだけ、この状況を打破する方法があるのだが・・・

ジャキッ！

「！」

シャマルの背後から、何かを突きつける音がした。
シャマルは驚いたが、下手な動きは危険だと即座にわかったため、振り向かない。
シャマルにデバイスを突きつけた者が口を開いた。

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します」

デバイスを向け、シャマルにそう告げるのは、クロノだった。

「抵抗しなければ弁護の機会が貴方にはある。同意するなら武装の解除を・・・」

クロノがそこまで言いかけた時だった。
クロノの横から突然何者かが割り込んできた。
その者はクロノの腹に蹴りを決めた。

「ぐあっ！」

蹴られたクロノは吹っ飛ばされ、フェンスに激突する。
クロノに蹴りを入れた人物は、仮面を被った男。

「貴方は・・・！？」

シャマルは尋ねる。が、仮面の男は質問に答えず、こう言い放った。

「使え」

「え！？」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

仮面の男はシャマルに闇の書の使用を促した。

・・・そう。闇の書を使うことが、シャマルがこの結界を破る唯一の方法である。

「でもあれは・・・！」

だがシャマルはまだ迷っていた。

闇の書を使えば結界の破壊ができる。だが、闇の書の魔力を使うということは、今まで集めてきた頁の消費にもなる行為だ。極力避けるべきことである。

「使用して減った頁はまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かろう」

仮面の男はまだ迷うシャマルにさらに促す。

その時、ヴァンもこの場に辿り着いた。

「クロノ！」

ヴァンはクロノの元へと駆け寄った。

「大丈夫か？」

「あ、ああ・・・それより、あいつは一体・・・」

クロノは立ち上がり、仮面の男を睨みつけた。ヴァンも仮面の男を見る。

だがヴァンは次に誰もいない場所に顔を向けた。

「・・・モデルＦ」

ヴァンはモデルＦＸとなり、アームＬを構えると、その誰もいない場所へと弾丸を放った。

「おい、どこに撃っている？」

クロノの質問も無視し、バスターエディットの設定を受けたオレンジの弾丸は途中で９０度軌道を変え、ビルの陰へと入っていった。直後、何かが当たる音がして、ビルの反対側から、全く同じ姿をしたもう１人の仮面の男が飛び出してきた。

「もう１人！？」

クロノが驚く。

「くっ・・・なぜわかった！？」

「モデルＰを使ってる時点で、お前のこともバレてるさ」

仮面の男にそう答え、ヴァンは再びアームLを構える。
クロノも、もう1人の仮面の男との戦闘態勢に入った。
その時、

ズガァァァァン!!

雷が落ちる轟音が聞こえた。

「「!?」」

ヴァンとクロノが音の方向を見た。
結界の上に闇のように黒い雷が落とされていた。闇の書による砲撃である。

「しまった!」

クロノは急いでシャマルを取り押さえようとする。だが、仮面の男がクロノを蹴り飛ばしてそれを妨害した。
もう1人の仮面の男も、ヴァンに攻撃を仕掛け、ヴァンをシャマルへ近づけるのを許さない。

結界内。

「すまんテスタロッサ。この勝負は預ける」

「シグナム!」

結界が破壊されるのを確認したシグナムが戦闘から離脱する。

「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータ。・・・あんたの名は？」

ヴィータは離脱する前に、自己紹介と、なのはの名前を尋ねた。

「なのは。高町なのは！」

なのははヴィータの質問に答える。が、

「高町なにょ、なぬ、ってええい呼び辛ぇッ！！」

「逆ギレ！？」

ヴィータが“なのは”という名前を噛んで逆ギレ。なのははたじろいだ。

「ともあれ勝負は預けた！次は殺すからな！ぜってーだ！！」

そう言ってヴィータは離脱した。

アルフと交戦していたザフィーラも、戦線から離脱する。

そして、結界は粉々に砕け散った。

結界が砕かれ、シグナムらが飛び去っていく様子を、ヴァンは見ていた。

仮面の男は結界が破壊されるのを見るとすぐに姿を消していた。

「・・・くそっ、逃げられた」

ヴァンが悔しそうに顔を歪める。

『・・・・・気のせいか？』

『？どうしたんだい、モデルＺ』

モデルＸが尋ねるが、モデルＺは何でもないとすぐに答えた。

だが、モデルＺはシャマルが飛び去った方向を見る。

『（闇の書の実物を間近で見るのは初めてのはずだが・・・なんだ？この身に覚えのある違和感は・・・・・）』

謎は、深まるばかりである。

第３０話ー第２戦（後書き）

楓

「これから更新が遅くなります。でも応援してくれるなら嬉しいです」

第３１話－さらなる謎（前書き）

・・・・・・・・・・これが・・・・・・・・・・・・若さというもの・・・なのか・・・・・・！

・・・レグアンカー

ところで、プレシアって何歳なんだろ？

・・・暁　楓

第３１話－さらなる謎

八神宅。

「ごめんなさい・・・ごめんなさいはやてちゃん・・・・・！」

リビングにて、シャマルが受話器を耳に当てて謝っている。彼女の言葉から察せられる通り、電話の相手ははやてである。

今日、本来ならばヴォルケンリッターの面々ははやてとはやての友人と一緒に鍋パーティーをする予定であった。だが、先程の管理局との戦闘で帰りが遅くなってしまい、パーティーはできなかった。はやては今現在、その友人の家にいる。今日はそこに泊まって、明日帰ってくるということだ。

電話越しのはやては気にしていないと言うが、それでもシャマルは今にも泣き出しそうな顔で謝り続ける。

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ（狼形態）はその様子を黙って聞いている。

シグナムはリビングから外に出た。夜空を見上げる。

自分達は主はやてに、寂しい思いをさせてしまった。

それだけではない。やむを得なかったとはいえ、闇の書を使用したことによって闇の書の頁が減ってしまった。

敵も、自分達と互角以上の戦いをする者が増え、ますます蒐集が困難な状況になってきている。

だが、

（時間もあまりない・・・・一刻も早く闇の書を完成させ、主はやてを真の闇の書の所有者にしなくては・・・・・）

シグナムは決意をさらに固める。

「シグナム・・・はやてが代わってって」

いつの間にか電話を代わっていたヴィータが、受話器を片手にシグナムに近づいてきた。

「・・・ん、ああ」

シグナムはヴィータから受話器を受け取る。

シグナムがはやてと電話している間、誰にも気づかれることなく闇の書が鈍い輝きを小さく放った。

一一一ドクン・・・

足リナイ・・・・・

一一一ドクン

絶望ガ・・・憎シミガ・・・・・

一一一ドクンッ

怒リガ、悲シミガ、苦シミガ、ソシテ狂気ガ足リナイ・・・・・

一一一ドクンッッ

サア・・・書ノ騎士、イヤ、我ガ道具達ヨ・・・・・

モット力ヲ・・・ソシテモット、心ノ闇ヲ集メルガイイ・・・・・

全テハ、我ノ覚醒ノタメニ・・・・・・！

・・・・・・・・・・・・・・・・・ドクンッッッ！！

その頃、マンションのハラオウン家では、なのはを含めたハラオウン家の面々で闇の書の守護騎士について話していた。
守護騎士は、闇の書によって生み出されたプログラムであること。
その守護騎士の役割は主を守護し、闇の書を完成させるため蒐集活動をすること。
そして守護騎士には意思疎通こそできるものの、感情や人格まで持つ事例は今までなかったこと。
守護騎士が厳密に人間ではないことを聞いた時、フェイトが、

「それってつまり・・・私と同じ・・・」

なんて言いかけた。その瞬間ヴァンがフェイトに素早く拳骨をくらわせた。
痛がるフェイトに、

「何自分のことを変に言ってんだ」

「少し生まれ方が普通と違っただけで、貴方はフェイトっていう名前の人間、私の娘よ。馬鹿なことは言わないで」

とヴァンとプレシアの叱りが入った。
愛する人と母に叱られ、フェイトは少し落ち込むが、ヴァンに頭を優しく撫でられすぐに元気になる。
その時ヴァンに頭を撫でられるフェイトを見て、なのはが少々複雑

そうな表情を見せていたのを、一応ここに記しておこう。
その後いくつか話し合った後、今日は解散となった。解散と言っても、なのはとユーノが家に帰るだけだが。

「ところで、闇の書の主って転生機能ってモンが発動するときにランダムで決まるんだよな？」

なのはが帰った後、ヴァンがクロノに尋ねた。

「ああ、そうだが・・・それがどうかしたのか？」

「いや、今の闇の書の主って、どんな奴かなって」

「ん～魔力さえあればどんな人でもいいわけだし、案外フェイトさんやなのはさんぐらいの子だったりするかもねぇ」

リンディもその話題に入ってきた。

「かあさ・・・艦長、さすがにそれは・・・」

クロノは控えめに言う。一応完全に否定はできないが。

（はは・・・まさかなぁ・・・）

ヴァンも心の中でそう思うが、近いうちにそれが覆される。

翌日。

「携帯？」

「うん。なかなか決められなくて・・・ヴァンはどんなものがいいのかなって」

夕方、学校から帰ってきたフェイトが携帯電話のパンフレットを片手に聞いてきた。どうもどれにするか迷っているらしい。

「まぁ、俺も一応持ってるけど・・・」

高町家居候時代に、ヴァンも一応携帯を買った。なくてもいい物だったが、ヴァンの耳にかけている通信機のような機器はこの世界にはないため、こっちの方が都合がいいのだ。

「なのは達はどう言ってるんだ？」

「えっと、なのは達は・・・・・」

フェイトは学校でなのは、アリサ、すずかの言っていたことを話した。簡単にするとこんな感じ。
デザインを重視するアリサ。
携帯の操作性を強調するなのは。
携帯のその他機能の充実したものを勧めるすずか。

（まさか3人とも意見がバラバラとは・・・）

仲良しであることと思考は全く関係ないということを改めて知るヴァンであった。

「それで、ヴァンはどんな携帯を使ってるの？」

「んー、そもそも大した使うものじゃないし、適当に選んだものなんだよな」

「その、ヴァンの携帯・・・見せてくれる？」

「ああ。ほいこれ」

ヴァンはポケットから携帯を取り出した。青くシンプルなデザインの携帯である。
フェイトはヴァンの携帯を受け取ると、まじまじと見る。

「・・・・うん、ありがと」

1分程の観察の後、フェイトは携帯をヴァンに返した。

翌日。
学校帰りにフェイトはプレシアに携帯を買ってもらった。
青くシンプルなデザインの携帯。ヴァンと全く同じものである。
付き添っていた友達3人のうちアリサとすずかは青色のチョイスに意外そうな表情をしたが、なのははその携帯がヴァンとのお揃いであることに気づき、複雑な気持ちになった。

（・・・なんでだろう、昨日もそうだけど、最近ヴァンさんとフェイトちゃんの様子をこうして見てると、なんだか胸のあたりがモヤモヤする・・・・・）

この感情の正体になのはが気づくのは、まだ少し先の、別の話である。

第３２話　鉢合わせと守護騎士の思惑（前書き）

そろそろネタがなくなってきました

・・・暁　楓

フンッ、これならさっきの赤のロックマンの方が、まだマシだったな

・・・プロメテ

・・・よかった、ネタはまだ無事だ・・・

・・・ヴァン

第３２話　一鉢合わせと守護騎士の思惑

なのは達とヴォルケンリッターの２回目の戦闘から数日後の、とある日曜日の朝。
八神家では、はやてと守護騎士４人が朝食をとっていた。

「今日は昼から検診やね」

「はい。私が送ります」

そうはやてとシャマルの何気ない会話。だが次の瞬間、「あっ！」とはやてが何かを思い出したような素振りを見せた。

「主はやて、どうしました？」

シグナムが尋ねる。

「今日、昼からスーパーでタイムセールスがあるんやった・・・」

「そういえば・・・そうですね・・・」

５人の食費と言えば、かなりのものである。なのでこういった安く食材を買えるタイムセールスは見逃せないものなのだ。
シャマルはシグナムとヴィータに視線を向けた。

「あたしは、昼から老人会のゲートボールがあるし・・・」

「・・・私も、昼から道場での稽古が・・・」

ヴィータ、シグナムの順に自身の予定を告げる。守護騎士とはいえ、表向きははやての親戚で通っている。こういったことも必要なのだ。
続いてシャマルはザフィーラ（今は狼形態）に視線を向けるが、

「・・・我では人型でもまずい・・・・・」

「・・・・・ですよね」

ザフィーラは人型になっても、獣の耳と尻尾が残ってしまう。そんな姿で街を歩けば当然怪しまれる。
シャマルははやての検診の付き添いで不可能なため、残りの3人のうち1人が諦めるか、買い物を諦めるか・・・このままではある意味極限の2択を選ばねばならない。
そう、このままでは。
シグナムが稽古を諦めようと思ったその時、

「そうや！」

はやてが声を出した。思いついたのである。
全員を予定の地へ送り、なおかつ買い物ができる、そんな選択肢が。
はやてはポケットから携帯を取り出した。ボタンのプッシュし始める。

「・・・電話、ですか？」

「うん。シグナムには話したやろ？何日か前に図書館で会った男の子」

「ああ、はい」

シグナムに答えながら、はやては携帯画面の通話先を確認。

「その人が運び屋をやってるって話なんよ。で、運びだけじゃなく色んな依頼も受けてくれるそうなんや。こんなときこそ彼に頼めばええかなって」

そして通話ボタンを一押し。携帯を耳に当てる。

「あ、もしもし?うち、八神はやてや。うん、ちょっとお願いしたいことがあってな。・・・うん、昼の1時に来れる?あ、家の場所は・・・あ、うん。・・・・・そうそう、後親戚の人達の紹介もしてええか?・・・うん。それじゃあまたなー」

はやては電話を切り、携帯を仕舞うと、シグナム達の方を見て親指を立てた。

「よしっ、大丈夫!これでいけるで!」

その言葉に騎士一同はホッと一安心。

「ところでその運び屋の人って、どんな奴なんだ、はやて?」

一安心したところでヴィータが質問。

「優しい人やで。あとあの緑色の瞳は綺麗やったな~・・・」

はやては答えながら、初めて会ったあの場面を思い出し、少し顔を赤く染めた。

「ま、まあとりあえず、昼の1時ごろに来るから、その時名前教え

るなー」

そう言って、はやては朝食の後片付けに入った。

ＰＭ０：５０頃。

ヴァンは地図を頼りにある目的地へと足を運ばせていた。とある少女からの依頼である。

依頼内容は彼女の家で確認。あと、親戚の人達の紹介もしたいらしい。

ハラオウン家で彼女からの電話をもらって、通話終了後、フェイトと遊びに来ていたなのはがそれぞれバルディッシュとレイジングハートを突き付け、

「ヴァン？今貴方に電話をかけてきた人はだぁれ？女の子の声だった気がしたんだけど」

「ヴァンさん、ちょっと“お話”しよう？」

と言ってきた。笑顔ではあったのだが、目だけ笑っておらず、瞳は単色になっていた。はっきり言ってメチャクチャ恐ろしいものだった。

とりあえずその修羅２人から逃げ、目的地・・・八神家へと到着。

「そういや図書館で会ってから数日ぶりになるな～」

そんなことを思いながら玄関のインターホンを一押し。

ピンポーン、という音が玄関の扉越しに聞こえてくる。

「あ、今行くでぇー」

はやての関西弁が聞こえ、少しすると扉が開いた。

「久しぶりやなー。さ、入って入って」

はやてに連れられ、ヴァンはリビングへと入る。

リビングへの扉が開かれる。

「紹介するな。この人達が今一緒に住んでる親戚や」

リビングに入ったヴァン。

そして、仰天した。

「右からシグナム、シャマル、ヴィータ、そしてペットのザフィーラや」

（なっ・・・！！）

そこには、シグナムら守護騎士４人が揃っていたということが。

（知らぬ間に敵陣に突撃していただとぉぉぉ！！？）

顔に出さないようにヴァンは驚いているが、守護騎士達はヴァンを見て穏やかな者、少しだけ眉を動かす者、特に表情を出していない狼といった感じだが、誰一人として驚きの表情はなかった。殺気もない。

（落ち着け、ＣＯＯＬだ。ＣＯＯＬになるんだ俺。幸いあいつらはロックマンとしての俺しか知らない。まだ俺がヴァンだって気づい

ては－－－）

「みんな、紹介するな。この人がヴァンさん。図書館で知り合った人や」

（・・・そうだ。ＣＯＯＬになれよ俺。こうやってばれることぐらい予想がつくはずだろ俺）

「「「「！！」」」」

シグナム達は驚いた。それと同時に殺気がヴァンに向けられる。

（やべーよ、殺気がビンビンになったよ。あのヴィータなんか目に見えるくらい睨んでるよ！つーかなんでここにいるんだよ！やべ、今すぐにでも逃げたい！！）

「・・・？みんなどうしたん？」

全員黙りこんだこの状況を見て、事情を知らないはやてが尋ねた。ヴァンは慌てて引きつった表情のまま答える。

「あ、ああ。実は、ちょっとした知り合いでさ！でもその時は仮装した姿だったから、俺がヴァンだってことにびっくりしてるんだよ！な！？」

ヴァンはシグナムらに視線を向ける。その表情からは“話を合わせて”というメッセージがオーラとして放たれている。

「へー。そうなんシグナム？」

「あ、まあ・・・そんな感じです」

「そか。それで、ヴァンさん。頼みたいことなんやけど・・・」

はやては1枚のメモと財布を差し出した。メモには食材が書かれており、その一部には横に時間も書かれている。はやての依頼は、タイムセールスに合わせてメモの品を買い揃えること。

「・・・なるほど」

「今日はみんな予定があって・・・お願いできへんやろか?」

「まあ、問題ないけど・・・」

そこでヴァンははやてに気づかれないように視線をずらした。シグナム達は相変わらず睨んでいる。否、先程よりも視線がきつい。わからないことはない。このままはやての依頼をこなしに外へ出ればそのまま管理局へ連絡すると疑われる。それをなんとかしなければ。

「なあ、この大きな犬、確かザフィーラ、でいいんだよな?」

「ほえ?うん、そうやけど?」

突然話が変わり、はやては少し驚いた。

「みんな、予定があるんだろ?ならザフィーラの散歩もついでにやっておこうか?」

ヴァンは散歩、という口実で自分の監視役を置くことにした。

「え、ええの？」

「ああ。というか、大型犬の散歩って、一度やってみたかったんだよ。な、いいか？」

適当に嘘をつく。というか、そうしなければこっちが色々と危ない。頼む、そうなってくれ。

「うーん、それじゃあええよ。ザフィーラ、ちゃんとええ子にするんやで？」

作戦成功。シグナム達の殺気も少しだけ弱くなった。

「それじゃあ、早速行ってくるよ！」

ザフィーラを連れ、ヴァンは買い物という依頼をこなしに向かった。

スーパーでの買い物も終わり、今現在ヴァンとザフィーラは近くの公園に来ていた。

幸運にも人がほとんどいないその公園のベンチにヴァンは腰掛け買った食材の入った袋を隣に置く。

「・・・・で、あそこに勢揃いしてたってことは、はやてが闇の書の主なのか？」

「・・・・・・・・」

ザフィーラは答えない。だが、内心焦っていた。

とりあえず買い物時の管理局へと連絡はなかったが、このまま依頼が終了し、ヴァンが帰ってしまえば監視できず、通報される。だが、ヴァンはシグナムを打ち負かした強者・・・自分でも勝てるかどうか・・・でも、

「・・・主のため、それが例えかなわぬ者だとしても、命に替えても主を守護する！」

ザフィーラは狼形態のまま身構えた。が、

「早まるなよ。俺は管理局にばらすなんて一言も言っちゃいないって」

「！？」

ザフィーラは驚く。
ヴァンは続けた。

「1つだけ、教えてくれ。お前達が闇の書の完成を目指しているのは、それではやてを救うためなんだろ？」

「！？・・・なぜ、それを！？」

「あいつが力を求めているようには見えない。それに、お前達の戦い方が、俺と少し似てるような気がしてたんだ。何かを守るためのものに、な」

「・・・・・」

ザフィーラは黙った。この者ならば、信用できる気がする。

「・・・ヴァン、話を、聞いてくれるか?」

「・・・ああ」

ザフィーラは話した。
自分の主、はやては幼いころから闇の書と繋がっており、闇の書に呪いをかけられていること。
その呪いが原因ではやては足が不自由となっていて、その呪いが足から徐々に上まで広がってきていること。
そこで自分達は蒐集をではやてを闇の書の主とすることで、その呪いから解放、はやてを救おうとしてきたこと。

「自分の主を呪う、か・・・」

「・・・頼む、このこと・・・主のことは、管理局には言わないでくれ・・・」

ヴァンとは本来敵同士である。だが、もうそう言ってられる状況ではないのだ。
ヴァンの答えは、

「ああ、いいぞ」

結構あっさりしたものだった。

「本当か!?」

「ああ、お前にも、守りたいものがあるんだろ?それを壊すことなんかしないさ」

ヴァンは優しく言った。そして買い物袋を持って立ち上がる。

「じゃ、そろそろ行こうぜ」

「うむ」

歩き出そうとしたその時。

「ん？どうしたモデルＺ？」

ヴァンの足が止まった。

「？どうしたヴァン？」

「いや、ちょっとモデルＺから」

「モデルＺ？」

「ライブメタルっていう、俺が戦う時に使うものなんだけど、ちょっと待ってくれ」

歩き出そうとした時、モデルＺが『頼みがある』とヴァンを呼んだのである。

「頼みってなんだモデルＺ？」

『俺をザフィーラに預けてほしい』

「はあ？」

訳がわからず、ヴァンは片眉を上げた。

『闇の書について、確かめたいことがある。それに、俺を管理局に言わないと約束した証拠にすれば、シグナムらも納得するだろう』

「まあ・・・わかった」

ヴァンはホルダーからモデルZを取り出し、ザフィーラに差し出した。

「む、これは？」

「モデルZがさっきの話の証拠に自分を預けてくれって。デバイスを通せばお前達もライブメタルの声を聞けると思うから」

「そうか、なら預かっておこう」

ザフィーラはモデルZをくわえる。そして八神宅へと戻った。ちなみに八神宅に最初に戻ったのはヴァンとザフィーラだった。ついでに、ヴァンがハラオウン家に戻ると、ヴァンが逃げたために先送りにされたヴァンとフェイト、なのはの“お話”が実行されたのを記しておく。

「いや、ちょっと待てよ。今回はただ依頼を受けただけで――」

「「問答無用！！」」

「う〝えああっ！！」

説明も虚しく、ヴァンは2人の砲撃の餌食となった。

（・・・あれ、フェイトはわかるとして、なんでなのはからも砲撃を受けてんの、俺？）

宙を舞いながら、ヴァンはそんなことを思った。

第３３話ー第3戦（前書き）

・・・・プロメテ・・・・・・ずるい・・・・・・

・・・パンドラ

ごめんなさいパンドラちゃん！！

・・・プロメテ

ゼクス公式質問コーナーネタｗｗｗ

・・・暁　楓

第３３話－第３戦

ヴァンが闇の書の主がはやてであることを知ってから数日後。
ヴァンは約束した通りはやてのことを他の誰にも言わずに日常を過ごしていた。
ユーノは本局の巨大データベース、“無限書庫”でグレアムの使い魔、アリア、ロッテと共に闇の書について調べている。
リンディも本局へ出向いて、アースラの整備状況の確認などをしている。
そしてその間、エイミィが駐屯所の指令を担っている。
・・・とまあこんな感じで、その他は大体いつもと同じだ。
今日はエイミィが買い物から帰ってきて、冷蔵庫に買ったものを入れている最中の時であった。

「しっかし、アルカンシェルかぁ・・・あんな物騒なもの、最後まで使わなければいいんだけどねぇ～」

エイミィが言った。アルカンシェルとは今回のアースラの整備で取り付けられた武装のことだとヴァンは聞いている。

「船艦の武装の心配もそうだけど、貴方も大丈夫？司令官代行なんでしょ？」

「責任重大～！」

プレシアが言い、子犬姿のアルフが冷やかしの言葉を送った。

「はは、大丈夫だよ。緊急事態なんてそう簡単に起こるものなんかじゃ・・・」

カボチャ片手にそう言った時である。
緊急事態のアラートが鳴った。
その場にいたなのは、フェイト、アルフ、プレシア、ヴァンは少し気まずそうな顔でエイミィを見た。
エイミィは、顔を凍らせて手に持っていたカボチャを落とした。

「・・・マジ？」

「文化レベルゼロの管理外世界。武装局員を向かわせて、結界を張るには時間がかかるなぁ・・・」

オペレーションルームで情報を確認しながらエイミィが言う。要するに、現地での足止めが必要になる。
画面に、その世界にいる騎士の画像が映し出される。

「シグナム・・・」

そこには、シグナムと人型のザフィーラがいた。何か会話をしている。
フェイトは抱いていたアルフと顔を見合わせた。お互いに頷き、エイミィに言う。

「私、行きます！」

「あたしも行くよ！」

「わかった！転送ポートを準備しとおくね！なのはちゃんはここで

待機！ヴァンさんはフェイトちゃんと一緒に行って！」

エイミィが指示を出す。

「はい！」

「ああ！」

なのはとヴァンがそれぞれ返事をし、フェイト、アルフ、ヴァンがこの部屋から出ようとする。

「フェイト、気をつけて！」

「うん。行ってくるよ母さん！」

心配するプレシアに、フェイトは答える。

「ヴァン、貴方も気をつけて」

「ああ。行ってくる！」

3人はシグナムとザフィーラのいる世界へと向かった。

一面が砂漠で覆われた世界で、シグナムは巨大なムカデのような化け物と戦っていた。

「なるほどな・・・ヴィータが手こずるわけだ・・・」

なかなか倒れない相手に苦戦している。
シグナムが改めてレヴァンティンを構えた時、ムカデもどきは触手でシグナムを背後から絡め捕った。

「っ！しまった！」

シグナムは振り解こうとするが、ムカデもどきは触手でさらにシグナムを強く締め上げる。

「っ・・・ぐあああ！！」

シグナムが悲鳴を上げた、その時。
いくつかの金色の魔力弾がシグナムを締める触手を撃ち抜き、そのままムカデもどきに当たった。
シグナムが解放されると、今度は雷がムカデもどきに直撃し、ムカデもどきは倒れた。
シグナムが顔を上げると、そこにはフェイトの姿があった。

『フェイトちゃん！捕まえるんだよ！助けてどうするの！？』

通信でエイミィが怒った。

「あ、すいません。つい・・・」

フェイトは謝った。その時、その助けた相手が声を出した。

「礼は言わないぞ、テスタロッサ」

「邪魔、しましたか？」

「蒐集対象を潰された」

地面に倒れているムカデもどきは、すでに絶命していた。蒐集は、生きている生物のリンカーコアでなければならない。

「まあ、悪者の邪魔が、私達のやることですから」

「そうか・・・私達は悪者だったな」

シグナムはレヴァンティンにカートリッジを込める。

（ここは引きたいところだが、速さはテスタロッサの方が上・・・戦うしかない、か・・・）

互いに自分の得物を構える。

次の瞬間、２人は激突した。

同世界のとある場所で、ザフィーラはシグナムがいるであろう方角を眺めていた。

「ご主人様が心配かい？」

声が聞こえて、ザフィーラは振り向くと、そこにはアルフがいた。

「シグナムは我らの将だが、主ではない」

ザフィーラは構えをとった。

「あんたの主は闇の書の主ってわけだね・・・」

アルフも握り拳を固め、構えをとった。

「・・・あれ、どこここ？」

ヴァンは誰もいない砂漠に1人取り残されていた。

「なんで俺はこんなところに取り残されなきゃいけねーんだ？」

ヴァンはポリポリと頭を掻いた、その時、

「キシャァァァァ！！」

「なんで俺はこんな目に会わなきゃいけねーんだ！？」

ムカデもどきが現れ、ヴァンに襲いかかった。

「くっ、モデルF！」

ヴァンはモデルFXに変身し、メガトンクラッシュをムカデもどきの体に叩きつけた。

ムカデもどきの体が吹き飛ぶが、硬い甲殻によって護られそれだけで済み、ムカデもどきは地面に潜り込んだ。

地面から触手が襲いかかる。

「モデルH！」

ヴァンはモデルＨＸとなり、空中に避難する。

『ヴァン、解析結果が出たぞ。甲殻同士の隙間を狙え』

モデルＨは自身の能力で、敵の弱点を見極めることができる。
ムカデもどきが顔を出し、自身で襲いかかった。
ヴァンは最低限の移動で回避し、オーバードライブをかけて甲殻同士の隙間・・・ムカデもどきの体に直接斬撃をいれた。

「キシャァァッッ！！」

雷を纏った斬撃はムカデもどきを感電させ、ムカデもどきは倒れた。
ヴァンは地上に降りる。

「・・・さて、どの方角に2人がいるんだ?」

ヴァンはため息をつき、走り始めた。

その頃、エイミィは新たに反応をもう1つキャッチした。
モニターに映されたのは、闇の書を持って飛んでいるヴィータ。

「な、こっちが本命!?」

「エイミィさん、私、行きます！」

モニターに映るヴィータを見て、なのはが出撃した。

ヴィータは飛びながら、シャマルと交信していた。
シャマルの話では、シグナムとザフィーラが管理局と戦っているらしい。
自分もそこに向かおうと考え、ふと飛行する体を止めた。
目の前に、自分とよくぶつかってくる、白い魔導師がいたからだ。

「てめぇは・・・！」

その魔導師の名を叫ぼうとして、ヴィータが思考した。
えーっと、名前はたしか・・・高町・・・高町な、な・・・・・・

「高町、なんとか！」

「な・の・は!!」

言ったが、すぐに否定された。まあ、なんとかという名前なんてないだろう。

「ヴィータちゃん。やっぱり、お話、できないかな？お話したら、もしかしたら協力できるかもしれないよ」

「うっせー！管理局の言うことなんか信用できるか！」

なのはが説得するが、ヴィータはすぐに断った。一応、ヴァンはある程度信用しているが、それとは別である。

「私、管理局じゃないよ。私は民間協力者」

なのはは両手を広げ、優しく語りかける。

ヴィータはなのはの優しさが、一瞬だけはやてと重なったように見えた。
少しだけ迷いが生じる。
だが、はやてを救うため、その迷いを振りほどき、魔力の鉄球を取り出した。

「吠えろ、グラーフアイゼン！！」

アイゼンでその鉄球を叩く。
叩いた瞬間、爆音が鳴り響いた。その爆音に耐えられず、なのはは耳を塞いだ。
その隙にヴィータは一気に距離を離す。
なのはが気づいた頃には、ヴィータは目視も困難な程の場所まで離れていた。
ヴィータはここまで離せば大丈夫だろうと、転移するため魔法陣を展開した。
だが、ヴィータはなのはの実力を見誤っていた。

「レイジングハート！」

なのはは待機状態にしていたレイジングハートを、シューティングモードにして構える。

「いくよ。久しぶりの遠距離砲撃！」

レイジングハートの先端に光が収束される。

「まさか、撃つのか？あの距離から！？」

その、まさかである。

「ディバイィィィン、バスタアアァァァ！！」

閃光が発射された。
それはヴィータ一直線に向かっていき、ヴィータに直撃。ヴィータは呆気に取られて何もできなかった。

（・・・やりすぎたかな？）

そうなのはが思った。
だが、煙が晴れると、その考えは覆される。
仮面の男が、なのはの砲撃を防いでいたのだ。
さらに仮面の男はバインドでなのはの動きを封じた。

「なっ！？」

なのははなんとかバインドから抜け出すが、その隙にヴィータも仮面の男も姿を消していた。

ガァンッ、ギィン！！

一方のフェイトとシグナムは開戦から数分経つが、それでも決定打を打ち込めずにいた。
所々甲冑が裂け、血を流し、肩で荒く息をしながらシグナムはフェイトを見据える。

（ここにきてなお速い・・・目に追えない動きが出てきた・・・）

一方のフェイトも、バリアジャケットが所々裂け、そこから血を流し、肩で荒い息をしていた。

（強い・・・クロスレンジもミドルレンジも圧倒されっぱなしだ。今は速さでごまかしているだけ・・・当たれば、やられる・・・）

シグナムとフェイトは互いに得物を構える。

（シュツルムファルケン・・・当てられるか？）

（ソニックフォーム・・・やるしかないかな？）

足を半歩前にずらす。

そして互いにに動き出し、勝負に出る――

――ドスッ

「――え？」

フェイトの胸から腕が貫通した。

「なっ！？」

シグナムが驚いて足を止める。フェイトの後ろには、仮面の男がいた。

貫通したフェイトの胸からは血は出ていない。シャマルがなのはのリンカーコアを捕まえたときと同じ魔法だろう。

仮面の男はフェイトを貫いた手を握り締め、魔力を放った。

「あ・・・あああああああ！！」

魔力を直に流し込まれ、フェイトが悲鳴を上げた。シグナムが先程上げた悲鳴とは比べ物にはならない。

「貴様ぁ！！」

シグナムが激昂し、叫ぶ。
仮面の男は、ゆっくりと握った手を広げた。
その手には、フェイトのリンカーコアがあった。

「！？」

「さあ、奪え・・・」

仮面の男は、囁くようにシグナムに言った。

第３３話ー第3戦（後書き）

楓

「どうも、一気に3話更新しました。
最近、感想やメッセージに『（特定した台詞を）誰が言っているのか教えてほしい』というものがたくさん来て意気消沈は大したし・・・なかった作者です。
・・・でも、これほどまでに台詞の解説の質問が来るって、そこまでわからないんですかね？
いや、リリなのを詳しく知らない、というのも当然ありえますよ？むしろそういう人でも見てくださっている方がいるってことは嬉しい限りです。
でも、それでも多すぎるんじゃね？と思えるような数の台詞が質問の対象として上げられるんですよ。
そのなかには周りの言葉とかで明らかになるようなものもあるんですがね・・・
別に質問を拒否する意味で言っているわけではありません。質問や指摘で僕自身の文章の過不足（？）に気づくこともあります。
でも、小説で少しわからなければすぐ報告、ではなくて、周りを見て、ここはどんな場面で、誰々がいるといったことをよく解釈した上で、不明な点を報告してほしい所存なわけあります。できればそういったことを意識してほしいです。
・・・これ、後書きに書いてよかったのか？
とにかくそういう愚痴です。
では」

第３４話－激昂（前書き）

結局・・・お前が全て・・・！母さんも・・・！先輩もっ・・・！・・・プレリーのお姉さんも・・・・・！

・・・ヴァン

よく聞いてみ？“プレリーのお姉さん”ってところが裏返っているから！

・・・暁　楓

活字じゃわからないよ～！

・・・なのは

第３４話－激昂

数分後、シグナムはフェイトからのリンカーコアの蒐集を完了した。
仮面の男はフェイトに貫いた腕を引き抜いた。支えのなくなり、意識を失っているフェイトはそのまま倒れ込んだ。

「・・・・・っ」

シグナムはフェイトへと走り寄り、フェイトを抱き起こした。

「ふん、早く闇の書を完成させろ」

仮面の男はそう言うと、転移の準備をした。
が、次の瞬間、右から強烈な衝撃が入った。

「が、あっ！！」

仮面の男は吹っ飛び、何度も砂地を跳ねて転がった。
全身を砕かれるような衝撃と痛みに感じながら仮面の男は見た。

「・・・どこへ行く気だ、お前」

そこには、激昂し、強烈な殺気と怒気を込めた目で自分を睨む、炎のロックマンがいた。

仮面の男は、ヴァンの殺気を見て一瞬震え上がった。

（なぜだ？相手はせいぜい１５歳程度の少年のはずだ。なのになぜ

これほどまでに悪寒を感じている？）

冷静になろうとするが、激痛と殺気がその考えをもみ消していく。

「フェイトをやったのは、お前の仕業だな？」

ヴァンはアームＬとアームＲにエネルギーチャージする。

「何が目的だ？」

仮面の男は答えない。

「答えろっ！！」

ヴァンはダッシュで一瞬で距離を詰めた。

「何が目的だ！！」

怒りにまかせてチャージされたアームＬのメガトンクラッシュを撃つ。

「くっ！」

仮面の男は右腕を盾としてガードする。

アームＬと右腕が衝突し、力負けした仮面の男が吹き飛ばされた。

「ぐあっ・・・！」

仮面の男は砂地を跳ねた後、着地するが、右腕が言うことを聞かなくなった。おそらく、骨が砕けたのだ。

追い討ちをかけるべく、アームRを少し引かせた状態でヴァンがダッシュする。
仮面の男は接近するヴァンを見た。殺気は変わらない。自分を叩き潰す気だ。

「はぁっ！」

仮面の男は地面にかかと落としをし、砂を跳ね上げた。

「っ！」

跳ね上がった砂がヴァンにかかってきて、ヴァンは顔を腕で覆い隠した。
砂が収った後ヴァンが顔を上げると、そこに仮面の男はいなかった。

「・・・くそっ！！」

ヴァンは仮面の男を殴るつもりだった、今やり場のなくなったアームRを地面に叩きつけた。
衝撃を受けた砂が一瞬吹き上がった。

「・・・・・」

シグナムはフェイトを抱き抱えたままその様子を見ていた。
以前の戦いで自分の一撃を受けても怒ることのなかったヴァンが、フェイトがやられたことで激昂していた。
その以前、なのはのリンカーコアを蒐集していた時に怒ったヴァンと同等・・・いや、それ以上。
シグナムはこの前のザフィーラの話を思い出した。
ヴァンは私達の戦いが自身の守るための戦いと似ていたから、私達

の蒐集活動の真の目的に気づいたのだと・・・。
まさにその通りだ。ヴァンがテスタロッサ達を守るための戦い、それを傷つけた相手を許さないのと同じように、私達も、主はやてを守るために戦っているのだ。

「ヴァン・・・」

シグナムはヴァンに近寄った。
ヴァンは振り向く素振りを見せない。

「・・・すまない」

それで済むとは思ってはいないが、シグナムは謝った。

「・・・・・」

ヴァンの回答は、無言だった。
シグナムはフェイトをヴァンの背中にもたれさせる。
ヴァンがシグナムの方を向いた。

「テスタロッサにも目を覚ましたら、すまないと伝えてくれ。・・・では、な」

シグナムはその場で転移した。

その後ヴァンとフェイトはザフィーラに逃げられたアルフによって本局へと運ばれた。
フェイトはリンカーコアを蒐集されたこと以外は特に大したことは

なかった。
一応フェイトの看病にプレシアを尽かせ、現地に赴いた3人とリンディ、エイミィ、クロノ、ユーノ、ロッテ、アリアはアースラの会議室で対策会議をする事となった。

「外部から素通りでのハッキングか・・・」

クロノが呟く。実はなのはが出撃した後、エイミィの司令部は何者かからのクラッキングを受けていた。

「ごめん・・・でも、セキュリティーを外部から素通りするなんて・・・」

エイミィは謝るが、本局と同じセキュリティーを使っている。こんな簡単にハッキングされたことに疑問を持っていた。

「強力なハッカーがいるってことは、組織ぐるみでやってるのかなぁ・・・」

そうロッテは不安げに言った。
その言葉に他の人達も不安になる中、ヴァンはじっとロッテを見ていた。

「・・・？どうしたのかな、ヴァンさん？」

ロッテが聞くと、ヴァンは質問で回答した。

「ロッテ、だっけ？その右腕はどうしたんだ？」

ヴァンが見ていたのは、ロッテの右腕、ギプスで固定された右腕だ

った。
ヴァンは、その右腕に疑問を持っていた。

「え？ああ、これはつい先程転んじゃって。ははは・・・」

「おっちょこちょいな性格が災いしたんじゃないか？ちゃんと気をつけろ」

呆れるクロノ。他の人達もその回答でとりあえず納得しているようだが、ヴァンは納得できずにいた。
右腕と言えば、仮面の男はメガトンクラッシュを撃ち込まれた時、右腕でガードしていた。
あの時のことは詳しく確認できなかったが、メガトンクラッシュを撃たれて骨が無事で済むことはないだろう。ましてや、手加減を知らないモデルFと、ヴァンが怒りに任せて本気で潰しにかかったのであればなおさらだ。

（2人の仮面の男に、2人の使い魔・・・そういえば、クロノの父さんは昔、闇の書の事件に関わって死んだんだって、リンディから聞いたことがあるな・・・確かそのクロノの父さんの上司は・・・）

そこで、ある仮説が立った。

（まてよ・・・そうか！仮面の男2人の正体って、それとそいつらの目的は・・・！）

ヴァンが辿り着いた仮説は、全てにおいて説明がつく、十分にありえる話だった。

（・・・後は、証拠か？それとやれる手を出しておけるか・・・？）

そんなことを考えているうちに、会議は終了。本部はアースラに戻すことになった。

「・・・・うっ、んん・・・っ」

少々うなされながらも、フェイトは目を開けた。

「フェイト・・・！」

ぼんやりと、目の前に映され、自分を呼びかける声の主を見た。半年前に分かり合ってから、日常でずっと支えてくれる大切な人物。

「母、さん・・・」

「フェイト・・・！よかった、目を覚ましたのね！」

プレシアは笑顔になり。フェイトの手を握った。

フェイトは首だけを動かして周りを見た。白く殺風景な部屋。アースラの医務室だった。

「あれ、私・・・」

フェイトは記憶を辿った。

確か、自分は砂漠でシグナムと戦っていて・・・

「後ろから襲われて、気を失ってたのよ」

プレシアはその後、リンカーコアを奪われたこと、ヴァンがフェイトを襲った仮面の男と戦ったこと、そしてシグナムからの伝言のことを説明した。

「・・・ごめんなさい、母さん。心配かけちゃって・・・・・」

奇襲だったため、必要ないことなのだったが、フェイトは謝った。

「いいのよ、フェイト。それに、ここにいるのは私だけじゃないわ」

「え？・・・あ」

プレシアに言われ、ようやくフェイトはベッドにもたれるように眠っているアルフに気づいた。

「・・・ん～、フェイトォ～・・・・・」

寝言でアルフはフェイトの名を呟いた。

「・・・ごめんね。そして、ありがと、アルフ」

フェイトはアルフの頭を優しく撫でた。

翌日の朝。

八神家のリビングで、ヴォルケンリッターは会議をしていた。その中にはモデルZの姿もある。

「・・・なあ、蒐集したリンカーコアが減ってるような気がするん

だけど？」

闇の書を広げながら、ヴィータは唐突にそう言った。

「それは、この前の結界破壊の砲撃で結構消費したから、それのせいじゃない？」

シャマルが理由を提示するが、ヴィータはかぶりを振った。

「そうじゃなくてさ・・・魔導師とか、感情的な魔導生物から蒐集した後・・・ページ数は変わらないけど、なんか減ってるような気がするんだよなぁ・・・」

「気のせいだろう。闇の書は使われてない以上、減ることはありえん。モデルZも、闇の書を見ているからわかるだろう？」

シグナムは宙を浮くモデルZを見た。ヴァンが事情を知った日、会議の時にザフィーラがくわえてきたことには驚いたが、ことを聞いてこのまま預かっている。ちなみに通訳は基本シャマルのクラールヴィントに任せている。

『・・・俺にはよくわからんが、たまに闇の書から違和感を感じたことがある』

「何？」

ザフィーラが聞き返した。

モデルZは続ける。

『たまにだが、そんな時がある。何があるのかはわからないが、そ

の様子だと、お前達もわからないようだな』

「・・・あたし達、何か大事なことを忘れてるのかな・・・・・」

ヴィータが不安そうに呟いた。

沈黙が流れた。

・・・ガタンッ！

「「「「！？」」」」

『・・・！』

突如、何かが倒れるような音がした。

ここにはヴォルケンリッターが全員いる。となると発信源は１つした考えられない。

「はやて！！」

ヴィータが真っ先にはやての寝室へ走り出した。

それにシグナム、シャマル、ザフィーラ、そしてシャマルのポケットに入れられてモデルＺも続く。

寝室には、床に倒れ、苦しそうに胸を掴むはやてがいた。

シグナムは急いで救急車を呼び、シャマルは回復魔法をかける。

――ドクンッ

ソウダ・・・守護騎士・・・

モット苦シメ・・・悲シメ、怒レ！

ソノ心ノ闇ガ、我ノ糧トナルノダ・・・！

・・・時間は、刻一刻と迫っていた。

第３５話　闇に潜む影（前書き）

お前だけにかっこつけさせたりなんかしないさ。いくぞ！ヴァン！

・・・ジルウェ

最後の出番だからなｗｗ

・・・暁　楓

第３５話 闇に潜む影

アースラのオペレーションルーム。
モニターに映された無限書庫のユーノが、これまで集めた情報の報告をした。
聞いているメンバーは、リンディ、クロノ、エイミィ、アリア、そしてヴァン。

『まず、“闇の書”っていうのは本来の名前じゃない。正式名称は“夜天の魔導書”。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた、主と共に旅する魔導書・・・ヴァンさんには、魔法の百科事典、とでも言えばわかりやすいかな？』

「ああ。わかるぞ」

ヴァンが返事をする。
ユーノは報告を続けた。

『破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う』

「ロストロギアを使って、無闇やたらに莫大な力を得ようとする人が今も昔もいるってことね」

アリアが呆れた口調で言った。力を欲し、狂った人というのはヴァンも見たことがある。

「転生と無限再生はその改変が原因か」

クロノが呟いた。

『一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊のために。だから、これまでの主はみんな完成してすぐに・・・・・』

その身を滅ぼした、とは誰もが言わずともわかった。

「ああ。停止や封印方法についての資料は？」

クロノが尋ねる。

『今調べてる。ただ・・・・・』

「どうした？」

クロノが聞くと、ユーノは答えた。

『その改ざんするためのプログラムに、１つのロストロギアが使われた、という記述を見つけたんだ』

「ロストロギア？なんというものか特定できたのか？」

クロノはさらに聞くが、ユーノは首を横に振った。

『その改ざんを行った過去の持ち主が見つけて、その力から便宜上そう言ってるだけで、ロストロギアの指定どころかその存在すら知られていなかったみたいだ。でも、記述には“白き絶望”って書かれてた。ものを狂わせる力を持ったものらしい』

「ものを狂わせる、白き絶望、か・・・・・」

ヴァンは思い出した。ジュエルシードで飛ばされる前まで、ずっと戦い、破壊し続けてきた、絶望を食い荒らし人々を狂わせる、生きた金属。

「まさか・・・な・・・・・」

「どうしたヴァン。何か心当たりでもあるのか？」

「いや、なんでもない」

クロノの質問にヴァンは首を横に振り、改めてその可能性を否定した。

「そうか。それじゃあユーノは引き続き闇の書の対策方法を調べてくれ」

クロノが指示を出す。

『うん。白き絶望についても、できる限り調べてみるよ』

翌日。

なのはと、体力は回復したフェイトは学校へと向かっていた。

フェイトはまだリンカーコアが回復しきっていないため、しばらくこっちで待機、ということであった。

バスに乗り、学校へ到着。

教室でアリサ、すずかと会ったのだが・・・、

「入院？」

すずかから、すずかの友達である八神はやての入院の話が聞かされた。なのはとフェイトも、はやてのことはすずかから友達としてのことを聞き、知っている。

心配そうに相談するすずかに、みんなでお見舞いに行こうとアリサが提案。

でももしかしたらのためにと、はやてと同居している人にはやてへのメッセージつき写真を携帯に送ることにした。

それは大体昼休み頃の話であった。

時間はさかのぼり、ＡＭ７：３０頃。

シャマルは１人家の掃除をしていた。

シグナム、ヴィータ、ザフィーラはすでに蒐集活動で出かけている。

はやては入院中。なので残ったシャマルが家事をこなしていた。

・・・シャマルとはやて以外に家事をやれる人物がいるかという問題もあるが。

まあとにかく、そうやって掃除が一通り済んだ時であった。

はやての電話が着信音を鳴らした。

その電話の相手はヴァンだった。

「ヴァンさんから・・・どうしたのかしら？」

通話となれば、自分が出なければならない。

ボタンを押し、携帯を耳に当てた。

「はい、もしもし？」

『もしもしって、その声はシャマルか？・・・はやてはどうしたんだ？』

「はい、実は・・・」

海鳴市の人気のない場所で、ヴァンはシャマルとの通話ではやての今の状況を聞いた。

「闇の書の呪いが進行、加速している・・・」

『はい・・・・はやてちゃんは何事もないようにしてますが、急に苦しみ出したことがあったので・・・』

「・・・・・・・」

ヴァンは闇の書についての本当のことを言うべきか迷った。だが、この状況で言っても聞かないだろうし、聞いたとしてもはやての命が危険な状態だ。うかつに喋ることはできなくなっていた。

『それで・・・何かあったのですか？』

シャマルが尋ねてきた。

「・・・いや、そっちのことが気になっただけだ」

ヴァンはとっさに嘘をついた。

『そうですか・・・あと他に要件はありますか?』

「いや、ない。・・・騎士達に伝えといてくれ。無茶して、はやてに心配かけることにはなるなよって」

『・・・はい、わかりました。では』

通話はここで終了した。

ヴァンは電話を一旦切ると、次の通信相手の通話にかかった。

プレシアは今、1人今日の分の買い物を済ませ、マンションへ戻ろうとしている最中であった。

歩いていると、ポケットにある携帯から着信音が聞こえた。フェイトが携帯を買ったついでに自分も携帯を買ったのである。

通信は、ヴァンからであった。

「もしもし、ヴァン?どうしたの?」

特に大したことと思わずに聞いたが、プレシアは次にヴァンの言った言葉に表情を険しくした。

『仮面の2人の正体の予想がついた』

との言葉に。

「・・・犯人は?」

プレシアはすぐに尋ねた。
娘のフェイトに不意打ちを仕掛けた奴らだ。許す訳がない。

『仮面の奴らの正体は、ロッテとアリア・・・そしてその2人を動かしているのはそいつらの主人、グレアムだ』

「！」

その言葉を聞いて、プレシアは驚いた。まさか、犯人がすぐそばにいるとは思わなかった。

『グレアムは、昔闇の書の事件でクロノの父さんを亡くしている。仮面の奴らは2人、使い魔も2人。声や姿は変身魔法ってやつがあるからそれを使えばできるだろうし、それにロッテの右腕が砂漠の時に俺がやったものなら、あの怪我も納得がいく』

「じゃあ、グレアムの目的は・・・」

『闇の書への復讐・・・闇の書の封印のはずだ。完成を目指す理由は、完成前では転生機能のせいで封印ができないからだと思う』

「つまり、完成した後が封印のカギなのね・・・それで、私は何をすれば？」

プレシアは新たに尋ねた。仮面の男の正体がわかったが、連絡を入れてきた理由がそれだけとは考えにくかった。何か、自分の協力が必要なことがあるはずだ。

『ジュエルシード事件の時に使ってた、あの次元魔法、だっけ。あれってどうやって座標を定めてるんだ？』

ヴァンが言っているものは、半年前なのはとフェイトの決戦後にプレシアが時の庭園からフェイトに向けて放った雷のことだ。

「ああ、あれなら何か目標となるものから座標を割り出して、そこの映像からさらにポイントを決めて撃っているけど・・・」

『その反応ってやつ、俺の通信機とかでも使えるか？』

「ええ。通信状態なら、それを元に座標を割り出すことは可能なはずよ」

顔はわからないが、そっか、という声を出しているヴァンは何か思いついている表情になっている気がした。

『なら、俺が言うことを聞いてくれ』

これで対策は立った、はずである。

様々な思惑が渦巻く中、闇の書の完成はもう少しのところまで近づいていた。

第３６話－サプライズ（前書き）

この国の歴史そのものがプロジェクトヘブンの一部なのだよ！

・・・セルパン

スケールでかいですね。へー

・・・暁　楓

作者がこのネタに疲れてきている！？

・・・ヴァン

第３６話－サプライズ

何日か過ぎ、今日は１２月２４日。クリスマスイブの日だ。
聖祥小学校はこの日が終業式で、なのは達４人は内緒で病院のはやての元へと向かう。
４人が向かっている途中で偶然ヴァンを発見。ヴァンは暇だったので、４人の話を聞いてそれに同行することとなった。
ヴァンにとってははやての闇の書の呪いの進行状況も見ておきたかった、というものもあった。
ちなみに、道中ではやてとは以前依頼された関係だとヴァンは説明した。
で、はやての病室前に到着。

（まあ、シグナム達は蒐集活動でいないかな）

そんなことを思いながら、すずかが開けるドアの向こう側を見る。

「「お邪魔します」」

アリサとすずかが先に入る。
そしてなのは、フェイト、ヴァンの順で部屋に入り、

「「「あ」」」

「「「・・・！」」」

守護騎士と、鉢合わせになってしまった。シグナムとシャマルとヴィータである。

（嘘おおぉぉぉぉ！！？）

予想外の展開に、ヴァンは心の中でシャウトした。

「・・・？みんなどうしたん？」

状況がわからないはやてがアリサとすずか以外の仰天している者全員に尋ねた。

「あ、あぁー、あれだ！先客がいたからビックリしたんだよ！な！？」

ヴァンが無理やり取り繕おうとし、シグナムとフェイトに話を合わせるよう視線を送った。

「は、はい。そんな感じですよ」

とりあえずシグナムはヴァンの話に合わせた。

「・・・それで、みんなどうしたん？」

はやてがすずかに聞くと、待ってましたとばかりに笑顔を見せたアリサとすずかが手にかけていたコートをからあるものを取り出した。

「「サプライズプレゼント！」」

「わあぁ、ありがとう！」

取り出されたプレゼントを見て、はやては満面の笑みを浮かべた。

「（おい、なんでこんな悪すぎるタイミングでお前らがいるんだよ！）」

「（いつまでも主に顔を出さない訳にはいかないから、今日は全員蒐集を休みにしていたのだ！お前達こそ、なんで何も連絡を出さずに来た！？）」

「（さっき見ての通り、なのは達がはやてにドッキリを敢行する計画だったんだよ！なにこれ、逆に俺がドッキリしたぞ！）」

「シグナムもヴァンさんも、そこで何コソコソしてるん？」

シグナムとヴァンの小声での会話に、はやてが尋ねてきた。はやての手には、先程のプレゼント箱が２つ抱えられている。

（念話ができない・・・ジャミングが張られている？）

フェイトはシグナムに念話を送ろうとするが、できない。シャマルが念話の妨害をしているのだ。

「あの・・・そんなに睨まないで・・・」

困惑しながらなのはは自分を睨んでくるヴィータに頼むが、

「睨んでねーです。元々こーゆー目つきなんです」

と言って睨むのをやめない。

「（やべーよ。ヴィータめっちゃ睨んでるぞ！おいシグナム。あれ

なんとかしろよ！）」

「（無理に決まっているだろう、こんな状況！どうやって止めるんだ！あ、主がヴィータを叱った）」

再びヴァンとシグナムの小声での会話をする。

小声で話し合うヴァンとシグナム、小声で話し合うフェイトとシャマル、さっきよりはましになったがやっぱり睨むヴィータと睨まれて困惑するなのは。そしてなにもわからずに首を傾げる残り３人。

そんなこんなな見舞いだったが、なんとか平穏無事（？）にすることができた。

そして夜。一旦すずか、アリサと共にヴァン達は病院を離れるが、家には向かわず、シグナムが指定したビルの屋上に向かった。

第37話一覚醒（前書き）

さあ・・・モデルV・・・！この国の恐怖と絶望を食らいつくせ！

・・・セルパン

第2章が終わったらこの名言集をやめようかな・・・・・

・・・暁　楓

第37話 覚醒

屋上では、シグナムとシャマル、ヴィータ、そして新たに駆けつけたザフィーラが待ちかまえていた。
そして、シグナムの話により闇の書の主がはやてであること、闇の書の呪いによってはやてに命の危機が迫っていることを、なのはとフェイトは知った。

「・・・もうすぐ、悲願は達成される」

シグナムは俯いた状態で語る。シャマルとヴィータも同じく俯いている。

「待って！闇の書を完成させたら・・・！」

「闇の書は、悪意ある改変によって壊れてしまっている。このまま闇の書を完成させたら、はやては・・・」

なのはとフェイトが説得を試みるが、ヴィータのグラーフアイゼンがなのはに振り下ろされた。

「きゃあ！？」

魔力壁によって直撃は避けたが、なのはは吹っ飛ばされ、金網に激突した。

「もう、少しなんだ。あと少しで、はやては助かるんだ。だから・・・だからっ・・・邪魔をするなぁぁぁっ！！」

ヴィータは涙を流しながら、甲冑を纏った。

「・・・我らはある意味、闇の書の一部だ。だから闇の書のことは我らが誰よりも知っている・・・・・我ら守護騎士、主の笑顔の為ならば騎士の誇りさえ捨てると決めた・・・我らはもう、止まれんのだ!!」

シグナムも涙を流しながら、甲冑を纏い、フェイトを睨んだ。
シャマルも、ザフィーラも自身の甲冑を纏った。
シャマルは念話妨害に集中する。
ザフィーラは、ヴァンを見据えて構えをとった。

「ザフィーラ・・・」

「お前も・・・自分が戦うのは、大切なものを守るためだと、わかっているはずだ・・・」

涙は流さないものの、ザフィーラの顔は限界ギリギリまで歪められている。

「我も、我が主を守るためなら、いくらでも己の手を血で汚しても構わん!!」

「・・・・・・・」

ヴァンは無言でモデルXを取り、ロックマンモデルXに変身する。
それを見てなのはとフェイトもデバイスを取り、バリアジャケットを纏う。
全員、はやてを助けたいと願っている。
なのに、意見の違いによって、対立し、争いあう。

悲しみの守護者と、悲しみを止めようとする者がぶつかり合おうとした。
その時、青色のバインドが、全員を捕らえた。

「ま、また!?」

なのはが辺りに視線を巡らせると、2人の仮面の男が目に映った。

(来やがったか!)

ヴァンは仮面の男2人を睨んだ。

「い、いつの間に!?」

シャマルが驚きの声を出した。仮面の男の1人が、闇の書を持っていた。

「残念だな。悲願が達成されるのは我らの方だ!」

仮面の男の1人が、まるで嘲笑うかのように言った。

「闇の書は完成してないのに、どうやって封印する気だ?双子の使い魔姉妹!」

ヴァンが叫ぶと、仮面の2人は仮面の上でもわかるぐらいに驚いた。

「こいつ・・・もうそこまで・・・!・・・いや、もう恐れる必要はないな。拘束され身動きのとれないお前に邪魔はできん!」

すぐに冷静になり勝ち誇った様子で言い放つが、ヴァンは笑った。

「いつ俺がやると言った？」

「何！？」

直後、空から雷が落ち、仮面の２人に直撃した。

「「ぐあああああっ！？」」

続いて雷はヴァン達の方に向かい、器用にバインドを焼き切った。
自由になったヴァンがＸバスターを放ち、２人を追撃。さらにバインドが現れ仮面の２人を拘束した。

「なっ！このぉっ！」

「くそっ、くそぉっ！」

２人はバインドから抜け出そうともがくが、そこに杖が突きつけられた。

「母さん！」

杖を持っているのは、プレシアだった。

「動かないで。そしてその変身を解いてもらうわ」

杖から魔力が放たれ、２人の変身が解ける。

「くっ・・・！」

「・・・・・っ」

「・・・ヴァンの、予想通りね」

2人の正体は、グレアムの双子の使い魔、ロッテとアリアだった。

「え、えっと・・・」

いきなりの展開についていけず、なのはは、いや、ヴァン以外の6人は困惑した。

「ついさっきのはヴァンの作戦なの」

プレシアは説明した。簡単に表すとこうだ。

ヴァンはあらかじめプレシアに耳かけ式通信機の片方をプレシアに渡しておく。

仮面の男・・・ロッテかアリアが現れた時、ヴァンがプレシアに連絡。

そしてプレシアが次元魔法でそいつを攻撃、捕獲という流れである。

見事成功だった。

「もう、それなら私達にも言ってよ」

「ザフィーラ、いや騎士達との約束があって、あまり多く言いたくなかったんだ」

頬を膨らませるフェイトにヴァンが謝った。フェイトからしたら、仲間外れにされた気分だったのだ。

なのはもそれは同じだったが、まずどうしても聞きたいことがあった。

「ロッテさん、アリアさん・・・どうして・・・・・」

バインドに拘束されている2人に問う。仲間として協力してくれていた2人が、仮面の男の正体だということが信じられなかった。

「クロノの父さんは闇の書の事件で死んだ。その時彼の上司だったグレアムが、闇の書に復讐を企てたんだ」

ヴァンが推測、否、ほぼ確信である動機を告げた。
その直後、ロッテが声を荒げた。

「闇の書のせいで父様は、いや多くの人々が苦しみ、悲しんだ！」

「これ以上同じことが繰り返されないように、私達が封印しようとしただけだ！何が悪い！！」

アリアも叫ぶ。2人の表情には、計画が邪魔されたことに対する怒りだけでなく、グレアムとの精神リンクによって生まれた悲しみ、苦しみ、憎しみ、そして闇の書への復讐心が全部混ざっていた。

――ドクンッ

ソレダ・・・ソノ憎シミト復讐心ヲ待ッテイタ・・・！

道具達モモウ用ハナイ・・・・・

サア・・・オ前ラノ力ト闇ヲヨコセェェェェッ！！

ドクンッ！！

「うぐっ！？」

「う、あ・・・あああ・・・！」

「・・・！？どうしたお前ら！？」

突然騎士４人とロッテ、アリアが苦しみ出した。ヴァンが呼びかけるが、苦しむ様子に変わりはない。

「ぐ・・・うあああああああ！！！」

「「「「！！？」」」」

苦しみ出した６人から、どす黒い何かが、リンカーコアと共に現れた。それを見た他の４人は顔面蒼白。

そのどす黒い何かとリンカーコアが、誰の命令を受けていない闇の書が吸収していく。それを見てなのはがさらに驚愕した。

「闇の書が、勝手に蒐集してる！？」

「それに、この不気味なものはリンカーコアじゃない・・・！一体何なの！？」

プレシアは驚愕しながらも、蒐集をしていく闇の書を止めようと手を伸ばすが、闇の書が作り出した魔力壁が邪魔して書に触れることができない。

「「「「「ああぁぁぁあぁあああ！！」」」」」

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

「ザフィーラ！シャマル！」

苦しむシグナム達を助けたい一心だが、起きていることがわからずにいるなのは達には何もできない。

『くっ、やはりそういうことか！』

ザフィーラが持っていたモデルZが、ヴァンのもとへと飛んできた。

『ヴァン！今すぐ闇の書を破壊しろ！』

モデルZが書の破壊を指示した。

「何言ってんだよ！？そんなことしても闇の書は転生機能で・・・！」

『そんなこと言っている場合じゃない！はやてごと破壊する事態にしたいのか！』

ヴァンの反対も、モデルZはすぐに否定した。

『あれは闇の書なんかじゃない！』

「闇の書じゃない・・・？」

ヴァンは目を細めながら闇の書を見た。
闇の書がひとりでに魔法を発動した。転移魔法だ。

「・・・えっ!?ここは!?」

転移されてきた人物は、はやてだった。
いきなり転移されたはやては周りを見回す。すると視界に苦しむシグナム達が見えた。

「シグナム!?シャマル、ヴィータ・・・ザフィーラも!どうしたんや!?」

「ぐあっ・・・あ・・・主・・・」

「シ、シグナムゥ!」

はやては這って近づいていこうとしたが、リンカーコアを吸い切られたシグナムが消滅してしまった。
続いて、ヴィータ、シャマル、ザフィーラも同様に消滅してしまう。
ロッテとアリアも、消滅こそしなかったが、リンカーコアを限界まで吸い取られ、気を失った。
はやての前に、完成した闇の書が降りてきた。

「闇の、書・・・・・なんで・・・なんでこんなことを!!」

闇の書ははやての言葉に何も反応せず、どす黒い空間を生み出してはやてを飲み込もうとする。

「はやて!!」

恐怖するはやてがその声に振り向く。いつもとは違う姿をしたヴァンが自分へ走ってくるのが見える。

「ヴァンさん！」

だが、ヴァンは途中で闇の書から放たれた魔力弾に弾き飛ばされた。そして、はやては闇に飲み込まれた。

「はやてぇ！！」

ヴァンが叫ぶ。空間からはやての悲鳴が聞こえる。
黒い空間から、はやて・・・いや、はやてに取り憑いた者が現れた。白く長い髪に、漆黒の服のような甲冑、すらりとした腕や脚には革ベルトのようなものが巻かれ、赤い刺青のようなものもある。
その人物が目を開けた。真紅の瞳が見える。
黒い魔法陣が、彼女の足下に展開される。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

なのはとフェイトが叫んだ。

「私は闇の書・・・全てに闇を、そして破壊をもたらす者・・・」

闇の書と名乗った彼女は、腕をゆっくりと上げた。
手の上に、巨大な魔力の塊が現れる。

「ディアボリックエミッション・・・」

「「「「！！」」」」

闇の書が、その空間魔法を発動、そこにいる全員を呑み込んだ。

「――ったく、ヒヤヒヤしたよ」

空間魔法が発動された直後、ヴァンはモデルＨＸとなり、フェイトとなのはを抱えてビルの陰に逃げ込み、なんとかしのいだ。
プレシアが心配だったが、プレシアの方から通信が来て無事がわかった。あの使い魔姉妹も無事らしい。

「・・・モデルＺ、さっきの言葉の意味、教えてくれ。何かわかったのか？」

モデルＺは、静かに答えた。

『・・・闇の書からたまに感じた違和感、あれは俺が知っているものだった。その時は違和感だけで確信はなかったが、ヴァンが言っていた闇の書を改ざんした、白き絶望・・・そして闇の書がリンカーコアと共に食らったアレで、確信となった。・・・覚えているな？１年半前に、俺達が戦った相手を』

それは、人々の心の闇を食らいつくし、力を得る、最強最悪の生きた金属。

『闇の書の中・・・闇の書を操っているものは・・・モデルＶだ！』

第37話 覚醒（後書き）

楓

「もうすぐ投票が終わりです！やり残しがあるならどんどん投票しちゃってください！締め切りは今月いっぱいまで！」

フェイト

「待ってます！」

第３８話　支配された者・・・開幕（前書き）

我らはお前の復讐のために力を貸したのではない・・・

・・・モデルＨ

第３８話　支配された者・・・開幕

モデルＺの言葉に、そこにいた誰もが絶句した。

「モデルＶ、だと・・・！？」

「モデルＶって・・・まさかライブメタル！？」

ヴァンは驚愕し、なのはは驚きの声を上げる。

『ああ、間違いない。どうやって当時の闇の書のところに次元漂流したかはわからんがな』

モデルＺは冷静に話した。

と、そこに駆けつけてきたユーノとアルフがやってきた。

「おーい、みんなー！」

「ユーノ君、アルフさん！」

ユーノの呼びかけに、なのはが手を振る。

アルフが全員の無事を確認して一安心した後、３人に尋ねた。

「一体何がどうなってんだい！？」

「実は・・・！」

フェイトは闇の書が完成してはやてを取り込んだことと、その闇の書にモデルＶが入れられていることをわかりやすく説明した。説明

を受けた2人は、闇の書の白き絶望の正体がライブメタルであることに驚いた。

「とにかく、今ははやてを助けないと！」

『待て！』

「えっ、モデルH！？」

フェイトが闇の書に向かおうとするのを、モデルHが呼び止めた。なのはが驚く。

『・・・八神を助けようと思うな。モデルVを、闇の書とはやてごと破壊しろ』

「そんな、なんで！？」

なのはが声を荒げる。無理もない。“はやてごと破壊する”ということはつまり、“はやてを殺す”ということなのだから。

『今の八神は、闇の書を通してモデルVと融合している。外部からモデルVを引き剥がすことは不可能な上、八神も闇の書もモデルVに支配されている以上、本人の意思で融合を解除することもできない。つまり、どうやっても助かることはないのだ』

「そんな・・・」

モデルHの非情な現実に、フェイトは言葉を失った。

直後、結界が張られた。

「これは・・・以前と同じ閉じ込めるタイプの結界だよ！」

アルフが結界を見てそう告げた。狙いが自分達であることは明らかだ。

さらにレイジングハートから悪い情報が入った。

［マスター。結界内に一般市民が取り残されています］

「えぇっ！？」

全員驚愕。このままでは戦いに巻き込んでしまう可能性がある。

「・・・よし、お前達はその一般市民を避難させろ。闇の書には俺1人が行く」

ヴァンが指示を出した。だが他の全員がそれに反対した。

「そんな！ヴァンさん1人じゃ危ないよ！」

「ヴァン、私も闇の書のところに！」

なのはとフェイトの抗議に、ヴァンはゆるゆるとかぶりを振った。

「この中で、モデルVを一番知ってるのは俺だ。闇の書のことは、闇の書への呼びかけは俺に任せてほしい」

その言葉に、今度はモデルHが異議を唱えた。

『さっきの話を聞かなかったのか！？モデルVを引き剥がすのは不可能だと言ったはずだ！』

だが、ヴァンも諦めない。

「お前の言い分はわかってる。でも俺は、はやてを助けたいんだ」

『だが、そんなことをしていたらモデルVによって闇の書が暴走を！』

『やめるんだモデルH！』

『モデルX様！？』

なおもくってかかるモデルHを、モデルXが止めた。モデルHは驚く。

『ヴァンが戦って倒すことに戸惑いがあったら、やられる。それに、僕もはやてを助けたいよ』

『し、しかし・・・！』

『あら、モデルX様に反抗するつもり？キザ坊や』

さらにモデルLも割り込んできた。

『ヴァンの意思と、モデルX様の意見は、あたし達にとって絶対よ？』

『俺も、モデルX様の考えに賛成だぜ！』

『我らはモデルX様の意思の下、弱き者を守護する刃。弱き者を我

らが殺めることはあってはならない』

モデルFも、モデルPもモデルHには反対の態勢をとった。

『・・・・・・・・』

モデルHはしばし黙り込んでいたが、

『・・・わかった。ヴァン、お前を信じよう』

だが、とモデルHが続ける。

『俺達はモデルVを元に作られたため、多少ならお前を操ることができる。もしお前が命の危機に瀕し、八神の救出が不可能と俺が判断した場合、俺はお前を操ってモデルVの破壊を行う』

「・・・ああ、わかった！」

ヴァンは強く頷いた。

「ヴァンさん、今クロノが解決策を考えているから、ヴァンさんはできるだけ投降を促して！」

「ああ！」

ユーノの言葉にも頷く。寧ろそのつもりだ。

そしてなのは、フェイト、アルフ、ユーノは民間人の避難に、ヴァンは闇の書の元へと飛び立った。

闇の書は目覚めた場所から一歩も動かずその場に立っていた。

「・・・・・・・・」

何かが近づいてくる音がして、闇の書は顔を向けた。
闇の書の前には、モデルＺＸとなったヴァンがいた。

「・・・あなたが、ヴァンですね・・・」

「・・・知ってるのか？」

「私の中には、主や騎士達がいますから」

闇の書は自身の胸に手を添えた。

「闇の書・・・俺はお前の中のモデルＶ破壊しに来た。今すぐお前と融合しているモデルＶを離してくれ」

「私は白き絶望・・・モデルＶによって絶大な力を得た。私はその力で全てを破壊する」

ヴァンは説得は、支配されている闇の書には届かない。
だが、ヴァンは諦めない。

「・・・その破壊に、お前は何も思わないのか？傷つく人達を見て、何も感じてこなかったのか？」

「・・・私は、ただの魔導書だ。感情や意思はない」

闇の書は、静かに目を閉じる。

「じゃあ・・・・・なんでそんな顔して泣いているんだよ？」

ヴァンは尋ねた。闇の書は、悲しそうな顔をして涙を流していた。
闇の書は言われて自分の流す涙を拭い取った。

「・・・これはこの身体・・・主の涙だ。家族同然であった守護騎士を奪われた、主の悲しみの残留思念が現れたものだろう」

闇の書は漆黒の魔法陣を展開した。

「私は、主にその悲しみを生み出させたこの世界を破壊する。夢であってほしいという主の願いでもある」

「待て！はやては破壊まで望んでなんかーーー」

「穿て、ブラッディダガー」

ヴァンの説得を遮り、闇の書は複数の真紅の短剣を生み出し、ヴァンに向けて飛ばした。
ヴァンは間一髪でよけ、ＺＸセイバーを取り出す。

「ったく、もう聞く耳を持たないか」

『どうする？やはり破壊するか？』

「冗談！」

モデルＨの言葉を一蹴し、ヴァンは構えた。

「一回で話を聞かないなら、聞くまで何度でも話すだけさ」

「・・・いいでしょう。来なさい、英雄の力を継ぎし者よ」

戦闘が開始された。

その頃、なのは達は取り残された民間人を探していた。なのはとフェイト、ユーノとアルフに分かれて捜索している。

なのはが、誰もいない街の道路を走る2つの人影を見つけた。

「すみませーん！危ないから、そこでじっとしていてくださーい！」

なのはの呼びかけが聞こえ、2人が振り返った。

そして、4人全員が驚いた。

「なのは、ちゃん？」

「フェイト・・・？」

「アリサちゃん！すずかちゃん！？」

一般市民とは、アリサとすずかだった。

アリサとすずかは、いつもとは違う友人2人の姿を見て困惑している。

「ねぇ、これってどういうこと？」

アリサが尋ねるが、なのはとフェイトには言い訳するものも、時間

もなかった。

「えっと・・・とりあえず今から安全な場所に送るから、そのままじっとしてて」

フェイトが言った直後、管理局の白い魔法陣がアリサとすずかの足下に1つ展開された。怖がって互いに互いを抱き合う中、2人は転送された。

「見られちゃった・・・・・」

なのはは魔導師としての自分が友人に発覚されたことがショックだったのか、顔を俯かせた。

「仕方ないよ、終わったら全部説明しよう。あの2人なら、きっとわかってくれるよ」

フェイトはそんななのはを励ました。なのはも気持ちを切り替えて「うん」と頷いた。

(アルフ、ユーノ。アリサとすずかを保護したよ。2人のことをお願い)

フェイトは念話で別行動していた2人に指示をだした。アルフは始めは戸惑ったが、了解した。

「行こう、なのは!」

「うん!」

フェイトとなのははは空を飛び、いまだにぶつかり合う2人の元へと向かった。

第３９話　支配された心・・・涙（前書き）

ムカつく奴をぶん殴って終わりなんて、ガキの喧嘩やってんじゃねえんだ

・・・モデルＦ

第３９話　支配された心・・・涙

ビルの屋上、ヴァンと闇の書の戦闘は、数分経った今もなかなか進展することがなかった。
ヴァンはダッシュで闇の書の攻撃を牽制しながら、できるだけ傷つけないように無チャージのＺＸバスターを撃つ。
対する闇の書は、膨大な魔力を利用した攻撃や防御でヴァンを容赦なく追い詰めていく。

（くそっ、本気を出していないっていうのもあるけど、それを差し引いても強ぇ！）

ヴァンはこの状況に顔をしかめた。

「闇の書！モデルＶなんかに支配されて、自分の意思も出せないままで本当にいいのか！」

言いながらヴァンはＺＸバスターを連射する。

「モデルＶと私は今は１つ・・・モデルＶの意思は、私の意思でもある」

闇の書は障壁を展開して弾丸を全て防いだ。
説得はもう何度も試みているが、結果が出てこない。
だが、それでも続ける。

「だったら、モデルＶに支配される前はどうだったんだよ！それでも破壊をしてきたって言う気か！？」

「・・・私には、モデルＶと融合する以前の記憶はない」

全く表情を変えず、闇の書はまたブラッディダガーで攻撃を仕掛ける。ヴァンは迫り来る短剣をＺＸセイバーで弾いた。

ヴァンは表情を険しくした。

何かだ。何か、闇の書とモデルＶを分離させる方法があるはずだ。

破壊ではない何かが。

そう考え込んだ時、収束音が聞こえた。

「ディバイン、バスター！」

「プラズマスマッシャー！」

戻ってきたなのはとフェイトが、闇の書に砲撃を仕掛けた。

「盾」

闇の書は障壁でその砲撃を防ぐ。砲撃は消え、闇の書は無傷だった。

「闇の書さん！もうやめてください！」

「こんな戦い、何の意味もない！」

なのはとフェイトが叫んだ。フェイトの言う通り、誰の意思でもなく、モデルＶによって操られたこの戦いに意味はない。

「そう・・・この戦いに意味などない・・・全てはモデルＶを喜ばせるための生きたゲーム」

闇の書は目を閉じ、俯いた。

なのはがまた叫ぶ。

「なら、そのゲームっていうのを、今すぐ止めて！」

「無理なことだ・・・この戦いは全てモデルＶの意思なのだから」

「貴方は・・・自分が操られて・・・自分がいろんなものを傷つけているのを見て・・・辛くないの！？悲しくないの！？」

さらにフェイトが問いかける。闇の書は目を開けた。

「先程ヴァンにも言ったが、私は魔導書だ。感情などない。それに、あったとしても・・・私に自由などない。今の私には、破壊以外に選択肢など許されない」

闇の書の目から、再び涙が溢れ出した。

「ならなんで、そんな悲しそうな顔をするの！？感情がないなら、そんな顔はしないよ！」

「貴方にも、ちゃんと感情はあるんだよ！そんな顔で感情がないなんて、誰が信じるものか！」

なのはとフェイトが叫ぶ。闇の書は、その涙を拭いもせずに答えた。

「・・・これもヴァンに言ったことだが、これは主の残留思念だ・・・」

「でもっ・・・！」

なのはが食い下がろうとしたところで、ヴァンが前に出た。

「2人とも、ここは俺に任せてくれないか」

「え?」

「ヴァン・・・?」

「1つだけ、思いついたんだ・・・闇の書を救う方法を・・・」

ヴァンは歩き、なのはとフェイトから少し離れた位置から闇の書の方を向いた。
闇の書は向きを変え、ヴァンの方を見る。

「・・・救う?私を?」

「ああ」

ヴァンは、まっすぐ闇の書を見る。

「その前に、1つ聞かせてくれ。お前は自分には自由がないって言ってたけど、自由って選択肢があったらどうするんだ?」

「・・・・そんな質問、私には意味のないことだ」

闇の書は数本のブラッディダガーを生み出した。

「穿て」

短剣が飛ぶ。

ヴァンは、その短剣をセイバーではじこうとせずそのまま受けた。
鈍い音と共に、鮮血が飛び散った。

「っづあ！」

「ヴァン！！」

フェイトが叫んだ。
ヴァンは苦悶の声を漏らし、仰け反るもしっかりと踏みとどまった。

「・・・どういうつもりだ？」

闇の書は眉をひそめて尋ねた。
ヴァンはそれには何も答えず、突き刺さった短剣を引き抜き、捨てた。

「・・・まだ、俺は答えを聞いてない。答えてくれ。自由が許されるならどうするのか」

ヴァンは闇の書を見続ける。
闇の書から見たヴァンの目は、自分をこれっぽっちも敵として見てないように見えた。

「忌々しい光だ・・・」

闇の書は手をかざし、金色の魔法陣を展開した。
それを見たなのはとフェイトが驚いた表情をした。

「あれは、フェイトちゃんの魔法！？」

「闇の書は蒐集した魔導師の魔法を使えるってこと・・・！？そんなことはさせない！」

フェイトが闇の書を止めようとバルディッシュで斬りかかる。が、突如地面から現れた触手に2人は絡め取られた。

「なっ！？この！」

「くっ、ヴァンさん！」

触手が2人の動きを止める中、闇の書は呪文詠唱を終える。

「プラズマスマッシャー」

金色の閃光が放たれる。
ヴァンはまたよけようとせず、その閃光に叩き飛ばされた。

「ヴァン！！」

フェイトが叫ぶ。自分の魔法がヴァンを痛めつけていることが辛くて、目に涙が浮かぶ。
屋上を転がされたヴァンは、ＺＸセイバーを杖代わりに、すでにボロボロの体を立ち上がらせた。

「・・・なぜだ。なぜ、戦わない？戦わないのになぜ、また立ち上がる？」

そうヴァンに問いかける闇の書の顔は、だんだん険しくなっていた。
ヴァンは、言い放った。

「諦めない・・・お前を救うためなら、俺は何度でも立ち上がって見せる！」

その希望の言葉が、闇の書の表情をより険しくさせた。

「・・・いいだろう、それなら私は、お前を二度と立ち上がれない者にするまでだ」

闇の書は手をかざし、桜色の魔法陣を展開した。

「咎人に、破滅の光を・・・」

呪文詠唱が始まる。
光の収束が開始される。

「ス、スターライトブレイカー！？」

「ヴァン！早く逃げて！！」

なのはは闇の書の詠唱する呪文を聞いて驚愕、顔を青くした。
そしてフェイトはヴァンに叫ぶ。
使用者であるなのはと、受けた経験があるフェイトには、スターライトブレイカーの威力がよくわかっていた。あの超強烈な砲撃を受ければ、そしてそれをただでさえボロボロなヴァンが受ければどうなるかなんて、嫌でも想像できた。
だが、ヴァンは動こうとしない。

『ヴァン、貴方は何を考えているのよ！？このままじゃ死ぬわよ！？』

『・・・いや、正しい』

『ああ？どういう意味だよモデルＨ？』

モデルＦが、モデルＨの言葉の説明を求める。

モデルＨは説明を始めた。

『モデルＶは相手の感情や思考を自身と同調させてから支配をしている』

『意味がわかんねぇよ。もっとわかりやすくしろ』

モデルＦは即答。代わりにモデルＸが説明する。

『モデルＶはまず相手の感情や思考を狂わせて自分の意思と共鳴させるんだ。共鳴している人の方が支配しやすいからね』

『だがもしその支配している者が同調している中から強い反発の感情が生まれたら・・・』

モデルＨのさらなる説明で、モデルＺは理解した。

『つまり、今のモデルＶの“ヴァンを破壊する”とは逆の“ヴァンを破壊したくない”という感情を持たせる気か』

『無茶に決まってるでしょ！数百年もの長い間、闇の書はモデルＶの支配を受け続けてきたのよ！？第一、ヴァンにそんな体力が残ってる訳ないでしょう！』

モデルＬの言う通りである。この方法で闇の書がモデルＶから離れ

る可能性は低い。

『確かにそうだが、それでも可能性としては一番高い』

だが、それでもモデルHの言う通り、そしてはやてと闇の書を救う方法はこれしかなかった。

「ぶつけてみろよ・・・俺が、全部受け止めて見せる！」

ヴァンは信じた。あの涙は残留思念などではなく闇の書自身が救いの手を求めて流した、“助けて”というサインだと。

だから、それをよけようとはしない。全部、受け止めて見せる。

呪文詠唱が終わる。

「貫け、閃光・・・・スターライト、ブレイカー」

桜色の閃光が、ヴァンを呑み込んだ。

なのはとフェイトが叫ぶが、その声は砲撃の轟音によってかき消された。

やがて、閃光が消えた。

砲撃を行った先が見えてくる。

「なっ！？」

闇の書は目を見開いた。

ヴァンは、立っていたのだ。

アーマーはボロボロで一部吹き飛んでいた。抉れ、傷ついた身体から機械部品が露出し、血が溢れている。

耐えられるはずのない砲撃を受けてなお、ヴァンは立っていた。

「ヴァン・・・！」

「ヴァンさん・・・！」

フェイトとなのはがそのボロボロなヴァンを見て声を震わせた。

「・・・言った、だろ？・・・全部・・・受け止めてみせるって・・・・」

ヴァンが、ゆっくりと、ふらつきながらも闇の書に向かって歩き始めた。

「やめろ・・・やめろ！」

闇の書は右手をかざし、漆黒の魔法陣を展開した。
あの砲撃を受けたのだ。例え立っていても、それにたったの一撃でも入れればすぐに壊れる。
その思考がよぎった直後、闇の書の身体が震えた。

「・・・やめ、ろ」

闇の書は左手で、魔法陣を展開する右手を掴んだ。

「やめろ・・・」

左手で強く、強く右手を掴む。
魔法陣が、消えた。

「やめてくれ・・・！」

闇の書は、その場に座り込んだ。
俯いているため、表情は見えない。

「私は・・・壊したくない・・・何も傷つけたくない・・・！」

闇の書から、涙が溢れた。
何百年もモデルⅤに支配され、絶望しきっていた闇の書の願い。
それを言い、泣いている彼女は、呪われた魔導書でもなんでもない、
ただ涙を流す少女だった。
そこに、近づく音がした。
誰かが闇の書の涙を拭う。
闇の書は顔を上げた。涙でぼやける彼女の目に、確かにヴァンの姿
が映った。

「それが・・・お前の本当の願いなんだな・・・・・」

ヴァンは今にも消え入りそうな声で言った。
意識が薄くなる中、涙を流して苦しむ闇の書の顔だけがはっきりと
映っていた。

「待ってろ・・・今・・・・・」

その意識すら、薄れていく。

「助け、て・・・・・や・・・・・」

ヴァンの身体がぐらつく。
一瞬光を発し、ヴァンの変身が解けた。
意識がなくなり、倒れるヴァンを、闇の書は受け止めた。

「・・・貴方の意思は、私にしっかり届いた。私に自由を与えてくれた・・・・・」

闇の書は、そっとヴァンを抱き締めた。
また、涙が溢れる。

「ありがとう・・・小さな英雄よ・・・・・」

だが、その自由は長く続かない。
モデルVが再び自分を浸食してきた。
闇の書はヴァンを仰向けに寝かせると、出来る限りの気力を振り絞り、魔法陣を展開した。

「英雄よ・・・よく戦った・・・もう眠るといい」

ヴァンの身体が光り出す。

「ヴァンさん!」

「闇の書!ヴァンに何をするつもり!?」

なのはとフェイトの叫びに答える余裕もないほどの頭痛が闇の書を襲う。
それでも、闇の書は自分に一瞬の自由をくれたヴァンを守りたかった。

「絶望も、支配もない、平和な夢の中で」

ヴァンを包む光が強くなる。

「眠れ」

ヴァンが、光と共に消えた。

「ヴァアアァァァァン！！」

「ヴァンさぁぁぁん！！」

「私の中で・・・ずっと安らかに・・・・・・」

ヴァンは、闇の書に吸収された。

第３９話　支配された心・・・涙（後書き）

楓
「なぁにこれぇ」（某王様のＡＩＢＯ風）

ヴァン
「いきなりそれ！？」

楓
「他に思いつかなかったんだ・・・くそ・・・鬱だ・・・」

第４０話－救済する者・・・夢（前書き）

熱くなっちゃダメ・・・力任せに泳いでも、水を濁すだけよ
・・・モデルＬ

第４０話　救済する者・・・夢

「・・・ァン・・・ヴァン・・・・・・」

何かが聞こえる。でも身体がだるい。

「起きろ、ヴァン！」

ゴンッ！

「痛っ！？」

声と共に頭に痛みが走って、ヴァンは跳ね上がった。

「まったく、いつまで寝ているつもりなんだ？」

なんだか懐かしい声が聞こえ、そちらの方を向いた。
すると目の前に、信じられない光景があった。

「せ、先輩！？」

「どうしたんだ、変な夢でも見たのか？」

目の前に、先輩・・・ジルウェがいた。
ヴァンは辺りを見回した。窓から海のように広がる雲が見える。

「ここは・・・ガーディアンベース・・・！？」

そう、ここは空飛ぶ船、ガーディアンベースだった。

「何驚いてるんだ？昨日遅くまでベースの荷物整理に追われていたのを、もう忘れたのか？」

「ベースの、荷物整理・・・？」

もう訳がわからなかった。

まったくどんな夢でも見たんだか、とジルウェは呆れながら部屋の扉へと歩き始めた。

ジルウェがこっちに振り返った。

「ほら、ボーっとしてないで行くぞ」

「え？どこに？」

ヴァンは尋ねた。

「司令室だ。プレリーに荷物整理が終わったことを伝えに行くんだよ」

扉を開け、ジルウェは再び歩き出した。

ヴァンは慌ててその後を追った。

ガーディアンベースはブリッジが司令室である。

ブリッジに入る扉が開かれ、ジルウェが入った。続いてヴァンも入る。

「プレリー、荷物の整理が終わったぞ」

「ええ。ありがとうジルウェさん」

チェアを回転させてガーディアン2代目司令官、プレリーが微笑んだ。

ヴァンにとっては懐かしいものだったが、意識はそれ以外のあるものに全部持ってかれた。

「ヴァンも、お疲れ様」

そう言って、ヴァンに微笑む女性。

「か・・・母、さん・・・？」

その人物は、自分の母であった。

「ん？どうしたのヴァン？」

母が尋ねてきた。ヴァンは混乱していた。

が、ジルウェがヴァンの頭を再び殴った。

「痛っ！？」

「いつまで寝ぼけているつもりだ？いい加減に起きろ」

「あらそうだったの？ちゃんと起きなきゃだめよ？それともよほど怖い夢でも見たの？」

ジルウェが呆れた表情で言い、母が笑う。

そこに、新たに1人人物が入ってきた。

「プレリー様。火災現場の民間人救助、終了しました」

「！？」

「うん。セルパンもお疲れ様」

それはかつてヴァンが倒した男、セルパンだった。だが社長服ではなく、ガーディアンの緑の制服を着用している。

一応、セルパンは元ガーディアン隊員だっとことをヴァンは知ってるが、現ガーディアン隊員のセルパンを見て唖然とした。

「さて、みんな揃っている訳だし、久しぶりにお茶会でもどうかしら？」

とプレリーが提案した。全員が賛成し（ヴァンも慌てて賛成した）、プレリーの部屋でお茶会をすることになった。

お茶会は母とジルウェ、セルパンが加わったこと以外は、ヴァンが次元漂流する前のものと特に変わらなかった。

お茶会が始まってから大体３０分程。ジルウェの通信機に連絡が入った。

「・・・・はい、わかりました。すぐそちらに向かいます」

通信を切り、ジルウェは立ち上がった。

「ヴァン、仕事が入った。場所はエリアＣ－１。行くぞ」

「あ、ああ」

ヴァンも立ち上がる。

「ヴァン、ジルウェさん、行ってらっしゃい」

紅茶を飲んでいたプレリーが座ったままで言った。

母も言う。

「ヴァン、行ってらっしゃい」

「・・・ああ」

ジルウェとヴァンは部屋を出て、トランスサーバーへど向かった。

「・・・しかし、平和になったものだな」

廊下を歩く途中、ジルウェが唐突に言い出した。

「イレギュラーがこの世からなくなって、事件が起こることはめっきりなくなった。ガーディアンも、じきに解散となるだろう」

ガーディアンはそもそもイレギュラー発生の原因を調べ、対策するための組織。イレギュラーが存在しなくなれば、それは当然か。

「そしたら、俺達はどうするんだ?」

ヴァンは聞いてみた。

「そりゃ、俺は運び屋の仕事を続けるさ」

ジルウェの返答は、ごく自然で、とても平和なものだった。
ヴァンはさらに尋ねてみた。

「他のみんなは？」

「それぞれの道を歩む。プレリーや一部のガーディアンはこっちで運び屋の手伝いをしたいって言ってるし、セルパンはモデルVを正しく使い、そのエネルギーで資源問題を解決するための会社、セルパンカンパニーを立ち上げている」

そういえば、モデルVについてのデータファイルで、モデルVは使い方次第で英雄にも、支配者にもなれると、初代ガーディアン司令官がいっていた。それの英雄と賞される使い方をするのだろう。
そんなこと2人での会話をしている内に、トランスサーバーのある部屋についた。

「ところで、そういうヴァンはどうするんだ？」

「え？」

突然のジルウェの質問に、ヴァンは目を丸くした。

「まだ、お前から何をしたいのか聞いてないぞ？」

「・・・なあ、先輩」

「ん？どうした？」

少し迷ってから、ヴァンは言った。

「これって、夢・・・なんだよな」

「・・・・・」

「こう言ったら変かもしれないけど・・・母さんが生きていたら、俺は先輩と会うことはなかった。そして先輩と会わなかったら、ガーディアンや、モデルX達に会うことはなかった」

「ああ。そうだ」

ジルウェは何も否定せずに答えた。

「ここは、闇の書が自分の意思でお前の理想の世界を作り、お前をここに送ったんだ」

ジルウェは笑いかけた。

「ヴァン、ここにいれば、お前は何も失わずにいることができるんだぞ」

その言葉に、ヴァンは一瞬ここにいたいという気持ちが生まれた。ヴァンは迷ったが、首を横に振った。

「確かに俺は、何も失いたくないと言ったことがある・・・でも、ただ辛いことがないっていうこの世界とは違う。俺が言いたいのは・・・・みんなの思い・・・みんなが生きてきた証を、その人がいるってことが言える全てを、守りたいってことなんだ。それが例え、辛く悲しい過去だったとしても・・・それがあってこそ、その人がいるんだって」

辛さを感じない人なんてこの世に存在しない。だからこそ、それを守っていく必要がある。辛さの中で苦しむ人に、手を差し伸べることができる。
だから、ヴァンは言った。
「先輩・・・俺は行くよ。闇の書を救いに・・・！」
「・・・そうか」
ジルウェは頷くと、ポーチからあるものを取り出した。
「モデルX・・・モデルZ！」
「損傷の激しかったモデルZはこっちでリペアしておいた。・・・ちゃんと大事に扱えよ」
ヴァンは2つのライブメタルを受け取った。
「ヴァン！」
部屋に、プレリーとセルパン、そして母が入ってきた。
「ヴァン、これ」
「これも忘れちゃだめよ、ヴァン」
プレリーの手にはモデルHとモデルFが、母の手にはモデルLとモデルPがあった。
6つのライブメタルが、ヴァンを囲うように浮いた。

セルパンが、おもむろにモデルVの欠片を取り出した。

「ヴァン・・・モデルVなど、私と戦った時のように打ち破ってみせろ！」

セルパンはそのモデルVの欠片を握り潰した。

「ああ」

ヴァンは頷いた。

「ヴァン、トランスサーバーの上に乗れば、いつでもここを出られるぞ」

ジルウェが言った。トランスサーバーのパネルが光っている。

「わかった。・・・じゃあみんな・・・“行ってくる”よ」

さよならなど言わない。この世界が自分の理想なら、ここは自分が作り上げる場所はなのだから。

トランスサーバーに乗り、ヴァンは、この夢の世界から転送した。

行ってらっしゃい。

そんな声が、みんなから聞こえた気がした。

リリカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問1～

ヴァン
「はい、本編に割り込んじゃいましたが、『リカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問～』！！基本の司会は俺、ヴァンとー！」

フェイト
「フ、フェイト・テスタロッサです。よろしくお願いします」

エール
「それと『ロックマンゼクス通信』からあたし、エールもでーす！」

ヴァン
「・・・なあ、なんでエールがここにいるんだ？」

エール
「しっつれいね！あたしだってロックマンゼクスシリーズの主役よ！それに読者からも“エールを出してほしかった”ってリクエストがあったんだからね！」

ヴァン
「あ～、そんなのあったな～。・・・で、ここに？」

エール
「そうよ！作者のヤローがなかなか難しいってのを理由に登場させてくれない上に！こんなところに出すなんて冗談じゃないわよ！！大体、なんでこの小説の主人公があんたなのよ！」

ヴァン

「（そこからかよ・・・）ま、まあ、リリカルなのはに出てくる女性キャラが多すぎるから、エールが主人公だと余計アンバランスになるからじゃないか？」

エール
「意味わかんないわよそれ！そもそもなによ、このキーワード！意味わかんないものが多すぎるでしょ！」

ヴァン
「確かに、“文才よ我に力をぉぉ！”とか“もっと票に力をぉぉ！”とか・・・」

エール
「そんなのはどうだっていいわ！なによ、“恋愛”って！」

ヴァン
「そこかよ！？」

エール
「あんた、フェイトっつったっけ？」

フェイト
「は、はい？」

エール
「恋愛っていうのは、好きな人に好きって言うだけの話じゃないのよ！もっとこう、なんていうか・・・色々付き合いとかがあるべきものなのよ！」

ヴァン

「具体性がなさすぎる!?つーかお前のそれはただの嫉妬じゃね!?」

フェイト
「わ、私だって、色々考えてるよ!／／／」

ヴァン
「フェイト!?」

フェイト
「い、一緒に買い物したり、ご飯を一緒に作ったり!それに今だって・・・えい!／／／」

ギュッ!（ヴァンの腕に抱き付く）

ヴァン
「うおぁ!?フェイト!?いきなりなにを!?」

フェイト
「あ・・・ヴァン・・・嫌、だった?」

フェイト、ヴァンから離れる。

ヴァン
「いや、あのさぁ・・・」

フェイト
「ヴァン・・・私のこと・・・嫌い・・・?（涙目&上目遣い）」

フェイト、ヴァンとの距離を離す。

ヴァン
「いや、そうじゃなくて・・・というかやめてくれ！そんな目で見るな！なんか俺がすごく悪いことをしたみたいだから！！」

フェイト
「ヴァン・・・（涙目&上目遣い）」

フェイト、また距離を離す。

ヴァン
「やめてくれ！俺のライフはもう0だ！・・・くそ、こうなったら！」

ガバッ（フェイトを抱き締める）

フェイト
「え・・・？／／／」

ヴァン
「・・・嫌いな訳がないだろ・・・／／／」

フェイト
「ヴァン・・・／／／」

ギュッ（ヴァンを抱き締める）

エール
「・・・・・げふぅっ」

デロロロロ（砂糖吐き）

ヴァン
「砂糖吐いてる!?」

フェイト
「ヴァン・・・／／／」

ギュウウゥゥ（抱き締めるのを強くする）

ヴァン
「トリップしてる!?」

ーーー数時間後ーーー

ヴァン
「・・・ふぅ、みんな元に戻ったか?」

フェイト
「う、うん・・・／／／」

エール
「あー、しばらくケーキとか食えないわね・・・」

ヴァン
「もういい加減本題に入ろうぜ?」

フェイト

「うん、そうだね／／／」

エール
「りょーかい・・・うぷっ」

ヴァン
「（・・・大丈夫か？これ・・・・・）」

暁　楓
「はい、あんな糖分のことは忘れて、今回の本題、『第1回キャラクター人気投票』の結果発表を行おうと思いまーす！」

ヴァン
「どっから沸いてきた作者！？」

エール
「あ！作者ぁ！！あたしの出番よこせぇぇ！！」

ピッキーン！（モデルＺＸに変身）

ヒュン、フォン！（ＺＸセイバーで斬りかかる音）

楓
「作者権限！！」

ピッキーン！（変身が解ける音）

エール
「嘘！？」

楓
「ホントいい加減始めないと。さて、今回は“無印篇のキャラ”で投票してもらいました」

ヴァン
「試験運行のため、投票者数が５人未満、もしくは投票数が５０票未満だと発表はなし、だったか？それでどれほど集まったんだよ？」

楓
「投票者８名、投票数１２０票となりました」

エール
「・・・で？この投票は成功だったの？失敗だったの？」

楓
「ぶっちゃけましょう。失敗です。同一順位者が出る結果になりました」

ヴァン
「まあ、読者、というか投票者からアドバイスをもらったぐらいだもんな・・・」

楓
「だが私は謝らない（キリッ）」

エール
「まーとりあえず、結果発表と行くわよ！」

ヴァン
「第７位！」

モデルP
投票者数1名
投票数4票

ヴァン
「では作者さんに解説をお願いしようと思います！楓さん、解説をどうぞ」

楓
「はい。モデルPの投票は最後の投票者によって出てきたものなんですよ。それまで出番の少なさから投票されないんじゃね？と思ってました」

ヴァン
「そうだったんですか。最後の最後での獲得、というわけですね。では次の方としましょう」

フェイト
「次は第6位です！」

モデルX
投票者数2人
投票数5票

フェイト
「解説をお願いします」

楓
「票は少ないけども、投票者が2人いるってことは結構価値のあることだと思いますよ」

ヴァン
「次は第5位。3人いるぞ！」

アルフ
投票者数1名
投票数１０票

モデルH
投票者数1名
投票数１０票

レイジングハート
投票者数1名
投票数１０票

楓
「同一順位者についての順番はとりあえず五十音順にしておきました」

エール
「さて、ここは作者最大のミスでできた場所、通称“泥沼の1人フ

ル投票キャラゾーン”と化しているけど、作者としてはどう思うのよ？これ？」

楓
「まあぶっちゃけ試験運行だし、いいんじゃない？」

フェイト
「あの・・・もしかして開き直ってます？」

楓
「そうだけど何か？」

エール
「うわー、ないわー」

楓
「次いこ次。次は第４位です！」

モデルＦ
投票者数２人
投票数１４票

楓
「最後の頃までモデルＦはあの泥沼ゾーンのままだと思っていましたが、票が入れられて一気に差をつけましたね」

ヴァン
「おや、モデルＦがなにやら叫んでいるようです・・・・作者さ

ん、モデルFが“誰が馬鹿や？だコノヤロー！”と叫んでいるらしいのですが、どういうことなんでしょうか？」

楓
「投票者の声ですよ。投票と共に応援とその言葉が混ぜられていたようです。ですが結局はライブメタル。モデルFだけでは何もできません」

エール
「そんなのどうでもいいから、次いくよ！いよいよ第3位！こっから台詞が入れられるよ！」

「俺は・・・全てを守るロックマンになってみせる！」

ヴァン
投票者数3人
投票数21票

ヴァン
「あ、俺だ」

楓
「まあなかなかだと思いますよ・・・・・あんま言うことがねぇや」

ヴァン
「酷くない！？」

エール
「それよりいいの？ヴァン」

ヴァン
「へ？何が？」

エール
「あんた3位でしょ？それってつまりヴァンより上がいるって証拠じゃん」

ヴァン
「フッ、俺はそんなことで慌てたりしないさ。また人気投票をやることが企画されてるし、その時に1位をとってみせる！」

エール
「それのようなことをゼクス公式質問コーナーで言って結局2位だったクセに・・・・ま、いっか。第2位！」

「ヴァン、あなたが好きです」

フェイト・テスタロッサ
投票者数3人
投票数22票

フェイト
「ちょっ、なんでよりによってこの台詞！？／／／」

エール
「いいじゃん、読者はみんな知ってるんだしさ♪それで、ヴァンを好きになった理由は？」

フェイト
「え、えっと・・・その・・・あのっ・・・・・・はぅ／／／」

楓
「今はそんな時間じゃないですよ。さっさと1位を発表しちゃいましょう」

エール
「ぶー」

フェイト
「（た・・・助かった・・・・・／／／）」

ヴァン
「でも、1位が俺でもフェイトでもないって、一体誰なんだ？」

フェイト
「（とりあえず落ち着いて・・・）なのは、かな？」

楓
「いえ、なのはは1位の話どころか、1票も入れられてませんでしたよ」

エール
「レイジングハートには入ったのに？」

ヴァン
「デバイスに負けたマスターｗｗ」

フェイト
「・・・・・プフッ」
プルプル（笑いを堪えてる）

楓
「では第1位を発表しましょう！」

『・・・あとはお前次第だ』

『俺は事実を述べただけだ・・・・・礼をするなら、お前の未来を作り上げたサイバーエルフらに言うんだな』

モデルZ
投票者数4人
投票数24票

ヴァン&エール
「「えええええええええええええ！！！？？」」

楓
「まあモデルZだからな、としか言えないですね。1位おめでとうございます！これで第1回キャラクター人気投票の結果発表を終わりま～す」

フェイト
「今後もアンケートをとる予定なので、その時はよろしくお願いし

ます」

結果まとめ

1位：モデルZ

2位：フェイト・テスタロッサ

3位：ヴァン

4位：モデルF

5位：アルフ、モデルH、レイジングハート

6位：モデルX

7位：モデルP

モデルＬ
『ちょっと、私の名前がライブメタルで唯一ないわよ！どういうこと！？』

楓
「人気がなかった、としか言いようはないです」

第４１話―救済される者・・・祝福（前書き）

リリカルゼクス通信ｍｉｎ！

楓
「この小説のアクセス数が１０万を超えました！！」

ヴァン
「おおっ！すげーなそれ！」

楓
「これも皆さんのおかげです！これからもよろしくお願いします！
！では第４１話開始です！」

第４１話　救済される者・・・祝福

ヴァンは、一面真っ黒な空間に出た。
上も、下も、前後左右全てが黒一色の空間。自分は今立っているはずだが、それを証明するようなものがないため、ひょっとしたら落ちているのかもしれない。

「・・・・・ここは」

ヴァンは辺りを見回した。視界には黒一色以外何も映らない。

『ヴァン、気をつけるんだ。ここは・・・』

「ああ、わかってるよモデルＸ。ここはモデルＶの中でもある・・・だろ？」

先程いた場所とは違い、ここは闇の書がモデルＶに浸食されている場所である。気をしっかりと保たなければ、自分も呑まれてしまう。

「それで・・・闇の書は・・・・・」

ヴァンは暗闇を見る目を凝らす。
遠くに、闇の書の姿が僅かに見えた。
ヴァンはそれに近づく。ここでは自分もプログラムであるため、遠くてもすぐに闇の書の目の前まで飛ぶように移動ができた。
闇の書の身体は、どす黒い鎖のようなもので拘束されていた。精神も拘束されているのか、意識はないみたいだ。

「こんな鎖・・・！」

ヴァンは闇の書を縛る鎖の一本を掴んだ。
その瞬間、ヴァンの強い意思にその鎖が拒絶反応を起こし、粉々に砕け散った。
鎖が唯一身体を固定していた闇の書がヴァンに倒れかかる。

「おっ、と・・・」

ヴァンはしっかりと闇の書を支えた。
拘束から解放された闇の書はすぐに意識を取り戻した。

「う、うぅ・・・・・」

少々唸りながら目を開く。
目を開け、顔を上げてヴァンを見た瞬間、闇の書の顔は驚愕の色に染まった。

「ヴァン・・・!?なぜ、ここに!?」

混乱する中、闇の書は焦り出した。

「だめだ、ここにいてはならない!ここにいては、貴方はモデルVに・・・!」

「俺は、そのモデルVから、お前を救いに来たんだ」

「え・・・?」

闇の書は唖然としてヴァンを見た。ヴァンの表情に、ヴァンの目に偽りはなかった。

闇の書の目に涙が溢れ出した。

「なぜ・・・なぜだ・・・あれほど傷ついても、あの夢の中にいても・・・なぜ、私のために・・・自分を捨ててまで！そんな目ができる！」

感情に歯止めがかからず、闇の書はまるで子供のように泣いた。

そんな闇の書に、ヴァンは優しく語りかけた。

「自分を捨ててなんかいないさ」

「・・・！？」

闇の書は再びヴァンを見た。

「俺が本当に望む世界は、あんな夢だけで終わるものなんかじゃない。俺が本当に望む世界は、本当に築き上げられた未来。その中に、お前もきっといるから、俺はその未来を守るために戦っているだけだ」

「！！」

闇の書は目を見開いた。自分がいる未来が、理想の世界だと言われるなんて、一度も考えるどころか、頭をよぎることさえなかったのだから。

「お前は、俺が守ってみせる」

ヴァンはまっすぐと闇の書を見た。

闇の書はその視線を受け、自然と自分の視線がヴァンの顔に向けら

れた。

「だから、俺はモデルVだけを破壊したい。だから闇の書、俺に協力してくれ」

「・・・無理だ。私に巣くったモデルVは、数百年もの間恐怖や絶望を食らい続け強大な力を得ている。今の私の力すら凌駕するほどに・・・」

闇の書はかぶりを振った。だが、もうその対応を思いついている者がいた。

『問題ない。モデルVと言えども、所詮はライブメタル・・・そして今はプログラムだ。その動きを止める手段はもう考えている』

モデルH達ライブメタルである。

『ここのモデルVに、僕達のプログラムをパスコードで流し込むんだ。そしたら闇の書の動きを一時的に止められるから、その時に分離させればいい』

『外部からが不可能ならば、内部から・・・ヴァンの考えは間違っていなかったわけだな』

モデルXとモデルZが説明する。つまり、モデルVをモデルX達が止め、その隙に融合を解除するということだ。

「だが・・・モデルVが作り上げた自動防衛プログラムが邪魔している・・・それに、私に直接干渉できるのはマスターである主だけだ。今は主もヴァンが先程いた場所と同様な場所にいるが・・・」

モデルVと戦ったことなあるヴァンは大丈夫だったが、まだ幼いはやてはモデルVの侵食には耐えられない、と言いたいのだろう。

「・・・防衛プログラムはフェイト達に任せるか。はやては、俺達に任せろ。絶対に守る」

「・・・わかった。まずは主を呼ぼう」

闇の書が魔法陣を展開し、はやてを転移させた。

「・・・ほぇ?でょこここ?」

・・・随分間抜けな感じではやてが転移されてきたことは、この際黙っていよう。

「あれ・・・ヴァンさん、と、誰?」

はやてはヴァンと闇の書の姿を確認して首を傾げた。一応、こうしてはやてと闇の書が対面するのは初めてなのだ。
だが、闇の書だと気づいていないはやては、2人を確認するとニッコリと・・・黒い笑みを浮かべた。

「ヴァンさぁん、その美人さんは誰なん?付き合っとるんか?付き合っとるって言いたいんか?」

黒い笑みを浮かべながら、はやては白い魔法陣を展開した。

「ちょっ、待て!そんな関係じゃないっていうか、今はそれどころじゃないから!つーかなんで普通に魔法陣展開してんの!?もうど

っかで練習してた!?」

「あ、主・・・とりあえず落ち着いてください・・・」

闇の書も慌てる。闇の書の顔が少々赤かった。はやての“付き合ってる”発言にはかなり焦った。

「むー・・・ええわ。なんか頭痛が酷いなぁ・・・」

渋々魔法陣を引っ込めたはやてが頭痛を訴えた。はやてをモデルVが支配し始めているのだ。

「大丈夫。俺達がそれから守るから」

ヴァンは6つのライブメタルをはやての周りに浮かばせた。ライブメタルの力が、モデルVの支配からはやてを守る。

「主、今から言うことをお聞き願えますか」

闇の書は自分が管制人格であること、身体がモデルVに支配されていること、そして支配から逃れ、モデルVを破壊するためにはやての管理権限が必要になることを説明した。

「そっか、わかった。でも、それともう1つやるべきことがある・・・名前をあげる。闇の書とか、呪いの魔導書なんて呼ばせへん。私が、名前をつけてあげる」

再び、はやての足下に白い魔法陣が浮かび上がった。

『・・・よし、僕達も、パスコードを流し込むよ!』

モデルXが指示をだした。
6つのライブメタルが輝き始める。

『風となり、空を巡る、ウェントス・アルス！』

『水となり、大地を潤す、グラキエス・パッシオ！』

『炎となり、命を燃やす、フランマ・ウィース！』

『影となり、忠義を誓う、ウンブラ・プロフェス！』

『光となり、無限の可能性を照らす、ルーメン・インフィニタス！』

『勇気となり、信念を支える、フォルティトゥード・クレド！』

6つの光が1つとなる。
さらに白い魔法陣がそれに重なり、光は辺りを包み込んだ。

外では、場所を海上に移しなのははレイジングハートをエクセリオンモードに、フェイトはバルディッシュをザンバーフォームにして闇の書との戦闘を続けていた。
突如、闇の書の動きが急激に鈍くなった。
なのはとフェイトが驚く中、今度は念話が入ってきた。

（外の方！管理局の方！）

「はやてちゃん！？」

「はやて！」

（え、なのはちゃんにフェイトちゃん！？）

全員が驚く。だが長々と驚いている暇もない。

（ごめん二人共、なんとかそいつを止めてくれる？魔導書本体からはコントロールを切り離したやけど、そいつが止まらんと管理者権限が使えへん・・・今そっちに出てるのはモデルＶが生み出した自動行動の防御プログラムだけやから！）

「えっ、えーっと！？」

はやての説明を受けてなのはが混乱する。

そこに今度は別の声が入ってきた。

（フェイト！なのは！聞こえるか！？）

「ヴァン！」

「ヴァンさん！聞こえるよ！」

声の主はヴァンであった。ヴァンは今プログラムであるため、プログラムを通して念話ができるようになっている。

「わかりやすく言うぞ！とにかくそれはただのモデルＶだ。だからそれを本気で叩き潰してくれ！どんな方法でもいい！」

「うん！わかりやすい！」

「わかったよヴァン！」

ヴァンの説明に了解し、なのはとフェイトはそれぞれのデバイスを構えた。

魔力を溜め、それぞれの一撃がモデルＶへと放たれた。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る」

優しく、はやては新たな名前を告げる。

「強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

光は、優しく2人を包んだ。

第４２話　救済する者達・・・作戦（前書き）

例え闇の中にあろうと、目指すべき光を見失ってはならない・・・

・・・モデルＰ

第４２話　救済する者達・・・作戦

外では、海面にドーム状の黒い球体が現れていた。防衛プログラムである。
今現在は、なのはとフェイトの他にもユーノとアルフも来ている。

『闇の書の反応・・・まだ消えてない！今クロノとプレシアさんがそっちに向かってるから、無闇にそれに近づかないで！』

エイミィから通信が入る。
すると、なのは達と防衛プログラムの間に白い光の柱が立った。

「おいで・・・私の騎士達・・・」

白い魔法陣、そしてその上に白い球体が現れる。声はその光から聞こえる。
光を囲み光に背を向ける形で守護騎士も現れた。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

「主在る限り、我らの魂尽きる事無し」

「この身に命在る、我らは御身のもとに在る」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ・・・守護騎士が復活した。

「リインフォース、私の杖と甲冑を」

「はい」

そして光の球体が砕け、中から杖を持ったはやてと魔導書のリインフォースが現れた。

「夜天の光よ、我が身に集え！祝福の風、リインフォース。セーットアーップ！！」

はやてが叫ぶ。髪の色が薄くなり、バリアジャケットを纏う。はやての背中から、翼が出た。

ヴィータは、そして守護騎士ははやてに振り返った。

「はやて・・・」

ヴィータの目に涙が浮かんでくる。

「すみません・・・」

「はやてちゃん・・・・・あの・・・ごめんなさい・・・」

シグナムとシャマルが謝った。勝手に蒐集活動をしていた事とか、はやてを護れなかった事とか、とにかくいろんな意味を含めているのだろう。

はやては首を横に振った。

「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そ

やけど細かい事は後や・・・・お帰り、みんな」

はやては優しく微笑んだ。

それにより、ヴィータの涙腺は崩壊した。

「う・・・うわあああ!!はやて・・・はやて!はやてぇぇぇぇ!!」

泣き叫びながら、ヴィータははやてに抱き付いた。

はやてもヴィータを抱いて、頭を撫でた。

そこになのはとフェイトがやってくる。

「なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな。うちの子達が迷惑かけてしもうて・・・」

はやてはヴィータを抱いたまま2人に謝った。

「ううん」

「平気」

なのはとフェイトは笑顔でそう返した。

それでもって、フェイトは大事な事を1つ尋ねた。

「はやて、ヴァンは・・・?」

はやてが出てきた。ということは、ヴァンもどこかに出てきているはずだ。

「うん、ヴァンさんも出てきてるよ」

はやては上を見上げた。他のみんなも釣られて上を見た。
頭上にもう1つの光があって、そこからヴァンがゆっくり降りてきた。

「ヴァン！」

フェイトがいち早くヴァンを支える体勢に入った。フェイトだけでは支えることは無理なので、なのはやはやて、シグナムも支えに入った。
そして、吸収される前と同じボロボロの身体を見て、全員が息を呑んだ。

「な、なんだこれ・・・！機械・・・！？」

「いや・・・そんなことより、この傷だらけの身体はどうしたんだ！？」

ヴィータは傷ついたヴァンの身体から出ている機械部品を見て驚き、シグナムはこの傷自体に驚いた。

（・・・ヴァンが、私を救おうと、身体を張ったのです）

はやてとユニゾンという融合状態になっているリインフォースが、念話でそう伝えた。

「ヴァン、お疲れ様・・・今は、ゆっくり休んでてね・・・・・・」

フェイトはそっとヴァンを抱き締めた。

「シャマル、ヴァンさんの治療を！」

「はい！クラールヴィント、癒やしの風を送って！」

はやての指示を受け、シャマルは自分の指輪型デバイスに命令した。

風が流れ、ヴァンと、それにフェイトとなのはの傷が癒えてゆく。

「“湖の騎士”シャマルと“風のリング”、クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「凄いです！」

「ありがとうございます、シャマルさん！」

シャマルの説明に、なのはとフェイトが礼を言った。

「ヴァンさんは傷はなんとかなったと思うのですが、あの機械の部分は初めてなのでわかりませんし、できたとしても目覚めるには多少の時間が必要でしょう」

人の怪我をすぐに直せるシャマルでも、機械の身体は初めてだったので、ちゃんと治ったのか心配だった。

そこにクロノとプレシアがやってきた。

「すまない。水を差してしまうんだが、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する」

クロノは黒いドームに視線を向けた。

「あそこの黒い淀み、闇の書の――」

『正確にはモデルVよ。勘違いのないように』
「・・・ライブメタル・モデルVの防衛プログラムが後数分後に暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在2つ――」
『あれだけあってたったの2つ？お前はそれでも管理局のエリートか？』
「いちいち挟むな！！」

クロノの説明中にモデルLとモデルHが割り込んだ。1回目はなんとか我慢したが、2回目でキレた。

「ま、まあクロノ、落ち着いて」

フェイトに静止され、クロノは渋々説明に戻った。
クロノは1枚のカードのようなものを取り出した。これはグレアムが闇の書の完全凍結に使うつもりだった氷の杖、デュランダルである。

「まず1つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。2つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲、アルカンシェルで消滅させる。これ以外に他にいい手はないか？闇の書の主とその守護騎士達に聞きたい」

クロノが他の意見を求めた。つまり、それはこの2つの案が共に選ぶのを躊躇する理由がある訳だ。
シャマルが手を挙げた。

「えーと、最初のは多分難しいと思います。主のいない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り再生機能は止まらん」

シグナムも渋い顔で言った。要は凍らせても意味がないということだ。

「アルカンシェルも絶対だめ！こんな所で撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！」

ヴィータが２つ目の案に反対する。腕を×の字に交差させるあたり、１つ目よりも反対のようだ。

「そ、そんなに凄いの？」

なのははユーノに尋ねた。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅させる魔導砲、っていうと大体わかる？」

「「それは私も反対！！」」

ユーノの説明を受けて、なのはとフェイトの声がハモった。確かにそんなものを撃てば、家どころか街、いや県１つは軽く消えるだろう。

「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより大きくなる」

「暴走が始まると、触れた物を侵食して無限に広がっていくから・・・」

クロノとユーノが説明する。撃てば街が消え、撃たなくても街が呑み込まれる。まさに八方手詰まりである。

『ハーイみんな！暴走臨界点まで後１５分切ったよ！会議の結論はお早めに！』

エイミィが通信で催促した。

「モデルＸ達は、モデルＶに詳しいんだろう？何かないのか？」

クロノはライブメタルのみんなにも尋ねた。

『・・・今のモデルＶには数百年分の力が蓄えられているはずだ。生半可な攻撃では届きもしないだろう。それを打ち破るほどの威力と言えば、やはりアルカンシェルの使用は避けられなくなるはずだ・・・』

モデルＨが言った。やはりアルカンシェルの使用は避けられないのか。

そう全員が思った時、モデルＺが声を挙げた。

『１つ、それについて考えがある』

「本当か！？」

クロノが食い付く。クロノだけでなく、全員の視線がモデルＺに一気に集中する。

『目標は、防衛プログラムとその中のモデルＶであって、ここではないのだろう？』

「そ、そうだが・・・？」

クロノが戸惑いながら答える。

『なら、目標をアースラの目の前に置いていけばいいのではないか？』

「・・・は？」

一瞬訳がわからず、クロノは間抜けな声を出した。

『だからだ。あれを宇宙へ転送すればいい』

『相変わらず・・・モデルＺの発想は物凄いと言うべきか・・・』

アルカンシェルの起動キーを持ったリンディがモデルＺの作戦を聞いて呆れたように言った。

『計算上では実現可能というのが、また恐いですね・・・クロノ君、こっちのスタンバイはオッケー。暴走臨界点まであと１０分！』

エイミィが通信でクロノに伝える。

「個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが・・・やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。

今、暴走前のそれぞれの確認をみんなでとっていた。

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはそれを破る」

はやてが暴走前の防衛プログラムを見ながら言った。

「バリアを抜いたら本体に向けて、私達の一斉攻撃でコアを露出」

フェイトも防衛プログラムを見る。フェイトの言う私達とは、なのは、フェイト、はやての3人の事。

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送！」

なのははアースラが待機している宇宙に向けて顔を上げた。

『あとはアルカンシェルで蒸発』

リンディが言う。そしてリンディは局員にアルカンシェルのチャージを指示した。

「あたし達はサポートだ」

アルフが言った。サポートに回るのは、アルフとユーノ、シャマル、ザフィーラの4人。

『僕達も、プログラムを流し込んでできるだけモデルVを抑えるようにするよ』

とモデルX。

プレシアは、連れてきたマルティナをヴァンとサテライトさせると、

陸のビルの屋上に運び、ヴァンを守る事となった。
防衛プログラムの周りに、いくつかの黒い柱が立った。防衛プログラムが暴走を開始したのだ。

「夜天の魔導書を、呪われた魔導書と呼ばせた、モデルVによって作られたプログラム、闇の書の闇・・・」

はやてが呟く。
黒いドームが消え、防衛プログラムが姿を見せた。

『・・・随分と懐かしい姿だな』

モデルZが呟いた。肩や頭に角に近い突起物があり、身体は上半身のみ。下半身は脚とは全く違う何かとなっている、巨大な異形。
それは、1年半前ヴァンが戦った、モデルVと完全融合したセンパンに酷似していた。

「行くよ、みんな！」

はやてが叫んだ。
防衛プログラムとモデルVの破壊を賭けた戦いが始まった。

第４３話　救済する者達・・・そして、出現（前書き）

君の力は、憎しみの力なんかじゃない・・・本当の力は・・・本当の勇気は・・・まだ・・・君の中にある・・・！

・・・モデルＸ

第４３話－救済する者達・・・そして、出現

「チェーンバインド！」

「ストラングルバインド！」

アルフとユーノのそれぞれのバインドが、防衛プログラムの周りにある触手を捕らえた。

「鎖のくびき！！」

ザフィーラが出した白い線が触手を斬る。

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータとなのはが自身のデバイスを構える。

「“鉄槌の騎士”ヴィータと、“鉄の伯爵”グラーフアイゼン！」

カートリッジをロードし、グラーフアイゼンは巨大なハンマーになる。

「轟天爆砕！！」

さらにハンマーを巨大化させ、振り上げる。

「ギガントシュラァァァク！！！」

柄がしなりながら、巨大ハンマーが防衛プログラムに向けて振り下ろされる。
ハンマーは防衛プログラムが張ったバリアを、文字通り“爆砕”した。

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン、行きます！」

なのはは足下に桜色の魔法陣を展開する。
カートリッジをロードし、エクセリオンモードのレイジングハートを防衛プログラムに向ける。

「エクセリオンバスター！」

先端に魔力が収束される。

「ブレイクシュート！！！」

閃光が放たれ、バリアに直撃した。バリアが砕ける。

「“剣の騎士”シグナムが魂、“炎の魔剣”レヴァンティン！」

左手にレヴァンティンを、右手にレヴァンティンの鞘を持つ。

「刃と連結刃に続く、もう１つの姿」

レヴァンティンと鞘を合わせる。
カートリッジをロードし、２つが合わさって１つの弓となった。
魔力の矢をつがえ、防衛プログラムに狙いを定める。

「翔けよ、隼！！！」

矢が放たれた。矢はバリアに当たって爆発し、バリアが砕ける。

「フェイト・テスタロッサ、バルディッシュザンバー、行きます！」

フェイトは足下に金色の魔法陣を展開し、剣の状態、ザンバーフォームとなっているバルディッシュを構える。

カートリッジがロードされる。

「撃ち抜け、雷神！！！」

バルディッシュが振り下ろされ、バルディッシュの魔力刃が防衛プログラムへと伸びる。

そして魔力刃はバリアを抜き、防衛プログラムを斬りつけた。

ダメージを受けた防衛プログラムが進化を起こし、上半身が上に持ち上がる。

防衛プログラムは両手を広げ、その両手からそれぞれ砲撃を放とうとする。

「“盾の守護獣”ザフィーラ！砲撃など撃たせん！！」

ザフィーラが白い魔法陣を展開した。

白い魔力の柱が防衛プログラムの両腕に突き刺さる。両腕はどちらとも砕け、砲撃が撃てなくなった。

「彼方より来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりてうち貫け！」

はやてが白い魔法陣を展開した。

上空に白い光が現れる。

「石化の槍、ミストルティン！！！」

その白い槍は防衛プログラムを貫き、防衛プログラムを石化させる。だが、防衛プログラムがさらに進化し、その巨大な身体全体がせり上がった。下半身が変形し、巨大な顔となる。さらにその巨大な顔と同じぐらい巨大な手が現れた。

『攻撃したそばから進化している！？』

『大丈夫、攻撃はしっかり通ってる。プログラムも効いてる！このまま続けるよ！』

モデルXがエイミィに答えた。進化して対応しているということは、裏を返せば攻撃が効いている証拠なのだ。後は進化や再生を上回る攻撃を叩き込むだけだ。

クロノが氷の杖、デュランダルを構え、魔法陣を展開した。

「悠久なる凍土、凍てつく柩の地にて、永遠の眠りを与えよ」

デュランダルを振るう。

海が凍っていく。

「凍てつけ！！！」

そして防衛プログラムも凍らせた。

「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」

なのはが2人に呼びかける。2人は頷いた。最後の、一斉攻撃だ。

3人がそれぞれ魔法陣を展開する。

「全力全開！スターライトーーー！」

膨大な桜色の光を収束させ、レイジングハートを振り上げるなのは。

「雷光一閃！プラズマザンバーーー！」

雷をバルディッシュに纏わせ、構えるフェイト。

「轟け終焉の笛！ラグナロクーーー！」

杖を掲げ、3つの魔力の弾を作り出すはやて。

だが、防衛プログラムが宙を浮く巨大な手から光を発し、巨大な闇のクリスタルを生み出した。それを手が砕く。

砕かれたクリスタルの破片が飛び散り、全員に襲いかかった。それは当然、砲撃を撃とうとしているなのは達も例外ではない。

「止めさせるか！！」

ユーノがなのはを、アルフがフェイトを、ザフィーラがはやてを障壁で守った。他のみんなも、障壁を張ったりよけたりして怪我はなかった。

そして、3人の溜められた魔力が最大限になった。

「「「ブレイカアアァァァ！！！！」」」

桜色、金色、白色の閃光が、防衛プログラムへ放たれた。

光に呑み込まれた防衛プログラムは大破し、コアが剥き出しになった。

その瞬間に、コアから黒い光が出ていったことには、誰も気づかなかった。

「本体コア、露出・・・捕まえ、た！！」

シャマルはなのはのリンカーコアを捕獲するときにも使った“旅の鏡”で防衛プログラムのコアを捕獲した。

「長距離転送！」

「目標軌道上！」

そこにユーノ、アルフも加わり、３人でコアを転送する。

「「「転送！！！」」」

コアが、宇宙へと転送された。

“アレ”がなくなり、再生機能と魔力だけとなったコアが・・・・・。

コアはアースラの前に転送されている間にも、ほぼ何もない状態から凄まじい速度で再生をしていた。

「アルカンシェル、バレル展開！」

リンディがキーボードを叩きながら言った。

リンディの前に発射装置が現れる。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します！準備を！」

「了解！」

局員が行動に移る。
リンディは装置にキーを差し込んだ。

「アルカンシェル、発射！」

キーを回す。
アースラから閃光が発射された。
閃光は再生し続け、蠢く防衛プログラムに命中、完全に消滅した。

「現場のみんな、お疲れ様！無事に終了しました！」

エイミィが通信で知らせた。
全員が安堵し、その安堵が喜びとなる。
なのは、フェイト、はやての3人はハイタッチした。
これで、全てが終わった。
事後処理として防衛プログラムの残骸の回収処分などがあるが、みんな今はこの結果に喜ぶことにした。
そこに、プレシアの念話が入った。

（みんな！ヴァンが目を覚ましたわ！）

「本当！？」

フェイトがすぐにヴァンがいる方角を向いた。

「行こうよフェイトちゃん！」

「うん！」

なのはの催促もあって、フェイトはヴァンのいるビルの屋上へと飛んだ。

なのはやはやても勿論、シグナム達もここに残る理由がないためヴァンの元へ飛ぶ。

ビルの屋上に、プレシアと、上半身を起こしたヴァンが見えた。

「ヴァン！！」

フェイトは今すぐヴァンに抱き付きたい一心で、ソニックムーブを発動。

「ぐべぅっ！！」

その結果、高速のタックルを受ける形となり、ヴァンがフェイトごとぶっ飛んだ。

「ヴァン！ヴァン～！」

ヴァンが無事だったのが何より嬉しくて、一心不乱にヴァンに抱き付く。だがヴァンの口からは「ぐぼぼぼぼ・・・」と断末魔。

「ちょっ、フェイトちゃん！ヴァンさんから離れて！そのままじゃあ羨まし・・・じゃなくてヴァンさんが苦しんでるから！」

「そうや！1人抜け駆けはだめやで！羨ましいやん！」

「正直者！！」

遅れてやってきたなのはがヴァンを引き剥がそうとする。フェイトに呼びかけた際、一瞬下心が出そうになって慌てて誤魔化したが、続いてやってきたはやては下心を隠さずに言った。

それをはやてとほぼ同時に来たアルフが聞いてドン引き。後ろのシャマルやユーノなどもそれには苦笑していた。

なんとかなのはとはやてはフェイトをヴァンが引き剥がすことに成功。フェイトは残念がり、ヴァンは腹を抑えて息を整える。

「ヴァン・・・怪我はもう大丈夫？」

「・・・お前から受けたタックルのせいで大丈夫じゃない・・・・・・」

「うっ・・・」

「まあ、それはいいとして・・・」

適当にフェイトとの会話を終え、ヴァンは立ち上がった。みんなを見回す。

「俺が外に出てから、何があった？」

ヴァンは尋ねた。とりあえずは状況判断だ。

「ヴァンさん！防衛プログラムは消滅したよ！」

なのはが答えた。それにはやても便乗する。

「防衛プログラムの中におったモデルVも消滅したはずやで！な、リインフォー、ス？」

もうユニゾンを解除し、隣にいるであろうリインフォースを見た。
だが、呼ばれたリインフォースは防衛プログラムの残骸を見つめていた。

「どうしたんだよ、リインフォース？」

ヴィータが尋ねるが、リインフォースは聞こえていないのか、黙ったままであった。

「・・・リインフォース」

今度はヴァンが尋ねた。

「・・・貴方が目を覚ましたのは、ある意味タイミングが良かったようです」

リインフォースが意味深な返事をした。訳がわからないほとんどの者が首を傾げる中リインフォースは、言った。

「来ます」

防衛プログラムの残骸から、黒く禍々しい光が現れた。
残骸の至る所から現れたその光は、空中の一点に集まり、防衛プログラム程ではないが、それでも大きな球体となる。

「な、何が起きてるんや！？防衛プログラムのコアはもうないのに

！」

「“防衛プログラム”は消滅しました。ですが、“防衛プログラムの中にあったもの”は残骸にプログラムを移して生き残ったのでしょう」

驚くはやてにリインフォースが説明する。

「あれが、私の中に巣くい、支配していた、真の闇」

光が収まり、姿が現れる。

「恐怖や絶望、心の闇を食らい人々を狂わせる、白き絶望」

金色の部品を白い甲殻が覆い、中心辺りには赤いコアがある。その赤いコアを中心に甲殻の全体に伸びる黒いラインを、緑の光が流れている。

「――ライブメタル・モデルV」

全てを支配する生きた金属、それは狂気そのものであった。

第４４話－白き絶望（前書き）

自分を・・・信じろ！

・・・モデルＺ

第４４話－白き絶望

苦しい。

フェイトが思った。

まるで、呼吸ができなくなっているみたいだった。

辛い。

なのはが思った。

まるで心臓が抉られるような痛みが全身を走る。

恐い。

はやてが思った。

全てを押し潰すプレッシャーが自身を覆っていく。

その絶望の異形を見て、誰もが恐怖した。

「あれが・・・モデルＶ・・・・・？」

クロノが言った。声が震えている。

クロノは最初、モデルＶと聞いてモデルＸ達のような手のひらに乗るようなものだと思っていた。だが、現物を見てそんな大きさの話など吹っ飛ぶほどのプレッシャーが、こんなに遠くからでも生々しく感じられた。それは他の全員・・・モデルＶを見たことがあるヴァンや今までモデルＶを抱えていたリインフォースも同じであった。

『相当なダメージを受けていたようだな・・・未覚醒状態まで下がっている』

モデルZがモデルVを流れる緑のラインを見て言った。破壊するなら今がチャンスだろう。

だが、モデルZがヴァンに呼びかける前に、はやての声が聞こえた。

「リ、リインフォース！？」

「あっ・・・ぐぅ・・・・・！」

はやてが駆け寄った。リインフォースは胸を抑えて苦しんでいた。

最悪な事態がモデルZの頭をよぎった。

そして、その予感は現実になった。

「あ・・・あああああああああああああ！！！」

リインフォースの体から、どす黒い淀んだものが出てきた。守護騎士やリーゼ姉妹が闇の書に吸収されたときと同じである。

「リインフォースゥゥ！！」

はやてが絶叫する。だがそれでリインフォースの苦しみが止まる訳がない。

その大量に出てきた黒い淀みを、モデルVが赤いコアに次々と吸収していく。

やがて黒い淀みを出し尽くしたリインフォースは気を失った。倒れる前にはやてがリインフォースを支えた。はやて1人では無理があるため、シグナムも支えた。

「あの野郎っ・・・リインフォースに何を!!」

「でも・・・あれはリンカーコアでも、そもそも魔力が感じられなかったわ・・・・・一体何なの?」

気を失っているリインフォースを見て、ヴィータは遠くのモデルVを睨んだ。一方のシャマルはモデルVが吸収したものに魔力がないことに疑問を持つ。

「・・・モデルVが吸収するものは魔力なんかじゃない」

全員が振り返る。視線の先にはモデルVを睨むヴァンがいた。

「魔力を吸収しない?なら、一体何を吸収したというのだ?」

ザフィーラが尋ねる。

ヴァンは険しい表情で答えた。

「モデルVは、人々の恐怖や絶望・・・心の闇を吸収して覚醒する。今吸収したのは、モデルVに支配され続けてきたリインフォースの数百年に渡る絶望のはずだ。そして覚醒したら・・・」

リインフォースの絶望を吸収しきったモデルVの緑のラインが、赤く輝いた。

コアが光り、モデルV全体が不気味な赤い光に包まれる。

そしてその中から数本の光の線が伸び、それは防衛プログラムの残骸に付着した。付着した残骸がモデルVに取り込まれていく。

「全てを取り込み、操って力を振るう・・・」

光から、何かが姿を現した。
白いアーマーに全身を覆われた巨人。遠隔操作の腕が宙を浮き、背には岩石のようなもので覆われている大剣が背負われている。胴体の黒いボディには赤いラインが光り、黒と白が特徴的なヘッドパーツの後頭部からは紫の長い髪。
それを見た瞬間、全員の背筋が凍った。

「な、なんだあれは!?」

歴代の主を守護し続けてきたシグナムでさえ、戦慄を覚えた。

『あれは・・・オメガ・・・!』

『モデルV・・・自身の記憶からオメガを作り出したか!』

モデルXとモデルZが驚愕する。

「な、なんなの?オメガって・・・・・」

怯えるフェイトが尋ねた。
モデルHが答えた。

『オメガとは、俺達の世界で数百年前の戦争で起用されたレプリロイドだ。戦闘能力が凄まじく、悪魔のレプリロイドとも呼ばれた危険な存在だ』

モデルXも追加で説明する。

『そもそもモデルVは、1人の科学者の男の魂が自身と融合した衛

星砲台“ラグナロク”の破片に宿ったものなんだ。モデルVはその記憶からオメガになったんだと思う』

その説明が終わったところで、エイミィの通信が入った。

『みんな！今あの巨人・・・オメガがそっちに近づいているよ！！』

その言葉に、緊迫感がさらに上昇した。

「とにかく、止めなきゃ！」

なのはがレイジングハートを構える。エクセリオンモードはそろそろ本体への負担が危ないため、シューティングモードに切り替える。桜色の魔力を溜める。

「ディバイン、バスター！！」

桜色の閃光が発射された。閃光は狂いなくオメガへと向かっていく。たが。

オメガが血のような真紅の巨大な障壁を展開した。

障壁に桜色の閃光が直撃する。

当たった瞬間、閃光が全てガラスのように砕け散った。

「そんな！？」

「砲撃が砕けた！？」

フェイトとアルフが驚愕した。エクセリオンモードじゃないとは言え、なのはのディバインバスターの威力はかなりのもののはずだ。

だが、それだけではなかった。

「なのは！？」

フェイトが慌ててなのはを支えた。急になのはが倒れそうになったのだ。

なのはのバリアジャケットが消え、レイジングハートも待機状態になった。

「な、何・・・？力が・・・入らない・・・・・」

なのはが力無く呟いた。調べると、ユーノが驚愕の表情となった。

「なのはの魔力がなくなってる・・・・？あの時、砲撃を通してなのはの魔力を消したというのか！？」

そう、なのはから魔力が消えていた。リンカーコアが無事かどうかはここでは調べられないが、今のなのははもう魔法を使うことができない。

クロノは考え込んだ。

「魔法を使えば魔力を根こそぎ消される。さらにやつから発せられるモデルⅤのプレッシャー。・・・となると、打てる手段は・・・・」

「・・・ああ、クロノ。お前の魔法で海一面を凍らせてくれ。俺が直接叩く」

「・・・すまない、ヴァン」

クロノは悔しがりながらもそのヴァンの意見に頷くしかなかった。

残された手段、それはヴァンが直接オメガと戦い、モデルVを破壊すること。

単純なようで、この方法はとても危険なものだった。モデルVは自分達10人とアースラのアルカンシェルを使ってようやく消滅させた防衛プログラムの創造主である。容易に破壊できるようなものではない。それに、オメガとなっても放たれるプレッシャーは、覚醒状態となって余計大きくなっていた。最悪、オメガの目の前に来てプレッシャーに潰される可能性もある。

だが、こちらの魔法がいとも簡単に防がれる上に魔力を潰されるのだ。それ以外に対処のしようがない。アルカンシェルも魔導砲、つまり魔法であるため、防がれる可能性があるのだ。

クロノはデュランダルを構え、魔法陣を展開した。そして放たれた魔法が、海の表面を凍らせていく。

「ヴァンさん・・・ごめんね、役に立てそうもなくて・・・」

なんとか自力で立ったなのはが謝った。

「気にすんな。それにモデルVの破壊は俺の使命だからな。どっちにしても、俺が破壊に向かってたさ」

ヴァンはなのはに安心させるように笑いかけた。

「ヴァンさん！必ず無事に帰ってくるんやで！」

「ああ、わかってる」

はやてにも応答する。それからさらに他の面々にも心配や無事願う言葉などがかけられた。

「すまない、私達もあれを止めに行きたいものだが・・・」

シグナム。

「ぜってー戻って来いよ！もしはやてが悲しむようなことがあったらタダじゃ済まさねぇからな！」

ヴィータ。

「申し訳ありません・・・私達のすぐそばにあったものも止められない私達で・・・・・」

シャマル。

「私も謝る・・・そして、あれを食い止め戻ってきてほしい・・・」

ザフィーラ。

「ヴァンさん、気をつけてください！」

ユーノ。

「無茶はするんじゃないよ！」

アルフ。

「必ず帰ってきなさい。決してフェイトを悲しませるようなことはしないことよ」

プレシア。

そして・・・、

「ヴァン・・・絶対に、絶対に戻ってきて・・・・・・約束だよ？」

「・・・ああ。任せろ」

フェイトがヴァンに抱き付いて涙声で無事を祈る。ヴァンは優しくフェイトの頭を撫でた。

「ヴァン！準備はもうできたぞ！」

クロノが告げた。海は完全に凍っていた。

「ああ、じゃあみんな、行ってくる！」

「ちょいと待～った」

早く行くためモデルXを取り出したところでアルフが待ったをかけた。

「あたしが送ってくよ」

言ってアルフは狼形態になった。

「大丈夫か？ここでも結構きついんじゃないのか？」

「大丈夫だよ、大体海沿いのところまでは大した距離じゃないし、これから戦うってやつはしっかりと体力温存しないと」

ヴァンの指摘も軽くあしらわれる。体力温存はありがたいものなの

で、その言葉に甘えることにし、アルフの背中に乗った。

「・・・で、これじゃあさっきあの場所で言葉送ってもらった意味がないじゃんか」

「あ、あはは・・・」

はやて否、そこの全員がぎこちない笑みを浮かべた。
ここは海岸。アルフがヴァンを送って行こうとした時、フェイトが自分も同じ場所まで送りたいと言い出した。それが他の全員にも広がり、全員が送りにここまで来たということだ。ちなみになのはは狼形態になったザフィーラの背中に乗って来た。

「それじゃ、行ってくるか」

ヴァンはモデルＺＸとなり、くるりとみんなに背を向けた。ヴァンの視線の先にはゆっくりと接近しているオメガがある。
ヴァンがそこに向かって走ろうとした。

「あのっ、ヴァンさん！」

なのはがそのヴァンを呼び止めた。
どうした、という顔をなのはに向けた。
なのはは、大きく息を吸い込み、言い放った。

「私、ヴァンさんのことが好きだよ！！」

「・・・・はああ！？」

突然の、しかも皆がいる前での告白に、ヴァンを始めとした全員が唖然となった。

「ね、ねぇなのは・・・なんでいきなり？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ！！？」

フェイトの言葉を聞いて、なのはは恥ずかしさから一瞬で顔が茹で蛸状態になった。無意識の告白だったのか、それとも誰もいないと幻覚紛いのものでも感じたのか。

穴があったら入りたい。

まさになのはの顔にはそう書かれていた。なのはの場合、穴がなければスターライトブレイカーでも撃って作り上げるだろう。

「忘れて！いや、この気持ちのことは忘れないで！いや、やっぱり忘れて！あ、やっぱ忘れないでほしいの！！」

「どっちだよ・・・まあ、絶対に帰ってこなきゃいけない理由が増えたな。これで」

なんだかこれから世界を賭けた決戦が始まるとは思えない空気になりながらも、ヴァンは凍った海の上を走り出した。

凍った海から1メートル程足を浮かせて、オメガは街に向けて進み続けていた。

オメガが進んでいる正面から何かの足音が聞こえてきた。

オメガの前に、ヴァンが立った。

目の前の障害物を確認して、オメガは行進を止めた。
ヴァンは、オメガを見上げる。

「グ・・・オオ・・・・！」

「オメガ・・・・・・」

ヴァンはＺＸセイバーを取り出す。

「・・・・・勝負だ！」

この闇の書を巡った戦いの、最後の決戦が開始された。

第４５話－死闘（前書き）

今ここに、新たな時代が始まる！新たな支配者・・・ロックマンの時代がぁ！！

・・・セルパン

うっさいわ！一生１人で独裁者でもやってろ！！

・・・暁　楓

なぜかキレてる・・・

・・・ヴァン

第４５話　死闘

本局で、グレアムはロッテ、アリアと共にモニターを見ていた。
モニターにはオメガと、オメガと対峙するヴァンの姿がある。闇の書の覚醒から今まで、ずっと見守ってきた。
グレアムは闇の書の永久封印をするために闇の書について今まで調べてきた。その中で白き絶望という名で記されたモデルＶの記述も見ている。
だがそのモデルＶのみを取り出す方法は掴めなかったため、闇の書自体をはやてごと封印するという方向をとった。はやては幼い頃から孤独の身のため、悲しむ者も少なくて済む・・・言い訳だとわかっていたが、闇の書を封印するため、これ以上闇の書による悲しみを生み出さないようにするためだった。はやての両親の知り合いを名乗って援助もしていたが、それも監視と共に封印される前までは幸せであってもらおうという自分の偽善。
そう、思っていた。

（だが、ヴァン君によって気づかされた・・・・・一番悲しんでいたのは、彼女なのだと・・・・・）

モデルＶに支配され、自分の望まない破壊を自分自身で行わされ続けた闇の書否、リインフォース。自由を願うことも許されなかった彼女の苦しみは一体どれほどのものなのか。生きていない、そして死ぬことも許されない苦痛を、リインフォースはどれほど味わされてきたのか。
グレアムはモニターの内のヴァンを見た。ヴァンは己の身がボロボロになろうとも最後まで向かい合い、リインフォースを解放した。
奇跡とも呼べるようなことを成し遂げた。
ヴァンは自分の持つ力は人を救うのではなく、守るものだと言った

が、彼は彼自身の力でリインフォースを救ったのだ。
だから、願う。

（頼む・・・彼女達の未来を、救ってやってくれ・・・・・！）

モニターの中で、閃光が動き出した。

オメガが頭部パーツから緑の閃光を発射した。
ヴァンはダッシュで閃光をかいくぐりながらオメガに接近し、跳躍する。オメガが巨大過ぎてそのままでは攻撃が脚にしか当たらないのだ。
だが、跳躍したヴァンをオメガが障壁を展開して跳ね飛ばした。
ヴァンはなんとか着地するが、上から遠隔操作の右腕がヴァンに殴りかかった。

「くっ！」

ヴァンはそれを避ける。
そして反撃として途中までチャージしたＺＸバスターを放ち、さらにバスターを連射した。エネルギー弾はオメガが障壁を展開することによって全弾防がれた。
オメガの左腕から緑の閃光が発射されヴァンに襲いかかる。

「・・・くそっ！」

さらにそれもなんとか避けるが、オメガは宙を浮く両腕とベッドパーツの光線による容赦ない攻撃を続ける。その度にヴァンは後退を余儀なくされていく。

しかし、いつまでも後ろに下がってられない。
ヴァンはモデルＰを取り出し、モデルＰＸに変身した。

『オーバードライブ』

ヴァンの身体に、影のようなオーラが浮かび上がる。
ヴァンは自身を影と化し、攻撃をすり抜けてオメガへと接近する。
籠手型のアームにエネルギーチャージする。

「っらぁ！！」

籠手から出現した大十文字手裏剣をオメガに投げる。オメガは再び障壁を展開して防ぐ。
オーバードライブによって威力が底上げされた十文字手裏剣が凄まじい回転によってガリガリと障壁を削る。
手裏剣が消滅した後、さらにそのポイントに集中してクナイの雨を降らせる。
一点に攻撃が集中されてダメージに耐えられなくなり、障壁が破壊された。
ヴァンは再びモデルＺＸになり、接近しながらＺＸバスターをチャージ。フルチャージされた弾丸を放った。障壁を破壊された後なので、何も邪魔が入らずにオメガに直撃する。

「ハアァッ！！」

そしてさらに跳躍してチャージセイバーで追撃。斬撃と共に衝撃波がオメガを襲う。

「グ・・・オォォオオオッ！！」

腕が氷の床に落ち、オメガが唸りを上げる。
スタッとヴァンが着地する。

「やったか？」

『いや、まだだ！』

モデルZが警告した。
唸りを上げ、床に伏していた腕が再び宙を浮く。

『やはり、しぶといものだな』

忌々しそうにモデルHが呟いた。

「グ・・・オォオオ・・・！」

オメガが両腕を広げた。オメガの足下に血の色の魔法陣が展開される。
そしてオメガの周りに、無数の魔力弾が形成された。その数はフェイトが使うファランクスシフトの魔力弾を軽く超えていた。

『ヴァン、水中に逃げなさい！こんな数、防ぐのもよけるのも無理よ！』

「くっ！」

魔力弾の雨が降り始めた。
魔力弾が次々と氷の床に当たり、爆発を巻き起こす。
オメガの周りはあっという間に煙に包まれた。

「くそっ、なんだよあの数・・・！」

海中で、モデルＬＸのヴァンが呟いた。本来人間が水中に居続ければ窒息してしまうのだが、ロックマンになっているヴァンは水中でも普通に息ができる。

オメガが魔力弾を打ち出す直前、ヴァンはモデルＦＸとなりメガトンクラッシュで氷の床を破壊、海中に避難したのである。

『オメガが魔法を使えるというのは障壁を出すところでわかってはいたが、ここまでくるとこのフィールド全体にオメガの武器があるのと同じだな』

モデルＺの言う通りだ。あれほどの魔力弾、相手にするのは手強すぎる。しかもそれに加えてガードもかなり堅く、オメガ自身の戦闘力も高い。死角が見えてこない。

『随分困り顔ね？』

モデルＬが問いかけた。それは当然だ。この状況を見て困らない訳がない。

そんなヴァンの感情を読み取ったのか、モデルＬは『考えがあるわ』と言った。

『奴がフィールド全体を武器にしてるって言うのなら、こっちはフィールドを武器にするまでよ』

「・・・？」

さっぱり訳がわからない。だが今索がないのだ。モデルＬに賭ける

しかない。

『さぁ、行くわよ！氷と水のライブメタルを舐めんじゃないわ！オーバードライブ！！』

力を最大限にして、ヴァンはハルバードをスクリューのように回し始める。

海がライブメタルの冷気で凍てつき始めた。

海の氷が、動き始めた。

氷が集まり、竜の形となる。氷の竜は形成されるとオメガめがけて突っ込む。至る所から氷の竜が出来てはオメガに突っ込む。

オメガはゲージ型の魔力壁で身体を覆うが、無数に現れ際限なく襲いかかる氷の竜に魔力壁が砕けた。そして防御がなくなったオメガの腕を、頭部を、大剣を、オメガの全身を氷の竜が襲い、凍らせる。

「グ、オォオオオオオ！！」

氷の中オメガは叫ぶが、全身が凍りついて動けない。

水中からヴァンが飛び出した。

ヴァンはモデルＦＸに変身する。あの装甲を砕いて攻撃を直接モデルＶに通すためだ。

「だりゃあぁぁぁぁぁっ！！」

何も抵抗できないオメガにメガトンクラッシュを打ち込む。一発目のアームＬは胴体にも張り付いた氷のせいで通りきらなかったが、それは想定内。本命のアームＲの一撃がオメガの胴体の装甲を砕く。

そしてヴァンはここでモデルＨＸに変身。ダブルセイバーの両方に

チャージをする。オーバードライブも発動する。

「プラズマサイクロンッ！！」

二振りの剣からプラズマの竜巻が巻き起こる。風と竜巻の中を走る稲妻がオメガを襲う。

そして、竜巻が収まる。

竜巻から解放されたオメガの目の前には、モデルＸの姿で、Ｘバスターに光を収束するヴァンがいた。

「いっけぇぇぇぇっ！！！」

ダブルチャージバスターが放たれる。

２つのエネルギー弾はオメガに直撃した。オメガの胴体に大穴が空く。

「グ・・・オォォオオオオオオオオッッ！！」

オメガが先程より大きな唸り声を上げた。両腕が落ちる。大穴の空いた胴体からバチバチと電流が出る。大破したオメガを見て、終わったと、誰しもが思った。

だが、戦いはまだ終わってはなかったのだった。

第４６話－信念の剣（前書き）

モデルＸにモデルＺ・・・英雄の伝説も所詮は昔話か・・・

・・・プロメテ

・・・それがどうかしたの・・・・・・？

・・・パンドラ

・・・ホントにネタ切れ起こしてんじゃないのか・・・？

・・・ヴァン

第４６話－信念の剣

大破したオメガは、海岸からなのは達にも見えていた。

「や、やったのかな？」

なのはが尋ねた。確証できないのは他の皆も同じであることがわかっている。だがそれでも状況を知りたかった。

「わからない。だがあれを見る限り、勝つには十分のはずだ」

意識を取り戻していたリインフォースが答えた。あれほどの破損状況なら、もう終わったと見える。

「・・・待って！あれは！？」

はやてが何かに気づいた。オメガの足下に血の色をした魔法陣が展開されてある。

「まだ動くのか！？」

シグナムが驚く。あそこまで壊れれば普通はもう動かないはずだ。ユーノが、そのオメガを見てあることに気づく。

「オメガの・・・魔力が増幅してる・・・！」

オメガの元から膨大だった魔力が、さらに数倍近くに膨れ上がっていた。

モデルＶの力なのか否か、どちらにせよ、何かが起こることは確実。

「ヴァン・・・！」

助けに行きたいのに行けない。そのもどかしさでいっぱいになりながら、フェイトはオメガと戦っている戦士の名を呟いた。

氷の床が揺れる。

「モット・・・モット力ヲォ！」

魔法陣の上で、オメガの力が増幅していく。

そして、オメガの身体が紫に輝き出した。

「！！」

ヴァンは警戒を強めた。

光が収まるとオメガの身体に変化があった。

オメガの身体が再生し、白だったアーマーが金色になっていた。黒い胴体を流れるラインも赤色から青色に成り変わっている。

「グ・・・オオオ・・・！」

オメガの落ちていた両腕が浮き上がる。両腕も金色に変わっていた。

大剣の岩石のような覆いが砕け、紫のエネルギーブレードが現れる。

ヴァンの頬を冷や汗が流れた。

先程の数倍近いプレッシャーが押し潰そうとしてくる。

息をするのが苦しい。

一歩動こうとするだけで疲労感が溢れる。

（身体が・・・動かない・・・・・・！）

そのヴァンの体を、血の色のバインドが縛り上げた。

「なっ！」

ヴァンはバインドから抜けようとするが、バインドは砕けない。逆にもがこうとする力が抜けていく。

「消エ・・・ロォォ！」

オメガの頭部から、両腕から、閃光が襲う。

ヴァンのXアーマーを砕き、ヴァンの身体を貫き、ヴァンを痛めつけていく。

光線によってバインドも砕けたが、無数の閃光を受けたヴァンからは立ち上がる力が失っていた。

うつ伏せに倒れる。

Xアーマーはボロボロとなり、至る所から多量の血が出ていた。指1本動かそうにも、意識が失いかけて動かない。

オメガは右手で大剣を持ち、逆手に持って真上からヴァンに切っ先を向けた。トドメにヴァンを串刺しにするつもりである。

ヴァンの心を、モデルVが侵食していく。

圧倒的な力の前に、勝てないと思い始める。

ここで意識を手放せば、それで楽になれるのではないか。そう思った。

その時、

『ヴァン・・・！』

『『ヴァンさん・・・・！』』

どこからか、声が聞こえた。

（・・・フェイト・・・・・なのは、はやて！！）

聞こえた3人の声で、ヴァンの意識が蘇った。

真上の剣が降下し始めた。

「ヴァン・・・！」

フェイトが祈る。その手にはプレシアが預かっていたヴァンの通信機の片方がある。

「「ヴァンさん・・・！」」

なのはとはやても祈る。戦いに協力できず、距離が遠いために様子も正確に把握できない自分達ができることはこれしかなかった。

ただただ、無事を祈る。

リインフォースもその3人を見て、通信機に向けて祈りの言葉を出した。

アルフも、ユーノも、プレシアもクロノも、守護騎士達も祈った。

祈りは、通信機を通して戦場へと届いた。

（みんな！！）

ヴァンは全身の力を振り絞り氷を蹴り上げた。
動き出したヴァンのすぐ後ろ、ヴァンが倒れていた場所に紫の剣が突き刺さった。
ヴァンはモデルＺＸとなる。モデルＸのダメージが、モデルＺＸの装甲にもヒビを入れている。

（そうだ・・・俺はまだ生きている。まだ諦めちゃだめだ！）

勝てないなど、誰が決めた？
意識を手放して、死んでその先に何がある？
そして・・・自分は何のためにここまで来た？

（まだ、守るための力がある！守るべきものがある！）

この世界の皆、フェイト達との約束、戻るべき場所、そして、自分で守り、作り上げる未来。
ヴァンには、守るべきものがたくさんあるのだ。
ＺＸバスターをオメガに向ける。

「うおおおおぉっ！！」

バスターを乱射する。オメガはそのエネルギー弾に対して障壁を張ることなくそのまま受けた。
オメガの頭部と、剣を持ってなかった左腕から光線が放たれる。障壁を張らなかったのは、いちいち防御するより敵の破壊を優先するためだった。
オメガが放った大量の閃光を前にしてなお、ヴァンは走る。閃光がヴァンの肩などが抉られても、走り続ける。
そして跳躍する。チャージされたＺＸセイバーを振り上げる。

「おおおおおおおおおお！！！」

チャージセイバーをオメガの胴体に叩きつけた。セイバーの衝撃がオメガに、衝撃の反動がヴァンに叩きつけられる。
セイバーとオメガの間でガリガリと金属音が響くが、まだ通りきらない。
逆に反動に身体が悲鳴を上げ、アーマーが砕けていく。

（越えてやる！こんな壁！！）

ヴァンは力を込める。モデルＺＸのアーマーの一部が砕け散った。

（守るんだ！俺が全部！！）

ヴァンは力を強める。身体から血が噴き出る。
金属音がさらに激しくなる。

（目の前に、敵が現れたなら――）

セイバーに自分の力、自分の全てを守る意思、そして仲間達の思いを注ぎ込む。

「叩き斬るまでだぁぁあああああああっっ！！！！」

全ての力を降り注ぎ、ヴァンはセイバーを振り切った。
着地するまでの力が残されておらず、ヴァンは氷の上を倒れ込んだ。
倒れたヴァンは、そのまま動かない。
そしてオメガは・・・オメガの上半身と下半身で斬り裂かれ、ギギギギと金属音を鳴らしながら上半身がずれていった。
裂かれた部分からショートし、小さな爆発が始まる。

「グッ・・・オォォオオオオオオオオオオオオォォォォアアアアアアアアアア！！！！」

やがて爆発は斬られた部分から全体の爆発へと変わり、辺りが巨大な爆風に呑み込まれた。

第４６話－信念の剣（後書き）

楓

「次回、第２章完結です」

第４７話－守った未来（前書き）

感情を生み出す・・・心を持つ君達こそ・・・真の、イレギュラー・・・なのだからぁ！！

・・・セルパン

ようは自分の行いを正当化させたいだけじゃん

・・・暁　楓

第47話－守った未来

夢を、見た。
どこまでも平和が続き、イレギュラーやその争いに誰も怯えることのない世界。
そこで自分はその世界と、もう1つの世界にいる大切な人達と共にその平和な時を生きていく。
今はまだ夢だが、それは幻想ではなく、いつか現実として現してみせる。現実に作り上げてみせる。そんな夢。
金髪の少女が、振り返った。

「ヴァン・・・・・」

その金髪の少女が、優しく呼びかけてくる。

『・・・ン・・・ァン・・・・・！』

「ァン・・・ヴァン、目を覚まして・・・！」

誰かの声が聞こえる。
ヴァンはぼんやりと目を開けた。目の前に、金髪の少女の顔が見えた。だが、半分以上が寝ぼけたままなので金髪以外の特徴が頭に入らない。
どっちだろう?とヴァンが思った。金髪の少女といって真っ先に思いついたのが2人いたからだ。
夢の中はガーディアンベースだったはずだ。そしてここもなんとなくだがガーディアンベースと同じ飛行船のような気がする。

とりあえず、候補の1人の名を言ってみることにした。

「・・・プレリー？」

「誰やねーん！」

バシィッ！

「っ！？」

突然横から関西弁と共に叩かれた。

この衝撃によってようやく意識が覚醒。もう一度見てみる。金髪で、赤い瞳をした少女だった。

「フェイト？」

「・・・ヴァン！！」

名を呼ばれたフェイトが抱き付いた。強く強く抱き締め、ポロポロと涙を零す。

ヴァンは周りを見た。どうやらここはアースラの医務室のようだ。

そしてここには自分とフェイト以外にもなのは、はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、リインフォース、アルフ、ユーノ、プレシア、クロノ、そしてヴァンとサテライトしているマルティナもいた。

「ヴァンさん！よかったぁ・・・！」

「もう、プレリーって誰やねん・・・」

なのはが喜びと安堵の表情を浮かべた。
そしてはやてはハリセンを持って少し頬を膨らませていた。ヴァンが寝ぼけて言ったプレリーという人物が誰なのか気になっているようだ。
寝たままだとみんなとの会話がしづらいため、上半身を起こそうとした。が、プレシアがそれを引き止めた。

「駄目よ身体を動かしちゃ。安静にしてなさい」

その言葉でようやく気づく。ヴァンの身体はまだ傷があり、軋んでいる。
その言葉を受け入れ、再び横になろうとして、ガバッと起き上がった。

「そうだっ、オメガは！モデルVはどうなったんだ！？」

そう、自分が戦った相手のことを思い出したのだ。最後の一撃を叩き込んだ後、気絶していたので覚えていない。
クロノがフッと笑った。

「オメガはお前との戦闘で撃破。大爆発を起こし、残骸は海に沈んだ。沈んだ後あのプレッシャーもなくなったところからしてもう大丈夫だろう。オメガや防衛プログラムの残骸は後日回収して、こっちで処分する」

「・・・そうか」

ホッと息を吐き、ヴァンは横になった。と、リインフォースが近づいてきてヴァンの視界に入った。

「ヴァン・・・その、貴方は大丈夫か？」

「ん、あー、かなり身体がギシギシいってるけど、まあ大丈夫かな。リインフォースこそどうなんだ？」

質問に答え、こっちからも尋ねる。モデルⅤがなくなってもう大丈夫だろうが、一応は心配である。

「大丈夫だ。防衛プログラムは消滅し、モデルⅤも貴方が破壊してくれた。モデルⅤがない以上、防衛プログラムが生まれることはなく、私が破壊を行う必要はない。主の脚も、これからのリハビリで歩けるようになる」

「・・・そうか」

「貴方のおかげだ。貴方のおかげで、私も、主も救われた」

リインフォースは少し恥ずかしそうに、顔を少し赤く染めて微笑む。

「本当に、ありがとう」

そのリインフォースの笑顔を見て、ヴァンの顔に笑みが生まれた。守りたいものを守れた。その結果、彼女の笑顔を見ることができた。だから、自然とそれが口に出た。

「綺麗な笑顔じゃんか。これからも、その笑顔でいろよ」

と。

「・・・！！」

微笑みながら言ったヴァンに、リインフォースの顔がさらに赤くなった。

「・・・で、この後の事後処理はどうなんだ？」

ヴァンがクロノに聞いてみた。ああ、とクロノが返事する。

「夜天の魔導書も守護騎士も、モデルＶによって利用されていたということははっきりしている。彼女らに罪を問うことはない。一応、保護観察はすることになるだろうが、それも形だけだ」

「え・・・いいんですか？」

クロノの言葉に、シャマルが遠慮がちに尋ねた。自分達のやってきたことは言わば犯罪である。それが実質なかったことになるのは、なんだか申し訳なく感じたのだ。

「さっき言った通り、君達はモデルＶに利用されていた。これは紛れもない事実だ。主であるはやては元から力を欲してなかったことだし、問題ない」

「はぁ・・・」

クロノの回答に、それしか言えなかった。

だがクロノは誰にも聞かれないように、

「・・・モデルＺと口論になることだけは避けたいからな・・・・・」

ぼそりと呟いた。何か罪を問えばモデルZとの論争で精神的にボロボロにされる自分達が想像できてしまっていた。ある意味トラウマである。

「え・・・何か言いました?」

シャマルがその呟きを僅かに聞き取って、なんて言ったのか確認してきた。クロノは「何でもない」と即答する。

「とにかくだ。お前が心配することは特にない。ゆっくり休んでいることだ」

「ああ。そうするよ」

「そうそう、ヴァンが映ったデータとモデルVのデータは全て消去しておくから」

部屋を出ようとして、去り際に言ったクロノのこの言葉。クロノにとってはヴァンへの心遣いのつもりだったのだが、真意を知らない者がいるわけで、

「貴様っ、それはどういうことだ!ヴァンの存在をなかったことにするつもりか!!」

「んだてめぇ、許さねーぞ!!」

「私達やはやてちゃんを救ってくれたヴァンさんのことを真実から消すなんて許しません!!」

「ヴァンは我らのためにも戦ってくれたのだ・・・それを無きもの

にするのは許さん！」

「クロノ君！シグナム達と同じく、それは私も許さへんで！！」

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、そしてはやてが激怒した。はやてとヴィータに関してはすでに戦闘大勢に入っている。リインフォースもヴァンを無きものにすることは反対だが、ヴァンを吸収したときにヴァンの記憶から元いた世界のことを知ったため、クロノの言葉の意味を理解し、抗議には至らなかった。
その後ヴァンの説明もあってシグナム達はその怒りを治めた。その時にシグナム達はヴァンの世界のことを知ることとなった。

その後もなんやかんやあったが、今は防衛プログラムやオメガとの戦いから数時間、もう１２月２５日に日付が変わってしまった午前０：３０程であったわけで、みんな寝ることになった。なったのだが・・・

「・・・なんでこうなんだ？」

医務室のヴァンが寝ているベッドには、ヴァンから右になのは、左がはやて、そしてヴァンの上にフェイトといった感じで入っていた。ベッドはそんなに広いものなどではないため、４人が入り込んでかなりギリギリだった。なのはとはやては落ちないようにヴァンと腕を絡ませている。さらにベッドの横にはリインフォースが椅子に座って寝ているし、ヴァンを治療しているマルティナは自分の額の上だ。
だがもう暗くなっている上、下手に動くとなのは達が落っこちてしまうため、じっとしている他はなかった。

「・・・にしても、長いクリスマスイブだったな・・・」

思い出してみる。なのは達とシグナム達の鉢合わせがあった見舞い、闇の書の覚醒、そして闇の書からリインフォースという名前に変わって、防衛プログラムと戦った（ヴァンは不参加だったが）。そして、オメガを、リインフォースに巣くっていたモデルVを破壊することに成功した。これが、たった1日の、半日であったことである。そう考えると、疲れが溢れて眠くなってきた。そのまま寝ようとする。

「ねぇ、ヴァンさん・・・起きてる？」

右側から声が聞こえてきた。なのはである。他の人を起こさないように、小さな声で話しかけてきた。

「どうした？」

ヴァンも、声を一段と小さくして会話する。

「うん・・・あの、覚えてる？ヴァンさんがオメガとの戦いに行こうとした時に私が言った言葉・・・」

そう、そういうこともあった。なのはが突然、ヴァンに告白してきたことだ。

「・・・・なぁ、あれって本気、なのか？」

ヴァンは質問で返した。

なのはの答えは、短く、そしてわかりやすい、

「うん。本気だよ」

という言葉だった。やっぱりか、と思いつつ、1つ疑問があった。

「なんで、俺を好きになったんだ?」

これである。ヴァンにはどうしてもわからなかった。

「・・・いつからかは、私にもわからない。フェイトちゃんがヴァンさんに支えてもらってるように、私もいつの間にかヴァンさんに色々支えてもらってるって思って、それからかな。ヴァンさんのことを強く意識するようになったり、ヴァンさんとフェイトちゃんの関係に妬いちゃったりしたのは」

しばらくして、それが恋だと気づいた。なのはの頭の中には常にヴァンがいるようになった。

ヴァンはなのはに顔を向けた。暗くて見えないが、なのはは恥ずかしそうに、そして笑顔になっているような気がした。

「フェイトちゃんには負けないよ。私がヴァンさんを振り向かせるから」

なのはが意気込みを語った。もうこうなれば、止まることはないだろう。

「・・・ま、その気持ちは聞かせてもらったよ」

ふぅ、とため息をつこうとして、やめた。ヴァンの上にはフェイトがいる。ため息がかかって起きてしまわないようにするためだ。

「ヴァンさん」

なのはが声をかけてきた。

「大好き。そして、お休み」

「・・・ああ、お休み」

こうして、ヴァンは眠りについた。

暗い、暗い、海の底。

そこには金色の巨大なアーマーの残骸が散らばっていた。

その残骸の中の一部から、砂煙が巻き上がった。

何かが出てくる。

翡翠色の三角形が、暗い海の中輝いている。その僅かな光によってできた影が、それが人の形をしていることを教える。

それの足下に血のように赤い魔法陣が現れる。

禍々しい光を放ち、それの姿が消えた。

管理局の一般では闇の書事件、そして当事者の間では闇の書・モデルV事件と呼ばれるこの戦い。

その戦いがまだ終わってなかったことを、ヴァン達が知ることとなるのは、まだ少し先の話・・・・・。

第2章・闇の書・モデルV事件篇

完

リリカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問2～

ヴァン
「はいっ、A' s篇も終わりました。ここでリリカルゼクス通信でーす！」

フェイト
「今回は重要な話があります」

エール
「へぇ、どんな話？」

ヴァン
「読者の皆さんにまたアンケートをしまーす！しかも2つ！」

フェイト
「1つは今後に大きく左右されるそうです！」

ヴァン
「名付けて！『第2回キャラクター人気投票A' s』と『ロックマンモデルAはどっち？第2主人公選定アンケート』～！！」

エール
「何・・・2つ目のタイトル？」

フェイト
「こちらがルール説明です」

○第２回キャラクター人気投票Ａ' ｓ・ルール

・投票対象は第２章開始から完結までの本編、前書き、後書き、リリカルゼクス通信に登場したキャラクター全て

・投票方法は感想にキャラクターの名前、投票する数を記入
（注意）投票数は１キャラあたり１、３、５、７、９のいずれかで、１票以外は票数が被ってはいけない

・マイナス票は受け付けない

・上記の条件内であれば、投票対象の人数、種類、票の移動は問わないものとする

・投票の締め切りは２月２８日まで。しかし、作者の都合で変更される可能性有り

・ユーザーではない人も投票できるが、同名だった場合は１人の票として扱う（ルール外の票になればその票は無効となる）

（例投票）
ヴァン・・・９票
フェイト・・・３票
リインフォース・・・７票
モデルＸ、モデルＺ、レイジングハート・・・１票

○ロックマンモデルＡはどっち?第２主人公選定アンケート・ルール

・投票対象はロックマンＺＸＡ主人公グレイとアッシュ

・投票方法は感想にＳｔｒｉｋｅｒｓ編に登場してほしい方の名前を記入（１人１票）

・複数票（２票以上）は認めない

・投票の締め切りは２月２８日まで。しかし、作者の都合で変更される可能性有り

・締め切り内であれば、何度でも変更可能

・ユーザーではない人も投票できるが、同名だった場合は１人の票として扱う（ルール外の票になればその票は無効となる）

・２人のプロフィール（自己解釈、ネタバレあり）

〇グレイ
・種族・・・レプリロイド
・性別・・・男
・身体年齢・・・１６歳？
・髪・・・銀のツンツク
・瞳の色・・・緑
・その他特徴・・・左頬の傷と背中からのチューブ
・追加事項・・・
謎の研究所で目覚めたレプリロイドの少年。
調整中のところをハンターによって発見、マインドコントロールが終わる前に強制的に目覚めたため記憶を失う。その後イレギュラーに襲われるが、近くのハンターキャンプに保護され成り行きでハンターとなる。

ライブメタルの輸送ミッションでプロメテ、パンドラの襲撃を受けるが、ライブメタル・モデルAを使用、ロックマンモデルAとなる。
彼の正体はライブメタル・モデルV及びウロボロスの創造者、マスターアルバートが本当に倒された時のアルバートのスペアボディ。
しかしグレイは自分の決めた運命を信じ、アルバートを撃破。その後は自分を見つける旅に出る。
性格はモデルA曰わく大馬鹿のお人好し。最初は目覚めてすぐに殺されそうになったことから自分を助けたハンターにすら敵意を剥き出しにしていたが、優しいハンターの心遣いから心を開き、自身もどんな悪人であっても助けようとする優しい性格となる。
そのため助けた元違法ハンターから“グレイの兄貴”と呼ばれるようになった。
ちなみに、グレイのストーリーでは本来ヴァンは登場しない。エールが登場する。

○アッシュ
・種族・・・ヒューマノイド（人間）
・性別・・・女
・年齢・・・16歳？（ZXA時代）
・髪・・・水色のポニーテール
・瞳の色・・・緑
・追加事項・・・
お宝好きなベテランハンター。
過去にイレギュラーの襲撃を受けた街の生き残りで、自分を含め自分を知る者が誰もいないため、自分の名を世界中に広めるためにハンターを営んでいる。
ライブメタルの輸送ミッションでプロメテ、パンドラの襲撃を受けるが、ライブメタル・モデルAを使用、ロックマンモデルAとなる。
彼女の正体はアルバートの遠い子孫。アルバートの血を最も濃く受

け継いだ故にアルバートにも想定外のロックマンとなった。
そして彼女は“物語”と称した自分の運命を自分で作り上げていくためにアルバートを撃破。その後もハンターを続ける。
性格は勝ち気で、勝手な行動をしたり三賢人を相手に強気な態度をとったりするが、いざとなるとやはり仲間や人のことを優先する優しい性格。
助けた元違法ハンターからは“アッシュの姐さん”と呼ばれている。
ちなみにアッシュのストーリーはヴァンが登場する正規ルートである。

ヴァン
「まあこんな感じかな?」

エール
「あのさぁ・・・なんでグレイが候補に出るわけ?普通にアッシュのままでいいじゃん」

ヴァン
「俺が知りたいよ」

フェイト
「ヴァン、作者から手紙が来てるよ?」

ヴァン
「手紙?」

カサカサ、スッ（手紙を取り出す音）

『グレイかアッシュかを投票させる理由?それはアッシュのトラン

スオンしたロックマンが弱いから、そしてグレイを小説で使いたいからさ！でもそんな理由で元々の設定を勝手に崩すのもあれだから、今回アンケートをとることにしたよ。
ｂｙ　暁　楓』

ヴァン
「・・・だってさ」

エール
「何この独断は・・・」

ヴァン
「つっても今回のＡ－ｓ篇だって後半ほとんどオリジナルだったじゃんか。モデルＶ然りオメガ然り」

フェイト
「あれ、封筒にもう一枚手紙が入ってる・・・」

カサッ（手紙を取り出す音）

『ちなみにモデルＡロックマン投票にはそれぞれの理由も用意しておいたから、投票者はぜひ理由の番号を３つまで付けてね。

グレイを選んだ理由
１、やっぱりロックマンやヒーローは男でしょ！
２、グレイかっこいい！
３、グレイとリリカルキャラの恋愛が見てみたい！
４、ヴァンをこれ以上ハーレムにしないで！
５、四天王ロックマンはやっぱりグレイの方が強い！

6、トランスオンしたアッシュの声が気持ち悪い
7、俺は作者についていくぜ！
8、グレイの兄貴！
9、グレイきゅ～ん！（ゼクス公式ブログでのパンドラの呼び方）
10、その他（書いてね）

アッシュを選んだ理由
1、ロックマンにも女を！
2、アッシュかっこかわいいよ！
3、やっぱ正規ルートだろここは
4、ヴァンを超ハーレムにしてしまえ！
5、アッシュだってヴァンに恋するもん！
6、アッシュの四天王ロックマンだって使いどころはあるって！
7、つーか勝手に変えんなよ作者
8、つーかグレイは旅に行っちゃったんだよね？どーすんの？
9、アッシュの姐さん！
10、その他（書いてね）

ちなみに僕も今回投票します！

人気投票
ヴァン・・・9票
リインフォース・・・7票
フェイト・・・5票
オメガ・・・3票
なのは、ザフィーラ、モデルZ・・・1票

ZXAキャラアンケート
グレイ
理由・・・3、6、9

投票待ってるよ♪』

フェイト
「・・・ということです。投票お願いします！あ、あと人気投票については前回同様、作者以外の投票者数が５人未満だった場合は発表を控えるとのことです！」

エール
「そういえばさ、なんで投票の数が奇数になってんの？」

ヴァン
「さあ？作者の気分じゃない？」

リリカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問2～（後書き）

楓

「投票お願いします！」

第４８話－平和な時の中・・・正月（前書き）

シャアァァ・・・（投票には）歓迎するぜぇ・・・
・・・ブレイジン・フリザード

あれ？Ｚ３？
・・・ヴァン

一応ＺＸにもいるから
・・・暁　楓

第４８話－平和な時の中・・・正月

ヴァンはハラオウン家、いや、テスタロッサ家の自室で目を覚ました。闇の書事件が終わった後、駐屯所だったこのマンションはテスタロッサ家の自宅となった。必要な機材をアースラに戻したこと以外はそのままである。

オメガを破壊してから、もうすでに数日が経つ。その間にも、特に事件が終わった翌日は色々とあった。

まずは、なのはとフェイトがすずかとアリサに魔法のことを打ち明けたこと。あの時、避難させた一般市民がその２人だったそうだ。なのはとフェイトの魔導師の姿がバレたので、２人に説明したのだ。なのはは、家族にも同じく説明をした。

はやてと守護騎士の面々は、クロノの言う通り管理局から保護観察を受けることとなったが、形だけであり、新たにリインフォースを家族に加えて明るく毎日を過ごしている。はやての脚のリハビリは守護騎士全員に加えてマルティナもサポートに加わっている。

グレアムは事件が終結した後、管理局を引退し、故郷のイギリスで使い魔２人と共に隠居生活をしている。イギリスに行く前にはやての元に向かい、自分がはやての生活援助をしていたこと、そしてはやてごと闇の書を封印しようとしていたことを話し、謝罪した。

クロノらアースラの人々は海の底に沈んだオメガと防衛プログラムを回収、処分した後はいつも通りの毎日に戻っている。

ヴァンも、八神家、そしてフェイト、なのは、アルフ、ユーノ、プレシアに自分のいた世界のことを改めて話した。

限りなく人間に近い機械生命体、レプリロイド。

遥か昔にあったとされる人と機械の戦争。

その戦争で人と機械のために戦った英雄・・・モデルＸ達の元となった存在。

自分の仲間達の組織、ガーディアン。

そしてライブメタルとの出会い、セルパンとの戦い。
その全てを話した。ヴァンの過去を聞いて悲しむ者もいたが、日常はそれほど変わらなかった。それどころか、なのは、フェイト、はやてがヴァンに対して色々と積極的になっていたりする。
・・・とまあそんな感じの数日間の出来事であった。
ヴァンはカレンダーを見た。月ごとに捲るタイプのカレンダーである。

「・・・・・新年、か・・・」

ヴァンが呟く。
そう、今日は1月1日。元旦である。

『ハッピーニューイヤー、だね。ヴァン』

「・・・ああ。明けましておめでとう。モデルX」

そんな会話をしながらベッドから降りる。朝食の準備をするために。

「おはよう。ヴァン」

「おはよう。もう朝食ができてるのね」

「いつも早いねぇ～」

フェイト、プレシア、アルフが順にリビングに入ってヴァンに挨拶する。

「ああ。今日は元旦だし、おせちってやつを作ってみた」

ヴァンも言葉を交わす。テーブルの上にはお雑煮やらといった普通のおせち料理がが並んでいた。
前にも言ったことだが、ヴァンの世界にも和という文化はある。だがヴァンにはそれの存在を知っているだけであり、当然おせちを作ることなんて初めてだ。というか、おせちという存在自体、最近初めて知ったものである。
ではなぜ作れたのか。それは桃子の協力を得たためである。事前に桃子からおせちの作り方について聞いたのだ。
全員席につき、箸を取る。アルフも人間形態である。

「「「「いただきます」」」」

それぞれがヴァン作のおせち料理に箸をつける。
料理の1つを口に入れる。

「うん。微妙」

ヴァンにとって、自身から出るこの感想についてはもう慣れていたりした。

とある神社の鳥居前。
朝食を食べ終え、片付けた後、ヴァン達はこの場に来ていた。
今ヴァンが着ているのは青の紋付き袴、フェイトは黒、プレシアは紫の着物、アルフは人型で赤い着物である。

「・・・にしても遅いねぇ、あいつら」

アルフが欠伸をしながら言った。待ち合わせからもう5分程過ぎている。

「そんなもんじゃないか？お前達だって着物着るのに結構かかったんだし」

ヴァンは後頭部で手を組む。この４人は初めての着物の着用だったため、かなり手間取った。待ち合わせから5分と言ったが、４人が着いたのはその時間である。
フェイトがこちらに近づいてくる人物に気づいた。

「あ、来たよ！」

フェイトは手を振って自分達の存在をその相手に伝える。

「ごめんごめん、待った？」

「ううん、私達もさっき来たところ」

「そっかぁ～。明けましておめでとう。フェイトちゃん」

「うん、明けましておめでとう。なのは」

やってきたのはなのはだった。ピンクの着物をきている。
なのはは他の３人にも新年の挨拶をする。ヴァンと挨拶する時に少し顔を赤く染めていた。
さらに何人かがこちらにやってきた。

「ごめんごめん～。遅れてもうた」

やってきたのははやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、リインフォース。狼形態のザフィーラ以外は全員着物姿であった。色は皆自分の魔力光と同じものである。

「明けましておめでとな。ヴァンさん、なのはちゃん、フェイトちゃん」

はやてがなのは同様に新年の挨拶をする。はやてもヴァンに挨拶する時に顔を少し赤らめていた。そして全員で挨拶をする。

ふとヴァンは、リインフォースがどこか落ち着いていないことに気づいた。

「どうしたリインフォース。そんなそわそわして？」

ヴァンの声に気づいたリインフォースは、少し言いづらそうに、

「いや、その・・・着物というのは初めて着るから・・・その、変ではないか？」

とヴァンに尋ねた。

ヴァンはリインフォースをよく見た。紺に近い黒の着物。彼女の銀の髪とは対照的なその色はよく似合っている。

ヴァンに見つめられて、リインフォースは少々恥ずかしそうにしている。

「ああ。よく似合ってる。綺麗だ」

ヴァンは正直に答えた。

その回答に、リインフォースは嬉しそうに笑顔となった。

「ちょっ、リインフォースばっかずるいで！ヴァンさん、うちはどうや！？」

「あーっ！はやてちゃんもずるいよ！ヴァンさん、私は！？」

その様子を羨ましそうに見て、我慢できなくなったはやてとなのはがヴァンに詰め寄る。

「あ、ああ。似合ってる」

ヴァンは詰め寄る2人にたじろぎながら答えた。2人の着物姿も、十分似合ってる。この感想は間違いないのだが、それ以上に2人が怖かった。

出発前に似合ってると感想をもらっていたフェイトは、その様子を少し睨むように、そして頬を膨らませながら見ていた。

そんな一悶着があったものの、一行はここに来た目的、初詣をした。なのはとはやて以外は初詣を知らないため、2人から願掛けという新年の願い事をすることを聞いてから、賽銭を投じ、手を合わせる。

「ウ、・・・ァン・・・と・・・緒・・・に・・・・・」

チラチラとヴァンを見て、顔を赤くしながらフェイトが小声で願い事を呟いている。

なのはも無言で手を合わせているがチラリとヴァンを見ては顔を赤くしている。

「ヴァンさんがうちに振り向いてくれますように、ヴァンさんがうちに振り向いてくれますように、ヴァンさんがうちに振り向いてく

れますように・・・」

はやては声が明らかに聞こえる上、早口で願い事を呟いている。
願掛けは流れ星への願い事じゃない。それに、聞こえる声でそんな願い事を言うのはやめてほしい。周りからヴァンに向ける視線が痛い。
ヴァンはそんな視線に耐えながら、何も言わず目を伏せ手を合わせている。他のみんなもヴァンと同じく静かに願掛けをした。

その後屋台巡りを一通りして今現在帰路に立っている。

「ところで、みんなどんな願い事をしたんや？」

はやてが尋ねた。

「はやてちゃんは聞こえる声で言ってたけど・・・さすがにそれは叶わない、いや、叶えさせないよ？」

なのはが願い事の代わりに黒い笑みと共にそう宣告した。

「それはなのはもだよ？ヴァンは私のものだから」

フェイトも黒い笑みを浮かべてなのはに警告した。

「あたしは、はやてとこれからもずっと一緒にいたいって願った！」

「私も、同じことを願いました」

ヴィータとシグナムが言った。守護騎士は皆同じ願いのようだ。

「私は、フェイトがこれからずっと笑顔でいてくれるように願ったわ」

「あたしもそれっぽい感じだったねぇ。フェイトが幸せでいられますようにって」

とプレシアとアルフ。

「ではヴァンさんはどのような願いをしたんですか？」

睨み合っている3人少女の代わりにシャマルが尋ねた。その言葉で3人は一時休戦し、ヴァンに視線を向けた。

「俺の願い？ん～、そうだな～・・・」

顎に手をあててわざともったいぶる。そしてニヤリと笑って一言。

「秘密」

直後3人がずっこけた。

「ちょっ、ちょっと！秘密って！」

「ずるいやん！うちのは教えたのに！」

「ヴァン、何を願ったのか教えて！」

なのは、はやて、フェイトが口々に言い寄る。ヴァンはそれをのらりくらりと笑いながらかわしていく。他7人はその様子を微笑まし

く見ていた。
ヴァンの願い。
この世界、そして元の世界のみんなと笑顔で暮らせますように――。
今日も海鳴市にてヴァン達の日常は平和そのものである。

第４８話―平和な時の中・・・正月（後書き）

楓

「はあ、投票がどんどん来て嬉しい作者です。
ただ、ルールは守って！偶数の投票や１票以外の数に２キャラ以上入れるのはルール違反で無効になるよ！？」

第４９話－平和な時の中・・・バレンタイン（前書き）

その透かした面、恐怖で凍り付かせてやるよ！アハハッ！

・・・チルドレ・イナラビッタ

またＺ３・・・

・・・ヴァン

知ってる？この戦闘前の台詞は一部ＺＸでしか聞けないんだよ？ある意味名言じゃね？

・・・暁　楓

第４９話　平和な時の中・・・バレンタイン

時は過ぎ、２月１４日。
それはバレンタインデー。女性が男性にチョコと共に好意を届けるという定番で広く知れ渡っているイベントである。
ヴァンは、そのバレンタインが嫌いであった。
なぜ？と聞かれれば一般的な答えはチョコをもらえないから、毎年チョコをたくさんもらっていい思いをしている奴がいるから、といったものだろう。実際に、ヴァンは元の世界ではチョコをもらえてなかったし、ジルウェは生前チョコを結構もらっていた。
だが、それとは違う、そんなことはどうでもいいと思ってしまうほどの理由があった。
それは、仕事である。
バレンタインデーになって急遽仕事が飛び込んでくるのだ。それが毎年である。
仕事はバレンタインで浮かれた社員の代わりが大半だが、その他にも自分から渡すのが恥ずかしいからとか、忙しいとかの理由で代わりに手紙と共にチョコを届けてほしい、というものまである。ヴァンは特に後者が嫌である。
例えば、〇〇君に私の代わりにチョコを渡してほしい、という依頼がくる。ヴァンは依頼者からチョコを受け取ってそれを相手に配達する。
ここでストレスになるのが、まずチョコを受け取った相手の反応だ。説明はするので勘違いなどは起きないが、依頼者のチョコを受け取ってその場で浮かれる者がたまにいる。その様子を見てイラつく。
でもってもう１つのストレスが、周りの人の目である。相手には事情を説明するが、周りの者は事情を知るわけがない。端から見ればヴァン自身が男にバレンタインチョコを渡しているようにしか見えないのだ。事実そういう目で見られて仕事がめっきり減ったことが

ある。
そんなバレンタイン限定の仕事のせいで、ヴァンはバレンタインデーが嫌いなのだ。
しかし、ここはその世界とは違う。自分は運び屋としての知名度が限りなくゼロだ。ここでなら、そんな仕事に追われずに済む。そう思った。
そう、思っていた時期があった。

「ヴァン君！これをそっちのお客さんに！」

「うーっす！」

士郎の掛け声にヴァンが返事をし、注文の品があるトレイを持つ。
ここは翠屋。ヴァンは臨時店員として動き回っていた。ヴァンと高町家の他にも、手伝いとしてフェイトやプレシア、八神家からもシグナムとシャマルも動いている。
今翠屋は、多忙のピークを迎えていた。
理由は、バレンタイン限定で販売しているチョコレートケーキ他、チョコレートケーキ全般。その場で食べる、持ち帰りにしてバレンタインのプレゼントとして渡すなどの理由で客が来るのだ。予約もあったのだが、すぐにいっぱいとなっていた。
しかも、だ。
どこからどうやって聞きつけたのか、ヴァンに仕事の依頼をしてくる者もいた。
バレンタインで浮かれた社員の代行、バレンタイン特別イベントの準備および後片付け、チョコの配達、エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ！

『ヴァン！そろそろ次の依頼の時間だよ！』

モデルＸが時間を知らせる。

（ちくしょおおおおおおおお！！！）

心の中、ヴァンは思いっきり叫んだ。

ようやく全ての依頼を遂行し、ヴァンはベッドに倒れ込んだ。現時刻、１１：５０過ぎ。

大量の仕事のおかげでヴァンの財布の中身は満タンになったが、逆にヴァンの体力はスッカラカンとなった。

疲労困憊な身体がベッドに沈み、眠気を受け入れていく。

（バレンタインなんて、モデルＶに食われてしまえ・・・・・）

そんな風に毒づきながら、ヴァンの意識は眠りの闇に落ちた。

翌朝。

いつもより遅く起きたヴァンは、微かな甘い匂いを感じた。

重い瞼をこすり、その匂いの方を見る。ちょうど、ほとんど使われていない机がある方角だ。

いくつかの包装された箱が机の上にあった。

「・・・・・？」

ベッドから出て、のそのそと机に向かう。
机の上には箱の他にも手紙があった。数は箱と手紙共に7つずつ。
手紙の封を開け、文を読み始める。

『昨日はお疲れ様、ヴァン。私もチョコを作ってみたの。よかったら味の感想を聞かせてね。・・・でも、直接渡したかったな。
フェイト』

『ヴァンさん、昨日はお店を手伝ってくれてありがとう。チョコレートケーキを贈るから、食べたら感想を聞かせてね。
なのは』

『ヴァンさん、昨日は大変だったってシグナムから聞いたよ。お疲れ様。これを食べて、ゆっくり休んでや♪
はやて』

『ヴァン、昨日はお疲れ様。とりあえず今日はゆっくりしておきなさい。苦労の労いとして、これを贈っておくわ。
プレシア』

『昨日はお疲れさ～ん。市販のものそのままだけど、まあ食べなよ。
アルフ』

『昨日は大変だったと聞いた。チョコ作りは初めてだから口に合うか不安だが・・・よかったら食べてくれるか？
リインフォース』

『昨日はお疲れ様です。私も苦労の労いとしてチョコを1つ作らせていただきました。よかったら食べてください♪
シャマル』

7つの手紙を読み終わった後、ヴァンは7つの箱を見た。箱にも、フェイト達の名前がそれぞれに書かれている。
1日遅れのバレンタインチョコ。だが、日にちは関係ない。ヴァンはこの7つのプレゼントに感激した。
ヴァンは包装を解き、手紙を読んだのと同じ順番でチョコを頬張っていく。
フェイトのハート型チョコレート、なのはのチョコレートケーキ、はやてのチョコレートクッキー、プレシアのビターチョコレート、アルフの市販の板チョコ、リインフォースのミルクチョコレート・・・どれもそれぞれ美味しかった。
ヴァンは初めてバレンタインがあってよかったと思った。
で、最後に残ったのがシャマルのチョコだが、箱を開けると手紙と1つの何かの錠剤が添えられていた。

「なにこれ？」

ヴァンは折り畳まれていた手紙を開いた。
手紙にはこう書かれていた。

『実はシャマル、料理が殺人級にやばいんよ。気休め程度に胃薬を勝手に入れといたよ。・・・食べないのが最善の判断やけど。
はやて』

「・・・・・・・・・」

ヴァンは箱の中身を見た。中にはチョコ、と思われる物体が入っていた。
・・・・・紫の。

（・・・・あれ？目がおかしくなったのかな）

ヴァンはゴシゴシと目を擦った。
だが紫のチョコはいつまでたっても紫であった。
・・・見るからに怪しいものである。これを食えと言うのか？一応、はやては食べないことを勧めているが。

（でも、せっかく作ってくれたんだし、ちゃんと食わないとな・・・）

ヴァンはそのパープルチョコレートを口の中に放り込んだ。
バリバリと普通では有り得ない音が鳴る。
そして、ヴァンは再び深い眠りについた。

午後になってようやく復活したヴァンは、チョコの感想を手紙形式にして全員に贈った。
誰一人に対して否定の文を書かず、お礼などを書いたため、全員喜んだ。
だが、はやての手に渡った手紙の追記の文。

『これからシャマルにはバレンタインの時市販のものをそのまま出すようにしてもらって』

はやてはそれだけで何があったのか悟った。
そして今家に来ている、少し頬の痩けたヴァンに、

（・・・うん、まかせてや）

哀れみの気持ちを含めて、シャマルに気づかれないように、親指をしっかりと立てた。

ちなみに、この出来事のおかげでヴァンに少しだけ料理の腕に自信がついた余談がある。

第４９話―平和な時の中・・・バレンタイン（後書き）

楓

「バレンタインに合わせて投稿してみました」

第５０話－平和な時の中・・・告白（前書き）

ふう。もう５０話か・・・・・・

・・・暁　楓

あれ？名言は？

・・・ヴァン

たまにはいいじゃん。疲れた

・・・暁　楓

第５０話　平和な時の中・・・告白

また時は過ぎ、３月も残り数日となった頃。
ヴァン、フェイト、なのは、守護騎士達が病院に集まっていた。
彼らが見つめる先には、車椅子に乗ったはやてがいる。
はやての脚の回復は、懸命なリハビリやマルティナのサポートによって一週間前にはもう１人で歩けるほどになっている。はやても手すりや誰かの支えがあれば歩ける。だが、自分を支えるものがない状況ではまだ立つこともできないでいた。
回復はしきっているのに立てない。その理由ははやて自身の心にあった。
生まれてから今まで、立つということをしたことがない彼女は、動かない脚に慣れてしまい、頭では歩けるとわかっていても、それが心のどこかで“歩けない”と否定してしまうのだ。
ずっと動かなかった脚で立てるわけがない。
立っても、すぐに倒れてしまうのではないのか。
そんな否定がはやての歩く意志を抑えつけてしまう。
そして今日は１人で立つ練習の７日目であった。はやてとヴァン達の距離は大体２～３メートル程である。

「ほな、いくで・・・」

はやてが声をかけ、立ち上がろうと力を入れる。
ゆっくりと立ち上がろうとするはやてを、ヴァン達が見守る。はやてをいままで診てきた石田先生も見守っている。
はやてが立ち上がり、車椅子の手すりを掴みながら車椅子の隣まで移動した。
はやては車椅子の手すりを掴む手を、片方離した。

「はやてちゃん、頑張って・・・！」

「大丈夫だよ、はやて・・・！」

なのはとフェイトがエールを送る。
はやてが車椅子を掴む手を両方離した。
心の中の不安が脚に伝わり、小刻みに震える。

「あ・・・・・」

脚が屈して、はやてはペタリとその場に座り込んでしまった。

「はやて！」

ヴィータがはやての元に駆け寄ろうとする。シャマルも同じくはやてに近づこうとした。
いままでは、はやては2人に助け起こされ、ごめんと申し訳なさそうに言って終わりだった。だが、今日は違った。

「待って！」

「・・・！？はやて？」

はやてが近寄るヴィータとシャマルを止めた。
はやては震える身体に必死に力を入れている。

「だめや・・・ここで助けてもろうたりしたら、ここで諦めたら、ずっと変われへん・・・！」

ゆっくりと体を起こしていく。

心の不安との戦いが、涙となって出てくる。

「みんな・・・頑張ってくれてるんや・・・だから、今度はうちが頑張らなきゃだめなんや・・・！」

震えながらも、はやては立ち上がった。
その光景を見て、シャマルを始め守護騎士の目からも涙が出てきた。
はやてはまっすぐ、自分が好意を寄せている人物、ヴァンを見る。
距離は2～3メートル程。

「歩くんや・・・」

僅かな、本当に僅かな一歩を踏み出す。

「歩く・・・！」

リハビリを、練習を思い出しながら、一歩、また一歩と脚を動かす。
小さかった歩幅は、歩くにつれて少しずつ大きくなっていく。
少しずつ、ヴァンが近くなっていく。
不安は、いつの間にかなくなっていた。

「ヴァンさん・・・！」

はやてとヴァンの距離が1メートルを切った。
だが、その時脚がもつれてしまい、はやてが倒れかかった。

「あっ・・・！」

突然の出来事、そして来るであろう痛みを恐れて、はやては目を固く閉じた。

だが、次に感じたのは床に倒れる痛みではなく、誰かに抱かれるような、優しい感触だった。

「え・・・？」

はやては目を開け、顔を上げた。
そこには、ヴァンの顔があった。
はやてが倒れる直前、ヴァンはとっさにはやてを抱きかかえたのだ。

「・・・よく頑張ったな。はやて」

ヴァンは優しくはやての頭を撫でた。
それははやてにとって何よりも心地よくて、何よりも欲しかった暖かさだった。

「・・・ぅぐ・・・ヴァン、ざぁん・・・ひっく・・・！」

目から涙が溢れ、はやては強くヴァンに抱きついた。

「あ、歩けた・・・ぐすっ、1人で・・・うちの力で・・・ひっく・・・歩けたぁ・・・！」

歩くという、もうずっと前に、一度は諦めていた願い。
はやては、自分自身でその願いを叶えた。

それから数日。はやては引き続き練習を重ねた。
心の不安が取れると、人の上達は早いものである。その後はどんどん上達していき、走るまではまだいかないものの、しっかりと歩く

ことができるようになった。もう車椅子は必要なくなった。
そして今日。ヴァン、テスタロッサ家、八神家は高町家の翠屋に集合していた。
はやてが歩けるようになったのと、明後日となったはやての復学を祝ってのパーティーだ。学校はなのは達と同じ聖祥小学校である。
三家の他にもアリサとすずかもいる。今日は全員お泊まりだ。

あれ、全員ちゃんと入るのか？（暁　楓）

貸し切りで会場となった翠屋で、騒がしいパーティーが始まった。

「ちょっとヴィータ！それはあたしが狙ってたケーキ～！」

「へっへー！早いもの勝ちだアリサー！」

アリサとヴィータがケーキの取り合いをしたり、

「皆さーん！ケーキを追加で作ってみましたー！」

「って、シャマルが作ったのか！？」

「何その反応！酷くない！？」

シャマルがケーキを自作してシグナムがドン引きしたり、

「ガツガツガツガツ・・・・・」

「アルフ。食べ過ぎよ」

「すごい食べっぷりですね～」

料理にがっつくアルフをプレシアがたしなめすずかが笑ったり。

さらには、

「ヴァン～」

「うおっ、フェイト!?って酒臭っ!」

「「ヴァンさぁ～ん」」

「って、お前らもかよ!誰だ!未成年に酒飲ませたのは!」

「あーっ!これジュースだと思ってたぁ!」

「シャマルお前かぁぁあああ!!」

「貴様ぁぁぁ!なのはに何をぉぉおおお!!」

「少しは落ち着けシスコン兄がぁぁあああ!!」

てな感じで怒号が響き渡ったり。

「・・・こ、これを飲めば、主達と同じようにできるのだろうか・・・」

リインフォースははやてが飲んだのと同じ酒が入ったコップを見つめて顔を赤くしながら考え込んでいる。

ザフィーラは静かに狼形態で料理を食べている。

士郎と桃子と美由紀はそれらの様子を笑いながら見ている。
一方ライブメタルは、

『賑やかで平和だね』

『・・・そうだな』

『平和はいいとして、久々の出番がこれだけ？冗談じゃないわよ』

『我慢しろモデルＬ。出番があるだけありがたいと思え』

『あー、退屈だ・・・』

『・・・・・・・・』

こんな感じだった。

騒がしいパーティーも、夜になるとほとんどの者が寝て静かになった。
まだ起きている者もいる。ヴァンはその１人だ。高町夫妻も起きていて、パーティーの後片付けを静かに行っている。ヴァンは寝静まったみんなを起こさないようにしながら毛布をかけている。
もう１人起きていた者、リインフォースがヴァンに近寄ってきた。

「あの・・・ヴァン・・・」

「ん。どうしたリインフォース？」

ヴァンは毛布をかける手を一旦止め、リインフォースに振り向いた。
そわそわと落ち着きのないリインフォースは、少し顔を赤らめている。

「そ、その・・・話したいことがあるのだが・・・ふ、2人で外に行かないか？」

「・・・？ああ、いいぞ」

2人は外へ出た。

2人は歩いていき、公園についた。

「・・・で、話ってなんだ？」

「・・・・・・・・」

尋ねてくるヴァンに話そうとするが、声が出ない。
胸の鼓動が早くなるのがわかる。
話すことは決まっているのに、なぜかその言葉が出ない。出そうとすると、急に喉が抑えつけられたかのように苦しくなる。
でも、こうやって誘ったのだ。何が何でも言わなければいけない。
リインフォースは焦りのまま言葉を出した。

「ウ、ヴァンは元の世界が見つかったら、そこに戻るのだろう？」

「・・・ああ。俺にはモデルVを全部破壊するっていう使命があるからな」

「で、ではそれが終わったら、どうするのだ・・・？」

言いながら、リインフォースは自分が言おうとしたことはそれじゃないと思った。

日常で、リインフォースの頭の中にヴァンの姿が現れることが毎日のようにあった。ヴァンを思い浮かべては胸が痛み、熱っぽくなる。周りの声が聞こえなくなる。モデルＶの支配よりも苦しく感じることさえあった。

ヴァンが八神家に来た時はより苦しく感じる。ヴァンが主や高町、テスタロッサと話すところを見ると締め上げられたかのように痛む。

だが、その症状は嫌にはならなかった。

それが恋だと知ったのは、主に相談したときだ。

ある日、主にこの症状について聞いてみた。主は複雑そうな顔をしながら、

「ライバルが増えたなぁ・・・」

なんてぼやきながらそれがヴァンに恋しているのだとと言ってきた。ついでに「リインフォースには負けへんで！」とまで言ってきた。

恋というのは知識としては知っていたが、実際にはどういったものかわからなかった。

でも、ヴァンが近くにいると安心できる。できることならヴァンはずっとそばにいてほしい。それが恋なのだと思った。

だが、それと共にある不安が生まれた。

ヴァンが元の世界に戻ったら、もう会えなくなるのではないか？

遥か遠い場所へ行って、それっきり戻ってこなくなるのではないか？

リインフォースはそれが不安で仕方なかった。その不安でいっぱいになって眠れない夜もあった。

だから違うと思ったこの質問も、実はリインフォースが話したいこ

とでもあったりする。
ヴァンは目を伏せた。

「・・・俺が望む未来には、みんながいる。元の世界のみんなも、この世界のみんなもいる」

ヴァンは目を開けた。
そしてヴァンは微笑んだ。

「モデルVを全部破壊し終わったら、その未来を作り上げて、みんなと一緒に生きていくさ」

リインフォースは思い出した。モデルVに支配されていた自分をなぜ助けようとするのかという質問に対してヴァンが言った言葉。

“俺が本当に望む世界は、本当に築き上げられた未来。その中に、お前もきっといるから――”

なんて馬鹿な心配だったのだろう、とリインフォースは脱力した。
ヴァンの未来には、自分達がいるのだ。元の世界に戻っても、必ず戻ってくるとわかるものだった。
フッと、リインフォースから苦しさがなくなった。喉を抑えられるような感じもない。あとは、言葉を出すだけだ。後、もう1つやることもある。
リインフォースはヴァンの頬に手を添えた。

「・・・？」

手を添えられたヴァンは怪訝そうな顔になる。
目を閉じ、リインフォースはヴァンに顔を近づけた。ようやくヴァ

ンがあることに気づくが、もう遅い。
リインフォースとヴァンの唇が重なった。

「――っ!!」

ヴァンは仰天し、顔を赤くするが、なぜか思考が停止して動けない。
フェイトとは違い、重なり合った唇はすぐには離れなかった。柔らかい感触が唇に伝わり続ける。
1分かそこらの長いキスを終え、リインフォースは顔を離した。顔は赤いが、笑顔だった。

「ヴァン、好きだ。私は貴方を愛してる」

告白が耳に届いた。だが、ヴァンはまだ動けずにいた。

「・・・では、戻ろう」

リインフォースは歩き出した。
ヴァンはその場から動かずにいた。
視界からリインフォースがいなくなった辺りで、ヴァンの思考は復活。顔が引きつっていく。

「・・・このことがフェイト達にバレたら、殺されるな・・・・・」

それから数分して、ヴァンはようやく翠屋に戻った。
後日、また後をつけていたモデルLにこのことをからかわれ、めちゃくちゃ恥ずかしい思いをした。

第５０話　平和な時の中・・・告白（後書き）

楓

「予告です。次回から多分ヴァンへの殺意が上がります」

ヴァン

「なにそれ！？」

第５１話　平和な時の中・・・共感（前書き）

楓

「今回は名言コーナーそのものを休みです。
本来ならヴァンに殺意を覚える話の予定でしたが、急遽それは次回に持ち越しということにしました。
で、今回はちょっとしたリクエストの話をと。
ではどうぞ」

第５１話　平和な時の中・・・共感

ある日のことである。ヴァンはアースラに呼ばれた。
小説上ではしばらく関わっていなかったが、ちょくちょく任務で皆アースラに呼ばれる。単に小説として出されていないだけだ。
アースラに入ったヴァンは、呼んだ本人であるエイミィからあるものを渡された。

「なにこれ？」

渡されたのは、赤い宝石が入ったペンダントであった。

「こっちの技術で、デバイス本体に魔法を使う分の魔力を持たせることでリンカーコアのない人でも魔法を使えるようにするっていう研究がされてるんだけど、その技術を少しいじってライブメタルの変身するためのエネルギーを持たせてみたんだ」

エイミィが説明する。それはつまり・・・

「疑似的なロックマンにするためのデバイスってことか？」

「そういうこと♪」

指で○を作る。
はあ、とヴァンが呟く。

「ああ、心配しなくても開発に協力してもらった技術者にはちゃんと他には口出ししないって約束してもらったから」

「・・・俺としては約束よりもデータが残ってたってところに疑問があるんだけど？」

ヴァンは軽く睨む。エイミィは睨まれる前に素早く視線を顔ごと反らせた。

はぁ、と今度はため息。

「・・・で、これをどうしろと？」

ヴァンはペンダントのヒモ部分を摘んでぷらぷらと揺らした。

「まあ、ちょっとした出来心で作ってもらったんだけど・・・作ってもらったんだしお願い！誰かロックマンに変身させてくれない？」

エイミィは勢いよく手を合わせて頭を下げた。

出来心でって・・・とヴァンは呆れるが、ここまで頭を下げられてはどうも断りづらい。

まあ自分としても興味はあるし。

「はぁ、わかった。わかったから頭を上げてくれ」

「ありがとー！」

一気にハイテンションになったエイミィ。

そのことはほっといて、誰に渡そうかと悩むヴァンであった。

「・・・で、僕に？」

「ああ。まあよかったんじゃない？そろそろ出番が欲しかっただろ？」

「そういう発言はやめようよ・・・」

白羽の矢が立ったのは、無限書庫で働いていたユーノ。
第４８話からすっかり名前すら出されなくなっていた人物である。
ちなみに、もう忘れたかもしれないが今作の彼は淫獣ではない（笑）。

「これがその装置？」

「ああ。名前とかはないからって“ライブメタル共感用デバイス”なんて味っ気のない名前をつけられた装置」

「・・・説明どうも。これを首に掛ければいいんだね？」

「そう言ってた」

ユーノはペンダントをもらい、首に掛けた。

「どうだ？」

「別に、これといった変化は感じないけど・・・」

『それじゃあ、僕の声は聞こえるかい？』

試しにモデルＸが言葉を出してみる。するとユーノが驚いた。

「あ、聞こえるよ！モデルＸだよね？」

「おお！本物！じゃあ後は変身だな。よし、訓練室に行くぞ」

ヴァンがユーノを引っ張る。

「え？僕が変身するの？」

「当たり前だ。じゃなきゃここに来てないって」

「いや、でも僕にはここでの仕事がたくさん・・・」

ユーノは渋った。そう、この無限書庫での仕事は結構ハードなものなのである。今でも仕事がたくさんあるのに、それを少ない休みの時に持ち越すようなことはしたくない。

「・・・ていうかそのエイミィさんは？自分で変身しないの？」

「いや、オペレートばっかのあいつが変身の衝撃に耐えられるわけないだろ。かなりくるものだぞ？あれは」

「つまりそれを僕に押し付けようとしてるんだよね？でもそれだったらなのは達が・・・」

ユーノはもっともな意見を述べる。変身の衝撃に耐えるのであれば、魔力が強いなのは達がいる。だが、

「俺があいつらに持って行けば争奪戦になりかねない。余計面倒」

「でも、それならシグナムさんとか・・・」

「シグナムら守護騎士ははやてが却下する」

「なら、プレシアさん・・・」

「同じ理由のフェイトバージョン。アルフも同じく」

「クロノは・・・」

「最近書類に追われてるらしい」

「・・・アースラ隊い」

「俺が却下」

「・・・・・・・・」

全ての逃れる手を失ったユーノであった。

『それじゃあユーノ君。お願いね！』

「・・・・・はい」

結局ユーノがやることになった。ユーノの傍らをモデルHが浮いている。

ユーノの向かい側にはヴァンが立っている。一応模擬戦とし、相手としてヴァンが請け負うことになった。ハンデとして威力の抑えると共に、ヴァンが変身できるのはモデルXのみとしている。

ヴァンはもうすでにモデルXで変身してる。

「えーっと、モデルHに神経を集中させればいいんだよね？」

モデルHに確認をとる。

『ああ。また、変身するときには、言わばパスワードとして“ロックオン”と唱える必要がある』

「デバイスの起動条件みたいなものだね」

ユーノはモデルHを手に取り、意識を集中し始める。

ヴァンと同じように手をかざし、叫ぶ。

「ロックオン！！」

『適合者確認・・・R．O．C．K．システム、起動開始・・・』

モデルHから溢れる閃光が、ユーノを包み込んだ。

風が巻き起こり竜巻が生まれ、周囲を雷が轟く。

竜巻が晴れると、緑の装甲を纏ったロックマンモデルHとなったユーノが現れた。

基本的な装甲はモデルHXよりも軽そうな感じとなり、特にホバージェットは小型化されていた。胸には共感装置がプログラムにならずに残っている。

「ほぉー」

ヴァンが関心の声を上げた。

「すごい・・・僕の中で力がどんどん溢れてくる・・・！」

ユーノは自分自身の変化に驚いている。

『はい！ユーノ君が変身したところで、模擬戦始めるよ！ちなみにできるだけ魔法は使わないようにね！』

嬉しがっているエイミィの言葉で火蓋は切って落とされた。

「そおらっ！」

「はっ！」

開始3分。攻撃を制限された者とライブメタルに慣れてない者との模擬戦は進展があまりなかった。

ヴァンは手加減としてチャージをしない分、Xバスターをの弾数で勝負。

対するユーノは弾丸を空中でよけながらプラズマサイクロンで攻撃していく。だが、ヴァンはプラズマサイクロンばかりの攻撃が当たるほど弱くはない。

『どうした！攻めて行かねば勝てんぞ！』

少々苛立っていたモデルHが荒い声を出した。モデルHは本来ダブルセイバーを使った空中においての接近戦を得意とする。それが遠距離からのプラズマサイクロンのみであれば当然苛立つ。

「そんなこと言われても！僕はそもそも接近戦はあんまり得意じゃないんだよ！」

ユーノが叫んだ。

ユーノはそもそも結界魔法や回復魔法、探索魔法といったサポートが主体だ。戦闘が全くできないというわけではないものの、この得意不得意は大きい。

「どうした！ロックマンはライブメタルと息を合わせないと勝てないぞ！」

言いながらヴァンはバスターを連射する。

「そもそもロックマンじゃありませんよ！今だけなんですっと！」

ユーノは着地し、ダッシュで弾丸をよけようとした。
その時、アクシデント発生。
何かにつまずいたのか、ダッシュの勢いの加減にミスがあったのか、思いっ切りその場に正面から転倒してしまった。

「いだっ！！」

ガゴンッ！と音が鳴り響いたところと、ユーノの声からして、結構痛そう。

「おーい。大丈夫か～？」

ヴァンが呼びかける。が、ユーノは起き上がらない。
頭でも打ったか？と思ったが、指がちょろまか動いているところからして意識は無事のようである。となれば何だろう？

「・・・おい、大丈夫か？」

さすがに心配になってきたので近寄ってみると、ユーノは首だけを

横に動かした。

「動けません・・・」

「・・・は?」

「体が・・・とても重くなって動けないです・・・」

「・・・・・・・・」

ふとヴァンは地面に散らばっているあるものを見つけた。
転んだ拍子に砕けたのだろう。粉々となった共感装置である。

「・・・・・あ～～～」

ヴァンはめんどくさそうに頭を抱えた。

調べると、やはりヴァンが思った通り装置が壊れたことによってライブメタルを制御できなくなったせいだった。
そしてこの装置を作るのは数日掛かりとなるため、変身の解除もできないユーノはその数日間事実上寝たきりになった。
ヴァンは責任としてその数日間に加え何日か書庫で働く羽目にあったのは言うまでもない。

第５１話―平和な時の中・・・共感（後書き）

楓

「はい。という訳で今回はＫ・Ｈさんからのご提供、“ライブメタル共感装置”を使わせてもらいました。

ただ、フェイトがこれでユーノのようなアクシデントにみまわれてヴァンに看病してもらうってシチュも思いついてて悩みました。まあ久々のユーノ登場にはそれでいいんだけど。

え？前にこのリクをやるなって要求があった？なにそれおいしいの？面白いの？

後、いつしか誤字指摘や台詞質問なんかよりも普通に感想が届きますように・・・！」

第５２話ー デート・・・前日（前書き）

楓

「今回もちょっと明言コーナーは休みにします。
理由は、ユーザページに荒らしの屑野郎が入り込んだためです。
運良く早期発見に成功したため作品は無事でしたが、正直心外です。
人をなんだと思ってんの？
とりあえずその荒らし野郎、このサイトから出ていけよ。
そして読者の皆さんも、荒らしには十分お気をつけを。
・・・さ、気を取り直して、今回からヴァンへの殺意が強まるのではないかと思いますって、タイトルからして予想はできるかな？」

第52話 デート・・・前日

それは、太陽からの日光も暑くなり始めたある金曜日であった。
この日、ヴァンはフェイト達の迎えにバス停に来た。特に物騒な事件があったからというわけではなく、単に暇だったからである。今日に限ったことではなく、たまに暇な時はこうして迎えに行く。
バス停には自分以外にも、はやての迎えに来たリインフォースがいた。
あの夜からしばらくの日にちが経ったため、特に緊張とかはない。ないが、それがリインフォースとの関係が深まっているみたいで、フェイト達に襲われはしないかとヴァンは新たに不安を抱えていた。
バスが到着し、なのはを先頭に仲良しな5人が降りてくる。
バスが去った後にアリサとすずかはリムジンという高級車に乗って帰っていく。2人はどちらも令嬢で豪邸に住んでいる。ヴァンもそれぞれの家に来たことがあるが、とにかくでかかった。
そしてみんなで帰るのだが、ヴァンとリインフォースが一緒にいた、というのに触発されたのか、はやてが、

「ヴァンさん！明日デートするで！」

といきなり申し出てきた。

「おい！？なんでいきなりっつーかなんでお前が！？」

「だってうちもヴァンさんのことが好きやもん！」

「いきなりの告白だな！？何？海鳴市では告白の不意打ちでも流行ってるの！？」

だが、その会話に待ったをかける者もいた。

「待って！ヴァンは私のだよ！ヴァン、私とデートして！」

「フェイトちゃんもはやてちゃんもずるいよ！ヴァンさん、明日私とのデートに付き合って！」

フェイトとなのはが加わり何だかヒートアップ。一応言っておこう。今はバス停の前であり、バスから降りた人達が帰っている途中である。そんな場所で1人の少年を巡った美少女の言い合いがあれば、当然視線が痛い。

「リインフォース、なんとかこの3人を――」

止めてくれ。と言おうとした。

だが、そのリインフォースは顔を赤らめ、もじもじとしながら、

「その、ヴァン・・・私と、明日付き合ってくれるか・・・？」

3人の火に油を注ぐ発言をした。

（ノオォォオオオオ！！！）

ヴァンは自分の失敗に頭を抱えた。

それが目に入っていない4人はそれぞれ自分の敵3人にバチバチと睨みを効かせる。

「敵は3人・・・」

「このメンバーで明日のヴァンさんとのデート権を決める・・・」

「勝った1人が明日のデートができるんや・・・」

「いいでしょう・・・勝負です・・・」

黒いオーラを出しながら、４人が構えをとった。

全員体中から魔力が放たれている。

「いや、ちょっ、何してんのお前達?戦うの?ここで?今?」

その戦いの中心人物であるヴァンは冷や汗でびっしょりとなっていた。

デートするなんて言ってないんだけど、とはもう言えない空気である。

フェイトは考えた。

（自分の性格は作戦に影響するって聞いたことがある・・・となるとなのはは砲撃手だしあれで来ると思う。はやてもなのはと多分同じ手だし、リインフォースもはやてのサポートが本来の役割なんだから多分そう。だからこれで勝ちます・・・あれ?作文?）

なのはは考えた。

（フェイトちゃんは恐らく私の出すものを予想してくる。だから私はそれの裏を突こうてして、そのさらに裏を突いてくると思う。だから私はそれのさらに裏を突こうと思います・・・って、あれ?作文?）

はやては考えた。

（フェイトちゃんもなのはちゃんも・・・なんだかあれ？作文？なんて思っているような気がする。でもってうちはそうやって裏の読み合いをしていたら疲れてやられると思うので、うちは普通に頑張って勝とうと思います・・・ってあれ？うちのも作文？）

リインフォースは考えた。

（大丈夫・・・ヴァンは私のものにする・・・全員の出すものは見えている。これで勝ちにいこうと思います・・・なんだか作文っぽくなりました）

それぞれの思い（作文もどき）が交差する中、緊張が膨れ上がる。
置いてけぼりのヴァンは、とりあえず何事もないように願うしかなかった。
そして、４人は動き出した。

「「「「じゃーんけーん！！」」」」

結果。

「ふふっ、明日ヴァンは私のものです」

「でも明後日は私のものだよ♪」

「ぐぅぅぅ、リインフォースに先を越されるなんてぇ～」

「わ、私が・・・ビリ・・・最後・・・・・」

明日のヴァンとのデート権を手にしたのはリインフォースであった。

１人勝ちである。
だがはやては諦めず、明後日のデート権を取ろうとした。でもって同じくじゃんけん。
そうやっていって、さらに来週の土日のデート権まで争奪戦になり、それらの結果は、

日曜（明後日）・・・なのは

来週の土曜・・・はやて

来週の日曜・・・フェイト

となった。
なのはは比較的日数が近い明後日で安心したが、はやてとフェイトは学校の関係上来週まで待たされることになった。特にフェイトは最下位だったのがショックだったのだろう。放心状態である。
そして色々と長引いてしまったため、とりあえず今日はさっさとそれぞれの家へと帰っていった。
明日から週を挟んで４日間、４人とデートである。
ヴァンはもはや疲れを感じて、ため息をついた。

第53話ーデート・・・リインフォース（前書き）

ギチギチギチッ！（荒らしとモテ男は）刻んでやる・・・！

・・・デスタンツ・マンティスク

荒らし警告台詞・・・！って、あれ？なんで俺に鎌向けてんの？って、アーッ！！

・・・ヴァン

第53話ーデート・・・リインフォース

ＡＭ８：５４。
ヴァンは公園に向かっていた。リインフォースに告白された公園である。
今日は前回の出来事から翌日。リインフォースとデートする日である。それでここに朝9時に待ち合わせということになっている。予定より早めに行くというのは定番というか、普通にマナーであろう。
ヴァンの服装は白いズボンに青いフード付きパーカーといつもの作業着と同じ感じ。ライブメタルは置いてきている。
数分して公園に到着。リインフォースももう来ていた。

「お、早いな」

「まあ、その・・・少し早めに出た方がいいと思って・・・」

「何分ぐらいに着いたんだ？」

「・・・今から約２０分前」

「早すぎだろ」

と、何気なく会話を作る。ヴァンもそうだが、リインフォースも緊張していたようである。その緊張がほぐれたようだ。
緊張がほぐれたが、リインフォースはもじもじとしながらヴァンに尋ねた。

「ヴァン・・・その、似合ってるか？」

リインフォースの着ているものは純白と言える白さが特徴的なワンピースであった。初詣の時は黒の着物が銀髪を強調して美しかったが、今回は彼女の銀髪とワンピースの白さに一体感があってこれまた似合ってる。すらりと出ている腕や脚が美しさを強調している。

「ああ。似合ってる」

ヴァンは正直に言った。

リインフォースは顔を赤らめ、そして嬉しそうにはにかんで笑った。

「それじゃあ行くか」

2人は歩き出した。

現在2人は商店街を歩いている。

「で、具体的にどこ行きたいんだ？」

ヴァンが尋ねた。歩き始めてからそれなりに経ち、そろそろ聞いた方がいいだろうと思ったのだ。

だが、予想外な返答が返ってきた。

「デートとは、具体的に何をすればいいのだ？」

その返答に、ヴァンは思わずこけた。

「おまっ・・・何の計画も立たずに今日を迎えたのか？」

「ま、まあ・・・そうだな・・・・・」

ヴァンは呆れた。こいつはデートというものをよくわからずに昨日参戦していたのか？ため息が漏れる。
リインフォースは呆れているヴァンを見て怒っているとでも思ったのか、１歩程距離を離して俯いている。
ヴァンはさらにため息をついた。

「・・・まあデートなんてそんなに深く考えることもないか。リインフォースが興味を持ったところに行こう」

「え？しかし・・・」

リインフォースがおずおずと顔を上げた。それは遠慮なのか、自分の不安なのか、それとも別の理由なのか。

「いいって。お前が誘ったデートなんだ。俺はお前についてくぞ」

そう言って手を差し出した。
もう、なるようになれと思っていた。これはデート権争奪戦の時にも同じことを思っていたりしたことだが。

「そうか・・・だが、もしもの時があったら・・・助けてくれるか？」

「ああ。当然だ」

リインフォースは差し出されたヴァンの手を握った。
２人は再び歩き出した。

それからはまず洋服店に入った。
そこでリインフォースの洋服を買ったのだが、服選びに結構な時間を要した。案外女性の服というのは、よほどのものでなければ何でも似合うものである。リインフォースに黒や白はよく似合うが、青とか緑なんてのも似合っていた。ヴァンの服も買ったが、そこまで時間はかからなかった。
洋服店を出て歩き出す。だがリインフォースはすぐ隣の宝石や装飾品を扱う店の前で足を止めた。
ヴァンもそれに気づき横からリインフォースの見ているであろう物を見てみる。
ガラスケースで仕切られて展示されているとあるネックレス。
銀色に輝くネックレスで、プラカードには“２本セット。カップルでお揃いに！”と書かれている。４万７８００円也。

「あ、いや・・・つ、次行こう」

「ん、おお」

隣のヴァンに気づいてリインフォースは慌てて行ってしまったが、ヴァンは再度それを確認した後リインフォースを追った。

その後は辺りを歩いて食事をしたり、近くにあった美術館に入って展示物を見たりした。
だが美術館で作品を見ている途中、

「ごめん、ちょっとトイレ」

と言ってヴァンは少しの間リインフォースと離れた。
そして今は少し歩き疲れたということで、2人は近くにあったベンチに座っている。

「あー、そうだ、リインフォース。ほいこれ」

言ってヴァンは小包を差し出した。

「？これは？」

「んー、あれだ。とりあえず開けてみてくれ。見ればわかる」

「そうか。では・・・」

小包を開け、中から出てきた小さな箱を開ける。

「これは・・・！」

箱の中には銀色のネックレスがあった。同じものが2つである。宝石店で見たのと同じものであった。

「ヴァン・・・これを、いつの間に・・・？」

その質問をヴァンは笑って受け流した。実は美術館でトイレに行くと言って一旦宝石店へと戻り、これを買ったのだ。
金銭についての心配はあまりない。あまり日常で金を無駄に使うことはないし、あのバレンタインデーの依頼やちょくちょく来た依頼で財布の中身はかなり貯まっている。

「いいのか・・・？私のために・・・？」

「んー、別に俺は自分としていいなーって思ったから買っただけだぞ？お前のため、なんて一言も言ってないからな」

と意地悪に言う。正直にお前のために買った、なんて嫌だ。恥ずかしいし。

「・・・意地悪だな・・・」

リインフォースがムスッと頬を膨らませた。

「ははっ。まあ1つもらうぞ」

ヴァンは笑い、ネックレスの1つを取った。リインフォースも残った1つを手に取る。

「あの、ヴァン・・・その、これをつけてくれるか？」

顔を赤らめ、リインフォースはそうねだった。

「ん、りょーかい」

ヴァンはリインフォースのネックレスを受け取り、後ろに回ってネックレスを取り付けた。なかなか似合ってる。

「ありがとう・・・では、私も・・・」

今度はリインフォースとヴァンが逆の立場となり、ヴァンにネックレスを取り付けた。こちらも問題ない。

「ふふっ、お揃いだな」

リインフォースが笑う。ヴァンと一緒にいれて、そしてこうやってお揃いの物を手に入れた。とても嬉しかった。明日からヴァンが他の者達のものとなってしまうが、今はこのことに喜んでいたい。時はもう夕刻となっていた。そろそろこのデートも終わりだ。

「じゃ、そろそろ戻るか」

「ああ」

2人は歩き出した。並んで歩く中、リインフォースは言った。

「今日は楽しかった。できればまた今度も、付き合ってくれるか？」

そう問うリインフォースの顔は、夕日の光を受けて赤く染まっていた。

「・・・その時はまた、なのは達とケンカになるだろうなぁ・・・」

ヴァンは苦笑いをした。

2人は笑い合い、並んで歩く。

2人の銀のネックレスが、夕日の光を受けて綺麗な輝きを放っていた。

第５４話ー デート・・・なのは（前書き）

（モテてるテメェは）燃えて消え去れっ！！

・・・ブレイジン・ブリザード

うおおおおっ！！？

・・・ヴァン

第５４話－デート・・・なのは

日曜日。なのはとのデートの日である。現在ＡＭ９：０７。
ヴァンは高町家の前で待っていた。今日の服装は緑の上着と青いジーンズである。
なのはとのデートの時間は朝９時からなのだが、何を手間取っているのか、今もまだ来ない。待ち望んでいるというほどでもないが。
それと、さっきから何やら物騒な音がしている。具体的には何かで叩きつけるような音と知ってる人（男）の断末魔。
さらに数分後の９：１５。ようやくなのはが家から出てきた。

「ごめんごめん。ヴァンさん、待っちゃった？」

駆け寄りながらなのはが尋ねてくる。その顔は何かを成し遂げた時のような笑顔であった。

「いや・・・それよりさっきの音は？」

ヴァンは受け流し、念のため聞いておく。もう大体の予想がついてるが、気のせいであってほしいとまだ願っている。

「うん、ちょっとしつこかったお兄ちゃんと“お話”をしてきただけだから」

「うん。その言葉だけで大丈夫じゃないって断言できる」

「気にしちゃ負け、だよ？」

なのはは笑顔を崩さない。が、その笑顔は何やら怖くて仕方がなか

った。

「少し時間を押してることだし、早く行こ？」

「あ、ああ・・・」

ヴァンは頷いた後、チラリと高町宅を見た。そして、静かに犠牲となった彼に手を合わせた。

そして歩き出す。

「・・・で、どこ行くんだ？」

ヴァンが尋ねると、なのはは嬉しそうにポーチからある紙を取り出した。そこには“遊園地１日ペアチケット”と書かれている。

「えへへ・・・この前福引きで当たったの！隣町の遊園地に行こう！」

「ほぉ～」

関心するヴァン。だが再び歩いている途中、思い出したあの日で少しだけ表情を暗くした。もちろん、なのはには見せない。

（遊園地、か・・・・・）

だがすぐに首を横に振る。

何考えてるんだ。そのことはもう大丈夫だし、何より自分の勝手な悲壮感でなのはを悲しませたくない。

とりあえず今日だけはあの日のことを忘れ、今日を楽しもうと意思を固くした。

「ふぇぇ・・・立てない・・・」

「お前なぁ・・・自分から乗りたい言ってこれかよ・・・」

遊園地にて、ベンチに横たわるなのはをヴァンが介抱している。
理由は、最初のアトラクションだった。
遊園地に入って最初に目に止まったジェットコースター。それに乗りたいとなのはが言ったのだ。最初っからそれかよ、とヴァンも思ったのだが、まああれより速そうな速度で飛んでるし、と思って言う通り乗った。結果がこれである。
今はベンチに横たわっているが、これでもましになった方である。
ジェットコースターが終わった直後なんて目を回して気絶してたし。
初っ端から休憩に入ってしまった2人。次のアトラクションに行こうにもなのはがこれじゃあまだ無理だろう。

「何か飲み物でも買ってくるか？」

ヴァンが提案した。

「うん、ごめん・・・お願い・・・・・」

ぐったりとしたままなのはが答えた。
ヴァンは比較的近くにあった自販機で適当にジュースを2本買った。

その後なのははなんとか回復し、アトラクション巡りを再開。

「ヴァンさ～ん！どこ～！？」

「・・・壁を挟んで向こう側」

巨大迷路のアトラクションでなのはが完全に迷子になったり、

「にゃあぁぁぁぁ！！揺れる揺れるぅ～～！！」

「ちゃんとアトラクション選べよ・・・」

ゴンドラ船のアトラクションでなのはが酔いかけたり、さらには、

『ドロドロドロドロ・・・・・・』

「ふぇぇ～～ん！ヴァンさぁ～～ん！！」

「あのなぁ・・・・・」

お化け屋敷に入って仕掛けに本気で泣いたなのはがヴァンに抱きついたり。

・・・とまあアトラクションを“楽しむ”という観点からしたら明らかにハズレのものばかり引いてしまったなのはであった。

一部なのはにとってアトラクションに“ヴァンと一緒”という観点で当たりを引きはしたが・・・。

そして夕刻。最後のアトラクションとして2人で観覧車に乗った。

現在2人を乗せた箱はてっぺんまでもう少しのところである。なのはとヴァンは向かい合う形で座っている。

「たはぁー。色々大変だったけど、楽しかったよ」

「・・・・・そうか」

笑顔で話すなのはにヴァンが笑ってやる。だが、なのはがそのヴァンを見て不思議そうに首を傾げた。

「・・・ヴァンさん」

「ん、なんだ？」

「どうしたの？遊園地に来てからヴァンさん、なんだか悲しそうだよ？」

「・・・・・・・・」

自分は無意識の内に感情を顔に出していたのか。それも、なのはに気づかれているとは。

ヴァンは窓から下を見下ろした。なのはもつられて下を見る。視線の先には様々なアトラクションが動いている遊園地。

「・・・俺の母さんは、１１、いや、１２年前になるか。イレギュラーに殺されたってことは、前に言ったよな」

「・・・うん」

なのははそのことを２度聞いたことがある。

１度目は、ジュエルシード事件の最中、アースラで聞いた運び屋となった経緯。

２度目は、闇の書・モデルＶ事件が終わった後、ヴァンが自分達に

元いた世界を話した時だ。
だが、どちらもヴァンの母親については詳しく語られなかったため、なのははまだ関連性が見えていない。
ヴァンは静かに語った。

「そのイレギュラー襲撃事件があった場所が、ここみたいな遊園地だったんだ」

「・・・・・!!」

ビクリと肩が震え、なのはの目が見開かれた。
自分がやったことは、自分にとって単にデートであったものが、ヴァンの心の傷を抉るようなものだった。知らなかったとは言え、自分は最悪なことをした。
その答えに到達したなのはの身体が震えだし、泣きそうになる。

「ご・・・ごめん・・・・・私・・・・・・!」

謝って済むようなことじゃないとわかってる。だが、こうやって謝る他に方法が見つからなかった。
だが、ヴァンは笑って首を横に振った。

「なのはは悪くないさ。第一俺が何も言わなかったのが悪いんだし」

「でもっ・・・!」

「それに、俺は1人じゃない」

ヴァンはエリアHのことを思い出した。
ライブメタルの反応を追い、あの遊園地に来た時、ヴァンは過去の

記憶・・・何も救えずにいた自分を思い出して焦っていた。プレリーは、そんな自分になんでも1人で背負い込む必要はないと言ってくれた。エリアHに入った時から喪失しかけていた自分を見守り、支えてくれるみんなの存在を思い出させてくれた。

「だから、俺はあの思い出から逃げない。ちゃんと、みんな守り続けていくさ」

「ヴァンさん・・・」

なのははは立ち上がり、ヴァンに近づいた。
そして顔を近づけ、ヴァンと唇同士を重ねた。

「・・・なのは?」

「私も、ヴァンさんを支えているみんなの中に入っているよね?」

「・・・ああ。今はもう入ってる」

「そのこと、忘れちゃだめだよ?この初めてのキスのことも」

「・・・わかってる」

アトラクションについてもキスについても、今日はなのはに振り回されっぱなしであった。
いつの間にかもうすぐ降りるところまできていた。
観覧車を降り、2人は売店に立ち寄った。
商品を見ていく中、なのははある品に目が止まった。
目に止まったのは金のブレスレット。ハート型の装飾がある可愛らしいものだ。だが、正確には商品ではない。ここは売店の隣の射的

場。ブレスレットは射的の的であり、景品である。
ヴァンもそのなのはに気づく。

「ん？あー、射的か・・・・・」

「おっ、兄ちゃんやるかい？５発３００円、１０発で５００円だよ！」

この的当ての店主が射的用の銃とコルクの弾を持った。

「なのは、どれが欲しいんだ？」

「え・・・いいの？」

「お前からここに連れてきて、いまさら遠慮なんて言わせないぞ？」

そう言いながらヴァンは１００円玉３枚を財布から取り出して店主に渡した。店主から銃と弾５発を受け取る。

「じゃあ、まずあれ・・・！」

なのはは甘えることにして、最初に欲しいと思ったブレスレットを指差した。
ヴァンは１つ目の的を確認すると、右手１つで銃を構える。ちょうど、イメージとしてはＺＸバスターを構える感じだ。
引き金を引き、銃身からコルクの弾が飛び出した。
弾は命中したものの、少し狙いがそれたためブレスレットが掛けられた台に掠って揺れただけで終わった。
再び狙い、２発目。今度は狂いなくブレスレットに命中し、台が倒れた。

「おぉー！」

なかなか狙っても倒れなかったものだったのか、店主まで関心の声を上げた。

「・・・で、次はどれがいい？」

ヴァンが再び確認する。

「これと・・・あ、あとそれも！」

結局残りの3発で、1個的を倒すことに成功した。

「にゃはは。ありがとね。こんなプレゼントまでくれて」

「お前が欲しかったものだろ。遠慮するなって」

帰り道。ヴァンとなのはは並んで歩いている。

なのはの左腕には先程の射的の景品である金のブレスレットがつけられていた。

「・・・ところで、そっちの方はつけないのか？」

「ん・・・これは、ヴァンさんへのプレゼント♪」

なのははもう1つの景品、銀に輝くブレスレットを差し出した。こちらのブレスレットには星型の装飾が施されている。

「え、いいのか？だってこれはなのはが欲しいと言ってたものだぞ？」

「いーの！元からそのつもりだったんだから！」

なのははそう言うとヴァンの右腕にブレスレットを取り付ける。歩きながらだとつけ辛いため2人は立ち止まった。

取り付けると、なのはは自分のブレスレットとヴァンのブレスレットを交互に見て嬉しそうに笑った。

「似合ってるよ。ヴァンさん」

「そうか。ありがと」

笑い合った後、2人はまた歩き出す。

「ヴァンさん、また今度時間があったら、同じように付き合ってくれる？」

「・・・早速同じことを言われたな」

これは本当にケンカ事になるような気がしてきた、とヴァンが思った。

なのはがヴァンと手を繋いだ。

「ヴァンさん。大好きだからね！」

「へいへい」

1つになって歩く影は、しばらく繋がったままであった。

第５５話－デート・・・はやて（前書き）

（モテる貴様が）目障りだ！

・・・ヘルバット・シルト

いい加減にしろおお！

・・・ヴァン

第５５話－デート・・・はやて

週を挟んでの土曜日。
今日のデートは提案者であるはやてである。
現在ＡＭ９：０３。場所はリインフォースの時と同じ公園の前。ヴァンはそこで待っている。今日の服装はヴァンとしては珍しく赤い服である。赤、と言っても正確な表現では炎みたいなのでオレンジの方が近いだろうか。

「ごめんごめんー！遅れてもうたー！」

はやてが急いだ様子で駆け寄ってきた。
はやての服はいつもと似たようなゆったりとした動きやすい服。緊張しないために敢えて特別な服装を避けたのだろうか。

「別に気にしてないぞ。で、どこ行くんだ？」

はやての謝罪を軽く流し、早速尋ねる。

「うん。隣町の動物園にでも行こかーって思って」

「りょーかーい」

行き先を聞いて早速歩き出そうとしたヴァンだが、そこにはやてが腕にくっついてきた。

「えへへ、これでカップルに見えるやろか？」

「・・・・・さぁ」

ヴァンはため息をついた。
ピットリと腕にくっつくはやてに動揺しない。子供だからと思っているのかそれとも耐性がついたのか。どちらにしてもあまり喜ばしいものではない。

「じゃあレッツゴーや！」

「うーす」

2人は歩き出した。

「おおお！あれがキリンか～！」

「そうや。というか、えらくハイテンションやなヴァンさん」

「正直動物園なんて初めてだからな！」

動物園にて動物を見て回っている2人。先程の台詞を見てわかる通り、ヴァンは動物を見ては興奮している。
ヴァンの世界にも動物はいるし、動物園も存在する。だが、ヴァンのいた国では遊園地の施設の1つとしての存在だったし、そもそも動物自体数がここまで多くはない。大抵はホログラムなどを使った博物館のような感じだ。オリジナルの動物をこれほど多く、そして間近で見れることに興奮している。

「あっちにはライオンがいるよ」

「本当か！おっ、こっちにはチーターもいる！」

この様子だとはやてよりヴァンの方が動物園を楽しんでいるようである。

動物園の方に夢中になってデートであることを忘れているのではないかとはやては少々危機感を感じている。

（まあ、ヴァンさんが喜んでくれているのはそれはそれで嬉しいんやけどなぁ・・・・・）

乙女としてはもうちょっとゆっくりと2人寄り添いながら見ていきたいとはやては思った。

「おーい、はやてー！早く行くぞー！」

気がつくと、ヴァンははやての数メートル先まで進んでいた。

「あ、ちょっ、ヴァンさーん！少しは待ってやー！」

はやては慌ててヴァンの後を追った。

その後もチンパンジーなり、フクロウなり、ペンギンなり、クマなり色々見て回ったヴァンとはやて。その間に昼食もとった。

しかし、次の動物を見に行こうとしてアクシデントが起こった。

「いったたた・・・もう、ヴァンさんが急ぎ過ぎやもん・・・」

「・・・ごめん。悪かった」

どんどん先を行くヴァンの後を追おうと急いで走っていたはやてが、
足を挫いたのだ。これが結構痛い。
とりあえず運良く近くにあった噴水で患部である右足を冷やす。

「この様子だと無理して歩かない方がいいな・・・」

「そやね・・・それじゃあヴァンさん、責任としておんぶしてや♪」

「・・・何気に嬉しそうだな・・・」

本当はお姫様抱っこを要求したかったが、さすがにこんなたくさん
の人の中でそれは恥ずかしい。

「早く早く♪」

「へーへい」

ヴァンはしゃがんだ体勢で背を向ける。
はやてはその背中に掴まった。落ちないように腕を回す。

「でー、後何見てなかったっけ?」

「んー大体見てったかなぁ・・・あ、これなんてどうや?『動物の
赤ちゃん飼育コーナー』!」

「おーす」

その後またいくらか見て行ったのだが、ヴァンに背負わされていたはやては歩き疲れていたようで、いつの間にか寝てしまっていた。
もうそろそろな時間でもあるし、ヴァンは寝ているはやてを背負ったままここに来た道を引き返す。
その帰路の途中であった。
はやてがヴァンの背中の上で、何やらもぞもぞし始めた。

「ん？はやて、起きたのか？」

ヴァンが呼びかけるが、はやての返事はない。何か夢を見てるのだろうか。
しばらくして、寝たままはやての口が開いた。

「ヴァン、さん・・・！」

「・・・はやて？」

ヴァンはその場で立ち止まった。
自分を呼んだはやての声が弱々しく、そしてかすれていた。
また、はやての口が動く。

「だめ・・・待って・・・！行かんでや・・・そんな遠くに・・・さよならなんて言わんで・・・・・！」

はやての頬を涙が伝う。
はやてから嗚咽が聞こえてくる。
今日の出来事が、夢になって出ているのだろうか。ヴァンがずっとずっと遠くになり、もう一生追いつけなくなる夢・・・・・。
はやてをおぶる手を片方離した。少しバランスが悪くなるが、なんとか持ち直す。

そしてその手で、己の肩を強く掴んでくるはやての手を握った。

「大丈夫・・・俺は今、ここにいる」

優しく、宥めるように語りかける。
するとはやてが安心したように笑顔となった。
またはやての口が動いた。

「ヴァンさん・・・ありがとう・・・・・・」

いつの間にか嗚咽も止まっていた。
ヴァンは微笑んだ。

「どういたしまして」

言って、ヴァンは掴んでいた手を離し、あるものを取り出してはやての服のポケットに入れた。
それははやてが寝た後に売店で買った色んな動物のシルエットを模したアクセサリーであった。ついでにそのプレゼントのことを明記した紙も入れておく。
そしてはやてを背負い直し、ヴァンは再び歩いた。

第５６話－デート・・・フェイト（前書き）

そのスカした（モテ）面、恐怖で凍り付かせてやるよ！

・・・チルドレ・イナラビッタ

だまれっ！！

・・・ヴァン

第５６話－デート・・・フェイト

はやてとのデートの日の夜９：５０。ヴァンの部屋。
夕食をとる、風呂に入るといったことを済ませ、ヴァンはベッドの上で寝ようとしていた。

『お疲れ様。どうだったの？今日のラブラブデート♪』

「・・・とりあえず猛烈にお前を叩き潰したいよ」

モデルＬのからかいにこめかみを脈立たせるヴァン。
だが今回に限った話ではない。リインフォースとなのはのそれぞれのデートの時も同じ質問をしてきたのだ。しかも話さなければフェイトとリインフォースのキスの話をバラすと脅してくる。ホントに質が悪い。

「・・・動物園に行ってきた」

『へぇ～。それで脱走した動物に襲われるはやてを救出したとか？』

『どんなシチュエーションだ・・・』

モデルＺのツッコミ。うん、それには共感したい。

『で、ところでどうするの？』

モデルＬが雰囲気が急に真剣なものになった。

「何が？」

『こんな風に色々付き合いがあるけど、貴方は誰を選ぶつもり？』

「・・・・・・・・」

ヴァンは黙った。

モデルＬの言ってる意味もわからなくはない。何人ものアプローチを受けているヴァンは、そこから１人を選ばなければならない。一夫多妻が認められているところもあるらしいが、そんなことをするつもりはない。色々怖いから。

しばらく沈黙が漂う。

「・・・・・さあ、な」

ヴァンはそれだけ返して、さっさと寝ることにした。

翌日。

「ヴァン！早く行こう！」

「早くって・・・ホントに早過ぎるだろ。まだ朝の８時だぞ？」

もう出かける準備が出来ているフェイトがヴァンの腕を掴んでせがんでいる。現在ＡＭ８：１６。明らかに今までより早い。出かける予定時間は今までの皆と同じＡＭ９：００である。

どうやら一週間以上待たされ、さらには他のライバル達に先を越されたことでもう待ちきれないようだ。

「場所ってもう決まってるよな？どこ行くんだ？」

少し時間がある今のうちにと場所を尋ねる。

「うん、隣町にある水族館。とても人気があって込むんだって！だから早く！」

フェイトはさらにねだる。

（・・・こんな性格だったか？）

ヴァンは疑問に思った。

ついでにプレシアとアルフは少し離れたところから微笑ましいとばかりに見ているし、ライブメタル・・・の中のモデルＬは表情は見えないものの絶対にニヤついている。帰ったらヤキ入れてやる。ちなみに他は関係ないと思っている奴ばかりだろう。唯一モデルＸがどう思っているかがわからないが。

・・・そろそろフェイトの引っ張りで痛くなってきた。

「あー、わかったから。少し準備してくるから待っててくれ」

「うん！」

フェイトから解放され、ヴァンは自室へと向かった。

「へぇー、結構込んでんな・・・・・」

「だから早く行こうって言ったのに・・・」

今日は水色のジャケットを着たヴァンが館内を見回す。今はもう水族館の中。外からは案外空いてるように見えたのだが、中に入れば結構込み合っている。人気という話はダテじゃない。
フェイトは女の子らしい、黒と白の色が特徴的な服を着ている。そしてこの人ごみの中に紛れないように、ヴァンの腕に体を引っ付けている。だがこれが少し恥ずかしいのか、顔が赤い。
ヴァンとフェイトは人ごみを縫って進んでいく。目的の水槽まであと少し。

「ほら、ついたぞ」

ヴァンの声を聞き、フェイトが顔を上げた。

「わぁ・・・・・！」

そこには、様々な魚が水中を泳ぐ、大きな水槽があった。海のように透き通った青色の水の中を、綺麗な魚達が泳いでいる。
海の底を再現された岩のところにも、魚やイソギンチャクがいる。
フェイトは、その美しい光景に心を奪われていた。

「綺麗・・・！」

「・・・ああ。そうだな」

ヴァンもこの小さな景色に心を奪われていた。
だがそれだけで全部を終わりにするわけにはいかないので、他の水槽も見ていく。

「へぇ、クマノミか」

「あ、かわいい♪」

「おっ、サメだ」

「ひゃうっ！」

「・・・フェイト、怖いのはわかるかもしれないけど、水槽の中と外の関係だから。とりあえず抱きつくのはやめてくれ。視線が痛い」

「これは何だろう？・・・クラゲ？」

「へぇ～。光るのか」

・・・とまあこんな感じである。

そして現在は館内の食堂で一休み。
ヴァンとフェイトはそれぞれのシーフードスパゲティを食べている。
ちなみに全ての食器に魚のデザインが施されている。

「おいしいね」

「おお」

何気ない会話。だがヴァンはふと昨日の夜、モデルＬが言ったことを思い出した。

“こんな風に色々付き合いがあるけど、貴方は誰を選ぶつもり？”

あの言葉・・・誰か１人を選ぶということは、裏を返せばそれ以外全員を振るということ。

ヴァンは尋ねてみた。

「なぁ、フェイト」

「ん、何？」

「もし・・・俺が他の人・・・例えばなのはとかを選んで、フェイトを振ったとしたら・・・・・フェイトはその時どうする？」

「・・・・・私は」

フェイトは言いかけたが、タイミングが悪くアナウンスが入ってきた。

『午後１時より、イルカのショーが始まります』

その声で反射的にフェイトが壁にかけられた時計を見た。現在ＰＭ０：５０。

「あっと、もうそろそろ行こう！そのショーに！」

「あ、ああ・・・」

急いで食器を片付け、２人はそのショーの会場へと向かった。

「一番前の席、2人分空いてるよ！」

「一番前って・・・見づらくないか？」

「ずっと後ろになるよりはいいと思うよ」

「まあ・・・そりゃそうだけど」

ヴァンとフェイトは一番前の席に座った。跳ねた水槽の水が観客にかからないようにするためのビニールシートが足元にある。

そしてイルカショーが始まった。

何頭かのイルカがかなりの速度で水槽内を泳ぎ回り、ジャンプして吊されたボールをつついたり、リングをくぐったりする。

「すごい・・・！すごいよ！ヴァン！」

フェイトもそのイルカのパフォーマンスを見て興奮している。

そして会場も盛り上がりを見せている時、イルカのトレーナーがマイクを持った。

「さあ！ではそろそろこのショーの定番で、お客様にも参加してもらいましょう！」

この水族館が人気である理由の1つであるこのショーには、毎回観客が直接このショーに参加することができる。

「そうですねー。今回は・・・あ、そこの兄弟でしょうかね？そこのお2人に参加してもらいましょう！」

と言ってトレーナーが走り寄った先にいたのは、ヴァンとフェイト。

「えっ？わ、わ、私達！？」

「なんだこのタイミングの良さは・・・？」

白羽の矢を立てられフェイトは一気に動揺した。ヴァンはなんだか呆れ模様。

「さ、こちらです」

「え？え！？」

「落ち着けフェイト。こういう時は成り行きに任せろ」

動揺と緊張がごちゃ混ぜになっているフェイトに、ヴァンが軽くアドバイスをする。

ショーの舞台に上がる。

観客の視線の的になり、フェイトは緊張と恥ずかしさで心拍数が急上昇している。さらにその隣にヴァンがいるのだから、まるで関係を人々に見せびらかしているみたいでもう大変。

トレーナーがイルカを2頭こちら側に呼び寄せた。

「さあ、まずはスキンシップとしてタッチから！」

「うーす」

ヴァンは緊張した様子を見せずにイルカの1頭に近づき、頭を撫でた。

（なんでそんなに緊張しないの！？）

フェイトはヴァンに視線で尋ねた。

（なんでって、人前での仕事に慣れてるから、か？つーか早くした方がいいぞ）

ヴァンも目で告げる。ついでに催促も目で。

フェイトはイルカに近づき、恐る恐る手を伸ばす。そして軽くイルカの頭をタッチすることに成功した。キュッキュとイルカが鳴いている。

その後は投げたボールを運ばせたり、イルカの背中に乗ったりといったこともやった。

ショーが終わった後、少々疲れた様子のフェイト。緊張も効いたのだろう。その場に座り込んでしまった。

「ご、ごめん・・・なんだか力が抜けちゃって・・・」

「全く・・・」

ヴァンはフェイトに背を向けてしゃがんだ。

「え？」

「ほら、乗れ。ここでそのままだと客に迷惑だろ？」

「あ・・・う、うん。そうだね・・・ありがとう」

フェイトはヴァンの背中に体を預けた。
ヴァンの背中から温もりが感じて、心地いい。
背にフェイトが乗っかったのを確認するとヴァンは立ち上がり、歩き出した。

館内の売店。
ヴァンは商品棚を見ながら、時折さり気なくフェイトの表情を見る。
フェイトが欲しいと思ったらそれを買ってやるためだ。フェイトは恥ずかしがり屋で少々遠慮がちなので、こういった形で商品を見分ける方がいいのだ。
折角ここまで来たんだし、何か形になるものがあった方がいいだろう。・・・他の3人にプレゼントがあってフェイトにない、という状況になった時のフェイトの怒りが恐いし。

「あ・・・・・」

フェイトに反応があった。視線の先には大きなイルカのぬいぐるみ。
価格は1万6500円也。

「フェイト、欲しいか？」

「え、でも高いよ。これ」

「大丈夫だって。甘えたい時は甘えろ。すいませーん！これくださーい！」

ヴァンはフェイトの遠慮を気にせずにぬいぐるみを買った。

持ち帰るには少し無理があったため、後日宅配便で配達してもらうことにした。運び屋なのに。

もう夕方である。ヴァンとフェイトは帰路についていた。フェイトはもうヴァンの背中から降りて歩いている。

「ヴァン。今日はありがとね」

「ありがとうって、お前から誘ったもんじゃないか」

「・・・そうだった」

フェイトは照れ笑いをした。
だが会話が少し途切れ、歩く音だけが聞こえる。
フェイトがその沈黙を破った。

「ねえ、ヴァン。あの時の答えなんだけど・・・」

“あの時”とは、昼食の時のヴァンの質問のことである。

「・・・考えないことにした。だって、私がヴァンを振り向かせるんだから。そうやって後ろ向きに考えるのはやめる」

それが、フェイトの答え。
フェイトだけじゃない。なのはも、はやても、リインフォースも、同じことを聞かれたらそう返すだろう。

「・・・今更ながらに、そう来るんじゃないかって思ったよ」

ヴァンはため息をついた。
フェイトが立ち止まった。

「ヴァン、ちょっと」

「ん？」

フェイトの呼び声にヴァンは振り向いた。
フェイトが駆け寄り、ヴァンに飛びつく。ヴァンはフェイトを支える。
そしてフェイトは背伸びをしてヴァンに素早くキスをした。
まるで、1年程前の時みたいだ。

「えへへ。これは、今日のお礼だよ」

「・・・そーかい」

ヴァンはため息をついた。
本当に耐性がついてきてるようだ。正直怖い。
フェイトは赤く染まった顔に無邪気な笑みを浮かべている。

「それじゃあ、早く帰ろ」

「おう」

2人は歩き出した。

「ヴァン」

夕日が照らす中、フェイトは言った。

「大好き」

「ああ。わかってる」

ヴァンも返事をした。

こうして、４日に渡る４人とのデートが終わった。

第５７話－破壊神、降臨（前書き）

楓

「今回も名言は休みにします。
理由は、この話の注意を書くためです。
はっきり言って、残酷表現使いまくりです。なのでＲ－１５指定しました。
この話への苦情は受け付けません。もっとも、明らかな誤字以外の苦情は受け付けないんですけどね。
グロい表現が苦手な方は気をつけてお読みください。一応、この物語において重要な話ですので
では、そろそろラストスパートといきますか。
第５７話、始まります」

第57話 破壊神、降臨

ヴァンがこの世界に来てから、もう1年と8ヶ月になる。
ヴァンの元いた世界の捜索は未だに難色を示している。本から情報量が少ない否、管理局でも存在を確認されていない世界だ。情報は無限書庫でも皆無に等しい。
元からゆっくりしていられない事情を抱えているヴァンも、さすがに未発見の管理外世界と言えども焦りはする。
だが、そうは言っても今の自分は頼んでいる側である。依頼や任務をこなしながら発見を待つしかなかった。
そんなある日、アースラから任務が入った。
内容は崩壊した管理外世界の調査。科学力が異常発達したところで、ロストロギアの暴走が主な崩壊の原因であろうとのことだ。
いつもと同じ内容だと思っていたヴァンであったが、今回は少し違っていた。
クロノから、今回調査に向かうのはクロノを含めヴァン、シグナム、ザフィーラ、リインフォースの5人にしたいと言ってきたのだ。
全く持って謎である。この5人に関連性が見えてこない。クロノを除いてもである。
なぜかとヴァンが尋ねたが、クロノは何か思い出したくない様子で首を振るだけだった。
だが、このメンバー編成に異議を唱える者が。はやてを始めとしたヴァンに告白した3人である。
理由はもう察せられるだろう。ヴァンとリインフォースが一緒だからだ。ここぞとばかりにリインフォースがヴァンにアプローチをする可能性がある。それだけは何としても阻止したいのだろう。
クロノは最初渋っていたが、なのはから“お話”されそうになり、仕方なく承諾した。
そしてその3人が行くことになったのだから、ヴィータ、シャマル

ははやてに、アルフはフェイトについていくと言ったので、結局１１人と、いつものメンバーとなった。
いつでも帰還できるようにする、と何か意味深なことをクロノが言い、一行は任務の地へと転送した。

目的地へと到着した一行。
魔導師はバリアジャケット、騎士は甲冑を纏っている。ヴァンはモデルＺＸに変身している。
ヴァンは辺りを見回した。窓ガラスは全て砕け、大きな亀裂が入り、廃墟と化した建物が並んでいる。

「・・・こりゃ、崩壊したっていうより、戦争跡みたいだな」

ヴァンは呟いた。今までいくらか崩壊した世界の調査をしてきたが、どの世界も一面荒野となったものばかりであった。ここまで建物の原型が残ることはない。

「にしても、変わったとこだな、ここ。建物や地面が赤ばっかだぜ？」

今度はヴィータの呟き。確かに、建物や地面が赤一色である。
フェイトが、アルフのある様子に気づいた。

「・・・？アルフ、どうしたの？」

言われるアルフは、鼻を摘み、なぜだか気分を悪くしていた。

「な、なんかさ、気持ち悪いんだよ・・・変な臭いがしてさぁ・・・

」

「・・・確かに、ここに来てから何か鉄のような臭いを感じます」

ザフィーラがはやてに告げた。ちなみに2人とも人形態である。

ヴィータが周りを見回した。そして道の角にうつ伏せに倒れている人を見つけた。

「！人だ！」

ヴィータはその人の元に駆け寄った。

「おい、大じょ――――」

ベチャ――

その人の肩を揺らして呼びかけようとした時、妙な音が聞こえた。

「・・・え？」

ヴィータはその音源・・・今自分が無事を確認しようとした人を見た。

恐る恐る仰向けにしてみる。

その人の正面が、全て抉られていた。

顔も胴体も、全部抉られ、中のものが見える。

内蔵がグチャグチャに混ざっており、近くにはその人のものと思しき脳髄や腸などの欠片があった。

ヴィータは一瞬意識が飛び、何を見ているのかわからなかった。

そしてようやく、その見ているものを理解した。

「うっ、うわあああああっ！！」

ヴィータはあまりのおぞましいその死体に恐怖し、尻餅をついた。

「ヴィータちゃん！？何かあった・・・ひっ！！」

シャマルがヴィータの悲鳴に駆け寄り、その死体を見て自分も短い悲鳴を上げ、口を手で覆う動作をとった。

クロノを除く他のみんなも、その死体を見て驚愕した。そしてなのはとフェイトはヴァンに、はやてはリインフォースに恐怖のあまりしがみついた。

「う、うわあああっ！」

今度はアルフが叫んだ。

アルフが見たものは、下半身と両腕がなくなった死体。その死体の周りに、その死体のものと思しき脚や腕が転がっていた。

他にもよく見ると、様々な死体が辺りに転がっていた。どれも無残な姿になり、欠損のないものなどない。死体の顔は苦痛で限界まで歪められている。この世界が虐殺の現場となっていた。

「まさか、この赤色は・・・！」

ザフィーラがあることに気づき、近くの建物の壁を擦った。

擦った壁の表面が灰色になり、代わりにザフィーラの篭手が赤くなった。

「間違いない・・・この赤は全て血だ・・・！」

そう、この一面の赤は全て死体から流れた血によって染められたも

のであった。先程の臭いは血の臭いである。

「・・・任務が出される前にここの映像を見た。だからこの状況でも冷静でいられるメンバーにしようと思ってたんだ」

表情が歪んでいるクロノが言った。

そう、クロノが提案したメンバーの選考基準は耐性の強さだ。こういうものに耐性がないなのは達一部のメンバーは今回の任務から外そうと考えていたのだ。

ヴァンやリインフォースにしがみつく3人は体が震え、顔が真っ青になっている。もう限界に達していた。このままでは危険と判断したクロノは3人をアースラに戻そうと通信回線を開こうとした。

だが、

「・・・艦長?エイミィ?アースラスタッフ!応答を!!」

「!?どうした?」

通信機に叫ぶクロノに、ヴァンが尋ねた。

「通信が繋がらない・・・!何かによって妨害されている!」

「!!」

返ってきた答えは、全員に緊急事態を知らせるのに十分過ぎるものだった。

さらに、事態が悪化していく。

最初に気づいたのはザフィーラだった。

「結界が張られた・・・!」

結界は自分達を閉じ込めるものだった。つまり、自分達を狙っている何者かがいる。
シャマルの前に、何かが転がってきた。
・・・皮が引き剥がされた、人の頭だった。

「きゃあああ！！？」

シャマルが悲鳴を上げた。
その頭が転がってきた方角から、何かが近づいてきた。
血のような真紅のアーマーを纏い、金の長い髪が特徴の、モデルＺＸに似た姿の男だった。彼の右手には紫に光るＺＸセイバーに似た剣が握られ、左手には頭と四肢がなくなった死体が掴まれていた。
ヘッドパーツにある宝石のような三角形が不気味に光っている。

「フンッ・・・我を倒そうとした者が、この程度で喚くとは、心外だな」

「・・・この程度、だと・・・？」

ヴァンはその奴の発言が頭にきた。
こいつは人の命を何だと思っている。
だが、奴の発言には疑問も生まれていた。

「お前を、倒そうとした・・・？」

シグナムが呟いた。
そう、奴は確かにヴァン達を自分を倒そうとした者だと言った。だが、奴と関わったことすら覚えがない。
その時、モデルＸが話しかけてきた。

『ヴァン、気をつけて・・・！奴は、オメガだ！』

「！？どういうことだ！？」

ヴァンはその意味がわからなかった。目の前にいる奴が、あの巨大なアーマーを纏ったオメガと同じとは思えなかった。第一、オメガは破壊したはずだ。

『・・・あのアーマーは、オメガの膨大な力を抑えるための拘束具だよ。そのアーマーが、本当のオメガ自身を守ったんだと思う』

モデルＸはその疑問の答えを話した。
つまり、ヴァン達の目の前にいるのが真のオメガである。

「なのは、フェイト、離れてくれ」

ヴァンは２人を離し、ＺＸセイバーを取り出した。
他の全員も、自分のデバイスを構える。

「クックククク・・・！」

１１対１という状況の中、オメガは笑っている。狂気に満ちたその笑いは、１１人に悪寒を感じさせるには十分すぎた。

「我はメシアなりっ！クヒャーッハハハハッ！！」

破壊神の高笑いが響いた。

第57話ー破壊神、降臨（後書き）

ヴァン
「・・・グロ表現っつったって、ここまでやるか？みんな絶叫の嵐だったぞ」

楓
「もう少しグロくする予定でしたがねぇ」

ヴァン
「・・・本気で言ってんの？」

第５８話　力と強さ（前書き）

我はメシアなり！ハーッハッハッハ！

・・・オメガ

オメガ・・・俺は、いや、俺達は負けない！

・・・ヴァン

第５８話　力と強さ

戦闘が始まった。
ヴァンはＺＸバスターでオメガめがけて何度も引き金を引く。銃口から何度もエネルギー弾が放たれる。
オメガは同じくバスターでエネルギー弾を数回放った。ＺＸバスターよりも大きく、高い威力の弾丸があっという間に打ち消した。
ヴァンはＺＸバスターからＺＸセイバーに切り替えてオメガに斬りかかる。オメガもセイバーに切り替え、セイバーを持つ手を振るった。

「はあああああああっ！！」

「ぬぅんっ！！」

ヴァンのＺＸセイバーとオメガのセイバーが衝突した。
バチバチと火花が散る。

「甘いわぁぁっ！！」

「ぐあぁっ！」

オメガが力任せにセイバーを振り切り、衝撃でヴァンを吹き飛ばした。
吹き飛ばされたヴァンは壁に激突する。

「シュート！」

「ファイア！」

なのはとフェイトがそれぞれアクセルシューターとプラズマランサーでオメガを狙う。
2色の魔力弾がオメガに直撃する。
だが煙の中からオメガはバスターで2人を狙撃した。
なのはとフェイトはそのエネルギー弾が直撃して吹き飛ばされる。
煙が晴れると、限りなく無傷の状態のオメガが出てきた。

「チェーンバインド！」

横からアルフのオレンジの鎖がオメガに迫る。

「ぬおおおお！！」

アルフの反対側からはザフィーラが殴りかかる。
オメガは右手に光を収束させた。

「消え去れっ！！」

オメガはその右手を地面に叩きつけた。その瞬間光の柱が立ち、アルフの鎖とザフィーラを弾き返した。

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！！」

今度はクロノが複数の光の剣をオメガに飛ばした。デュランダルによって飛ばした剣には凍結効果もついてある。
直撃し、オメガは氷漬けになった。
だがそれも一瞬で、すぐにその氷がバラバラに砕け、オメガが自由の身となる。
だが、その一瞬の内にシグナムとヴィータが接近した。

「紫電一閃！！」

「ラケーテンハンマー！！」

2人の攻撃を、オメガはそれぞれ手で受け止めた。そして2人のデバイスをへし折り、2人を殴り飛ばした。

「ミストルティン！！」

リインフォースとユニゾンしたはやてが攻撃を仕掛ける。
石化させる光が、オメガへと降り注ぐ。
光が直撃。しかし、オメガに変化はなかった。

「なっ！？」

「フンッ、その程度か？我が傀儡の王が」

「なんやて・・・！」

リインフォースを傀儡扱いされ、はやては怒りに奮えた。
だがオメガはそんなことを気にも止めず、バスターで撃ち飛ばした。

「おおおおおおお！！」

再びヴァンがＺＸセイバーを手にオメガに接近した。ＺＸセイバーは光を収束されている。

「はあああああっ！！」

ヴァンがセイバーを振るった。オメガはそれを左腕で受ける。
チャージセイバーを受けた左腕のアーマーにヒビが入った。だが、
それだけだった。

「っ！！」

ヴァンの表情が険しくなった。
オメガはセイバーにエネルギーをチャージした。

「ぬるいわぁぁっ！！」

オメガがセイバーを振るう。
ヴァンはそれを間一髪で避けた。衝撃波が地面を吹き飛ばす。衝撃
波に巻き込まれ、ヴァンが吹き飛ぶ。
ヴァンはなんとか持ち直した。

「ヴァンさん！」

なのはが心配のあまり叫んだ。
だがその瞬間、なのはの目の前にオメガが来た。

「！！」

「よそ見とは、随分余裕だな」

オメガがセイバーを持つ手を振り上げ、セイバーをチャージする。
間近のオメガから放たれるモデルＶのプレッシャーを受け、なのは
は金縛り状態になっていた。

「壊れろ」

その一言と共に、オメガがセイバーを振るった。
なのはは目前にまで迫った死に恐怖し、目を固く閉じた。
セイバーがなのはに当たる前に、なのはは強く、そして優しい力に押された。

「えっ？」

なのはは目を開いた。
なのはが自分を押したヴァンを見たのと、ヴァンがオメガの攻撃を受けたのは同時だった。
攻撃を受け、ヴァンが吹き飛ばされる。
それを理解し、行動に移ったのには数秒の時間がかかった。

「・・・ヴァンさん！！」

なのははヴァンに駆け寄った。
アーマーが破壊され、斬撃をもろにくらったヴァンは重傷だった。
息はしているが、意識がない。

「ヴァン、さん・・・私のために・・・！」

なのははヴァンを強く抱き締めた。

「フンッ、くだらん邪魔が入ったが、どちらにせよ全員潰すには関係ない」

オメガはその光景に鼻を鳴らし、ヴァンとなのはにトドメをさすべく近づいた。
そこにフェイトが割り込んだ。

「させない・・・ヴァンを、これ以上傷つけさせない！」

両腕を広げてオメガに立ちふさがる。
だがプレッシャーを当てられてフェイトの体は震えている。
それでも、恐怖に屈しようとせず、フェイトはまっすぐオメガを睨み続ける。

「・・・なぜだ？なぜこの圧倒的な力を前にしてなお刃向かう？なぜそのような目ができる？」

オメガはフェイトの目が絶望に染まらないことに苛立ちを感じていた。

「・・・いいだろう。望み通り貴様から潰す」

オメガがセイバーを振り上げた。
だが、振り降ろす前にアルフとザフィーラが飛び蹴りをかましてきた。

「フェイトをやらせっかよ！！」

「これ以上好きにはさせん！！」

「ぐっ！？」

意識が完全に前のみとなっていたオメガは反応に遅れ、２人の蹴りで吹っ飛ばされた。
地面に叩きつけられたオメガ。その胸からシャマルの腕が現れた。

「リンカーコア、捕獲！」

旅の鏡を使ったシャマルはそのオメガのリンカーコアを直接破壊しようと魔力を注ぎ込む。いくらオメガの姿が変わろうとも、あの時と同じく魔法を使えるはずである。そして魔法が使えるならリンカーコアだってあるはずと踏んだのは正解だった。リンカーコアに直撃攻撃すれば、かなりのダメージになる。

オメガのアーマーに亀裂が生じた。

「小賢しい！」

オメガは握り拳を固め、その拳を胸から生えるシャマルの腕に叩き込んだ。

ボキッ、と鈍い音が響いた。

「くっ、あああ！！」

シャマルが激痛でその手を引っ込めた。腕が完全に折れてしまっていた。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「ライトニングバインド！」

シャマルの攻撃から逃れることに成功したオメガを、アルフ、クロノ、そしてフェイトのそれぞれのバインドが拘束した。

「ぬうぅ！」

オメガはそのバインドを砕こうとするものの、３人が必死にバインドを固めているためなかなか壊れない。

「いくで！リインフォース！」

「はい！」

オメガの両サイドに、ユニゾンを解いて二手に別れていたはやてとリインフォースが声をかけ合った。

魔法陣をすでに展開して、いつでも魔法を撃ち込むことができる状態である。より確実に、そしてより多くのダメージを叩き込むために二手に別れたのだ。

「轟け終焉の笛！ラグナロクブレイカー！！！」

「貫け！スターライトブレイカー！！」

２つの巨大な閃光が撃ち出された。

動けないオメガはその２つの閃光に呑み込まれ、煙が巻き起こった。

「やったか！？」

だがそのシグナムの期待は、一瞬で砕かれた。

２つの閃光が突如ガラスのように砕けた。

その次の瞬間、はやてとリインフォースの甲冑が破壊された。あの時と同じ魔力破壊である。

「あっ――――！？」

「くっ・・・ああ!!」

はやてはよろめきつつもなんとか立ち続けたが、リインフォースはその場に倒れた。
リインフォースはシグナム達と同じく魔力生命体である。自身の魔力の破壊が、そのまま自分へのダメージとなったのだ。

「滅びよ!!」

そのオメガの声と共に、煙から閃光が拡散された。その衝撃波を受けてシグナム達が吹っ飛ばされる。

「下賤なる存在ごときが・・・我に刃向かうなどおこがましいわ!!」

閃光の中心にいたオメガが出てきた。
オメガは、砲撃でアーマーが損傷していたものの、まだ健在だった。
オメガは胸を抑え激痛に苦しんでいるリインフォースに近づき、見下ろした。
リインフォースはオメガに気づくと、激痛に必死に耐えながらオメガを睨んだ。

「この圧倒的な破壊力と支配力に勝てないと、我を、モデルVを取り込んでいた傀儡の貴様はとうに気づいているはずだ。・・・なのになぜ刃向かおうとする?なぜ絶望しない?」

オメガはリインフォースの目が先程のフェイトと同じであることに苛立っていた。
いや、リインフォースやフェイトだけではない。この場で自分に刃向かう者全てがまだ目に希望を宿していた。オメガはそれが不愉快

だった。

「はあっ、はあっ・・・私はっ、あの時のように、絶望はしないっ・・・お前には、二度と屈しない！」

息を荒くしつつも、リインフォースははっきりと言い放った。
オメガの我慢にも限界が来た。

「いいだろう・・・！ならば今ここで消え去れ！」

オメガがセイバーを振り上げた。
セイバーを振り下ろそうとした右腕を、何かが貫いた。

「ぐっ！？」

痛みでセイバーを落としたオメガは、その何か・・・弾丸が飛んできた方向を睨んだ。
そこには、ＺＸバスターを構えたヴァンがいた。

「手を・・・出すな・・・！」

ヴァンはリインフォースに手を出そうとしていたオメガを睨んだ。
みんなをボロボロにしたオメガを睨んだ。

「リインフォースに・・・みんなに・・・これ以上、手を出すな！」

ヴァンははっきりと叫んだ。

「ヴァン・・・！」

苦痛を感じながらも、リインフォースの表情が少し明るくなった。
そのリインフォースを見て、オメガがあることに気づいた。

「・・・そうか・・・貴様か。貴様がこの者共の希望そのものという訳か・・・」

オメガの口元がつり上がった。
自分は、メシアであると共に破壊神。それは何もかも、希望さえも破壊する存在。

「面白い・・・貴様ごと、全ての希望を粉々に壊してやろう！！」

オメガの魔力が膨れ上がった。
オメガを中心に何かが聞こえてくる。オメガに、モデルＶに取り込まれた、オメガが虐殺した者の恐怖や絶望の悲鳴だ。
ヴァンはＺＸセイバーに切り替え、構えた。

「モデルＺ・・・あれって、いけるか？」

『ああ。やれるさ』

返答を聞き、ヴァンは目を閉じた。
そして、カッと目を見開いた。

『「オーバードライブ！！」』

ヴァンの体が、赤いオーラに包まれた。
高ぶる力が、ヴァンに伝わっていく。
ヴァンとオメガが同時に駆け出した。

「「おおおおおおおお！！！」」

２人の、翡翠の剣と紫の剣とがぶつかり合った。
凄まじい衝撃を放ち、閃光が一面に広がる。
ヴァンの翡翠の剣にヒビが入り始めた。

「そうだ、壊れろ！剣も、貴様も、希望も！何もかも！！」

オメガが力をさらに強めた。ヒビが大きくなっていく。

『・・・オメガ、確かにお前のその力は強大だ。だがそれは強さではない』

「フンッ、そんな偽善などに興味などない！！」

オメガはさらに力を強めた。
だが、逆にオメガの紫の剣に、ＺＸセイバーよりも大きなヒビが入った。

「なっ！馬鹿な！？」

『オメガ、強さっていうのは、単に力だけじゃない。その力を使う人の意思が合わさって、初めて強さというものができるんだ！君はただ破壊するだけで、なんの強い意思が宿っていない！そんなのは強さなんかじゃない！君はメシアでも破壊神でもない、ただのイレギュラーだ！』

モデルＸが語りかける。
そう、それがヴァンとオメガの差。オメガが決してヴァンに勝つことのない差であり、オメガが負けていく理由。

『力には必ず限界がある・・・でも心は！勇気は！人々の意思には！限りなんてない！だから強さというのは、無限に存在するんだ！！』

「うおおおおおお！！！」

オメガの持つセイバーが砕けた。ＺＸセイバーはそのままオメガの腹に当たった。

「これでぇぇえええええ！！」

ＺＸセイバーが徐々にオメガのボディに食い込んでいく。

「終わりだぁぁあああああ！！！」

オメガが上半身と下半身で斬り裂かれた。
オメガの上半身が横へとスライドしていく。

「この、我が・・・敗れる・・・？こんなっ、下賤な者ごときに・・・敗れるだと・・・！」

小さな爆発が起き始める。

「グ・・・グォォォオオオオオオオオアァァァァアアアアアアアアアア！！！！」

爆発は大きくなっていき、大爆発が巻き起こった。

爆発が収まると、ヴァンは疲れで倒れた。

「ヴァン！大丈夫！？」

フェイト達がヴァンに駆け寄ってくる。ヴァンはみんなの方を見た。

「あんま大丈夫とは言えないな・・・・・あれ？」

呟いている途中で、ヴァンは地面に埋もれている小さな機械に気づいた。

「なんだこれ・・・？」

取ってみると、手の平程度の大きさの端末だった。まだ動きそうである。

この長い物語に、１つの終止符が打たれようとしていた。

第５８話　力と強さ（後書き）

楓

「モデルＺＸのオーバードライブは、漫画版ロックマンゼクスであったそうです（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ参照）

いよいよ物語に終わりが見えました。製作自体はもう済んでるけど」

第５９話－長き旅へ（前書き）

・・・誰もが心に弱さを持っている。けれど・・・だからこそ人は人に手を差し伸べることができるんだ

・・・モデルＸ

物語の終わりはもうすぐになります。ヴァンが拾った端末は一体何なのか？

・・・暁　楓

第５９話－長き旅へ

アースラの医務室に、リンディ、エイミィと、今回の任務遂行者１１人が集まっていた。１１人はオメガとの戦闘での負傷で医務室にいるため、２人が医務室に来た、というのが正しいか。
リンディの手には、ヴァンが戦闘後に拾った端末がある。

「みんな、無事で何よりだったわ」

リンディがねぎらいの言葉をかける。
オメガによって通信妨害され、さらには結界も張られていたのだ。
重傷者がいるとは言え、全員生還してきたことには何より安心した。

「それで、艦長。それの解析結果はどうでした？」

クロノが端末についてのことを尋ねた。
それにはエイミィが答えた。

「うん、解析結果、これはあの世界で開発されたもので、長距離転送用のロストロギアだってわかったよ」

「長距離転送・・・」

なのはが呟く。「そう」とエイミィが頷いた。

「でも、普通の転送装置とは違って座標の入れ方がちょっと変わってるの」

「変わってる？」

はやてが言葉を繰り返して説明を求めた。

「うん。転送装置で転送する時、転送する座標が必要になるでしょ？普通は座標の軸や数値を1つ1つ自分で入力するんだけど、これは使用者の記憶からその場所の座標を割り出して、転送する。転送は次元転移も可能らしいよ」

「記憶の場所に、次元転移・・・ってことは、ヴァンの元いた世界にも行けるってこと！？」

フェイトの声が明るくなった。それが可能なら、ヴァンはこれから元の世界とこっちの世界を行き来することができると思った。だが、ことはうまくは運ばなかった。

「・・・残念だけど、便利なものには欠点がつきものなんだよ」

「欠点、ですか・・・？」

シャマルがその言葉を繰り返した。
エイミィが頷いた。

「うん。記憶の場所、世界に転送するっていうのは、その記憶の読み込みから始まって、座標の割り出し、演算、座標固定、転送といかなきゃならない。ただでさえ転送だけにもかなりのエネルギーがかかるのに、座標の自動演算とかも入れば、すぐにエネルギー切れが起きる。転送後オーバーヒートで使い物にならなくなるのは確実だし、最悪転送途中で装置が壊れて転送に失敗、電子化から戻れなくなってしまう」

「その上、もし座標固定の前に記憶のブレが起きても、転送座標が不明になって電子化したまま戻れなくなるわ」

リンディも説明した。1回勝負の上、ハズせばもう二度と戻れなくなるという危険な代物である。

「そんな・・・じゃあ、使ったらヴァンは、もうここに戻れなくなるって言うのかよ?」

ヴィータが結論を言った。彼女の言う通り、ヴァンの世界が1年以上探しても見つからない以上、事実上そうなる。

「・・・・・・・・」

ヴァンはリンディが持つ転送装置を見たまま、黙っていた。
リンディはそのヴァンを横目で確認した後、言い放った。

「・・・ま、どちらにしてもこれはロストロギアです。これはアースラに保管、1週間後に本局に預けます」

「そんな・・・!」

「保管と言っても、最近保管室のロックに少々不具合がありますし」

「・・・?」

リンディの判断に待ったをかけようとしたなのはだったが、リンディ話にはまだ続きがあった。

「監視カメラも、故障していて調整中。人員が少ないということも

あって隊員を警備につかせることもできないので、部屋へは素通りできないこともないですが・・・ですが、決・し・て、保管室には立ち入らないこと。いいですね？」

わざとらしく言い、リンディはヴァンに視線を向けた。ヴァンは特に反応を見せない。
なのは達には、リンディの本当に言いたいことが何なのか理解した。

“１週間以内に、元の世界に戻るか、ここに残るかの覚悟を決めなさい”

それはリンディの遠回しな使用の黙認であると共に、迷いをなくして転送の成功率を少しでも上げるための気遣いだと、みんな理解した。
ヴァンは、無言のままであった。

翌日。
アースラの廊下を歩く、ヴァンの姿があった。

『・・・本当に、みんなに何も言わなくていいのかい？』

ホルダーに仕舞われているモデルＸが尋ねた。

「・・・・・ああ」

ヴァンはそれだけ返し、歩き続ける。
ヴァンはロストロギアの保管室に向かっていた。そこであの転送装置を回収し、元の世界に戻る。

モデルXが言っている通り、ヴァンはこのことを他の誰にも言っていない。
言ったら、みんな見送りに来るだろう。そしたら、もしかしたらここから立ち去ることに迷いが生じるかもしれない。
迷いが生じれば、転送に失敗するから・・・随分消極的な判断だった。

「・・・臆病者って思っていいぞ。みんなから逃げようとしているってことは、俺もわかってる」

『・・・そんなことは』
『ああ。臆病者だな』

『・・・モデルZ・・・』

フォローしようとしたモデルXにモデルZが割り込んだ。

『逃げているとわかっていて、それが間違いだとわかっていて、なぜあいつらを避けようとする』

「・・・・・・・・」

ヴァンは立ち止まり、しばし黙った。
そして、1つの答えを言った。

「・・・・・あいつらの泣き顔を、見たくないから・・・」

『・・・・・・・・』

「・・・・・早く行くか」

ヴァンはまた歩き出した。

ヴァンは保管室の扉のそばに立つ人影に気づいた。

「・・・アルフ、ザフィーラ」

2人の名前を口に出した。

人形態で壁に寄りかかっていた2人がヴァンに気づいた。

「・・・来たか」

「水臭いじゃないかい。あたしたちに何にも言わずに行っちゃうなんてさ」

ザフィーラはヴァンを見て呟き、アルフは笑って文句をつけた。

ヴァンは黙っている。

そのヴァンを見て、ザフィーラがあることを告げた。

「お前が元の世界へ戻ることは、誰もが予想できていた。もちろん、何も言わずに去ろうとすることもだ。・・・今、主達に念話でヴァンが来たことを伝えた。じきに主達がここに来る」

「・・・・・・・・」

「ヴァン・・・みんなと顔を合わせようよ。みんな、あんたを見送りたいんだよ。旅立つのを見届けたいんだよ」

アルフがねだった。

ヴァンは少し考えた。このままみんなが来る前に転送しようとしても、この2人が止めにくるだろう。さすがに、別れ際に仲間と戦いたくない。

「・・・わかった」

ヴァンは頷いた。

「けど、みんなに伝えてくれ。ここじゃ殺風景だから、旅立ちの場所は、海鳴市にするって」

ヴァンは保管室へと入った。

海鳴市のとある公園。そこにヴァンと、なのは、フェイト、アルフ、プレシア、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リインフォース、ユーノが集まっていた。
ヴァンの手には転送装置があり、彼の周りをライブメタルが浮いている。

「ヴァンさん・・・旅に、長い旅に行っちゃうんだね・・・」

「・・・ああ」

なのはの言葉にヴァンは頷いた。

「いつ終わるのか、いつ再会できるのか・・・何もわからないんだよね？」

「・・・そうだな」

フェイトの言葉に頷いた。

「・・・また、会えるんやろ？」

「・・・当たり前だ」

はやてに頷いた。

「私達は、貴方のことを探し、そして貴方の帰りを待っている」

「・・・ありがとう」

リインフォースに頷いた。

『元気でね。いつかきっと会えるよ』

『信念を通していけば、俺達の未来で必ず会えるさ』

『風は全て廻っていくものだ。我らもまた、風のように巡り会うだろう』

『水は決して斬っても斬れないもの。人の繋がりってやつも同じようなものよ』

『大地って、いくら高い場所に行こうが低い場所に行こうが、海底に行こうが1つに繋がってんのは変わんねえ。俺達の関係はもうそんなとこだろ』

『例え闇の中であっても、もうこの絆は決して絶たれることがあるまい・・・』

モデルX、モデルZ、モデルH、モデルL、モデルF、モデルPがそれぞれに言う。みんな、再会できると信じている。

「・・・みんな、今まで本当にありがとう。しばらく旅に出るけど、絶対にここに戻ってくる」

最後にヴァンが語り始める。絶対に再会する。そう明言した。

「フェイト、なのは、はやて、リインフォース・・・俺を好きって言ってくれてありがとな。告白されたのはこの世界が初めてだからさ、嬉しかったよ。今はまだ決められないけど、いつか、この長い旅が終わった先で、答えを出すから」

4人に言う。なんだか自分でも恥ずかしくなってきて、顔が熱くなる。

言われた4人は嬉しそうに、かつ恥ずかしそうに笑った。

他のみんなも笑顔だった。みんな、笑顔でヴァンを見る。

ヴァンはライブメタルを手に取り、ホルダーへとしまい始めた。

スコッ、スコッ、というホルダーとライブメタルで擦れる音が、別れのタイムリミットを示しているかのようだった。

全てのライブメタルをしまい、ヴァンは装置を起動した。

記憶の読み込みから転送まで、まだ少し時間がある。

「みんなに会えて、本当によかった」

ヴァンが光に包まれ始める。

ヴァンは、最後の言葉を口にした。

「・・・みんな・・・行ってくる」

ヴァンが完全に光に包まれた。
眩い光が収まると、そこにヴァンはいなかった。
フェイト達はさっきまでヴァンがいた場所を見た。
突然この世界にやってきて、敵としてぶつかったこともあって、仲間として支えてもらって、驚かされることばかりで、自分達を救ってくれて、そして、フェイト、なのは、はやて、リインフォースが愛する、自分達の英雄。
ついさっきまで目の前にいた英雄はもう、ここにはいない。
涙が、フェイトの頬を濡らした。

第５９話－長き旅へ（後書き）

楓

「次回、最終話です」

最終話－未来への勇気（前書き）

運命に立ち向かえ、未来を切り開け。それがお前達・・・この世界に生きる者全ての戦いだ

・・・モデルZ

ついに、最終回。すっげー久しぶりのキャラが登場します。

・・・暁　楓

最終話－未来への勇気

ヴァンは目を開けた。
海のように雲が広がっている。
風のやかましい轟音が響いている。
目の前には、腕が翼となった金の女神像があった。

「・・・ここは」

ヴァンは辺りを見回した。
ここは、船の甲板だ。そして、あの女神像から、どこなのかすぐにわかった。

「・・・ガーディアンベース」

ヴァンは、確かに元の世界に戻ってきた。
甲板にも隊員はいるはずなのだが、休憩中なのだろうか。誰もいない。
ベースの後方、甲板と船内を唯一繋いでいる扉が開いた。

「・・・ヴァン！」

ヴァンの耳に、1年以上も前の懐かしい声が届いた。

時は数分前に遡る。
ブリッジにて、プレリーは今日もヴァンの捜索をしていた。
ガーディアンで最後にヴァンを見たのは、プレリーだった。ヴァン

は落とし物の持ち主を探すために地上へ行った。
それっきり、連絡がつかなくなった。
最初は持ち主の捜索に手こずったり、仕事が入っていたりといった理由だろうと思っていた。だが、それが数日間続き、連絡がつかなくなっているのが異常だと気づいた。
最初は気のせいだと思いたかった。だが、ヴァンがいつも持っているはずのライブメタルの反応が見つからなくなっていた。
プレリーはミッションとしてヴァンの捜索をガーディアン隊員に発令した。
途中、自分をモデルVの代弁者と語るプロメテとパンドラと鉢合わせになった。プレリーはこの2人がヴァンの失踪に関与しているとも考えていたが、逆に2人から「モデルZXはどこだ?」と聞かれたため、2人は無関係だと知らされた。
そんなヴァンの捜索から、もう1年と8ヶ月になる。
モデルVの破壊が滞っているため、イレギュラーが数を増やしていた。イレギュラーに対処しながらヴァンの捜索も続けて、しだいに疲れが溜まってきた。
まるで、自分の姉を捜している時みたいだった。
突如として姿を消した姉。必死に捜しても、結局は見つかることがなかった。それと同じように、ヴァンも見つからないのではないかと思い始めるようになった。
そんなプレリーを、ガーディアンのみんなは支え続けた。
諦めかける自分を叱咤して励ましてくれている。
だから、ここまで保っていられた。
今日も、連絡がいつ来てもいいように通信回線を開きっぱなしにしていた。甲板の隊員は少し休憩に入っている。
突然、緊急事態をしらせるアラートが鳴り響いた。

「甲板に、転送反応!何かが来ます!」

オペレーターが報告した。
敵に発見されないようにベースは飛んでいたはずだが、そのベースに直接転送されることに驚愕した。

「くっ、いきなり直接襲撃されるなんて・・・！」

だが悔しがっても何も変わらない。来た敵に早く対処しなくては。
プレリーが指示をだそうと立ち上がった。そこに、オペレーターの新たな報告が入った。
それは、プレリーの思考を一時停止させるには十分なものであった。

「転送された反応の中に、ライブメタルを確認！６種です！！」

「！！」

６種類のライブメタル。
今確認されているライブメタルは7種類だ。その内６種を所有している人物・・・1人しか考えられなかった。
プレリーはブリッジから飛び出した。オペレーターの静止の声も彼女には届かなかった。

エレベーターへと、走る。
ただ走る。
途中、アラートを聞きつけて数人の隊員も加わった。
その隊員の1人に危ないから任せてほしいと言われたが、プレリーは無視した。
エレベーターで最上階まで上がり、甲板への扉を開けた。
ゴウッ、と風が通路に入り込んでくる中、プレリーは甲板へと飛び出す。

風の先・・・自分達に背を向ける形で立つ、1人の人物が見えた。

「・・・ヴァン！」

プレリーは叫んだ。

ヴァンは、ゆっくりと後ろに振り向いた。

視界に、ピンクの服を着た長い金髪の少女、プレリーが入った。自分を見て目を見開いている。

その後ろには、ただただ口を開けて驚いている男性隊員や、今にも泣き出しそうにしながら口元を抑えている女性隊員などもいた。

どう言葉をかければいいんだろ、と呑気な考えが浮かんでしまった。

そして、その考えのせいなのか、それとも別の思考からか、ヴァンから笑みが零れた。

特別な言葉なんか必要ないかな、と思った。

「・・・・ただいま、みんな」

特に張り上げもせずにヴァンは言った。

直後、プレリーの目から涙が溢れ出した。

「・・・・・バカ！」

プレリーが駆け寄り、ヴァンに抱きついた。

「どれだけ・・・捜していたと・・・思っているのよ、ヴァン・・・！うわあああぁぁん！！」

涙を流しながら、ヴァンを強く抱き締める。

抱きついたそばから伝わる温もりを、プレリーの思考が本物だと認識していく。

「ヴァン！」

「ヴァンさぁん！」

後ろから隊員達もヴァンに駆け寄ってくる。

「おーいみんなー！ヴァンが、ヴァンが帰って来たぞー！」

隊員の1人がヴァンの帰還を知らせに船内へと戻っていった。

何人にも抱きつかれる中、ヴァンはふと空を見た。

海鳴市の、とある公園。

ヴァンがこの世界からいなくなって、もう数分経った。

フェイトの涙はもう止まっている。なのはやはやて、リインフォースも泣いていたが、もう泣き止んでる。

いつまでもここに留まるわけにもいかないので、フェイト達はそれぞれの帰るべき場所へと歩き出した。

ふとフェイトは歩く足を止め、空を見上げた。

今、空には雲が1つもない。

ヴァンからの話ではヴァンの仲間達がいるガーディアンベースは飛行船らしい。ヴァンも、このような雲一つもない青一色の空を見ているだろうか。

なのはが、はやてが、そしてみんなが、そのフェイトに気づいて空を見上げた。

長い旅。
いつ終わるのかわからない旅。
いつ、自分達が再会するのかわからない旅。
どこまで行くのか、その道中に、その先に、何があるのか・・・何一つとしてわからない。
だが、それに不安はない。
絶望することはない。
それは、たった1つの、わかっている未来、その誓いがあるから。

未来で、絶対に再会する。

だから、未来を恐れない。
希望を持って前に進む。
未来への、勇気を持って。

Ｆｉｎ

最終話－未来への勇気（後書き）

楓
「まだだ・・・まだ終わらんよ・・・！」

ヴァン
「どこの科学者だお前は」

楓
「まだリリカルゼクス通信があります！それもお楽しみに！！」

リリカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問3～

楓
「いや～、この小説も終わっちゃいました」

ヴァン
「つっても、続きがあるだろ？」

楓
「まあ、そうなんですけどね・・・」

エール
「・・・で、今回は何だっけ？」

楓
「はい！第2回人気投票と、ＳｔｒｉｋｅｒＳ編でグレイとアッシュどちらを登場させるかと結果発表をしたいと思いまーす！」

ヴァン
「そっかー、そんなのあったなぁ・・・」

エール
「そういえば、人気投票では規格外の票があったよね？ルール無視して偶数だったり9票や7票とかを2人以上にいれたやつ。それどーすんのさ？」

楓
「ああ、それね・・・確かに無効になるって言ったけど、せっかくの投票に不憫だし、何より面倒だからそれも潔く入れたよ」

ヴァン
「面倒って・・・それは潔いのか？」

楓
「気にしちゃ負けです」

エール
「それじゃ、ちゃっちゃと始めよ」

只今準備中

ヴァン
「はいっ、始まりましたー！『第２回キャラクター人気投票Ａ'ｓ』！司会は俺、ヴァンとエール、そして作者の暁　楓でお送りしまーす！」

エール
「今回もランキング形式で発表しますが、よくある同順位者がいたときは－－－２位↓２位↓４位－－－ですが－－－２位↓２位↓３位－－－という形とさせていただきます！」

楓
「なお、投票キャラが予想以上に多かったため、１０票未満のキャラを一旦さっさと紹介したいと思いまーす。同順位者については五十音順ってことで」

１１位　１票
ヴィータ、ザフィーラ、バルディッシュ、レイジングハート

１０位　２票
モデルＰ

９位　３票
シグナム、パンドラ、モデルＸ

８位　４票
なのは、はやて、モデルＨ

７位　５票
プレリー

楓
「言わば低ランカーってことで、特に言うことはありません。言う必要もないかな」

シャマル
「ではここからは１０票以上を獲得したキャラが入場します。・・・え？ヴァンさんとエールさんですか？何か準備に向かわれたそうなので、私が司会の代役をさせてもらいます・・・あれ？っていうこ

とは、私には1票もなかったんですか!?ヴォルケンリッターの3人にはあったのに!?」

プレシア
「・・・まあ、そういうものよ。私も司会代役を務めさせてもらうわ」

楓
「はいっ、選手入場です!ちなみに五十音順に入場してきます!」

アルフ
「最初に入ってきたのは本小説の主人公、ヴァンだー!自らを追い上げ型だと語っていたが、果たしてどうなのだろうかぁー!・・・こんな感じかい?」

楓
「いいんじゃない?それで」

ユーノ
「適当感丸出しですね・・・それと無投票キャラはここに出すつもりですか・・・」

エイミィ
「いいじゃん、出番があるだけ。あっと次に入ってきたのは、リリカルゼクス通信のみの登場!作者からは“出す気力が湧いてこない”と門前払いされたエール選手!少ない登場数だが、投票者の心を掴めたのかー!」

クロノ
「まったく、ノリノリだな・・・さて、次に入ってきたのは・・・

オメガ!?しかも、第2章終了までに限定されているのを無視してメシアの方が!?」

プレシア
「一応第2章最後でメシア姿で出たわよ?さて、次に来たのはフェイトね。フェイト、頑張って!」

楓
「で、次に入ってきたのは、ライブメタル・モデルF!・・・でもどうせF好きのおかげだろ」

マルティナ
「だめですよ。そんなことを言っては。さ、次に入られたのは、ライブメタル・モデルLですね。前回は0票で散ったことにお怒りになられましたが、今回はその同情票がどこまで入ったのでしょうか」

リンディ
「マルティナも結構なことを言うわねぇ。さて次は、最後のライブメタルとなった、モデルZね。前回の1位だった彼（?）は今回も1位となるのかしら?」

楓
「なんやかんやでここまで結構文字数が使われたと思います。さて、最後に入場したのは、第2章の後半登場のヒロイン、リインフォースです!自分も個人的に好きです」

プロメテ
「フンッ、そんなことはどうでもいい・・・」

ユーノ

「誰！？」

プロメテ
「ほっとけ。それじゃあルール説明といこうじゃないか！今回はバトルサバイバル！思考の具現化で現れたトラップ満載のジャングルで戦い合うぜ！」

クロノ
「思考の具現化って・・・ＰＳＰｏ２・・・」

楓
「俺が採用した。で、生き残った時間が長ければ長いほど高順位。まあ投票の結果がそのままの勝ち負けだけどな」

エイミィ
「具現化も完了したし、バトルサバイバル、始め！」

カーン！

プレシア
「さて、モデルＦがどんどん進んでいるわね。宙に浮いているからトラップにも引っかかっていない・・・あら、フェイトと鉢合わせになったわ」

アルフ
「モデルＦは基本単独では攻撃力が皆無なため、フェイトに言葉攻め！だがしかし、モデルＦの挑発はフェイトにまったく効いていない！」

マルティナ
「炎属性は雷属性に全く効きませんからね。冷静な判断ができるフェイトさんには挑発は無意味でしょう」

リンディ
「あーっとフェイト選手、プラズマスマッシャーを放ったー！モデルFに直撃！モデルFは撃沈！まだ攻撃は伸びていく・・・？そこにはエール選手が！エール選手にも直撃！エール選手、撃沈！！」

6位
モデルF
10票

5位
エール
12票

楓
「おおーっと！！今入りました情報ですと、エール撃墜と同時に、オメガが“針と消える床ゾーン”にて爆死したようです（笑）」

5位
オメガ
12票

楓
「さすがトラップジャングル！もはやトラップの餌食になる者が現れております！」

シャマル
「餌食というか、それで死ぬってどれだけ危険なんですか・・・あ、モデルＬが水中に入りました」

アルフ
「あー、“地上は埃っぽい”ってたまに言ってたなー。あ、仕掛けに食われた。もう無理じゃない？」

４位
モデルＬ
２４票

ユーノ
「おっ、今度はヴァンとモデルＺが鉢合わせになったよ」

クロノ
「何かモデルＺが言ってるな・・・『あとはお前しだいだ・・・』これは言葉攻めか？」

プロメテ
「ああーっとぉー！ヴァン選手、いつの間にか持っていたモデルＸと立ちはだかるモデルＺを手にとってダブルロックオン！これは判定はどうなのかー！」

楓
「そこに存在する方の勝ち・・・モデルZはロックマンにするためにヴァンと融合したので、立っているのはヴァン1人、という判定で！」

3位
モデルZ
39票

エイミィ
「さて、いよいよ残り3人になったよ！・・・って、あれ？もう1位と2位しかいない？・・・これは、もしかしたら1位の同着があるかも！？」

リンディ
「3人の選手が1ヶ所に集まったわ！」

ユーノ
「・・・あれ？なんかフェイトとリインフォースだけで白熱してない？」

クロノ
「・・・少し中継を繋いでみるか」

～中継画面～

フェイト
「リインフォース・・・貴方も残っているなんてね・・・」

リインフォース
「それはこちらの台詞だ・・・テスタロッサ」

フェイト
「・・・譲らないよ」

リインフォース
「こちらも譲るつもりはない・・・」

フェイト&リインフォース
「「ヴァンは私のものだあああああああ!!」」

プロメテ
「おおーっと!ヴァンを巡るバトルが勃発ー!もう順位など彼女らの目にはないぃー!」

マルティナ
「・・・?何か気配が・・・」

ドオオォォオオオオオオオン!!!

シャマル

「!?この2つの閃光は・・・なのはちゃんとはやてちゃん!?」

なのは
「にゃはは♪ヴァンさんは私のものだよ?」

はやて
「なーに言っとるんや、なのはちゃん?ヴァンさんはうちのもんやで♪」

なのは
「ふふふ・・・（黒笑）」

はやて
「ははは・・・（黒笑）」

アルフ
「・・・こ、恐い・・・」

楓
「えー、さっきの砲撃によってフェイト選手とリインフォース選手が同時に撃沈しましたー・・・」

2位
フェイト
４４票

リインフォース
４４票

リンディ
「さて・・・これで残ったのは置いてけぼりにされていたヴァンさんのみになったわね」

1位
ヴァン
79票

楓
「んー、なんかキレが悪いなー」

プロメテ
「結果はいいとして、次回はZXAアンケートの結果発表だ！夜露死苦ゥ！」

リリカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問４～（前書き）

リリカルゼクス通信ｍｉｎ！

楓
「活動報告にもあった荒らし野郎にいい加減キレて来るなとメッセージ叩き込んでブロックしました」

ヴァン
「批判とか指摘ばっかでうっさい奴だよなぁー。ブロック数が2桁になってるよ。しかもほとんどがユーザー消されてるし」

エール
「いい加減にしてよね。こんなところで出番消費したくないんだけど」

楓
「荒らしダメ！ゼッタイ！リリカルゼクス通信、始まります！」

リリカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問４～

ヴァン
「はいっ！始まりました、リリカルゼクス通信！司会は第２回人気投票にて１位だったヴァンと！」

フェイト
「２位のフェイト・テスタロッサです」

リインフォース
「同じく２位、リインフォースです」

ヴァン
「それと作者、暁　楓でお送りしたいと思いまーす！」

楓
「よろしくお願いしまーす」

ヴァン
「作者さん、今回は『ロックマンモデルＡはどっち？第２主人公選定アンケート』の結果発表ということでよろしいですね？」

楓
「はい。では選手入場といきましょう！」

フェイト
「まず入ってきたのはアッシュだね。ＺＸＡにてヴァンが正式に登場するストーリーの主人公だよ」

リインフォース
「次に入ってきたのは、グレイだな。本来なら会うことのない組み合わせとなるが、作者のグレイを書きたいという願いは届くのか？」

ヴァン
「さて、ルール説明をします」

楓
「ルールは１対１で先に相手の体力を０にした方の勝ち。体力は初期状態の１６メモリ。攻撃手段は問わない。・・・まあ投票結果がそのまま勝ち負けになってるけどな」

ヴァン
「俺達は解説に回りまーす」

フェイト
「頑張ろうね、ヴァン！／／／」

ギュッ（ヴァンの右腕に抱きつく）

ヴァン
「うおっ、フェイト!？」

リインフォース
「ヴァン・・・その、私と頑張ろう・・・／／／」

ギュッ（ヴァンの左腕に抱きつく）

ヴァン
「お前もかよ！？っていうか胸！胸が当たってる！」

リインフォース
「そ、その・・・当てているのだ・・・／／／」

ヴァン
「おいいいいいい！？」

フェイト
「むーーっ（涙）！／／／」

楓
「さ、リア充のことはほっといて、試合開始です！」

カーン！

楓
「さて、まずは熟練の経験を生かしてアッシュ選手が先制攻撃！“ロックマンにも女を！”の意見で斬り込んだー！」

アッシュ
「今さら男女差別なんて古いわ！」

グレイ　残り体力
１６→１５

楓
「おっとグレイ選手、記憶喪失の特性を使って知識不足によって攻撃をガード！すかさず反撃！“やっぱりロックマンやヒーローは男でしょ！”の意見で攻撃！」

アッシュ
「うあっ！」

アッシュ　残り体力
16→13

ヴァン
「・・・あれ？なんで同じ系統の攻撃なのにダメージが違うのさ？」

楓
「票の数が威力に繋がる」

ヴァン
「なるほど」

フェイト
「さらにグレイが追い討ち！“四天王ロックマンはやっぱりグレイの方が強い！”“トランスオンしたアッシュの声が気持ち悪い”の連続攻撃！」

リインフォース
「主にモデルＡの能力、トランスオン関係ですね」

ヴァン

「あっと、アッシュも“アッシュの四天王ロックマンだって使いどころはあるって！”でガードしたー！」

アッシュ　残り体力
１３→１２

アッシュ
「チッ！いい加減にしなさいこのガキンチョが！！」

楓
「ああっと、アッシュ選手、ここでブチギレたー！グレイ選手は気圧されている！」

ヴァン
「アッシュ選手の攻撃！“やっぱ正規ルートだろここは”！」

グレイ
「ぐあっ！」

グレイ　残り体力
１５→１３

フェイト
「アッシュがさらに攻撃！“つーか勝手に変えんなよ作者”」

リインフォース
「・・・これはグレイへの攻撃というより作者への攻撃では？」

グレイ
「ぐあああっ！！」

グレイ　残り体力
１３→６

ヴァン
「ああーっと！これは効いた！グレイ選手大ダメージ！！」

フェイト
「さ、作者さん！？」

暁　楓　残り体力
１６→３

ヴァン
「おおーっと！なんということだぁ！作者が精神的に大ダメージを受けてしまったー！！もうレッドゾーンだ！！」

グレイ
「回復・・・回復！」

“俺は作者についていくぜ！”

楓
「よっしゃあああああ！！」

暁　楓　残り体力
３→１６

フェイト
「作者の方が回復しちゃったよ！？」

リインフォース
「戦闘場の設置型サブタンクを勝手に使いましたね」

ヴァン
「グレイ選手、何をしたかったのでしょう!?おっと、改めて“グレイとリリカルキャラの恋愛が見てみたい!”で回復をとった!」

グレイ　残り体力
6→16

アッシュ
「ちょっと卑怯よ!あんた達だけ回復して!あたしにもよこしなさい!」

楓
「ストーップ!回復を行うにはそれ相応の投票者の意見を提示することが条件!」

アッシュ
「はああっ!?」

ヴァン
「あっと残念なことにルールに阻まれてアッシュ選手は回復できない!」

リインフォース
「この隙にグレイが攻撃を仕掛けー！」

パンドラ

「グレイきゅ～ん♪」

グレイ
「・・・うわあああああ！？」

グレイ　残り体力
１６→１４

フェイト
「・・・え？」

楓
「ゼクス公式ブログネタにグレイトラウマｗｗｗ」

ヴァン
「・・・なんかこのぐだぐだ感に飽きてきたな」

楓
「あ、俺もそう思った。じゃあ俺がこのカードを切るか」

ヴァン
「なにそれ？えーっと、“アッシュだってヴァンに恋するもん！”って・・・・・」

ドオオオオオオン！！

アッシュ
「きゃあああああ！？」

なのは

「これ以上ライバルが増える必要はないと思うよ？」

フェイト
「ヴァンに近づくとどうなるか・・・」

はやて
「しーっかり、覚えてもらわな♪」

リインフォース
「では・・・逝きましょうか」

アッシュ
「いやあああああああ！！？」

ドオオオオオオオン！！

アッシュ　残り体力
１２↓１

ヴァン
「・・・なんとか生きてるんだ・・・」

グレイ　残り体力
１４↓１

ヴァン
「なんであいつもギリギリなの！？」

楓
「砲撃の嵐に巻き込まれたってことで」

ヴァン
「不憫だなー・・・」

楓
「おっと両選手、互いに最後の切り札、“投票数”で勝負！！」

ヴァン
「・・・そういや、これって投票数を競うやつじゃなかったっけ・・・」

グレイ
「僕が！」

アッシュ
「あたしが！」

グレイ&アッシュ
「「勝つ！！」」

グレイ
投票数　7

アッシュ
投票数　6

アッシュ
「ぐ、はっ・・・！」

アッシュ　残り体力

1↓0

ティウンティウン（爆死）

カンカンカン！！

ヴァン
「決まったー！！勝者、グレイ選手ー！！」

楓
「いやー、危ない危ない。ギリギリだったよ。これでＳｔｒｉｋｅｒＳ編が書けるようになります！」

ヴァン
「グレイ選手の勝利に、盛大な拍手をー！！」

楓
「そして読者の皆さん、この小説を最後まで読んでくださりありがとうございました！」

ヴァン
「続編にてお会いしましょう！！」

楓
「では！！」

リリカルゼクス通信～リリカルなヴァンの質問４～（後書き）

楓

「えー、こんな駄文を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

終わり際に見てみたのですが、お陰様でアクセス数が１７万超え、総合評価２１０、お気に入り件数７４件という大変ありがたい結果となりました。

これからＳｔｒｉｋｅｒＳ編を別小説で展開することになりますが、そちらの方も頑張っていこうと思います。

その時はまた、心清き読者様の来訪を楽しみに、小説を書きますよええ！！

ちなみにどうでもいい話。ようやく知ったか振り作者のタグがなんとかなりそうです。最近友達に頼んでアニメの知識が揃いそうです。今までＹｏｕＴｕｂｅで見ていましたが、これからは動画の読み込みで手間取るような方法ではないアクティブなアニメ鑑賞でクリーンな投稿になりそうです。キャッフォォウ！

とうでもいい話ですね（笑）。ホントどうでもいいことで手間取るのが僕の悪いところ。

それでは皆さん、こんな駄作者、暁　楓の次回作を、余裕の欠片の微粒子があれば応援、そして読んでってください。

ではでは」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4511p/

魔法少女リリカルなのはＺＸ

2011年7月31日23時27分発行